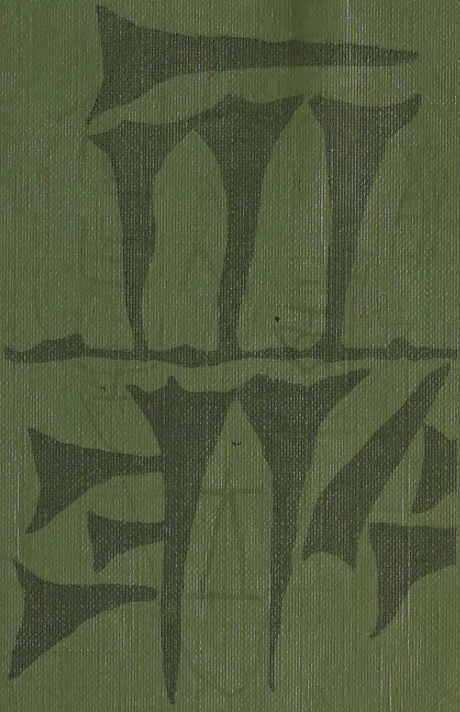
11	世史
学図	409

文部省検定済教科書



高等学校 世界史

吉岡　力

学校図書株式会社



地理上の発見
グリーンランド
アイスランド
1494年
植民地
分界線
スペイン
ポルトガル
ハドソン湾
ラブラドル
イギリス
ロンドン
カボット
カルティエ
ニューファンドランド
ケベック
モントリオール
ルイジアナ
ミシシッピ川
ニューアムステルダム
バージニア
フロリダ
大
西
洋
アゾレス諸島
ポルトガル
リスボン
マドリード
スペイン
マデイラ諸島
カナリア諸島
ボハドル岬
ベルデ岬諸島
ベルデ岬
ギニア
バルトロメウ=ディアス
コロンブス
サンサルバドル
キューバ
ドレイク
カリフォルニア
太
平
洋
1519
メキシコ
マヤ
コルテス
ユカタン
グァテマラ
パナマ
ベネズエラ
1499
キト
ピサロ
インカ
クスコ 1533
ポトシ
アマゾン川
テラデサンタクルス
リオデジャネイロ
カブラル
ガマ
マゼラン
コキンボ
ラプラタ川
ブエノスアイレス
パタゴニア
マゼラン海峡
アメリゴ=ヴェスプッチ
南ジョージア島
スペイン とその
コロンブ
コロンブ
アメリゴ
マゼラン
コルテス
ピサロ
180
160
140
120
100
80
60
40
20
0
160°
140°
120°
100°
80°
60°
40°
20°
0°



ロシア
アルハンゲリスク
オビ川
シ
ベ
リ
ア
トボルスク
タラ
ペルミ
モスクワ
カザン
リトアニア
ーランド
ンガリー
黒海
コンスタンティノープル
トルコ
カスピ海
ヒヴァ汗国
ボハラ汗国
サマルカンド
ヤルカンド
カシガル汗国
ホータン
キルギス
オイラート
カラコルム
トルファン
タタール
アムール川(黒龍江)
オホーツク海
ベーリン
後金(女真)
北京
太原
黄河
済南
粛州
西安
開封
成都
南京
揚子江
明
武昌
杭州
雲南
桂林
福州
広州
マカオ(ポ)
大越
台湾
平壌
京城
朝鮮
日本(ジパング)
平戸
種子島
太
平
洋
ペルシア(サファヴィー朝)
イスファハン
ダマスカス
アレクサンドリア
バグダード
カイロ
エジプト
アラビア
メッカ
ホルムズ
マスカット
アデン
ナイル川
エチオピア
ラホール
インダス川
デリー
アグラ
ガンジス川
ネパール
チベット
ムガール帝国
ジウ
ゴア
アラビア海
カリカット
1498
マドラス
コチン
ベンガル湾
セイロン
コモリン岬
タウングー朝
シャム
広南
カンボジア
フィリピン
マラッカ
ブルネイ
ボルネオ
スマトラ
セレベス
モルッカ諸島
ニューギニア
ソロモン
カロリン群島
マゼラン
ドレイク
ジャワ
チモール
ガマ
カブラル
モンバサ
モザンビーク
ソファラ
マダガスカル
インド洋
ドレイク
マゼランの部下
オーストラリア
望峰
カ
ポルトガル とその植民地
ヴァスコ=ダ=ガマ(1497~99)
バルトロメウ=ディアス(1487~88)
カブラル(1500)
フランス とその植民地
カルティエ(1534~36)
イギリス とその植民地
カボット(1497,1498)
ドレイク(1577~80)
-93)
-04)
9~1502)

(国境は 1600 年ごろ)

NaOH + Al

Na AaOH



美しき絵ガラスのマリア　パリ近郊，シャルトルの大聖堂は，13 世紀ステンドグラスの宝庫で，第二次大戦中は解体され，安全な場所に疎開した(1938～47)。写真のマリア像は，数少い 12 世紀の作品としてとくに名高く，素朴なデザインのうちに人々のあつい信仰心を見事に表現している。澄んだブルーの色は，「シャルトルのブルー」として世に知られる。



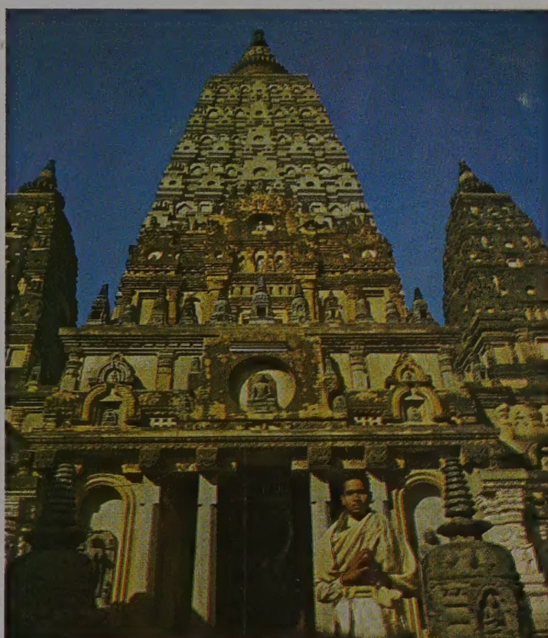
パルテノン神殿　アテネの一隅にある小高い丘アクロポリスに残る古代ギリシアの遺構である。紀元前5世紀に造られたドーリア式の代表的建築で，かつてはこの中にプラクシテレス作の守護神アテナ女神像が安置されていた。



コンスタンティヌスの凱旋門　4世紀初め，コンスタンティヌス帝の勝利を記念して建造されたもので，すぐ右に見えるのは，有名な円形競技場コロッセウムである。この両者はともに，建築における古代ローマ人のすぐれた才能をよく示している。



万里の長城　万里の長城は，秦(しん)の始皇帝が北方民族の侵入に備えて築造したのに始まり，戦国・漢の時代における修理・延長をへて，15〜16世紀の明代に完成された。全長は2,400kmに及ぶ。写真は八達嶺(はったつれい)付近で，最も堅牢(けんろう)に造られた部分の一つである。



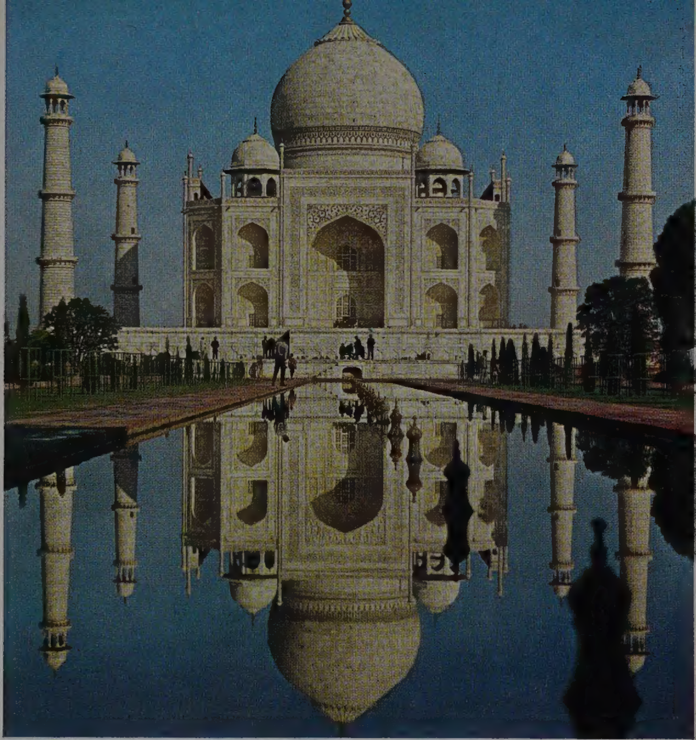
ブダガヤの仏塔　ブダガヤはインドのビハール州にあり，釈迦(しゃか)が悟りを開いた仏教の聖地である。釈迦がその下で悟りを開いたという菩提樹(ぼだいじゅ)も，植え継いで今日に至っている。その東にそびえるこの塔は，6世紀ごろグプタ朝時代の造営と考えられており，近代に多少の修復を受けている。かつてはこれを中心に大覚寺と呼ばれる大伽藍(がらん)が造営され，非常な盛況を呈したと伝えられる。



カルカソンヌの城(**南フランス**)　ヨーロッパ最大規模の城（長さ400m，幅230m）で，外城（13世紀半)，内城(13世紀，一部は6世紀西ゴートのもの）と，その内部の本丸(12世紀)から成り，48の塔が丘の上におとぎの世界を作り出している。



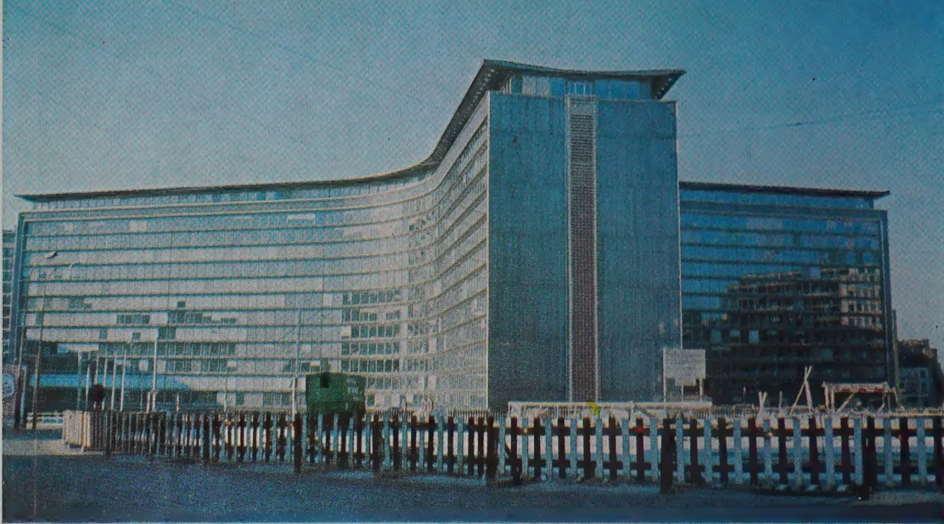
ケルンの聖ペテロ大聖堂(**ドム**)　ドイツの代表的なゴシック建築のひとつで，ライン地方では最初のもの。1248年いらい実に600年以上もかかって完成された。正面（ファサード）は幅が61m，尖（せん）頭の高さ157mもあり，現在ケルン駅前に，見るからに巨大で量感ある姿をそびえ立たせている。そばを流れるライン川にかかる橋（ドイツァー－ブリュッケ）からの眺めは美しい。



タージ－マハル廟 インドのアグラに残るこの廟は，ムガール帝国のシャー＝ジャハン帝が，亡き愛妃をしのんで建立したもので，1632年から約20年かかって完成した。インドの代表的名建築で，月の夜に照りはえる大理石のドームは特に美しい。



獅子の中庭（アルハンブラ宮殿，グラナダ）「太陽の丘」の上に夢幻の美しさを展開するアルハンブラ宮殿（原義「赤い」城，13～17世紀）は，長さ726m，幅180mあり，中心のアルカサル（城，14世紀）にある「獅子の中庭」は，中央に12頭の獅子を配した噴水をもち，スペイン最高のイスラム芸術である。



EEC 本部　ブリュッセルにある。EEC の中心は共同体委員会で，これは母国から独立して欧州統合のために忠誠をつくすことを任務とする委員からなっている。



コメコン本部　モスクワ河に臨むモダンな高層建築で，コメコン構成諸国の建築専門家がプランを出し合って完成した。クレムリンからまっすぐ西にのびるカリーニン大通りのはずれにあって，遠くからでもよく見える。コメコンは社会主義諸国の国家計画経済の統合と調整をはかる機関で，加盟国の技術と資源をできるだけむだのないように利用し合うことを目的としている。コメコン銀行もこのための機関で加盟国の貿易勘定をひとまとめにして決済したり，必要な資金を各国に貸付けたりする。各国から派遣された職員によって書記局が構成されて，日常事務をとっている。

昭和47年4月10日 文部省検定済 高等学校社会科用

高等学校
世界史

吉岡 力
村瀬興雄
木村尚三郎
松村 赳
中村 義

学校図書株式会社

についてはアメリカ・イギリスが，官僚制や法律についてはドイツ・フランスが，そして議会制についてはイギリスが，それぞれわが国の先生であった。

これに対し，日本が日本なりに高度産業社会の段階に達した20世紀後半の現在，われわれにはもはや先生はいない。それに高度産業社会は，多数の人々が個性的に活動し，互いに依存し合い，有機的に結びついてはじめて機能する組織的な集団社会であるから，ひとりの支配者や特定の社会層による独断専行をゆるさない。われわれの将来，われわれの行手は，ひとりひとりが自分自身で考え，求めていかなければならない。それは大きな精神的緊張をともない，ある意味では苦痛でもある。しかしながらこの責務を逃れることは，現代に人間として生きる自由を捨てるにひとしい。進路の決定を誰かひとりの指導者の手にゆだね，自らはその下で不平をいうだけの精神的な怠惰は，もう誰にもゆるされない。

自らの進路をさぐるには，まず自分自身を見きわめねばならない。自分の個性は，自分をできるだけ多くの他人と比べることによって明らかとなろう。世界的な視野で自分を発見するには，何よりもまず，われわれを包み込み，生活や行動の仕方，物の考え方に大きく作用している日本という地域文化圏を，ほかの地域文化圏と対比してみることが必要である。ヨーロッパ，アメリカ，アジア，アフリカその他の諸地域について，現在ばかりでなく，かつて過去に存在した文化圏を現代日本と比べてみよう。そのときわれわれは，しばしばそれらが持っていた個性の強烈さにおどろかされ，現代日本の意味をあらためて考えさせられる。歴史的な物の考え方とは，不安のうちに明日に向かって生きるために，過去との対比を通して，現在の自分と自分の置かれている位置を発見することである。過去は，世界史は，覚えることに意味があるのではない。それは，われわれの未来のために，世界の中の自分，世界の中の日本をたしかめるために，生きつづけているのである。

目　次



洞窟絵画 1. スペイン，アルタミラ洞窟に描かれた野牛の絵。

第１章　古代文化の起源

人類がいつ，どのようにして発生したかということは，最近，化石骨や石器の放射能測定などの科学的研究により，かなりくわしくわかるようになった。原始人類は，道具を製作し，火を利用することによって，200万年の長い時代を生きぬいたのであるが，その間，文化の発達はまことにおそかった。しかし，今から１万年あまり前，氷河時代が終わって，農耕牧畜がおこり，食料の生産がはじまると，人類に革命的な変化がおこった。定住生活が可能になり，組織ある社会生活が始まり，文化が飛躍的に発展したのである。やがて，それまでの石器に代わって金属器を使用し，多くの人口を集めた都市を中心に古代国家が生まれ，文字が発明されて記録を残すようになった。

世界最古の都市文化は，エジプト・メソポタミア，西北インド，北シナなど，食料生産に恵まれた大河の流域に発生し，それぞれオリエント・インド・中国の古代文化の成立に大きな影響を与えた。またオリエント文化は西洋文化の成立とも密接なつながりをもっている。

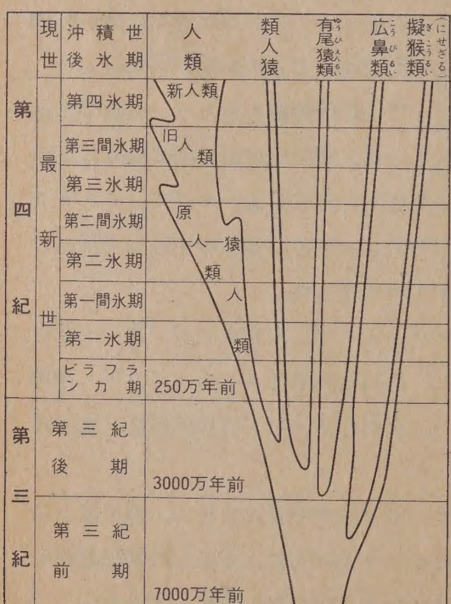
中・南米地方にも土着民のインディアンによるすぐれた文化が，旧大陸とは独立に成立したが，それらは，16世紀にヨーロッパ人による征服の結果壊滅した。しかし，その影響は現代のラテンアメリカ文化のなかに残っている。

第1節　原始社会の生活

1.　人 類 の 誕 生

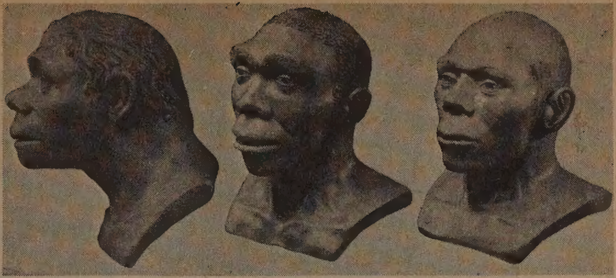
人類の発生　現生の人類は，霊長類(れいちょうるい)のホモ-サピエンス (Homo sapiens) というただ一つの種に属する。今では，最も近い親類である類人猿(えん)とも非常な差があるが，はるか昔に，人類と類人猿は共通の祖先である樹上の小動物から分かれたと考えられている。樹上生活をやめて地上におりた霊長類のあるものは，直立して歩き，自由になった手で物を巧みに扱うようになり，しだいに人類への進化の道をたどってきた。しかし，たしかに人類とみなせる生物が現われるのは，第4紀最新世 (洪積(こうせき)世) になってからである。

人類発生系統樹　人類発生の経過を木の分枝になぞらえてわかりやすく示したものである。人類の発生進化には異説が多いが，現在の最も新しい考え方にもとづく仮想図を示した。



氷河時代　約250万年前に始まる最新世は氷河時代ともいわれ，地球の高緯度地方や高山にある氷河が現在よりもはるかに発達したことが何度もあった。氷期と氷期との間には間氷期という温暖な時代もあった。

人類の進化　現在最も古い人類と考えられているのは，南・東アフリカの前期最新世に生息した猿人類，アウストラ



原始人類の復原像　化石をもとに復原した模型で，左が原人類(直立猿人)，中央が旧人類（ローデシア人），右が新人類（クロマニョン人）である。

ロピテクス類である。直立歩行し，あごや歯などの咀嚼(そしゃく)器が人類的で，脳は類人猿より大きく，すでに粗雑な石器，骨角器を使っていた。

猿人類の次に出現する人類は原人類である。ジャワの**直立猿人** (Pithecanthropus erectus)，中国の北京(ペキン)原人，ドイツのハイデルベルク人，アフリカのアトラントロプスなどがそれで，すでに地球上にかなり広く分布していた。道具は猿人類よりもずっと進歩しており，北京原人は火を使っていた。

最後の氷期の初めには，原人類よりはるかに進歩した旧人類が活躍した。旧人類はネアンデルタール人ともよばれるが，ホモ－サピエンスの亜種と見る人も多い。オーストラリア・アメリカを除く全大陸に分布し，すぐれた狩猟(しゅりょう)の技術をもっていた。

その後，新人類が現われ，すぐれた後期旧石器文化を築いた。彼らは現代人と身体上の違いはほとんどない。ヨーロッパのクロマニョン人や，中国の周口店上洞人など多くの化石骨が発見されたが，新人類は全地球上にひろがっており，人種の分化も始まっていた。

人間の条件

生物学的にみて，人類の最大の特徴は直立歩行することである。手はからだをささえることから解放され，これが脳の発達をうながすと同時に，頭骨を圧迫していた咀嚼筋が退化したために脳は大きさを増した。しかし，人類を他の動物とはっきり区別させるのは，道具を作り，火を利用し，言語を使用することによって，文化を創造したことである。

自然に働きかけ，道具を作り出すという労働が，人類の知恵をみがく

第一歩となった。やがて彼らは将来に備え，特定の伝統にしたがって，道具を次々に創造し，新しい生活環境に適応していった。「人間は道具を作る動物」といわれるのはこの意味である。また，火の利用によって人類は寒気と暗黒から解放され，調理した食物を食べられるようになった。

人類の進歩に **言語** の果たした役割はきわめて大きい。人類の言語は，動物の叫び声とはまったく異なり，それ自体にはなんの意味もない発音を組み合わせて特定の概念を表わすものである。言語によって，知識や経験を学習し，発展させて，世代から世代へと伝えることができた。さらにお互いの意志や思想を容易に伝えあうこともできるようになった。

2.　経済生活と文化

旧石器時代

人類文化の発展段階を **道具の進歩** から考えて，**石器時代** (Stone Age)・**青銅器時代** (Bronze Age)・**鉄器時代** (Iron Age) に区分することができる。

最古の道具は，丸石の一端に打撃を加えて，刃(は)の部分を作った礫(れき)石器で，猿人類はこのような石器を使った。**原人類** はさらに進んで，石材のしんの部分を使った核(かく)石器（握斧(あくふ)），石塊からはがしとった剝(はく)片を利用した剝片石器を使った。北京原人の遺跡からみると，すでに炉(ろ)をもっていて，野生の動物や木の実を食べて生活していたらしい。



核石器と剝片石器　1・2は核石器，3・4は剝片石器の一例を示す。

旧人類 の時代には石器も複雑に，軽量になってくるが，とくに注目されるのは宗教心の芽ばえが認められる点である。来世の思想や神の観念をもち始めたことは，死者を副葬(ふくそう)品とともに埋葬したり，クマの骨を安置して祭ったことなどに示されている。旧人類はマ

ンモスなどの巨獣を狩猟し，洞窟に住み，火をたいて，きびしい氷河時代を生きのびた。

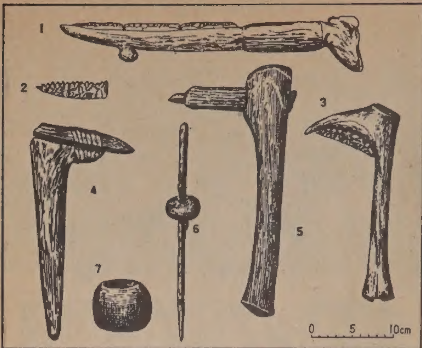


洞窟絵画2. 動物の毛皮を着て踊る呪術師（左）と傷ついた動物（フランスの洞窟画より）。壁画が洞窟の奥深くにかかれていることは，呪術と関係があると思われ，また呪術と狩猟生活との密接な結びつきも想像される。

新人類 は最後の氷期が終わりに近づくと，激変する気候や動植物の変遷に対して，多くの発明によって適応した。精巧な石刃や骨角器が作られ，槍投げ器や，石をつけた投げなわを使って，すばしこい獣や鳥をとった。冬は洞窟の入口に住み，夏は獲物を追って放浪したが，中には小屋やテントに住んで，一時的な部落をつくるものもあった。また洞窟絵画や彫刻なども生まれ，彼らの知能が非常に進歩してきたことがわかる。

洞窟絵画と彫刻 絵画では，はじめは洞窟に動物の単純な輪郭をかいたが，のちには多色の顔料を使い，みごとな写実力を示す動物画をかくようになった。スペインのアルタミラ，フランスのラスコーなどの洞窟絵画はとくに名高い。また丸彫りの女性像が彫刻され，のちには骨角器や石板の上に，動物の絵を彫刻した例が多くみられる。

中石器時代 旧石器時代と新石器時代の間に中石器時代を設ける。氷河時代が終わった紀元前1万年余り前から前7000年くらいまでにあたり，人類は後氷期の環境の激変に対して，さまざまの発明によって適応した。この時期には，細石器という小型の幾何図形的石器が登場した。さらに，磨製石器や，釣針・槍・もりのような骨製品，櫂やそり，木の繊維で作った網などが出てきたところもある。すでに弓矢・磨製石器の使用，漁撈技術の発達，犬の家畜化などがおこなわれ，後期には土器も発明され，農耕牧畜のための技術的準備ができあがった。



初期の石製農具　1・3は木の柄にとりつけた石鎌，2はその刃，4は磨製石器をつけた石鍬，5は先端に鋭い石刃をつけた手斧(おの)，6は多分農耕に使った穴掘り棒，7はこれに使われる石の止め具。

3.　食料の生産と都市文化

新石器時代

新石器時代は，人類が**農耕・牧畜**を始めて，食料の採取(さいしゅ)から生産に，放浪から定住生活に移った経済上の新しい発展段階である。*

農耕・牧畜が最初におこなわれたのは，北メソポタミア地方と考えられ，** 前6700年ころの遺跡からは小麦・大麦が出土し，石鍬(ぐわ)・石鎌(がま)もあり，家畜では羊・山羊(やぎ)・豚・犬などが見られる。同じころから，土器が作られ，織物も知られ，中庭のある大きな家屋が建てられた。前4000年前後になると，新しく南メソポタミアに住みついた人々によって初期の**灌漑農耕**(かんがい)が始められた。石または日乾煉瓦(ひぼしれんが)を用いた神殿を建て，祭壇(さいだん)を作り，いけにえを供えた。とくに重要なのは冶(や)金の発明で，銅製のピンや玉が製作され，金石併用時代にはいり，金属器時代のあけぼのを迎えた。



前4千年紀の神殿遺跡　東京大学イラク・イラン発掘隊により北部イラクのテル－サラサートで発掘された。

---

* 新石器時代の特徴として，以前は，磨製石器・土器・織物の製作，農耕の開始，ドルメンなど巨石文化の存在などがあげられていた。しかし，磨製石器などは中石器時代に作られたし，また，土器をもたぬ農耕文化や土器をもつ採集文化なども知られているから，このような特徴によって時代区分することはむずかしい。現在では，「新石器時代」は，上に述べたような経済の発展段階を示す時代区分として使われる。

** 農耕牧畜文化は北メソポタミアから旧大陸各地にひろがったものと推定される。

農耕・牧畜の発達

まだ農耕・牧畜が始まったばかりのころには，一定の土地に定住し始めた**氏族***集団が，社会の単位となっていた。人々は自給自足の生活をしており，富の分化はまだみられなかった。しかし，農耕・牧畜の発達はこのような人類の生活を一変させた。倉にたくわえられた穀物や，家畜のおかげで，飢餓(きが)の危険は減り，人口は増大し，生活には余暇が生まれた。人類はもはや農地を遠く離れることはできなくなり，定住生活が始まった。穀物や家畜の生産がふえると食糧にも余裕ができ，これにともなって貧富の差がおこり，土地や家畜など財産の私有が始まった。各地域の間では特産物の交換がおこなわれて，交易経済がひろがった。このような変化は人類の生活に革命的な影響を与えたので，**食料生産革命**ともよばれている。

都市文化の成立

食料生産が最初に発達したのは，パレスチナ・シリアを通って，チグリス・ユーフラテス両河流域のメソポタミアに達する地域で，ここは「肥沃(ひよく)な三日月」とよばれ，ナイル川下流域とともに最古の文化発生地となった。

前4千年紀**後半になると，メソポタミアでは，銅に錫(すず)をまぜて青銅を鋳造(ちゅうぞう)する技術がおこり，金銀細工の装身具も作られ，石器時代から，**青銅器時代**にはいった。集落も神殿を中心に道路や広場をもち，城壁をめぐらすほどに発達して，都市らしい外観を示すようになった。同じころ，エジプトでも，都市文化のあけぼのの時期を迎えた。

この時期の最もめざましい特徴の一つは，**文字の発明**である。文字は数詞・絵文字として始まり，やがてこれから表音文字も生まれた。メソポタミアやエジプトでは文字の記録が残され，またインダス川流域でも

---

* 氏族は家族とちがって，一つの共通の祖先をもつという信仰で結ばれた母系または父系の集団で，集団内では婚姻がおこなわれないことが特徴である(外婚制)。血縁的ではあるが，しばしば一定の土地につながりをもっている。

** 千年紀は紀元前の長い時代をいい表わすときの単位で，前4千年紀といえば紀元前4000年から3001年にいたる1000年間をさす。



メソポタミアの絵と文字の浮彫

絵文字を刻んだ印章が発見されている。(→p. 23)文字の使用により多くの記録が残されるようになると，先史時代から**歴史時代**にはいるのである。

印　章　この時期のメソポタミアでは，所有権を明らかにするためつぼやかめに印章で刻印したので，財産をもつ個人が現われたことがわかる。印章の絵には，平民が神殿に奉納する場面や捕虜を扱ったものなどがみられ，神官・平民・奴隷の階級が分かれ，その上に，都市を中心とした国家の最初の形態が現われたことを示している。

第2節　古代文化の起源

1.　古代オリエント*の国家

大河と文化　最初の古代文化は，エジプト・メソポタミア・西北インド・北シナなどに発生した。そこには，それぞれナイル川・チグリスおよびユーフラテス川・インダス川・黄河などの大河があり，水利と交通に恵まれた流域の平野が文化の発生地となった。

これらの大河は氾濫で災害を与えることもあったが，その反面，上流から土を運んで下流地帯に肥沃な平野をつくり，これを灌漑した。生産が自然の条件に支配されることの大きかった古代の農業にとって，これは比類のない恵みであった。このような土地には，多くの人口が集まり，他の地方にさきだって都市文化が発生するにいたったのである。

アジアの風土と文化　東アジアと南アジアは，季節風をうけて雨量が多く，広大な農耕地帯がひらけた。北アジア・西アジアからアフリカ北部にかけては，乾燥した砂漠や草原・高原がつづいている。大陸の中央から四方に走る

---

* オリエント (Orient) の語は，古代のローマ人が太陽ののぼる方向をさしたよび名からおこり，ここでいう古代オリエントは西南アジアとエジプトを含んでいる。



アジア・アフリカ大陸と文化の発生

山脈は，これらの地域を互いに隔て，ますますその特徴をきわだたせている。アジアは歴史時代を通じて一つの文化圏に統一されたことはなく，東アジア(中国とその周辺)・南アジア（インドとその周辺)・西アジアとエジプト（オリエント)・北アジア(モンゴリア・トルキスタンなど)の各地区は，互いに交流をもちながらも，それぞれに独自の文化圏を形づくっていた。

エジプト

「エジプトはナイルの賜(たまもの)」というヘロドトス(→p. 38)のこのことばは，そのままエジプトの栄えた原因を物語っている。ナイル川の定期的氾濫によって灌漑される肥沃な川床(かわどこ)と三角洲(デルタ)に住むエジプト人*は，砂漠によって周囲から孤立させられた豊かな環境の中で，早くから高い文化と大統一国家を生んだ。

エジプトの歴史　前3千年紀の初め，メネス(Menes)王が統一王国をつくり，その後，前6世紀にペルシアに征服されるまで26の王朝が興亡した。古王国の第4・5王朝には巨大なピラミッド**が建造され，エジプト文化の伝統はこの時期に確立した。前2千年紀の初めに栄えた中王国の末期に，アジアから遊牧民族ヒク

*. ハム語族に属する。語族とは同一系統の言語を話す民族の集団で，おもな言語族には，インド-ヨーロッパ語族(→p. 17)・セム語族(→p. 16, 17)・ハム語族・シナ-チベット語族（中国人など)・アルタイ語族（モンゴル・トルコ・ツングース）などがある。

** ナイル西岸にあり，クフ王のピラミッドが最も大きい。この時代には古代エジプトの代表的な巨石建造物であるオベリスクやスフィンクスの建造も始められた。



トゥトアンクアメンの玉座　前14世紀にアメンホテプ4世は，テル-エル-アマルナに都を移して太陽神アトンの一神教をおこし，ここで自由で写実的なアマルナ芸術が生まれた。トゥトアンクアメン王は彼の甥(おい)で，その墓室は1922年テーベ対岸の王陵の谷で発見された。図は木製黄金張りの玉座の背部に刻まれた彫刻で，太陽神の恵みをうける王と王妃(ひ)。アマルナ芸術の代表作の一つである。

ソスが侵入したが，前16世紀にはこれを撃退してテーベに**新王国**がおこった。新王国初期の第18・19王朝(1560～1200 B.C.ころ)は国力の最もさかんな時代で，エジプト人ははじめて大きく西アジアに進出した。*

メソポタミア　チグリス・ユーフラテス両河流域のメソポタミアは「肥沃な三日月」の東半部を占め，四面がひらけているために，早くから周辺地域との交易が発達し，またしばしば遊牧民族などの侵入をうけた。おおむね孤立した環境の中で伝統的文化を守ったエジプトに比べると，メソポタミアの歴史は複雑であり，文化は広い範囲に伝わった。

メソポタミアの南部には前3千年紀の初めから，**シュメール(Sumer)人**の都市国家**の文化が栄えた。その後アッカド人・アムル人など**セム語族**の侵入が始まり，前2000年ごろアムル人によって，**バビロニア(Babylonia)王国**がおこされた。

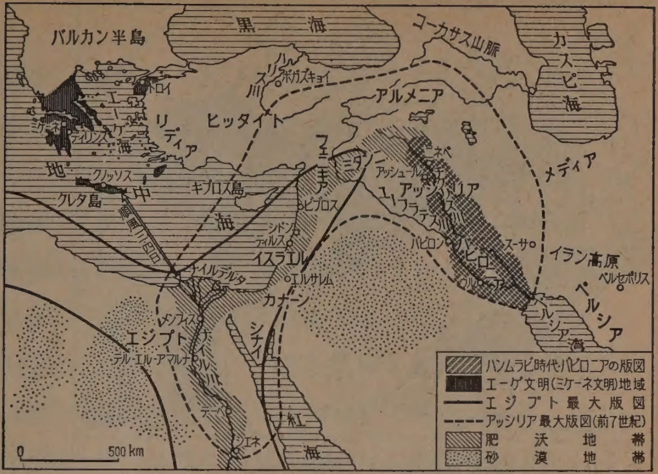
前18世紀に即位したハンムラビ(Hammurabi)は，メソポタミアを統一し，完備した法典を編纂(さん)し，バビロニア文化の黄金期を築きあげた。

---

* トトメス3世（前15世紀）・ラメス2世(前13世紀）などはとくに征服者として有名で，この間エジプトの勢力は遠く南方のヌビア地方にものびた。

** 多くは神殿を中心に発達した(→p. 12)。その代表的な都市ウルの遺跡はウーリー博士らによって大規模に発掘され，そのすぐれた文化は人々を驚かせた。

新民族の活動



古代オリエント

エジプトとメソポタミアの二つの中心を一つに結びつけるきっかけをつくったのは，インド-ヨーロッパ語族の活動である。*彼らは前2千年紀の初めに，北方から西アジアの諸地域に移動し，馬と戦車を利用して大征服をおこなった。小アジアに強大な王国をたてたヒッタイト**や，メソポタミアの北部に大国をたてたミタンニは，新王国初期のエジプトと，シリアの覇権を争った。カッシートは，バビロニア王国がヒッタイトの侵入で滅んだあと，長くその地を支配した。またイランにはメディア人やペルシア人が移動した。こうして，エジプトと西アジア各地の政治・文化は交流し，オリエントの一体化が進められた。

前2千年紀の末ごろから，シリアを中心にフェニキア人・アラム人・ヘブライ人などセム語族の活動が著しくなった。フェニキア人はシドン・ティルスなどの都市国家を中心に，長く地中海上の交通・貿易を支配し，カルタゴ(→p. 41)など多くの植民市をつくった。同じころアラム人は，ダマスカスを中心に広く西アジア内陸の交通・商業のにない手となって活躍した。またヘブライ人は，旧約聖書によれば，前2千年紀の中ごろから移動を始め，その一部はエジプトに移住したが，モーセ(Moses)に率いられてエジプト

* その移動範囲はインド（アーリヤ人）からヨーロッパ（ギリシア人）に及んだ。インド人・イラン人やヨーロッパのラテン人・ゲルマン人・スラブ人はこれに属する。

** ヒッタイト（1800～1200B.C. ころ）ははじめて鉄器を使った民族であるが，その生産量はわずかで，オリエントに鉄器が普及するのは前2千年紀の末以後である。



四国分立とペルシア帝国の統一

を脱出し，カナーンに定着した。前1000年ごろダヴィデ(David)は，全部族を統一して王国をたて，その子ソロモン(Solomon)の時大いに栄えたが，まもなく北のイスラエル，南のユダの二王国に分裂した。

オリエント世界の統一　前1千年紀にはいって，アッシリア人*が強大になり，前8～7世紀にメソポタミアとエジプトを征服して，大帝国をたてた。アッシリアの滅亡 (612B.C.) 後，メソポタミア・シリアには新バビロニア，小アジアにはリディア，イラン高原にはメディア，アフリカにはエジプトの4国が対立した。中でも新バビロニアの首都バビロンはオリエントにおける商業・文化の中心地として栄えた。

前6世紀の後半になると，アケメネス朝ペルシア (Persia) が，急に勢力を増して東西に及ぶ大統一国家をつくった。(→p. 50)ここにはじめてオリエント世界の政治的統一はなり，経済・文化の一体化も進められた。

2.　オリエントの文化

オリエントの社会　オリエントの灌漑農耕国家では，大河の氾濫を調節し灌漑に利用するための大土木工事と，豊かな土地をめざして侵入する外敵の防禦(ぎょ)が，支配者の主要な任務であったが，それには，大きな統制力を必要とした。また，生産が自然的条件に左右されることが大きく，自然を司(つかさど)る神を祭ることが，国家の重要な行事であった。

* 前3千年紀のはじめチグリス川中流域に移住したセム語族で，アッシュール市を中心に発展した。帝国時代の首都ニネベ遺跡のアッシュールバニパル王の大図書館からは，約二万枚の粘土板古記録が発見され，オリエント研究に大きく貢献した。

したがって王は，最高の神官としてあるいは神そのものとして，大きな権威をもって人民に臨んだ。このような背景をもとに，オリエントでは，大統一国家と専制政治が発達した。人口の大部分を占める**農民**は，専制君主である王や神官・官僚・軍人など大土地所有者のもとで，共同体に所属して貢納と労働の義務をおい，自由を束縛されていた。大土木工事に使われたのは，たいていこれらの農民か**奴隷***であった。

このように圧倒的多数の人民の上に，少数の支配者層を中心とする文化が築かれた点は，古代の中国やインドにも共通する特色である。オリエントでは，国家や支配者層の必要に応じて巨大な建造物やすぐれた美術品がつくられ，実用的な知識や技術が発達した。しかし専制政治と共同体の支配する社会であったので民衆の個々の力は弱く，彼らの生活と結びついた個性のある芸術や科学的精神の開花はみられなかった。

宗　　教　エジプトやメソポタミアでは，氾濫や収穫の時期を正確に知る必要から**天文**・**暦法**・**数学**が発達し，神と人の仲介者であるとともに，これらの知識を独占した神官は大きな権力を握った。エジプトでは世界最古の太陽暦が創始され，メソポタミアでは，太陰太陽暦が用いられ星座がつくられた。宗教は自然崇拝の**多神教**で，太陽・月・星などの天体や自然物・動植物などが神としてあがめられた。エジプトでは，霊魂の不滅，死後の生活の存在が信じられて，死体保存のためミイラがつくられ，「**死者の書**」が残され，墳墓として壮大なピラミッドや岩窟墳墓が建設された。メソポタミア人の信仰には現世中心の傾向が強く，運命を占うための**占術**がさかんにおこなわれ，またすぐれた宗教文学が発達した。

---

* ハンムラビ法典には，貴族・平民・奴隷の身分が厳重に規定されて，同じ罪を犯しても身分により刑罰が異なっている。奴隷は，捕虜・被征服民・債務奴隷・奴隷の子などが主で，家事・農耕・神殿の奉仕などにも使われ，家畜と同じように売買された。しかし，ギリシア・ローマに比べるとその数は少なく，生産の主要なにない手は農民であった。



「死者の書」―アニのパピルスより　死者とともに，墳墓に埋葬した宗教文書で，その来世観を知る重要な資料である。図は新王国第18王朝の書記アニのパピルスに書かれた「死者の書」の一部。
左側のアニとその妻が，死後復活して幽界の神となったオシリスの法廷に導かれ，アヌビス神（狼の形）がアニの心臓と真理の羽を天秤にかけ生前のおこないを審判しているところ。

これら多神教の間にあって，善悪二神の対立を説くペルシアのゾロアスター教の倫理的な教えは，ユダヤ教やキリスト教に影響を与えた。また，もとは多神教であったヘブライ人は，モーセの教えによりヤハウェ（エホヴァ）の神を信ずるようになった。前8世紀にイスラエル王国が滅びたのち，ユダ王国も前6世紀に新バビロニアに滅ぼされ，住民はバビロンに連れ去られた（バビロン捕囚）。異境にあってその信仰をいよいよ深くした彼らは，半世紀後ペルシア王に解放されて帰国したのち，エルサレムの神殿を再建し，モーセの教えを中心として一神教を確立した。これがユダヤ教である。のち，これを母胎としてキリスト教が成立した。

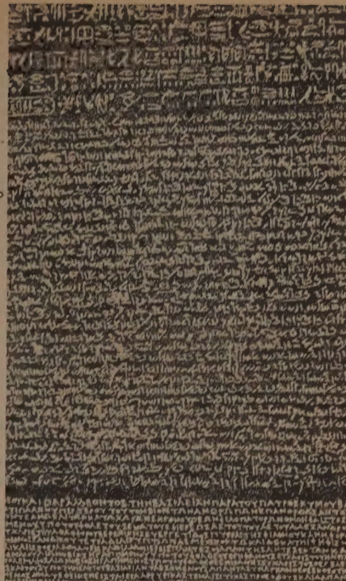
旧約聖書　(→p. 48)ヘブライ人の神話・歴史的伝承・讃歌・ヤハウェの教義などを集めたものが旧約聖書で，すぐれた文学的作品であり，新約聖書とともにキリスト教の経典としてヨーロッパの思想・文学・美術などに影響を与えた。

法　　律　メソポタミアでは，インド・オリエント各地域との交易がさかんで商工業が栄え，交換経済*や信用取引が発達した。したがって早くから商法・民法・奴隷法・刑法などの法律が発達した。前3千年紀末にはシュメール法が編纂され，この影響をうけて前18

* 西アジアでは早くから銀・銅などが価格の単位として取引に使われた。しかし一定の品位・形をもつ鋳造貨幣の流通は，前7世紀のリディアが最初である。

世紀には，現存する最古の完備したハンムラビ法典(→p.16)がつくられ，アッシリア法・ヒッタイト法・ヘブライ法などに影響を与えた。

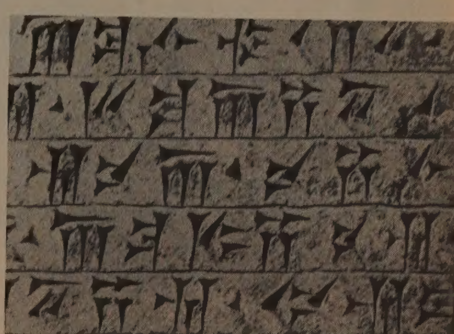
文字の発達と普及　オリエント文化の発達は文字の普及によることが大きく，とくにアルファベットの発明は，後世に大きな影響を与えた。エジプト文字は神聖文字（ヒエログリフ）といわれ，のちこれを草書体にしたのが民衆文字（デモティック）である。ナイル川に自生するかみかやつり草でつくったパピルスにインクで書かれた。



ロゼッタ石　1799年ナポレオンのエジプト遠征の時，ナイル河口のロゼッタで発見され，19世紀前半にシャンポリオン(→p.210)(仏)らはこれを鍵（かぎ）にしてエジプト文字の解読に成功した。図の上段は神聖文字，中段は民衆文字，下段には同じ内容がギリシア文字で書かれている。

シュメール人の文字もエジプト文字と同じく表意文字と表音文字とよりなり，硬筆で粘土板に刻まれたので，楔形文字（くさびがた）といわれるようになった。楔形文字はバビロニア人・アッシリア人・ヒッタイト人・ペルシア人などにうけつがれ，国際間の外交や商業に使われて広く全オリエントに普及した。

フェニキア人は商業上の必要から簡単な22のアルファベット*を作



楔形文字の解読　バグダードからテヘランにいたる隊商通路に沿う，寒村ベヒストゥンの断崖（がい）に刻まれた，ペルシア王ダリウス1世のペルシア語碑文の一部。19世紀前半に，これがローリンソン(英)・グローテフェント（独）らの研究によって読まれ，さらにバビロニア語・シュメール語などの解読のきっかけとなった。

* ヒエログリフを単純化してセム語の音を表わしたシナイ文字をもとにして作られた。

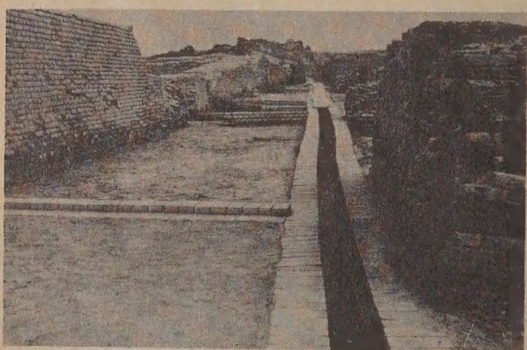
り，これをギリシア人に伝えた。今日のローマ字は，ギリシア文字からさらに転化したものである。アラム文字は楔形文字よりもさらに広い地域に伝わり，メソポタミア・イラン・インド・中央アジアにまで影響を及ぼした。* (→p. 74)

3. インド・中国・アメリカ

インダス文化

インドでは，新石器時代に原始農耕文化が発達していたが，前3千年紀の中ごろから，北西部のインダス川流域を中心に，灌漑農耕と牧畜に基礎をおき，青銅器をもつ都市文化が栄えた。これはインダス文化とよばれ，下流西岸のモヘンジョ-ダロやパンジャブ地方のハラッパなど多くの都市遺跡が発掘された。

これらは強い権力をもつ王により，都市計画にもとづいて建設されたらしく，城壁の中に，れんが製の公共建築物・住宅が東西と南北に走る街路に沿ってつくられ，給・排水設備も完備している。市民の食料は小麦・大麦など穀類やなつめやしを主食とし，牛・羊・山羊・象などの家畜も飼われた。美しい彩色土器や青銅器・印章などが製作され，衣服には木綿（もめん）が常用され，装身具も発達していた。彼らは南インドや西アジアと交易し，メソポタミア文化の影響をうけた。インダス文化を生んだのは，現在南



モヘンジョ-ダロの遺跡　モヘンジョ-ダロを南北に貫く主街路は幅約10m 長さ2500m 以上あり，その壮大さが知られる。舗（ほ）装された路面の下や両側の家屋には完備した下水溝（こう）（上図）が設備されている。

---

* アラム語も西アジア一帯に広く流通し，一種の国際的商業・外交用語として用いられた。アケメネス朝ペルシアはこれを公用語とした。

インドに分布するドラヴィダ人ともいわれているが，前２千年紀前半に，洪水とアーリヤ人(→p. 52)の侵入によって滅亡したと考えられる。



印章　滑石などで作られ，きわめて写実的ですぐれた動物などの絵とともに多くの象形文字が刻まれているが，まだ解読されていない。この印章には神聖視された牛と文字が刻まれている。

中国の先史文化

シナ大陸では，北京原人以後の旧石器時代の状態ははっきりわからないが，その間，黄土が北シナ一帯に堆積した。やがてこの**黄土地帯**に，竪穴に住み，土器を作り，農耕・牧畜をおこない，村落生活をいとなむ新石器人が現われた。彼らは**原シナ人**とよばれ，のちの漢民族の祖先と考えられる。中国の新石器文化には，**灰陶・彩陶・黒陶**の三種の土器がある。灰陶は華北の原始農耕民が穀物の煮たきに使った粗末な灰色の土器で，広く黄土地帯に分布した。彩陶はオリエントから農耕牧畜文化とともに伝わり，灰陶とともに原始農牧民の間に分布した。この文化は，経済生活の発達にともない，さらに進んだ農耕社会を基盤として黒陶文化を生んだ*。黒陶は，表面をみがきあげた薄手の黒色土器で，黄河下流域から山東にかけて分布し，形の上でも殷・周の青銅器によく似たものがある。この黒陶文化を母胎として，のちの殷文化が成立したと考えられる。

北シナの農民は血縁を中心として，邑とよばれる村落をつくっていたが，やがてそれら諸邑の間にゆるやかな支配と従属の



灰陶の三足土器



黒陶のたかつき

ともに遼東半島の四平山出土。

* 華北の新石器時代は最近の考え方では，彩陶を含む仰韶文化と，黒陶を含む龍山文化の前後二期に分けられている。



彩　陶　中国甘粛省半山出土。赤褐色の光沢ある面に，黒と赤の線を交互に使って美しいうずまきもようを描いた形のよい壺である。高さは31cm。中国の彩陶は，黄河上流の甘粛から，中・下流にひろがり，さらに熱河・南満州方面にも達している。

関係が生まれ始めた。前2千年紀になると，黄河下流域に都市文化がおこり，また，漢字の原型となった甲骨文字によって記録が残され，東アジアも歴史時代にはいった。(→p. 58)

アメリカ大陸の都市文化　無人の大陸であった新大陸*には，旧大陸とまだ陸つづきであった3万年ほど前から，原始モンゴル系の旧石器人がしばしば移動した**。

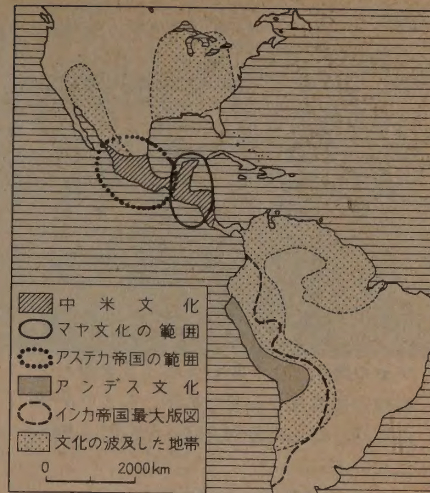
後氷期にはいり両大陸が断絶したのち，原住民インディアンが農耕を開始するのは，中米では前7000年ごろで，旧大陸農耕とほぼ同じくらい古いが，トウモロコシの栽培を中心とする定住農村の確立はおそく，前千年紀からであった。その後，各地で灌漑農耕がおこり，やがて神官が強い権力をもって支配し，宗教的都市を中心に文化が発達し，最後に軍事的統一国家ができるなど，旧大陸文化とよく似た経過をたどった。新大陸では南米の中央アンデス地帯と中米で，とくに文化が発達した。彼らは鉄・大型の家畜・火器・車を知らなかったが，旧大陸に劣らない高い文化を築いていた。

アンデス文化と中米文化　南米のアンデス地帯では，中米より農耕の開始はおそかったが，前2千年紀前半までに大神殿・芸術的な石彫・土器がつくられ，前千年紀には，金銀の細工が始まり，アンデス文化が発達した。紀元前後からは，美しい織物・土器にすぐれた才能を発揮し，多種の農産物を栽培して，人口も飛躍的にふえた。13世紀ごろべ

* ヨーロッパ人は15世紀に発見したアメリカを新大陸とよび，それ以前の既知の大陸（アジア・ヨーロッパ・アフリカ）を旧大陸とよんだ。

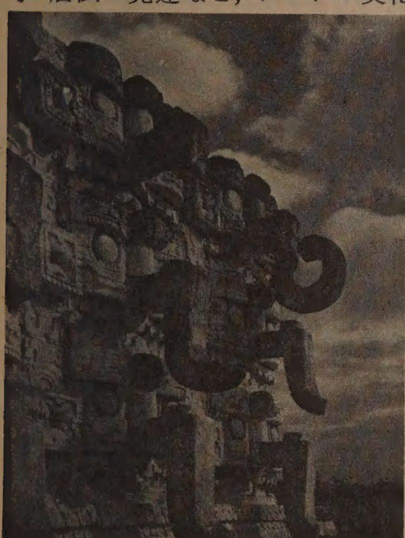
** 彼らはのちのインディアン（スペイン語のインディオ）の祖先である。

ルーの山岳からおこった一部族が，アンデス各地を征服し，15世紀には新大陸最大の国家となった。これがインカ帝国で，インカ（皇帝）を頂点として完備した中央集権政治をおこなった。彼らは文字は知らなかったが，巨石を使った大規模な都市建設や道路・灌漑などの土木工事に驚くべき技術を示している。



中南米の諸文化圏

中米に発達した都市文化には，石造の階段ピラミッド・文字・天文・数学・暦法の発達など，アンデス文化よりすぐれた特色も多いが，冶金術の発達ははなはだしく遅れた。グアテマラを中心に発達したマヤ文化は，新世界のギリシアといわれるように，高い知的水準*を示し，他の中米文化に強い影響を与えたが，10世紀ごろ，文化の中心は北のユカタン半島に移った。また，新大陸農耕の発生地であるメキシコ中央高原にも，早くから都市文化がおこったが，15世紀に，アステカという一部族がこの地方を征服して，強大な軍事国家をたてた。



マヤの神殿　ユカタン半島にある雨神チャクの神殿の一部。全面長い鼻の雨神の彫刻でおおわれ後期マヤの代表作の一つである。

しかし，16世紀前半に侵入した

* 彼らは早く数字の0を発見し，20進法を確立し，精密な太陽暦と祭儀暦を併用した。文字は神殿の壁や木・動物の皮などに書かれているがまだ完全には解読できない。

スペイン人によって，インカもマヤもアステカの帝国も滅び，原住民の多くは奴隷化され，新大陸の古代文化は終わった。



マヤの数字　1を現わす点と5を現わす横棒とを組み合わせた数字。左より0～9の記号。ほかに象形文字(下2段)も使われている。

課　題

1. 原始社会の生活を学ぶことがわれわれにとってなぜ必要か。また文字のなかった時代の歴史をどのような方法によって研究することができるか。
2. 先史時代における道具の制作の意味を考えてみよう。道具の進歩は，経済生活にどのような影響を与え，社会の姿をどのように変化させたか。
3. 都市文化の成立は，食料生産技術・冶金術・文字の発達とどのようなつながりをもつか。メソポタミア・アメリカなどの例について調べてみよう。
4. 古代文化は，まずどのような自然的条件をもつ地域に発生したか。四大文化発生地について，それらの地域に共通する条件を考えてみよう。
5. オリエントの文化遺産は，後のアジアやヨーロッパの人々の生活の中にどのように生かされているか。文字・宗教・暦・星座・建築・法律などについて調べてみよう。
6. インダス文化・黄河文化・アンデス文化・中米文化などは，どのような点で後世の文化とつながりをもっているか，よく調べてみよう。



ローマのコロセウム
(→p.47)

第2章　古代文化の成立

最古の文化が，大河の流域におこったのに対して，ギリシア・ローマの古典文化は，地中海という海を中心に発展した。文化の潮流は，オリエントからエーゲ海へ，ついで，ギリシアからローマへと西漸(せいぜん)し，最後に，ドイツの歴史家ランケ(→p.246)のいったように，いっさいの古代史は，いわば一つの湖に注ぐ流れとなってローマ史の中に注ぎこんだのである。古代ギリシア人の生み育てたヘレニズム文化と，ローマ帝国と結びついて発展したキリスト教は，いずれも，ヨーロッパ文化の成立発展に大きな影響を与えた。

地中海世界の東隣りの西アジアでは，アケメネス朝からササン朝にいたるまでの千余年間，東西文化の交流する中で，イラン的民族意識と独自の美術文化が形づくられていった。また，インドにおいては，侵入したアーリヤ系文化と先住民の文化とが融合しつつ，インド式生活様式が形成・充実され，その中から生まれた仏教など新宗教の発展とともに，アジア諸地域に影響を及ぼした。しかし西アジアもインドもやがて，イスラムという異質の文化の強い影響をうけることになるのである。(→p.90)

東アジアの歴史は，中国を中心として展開した。黄河文化の発生した華北を中心に，同じ漢民族によって，しだいに充実し拡大していったのが中国の歴史である。秦の統一，ついで，儒教にもとづく漢の統一政治により確立された中国古代文化は，やがて東アジア全域にその文化圏をひろげていくのである。

第1節　ギリシア文化の発展



線形文字の書かれた粘土板
クレタ・ミケーネ・ピロスなどで多く発見され，その一部（線文字B）は1952年イギリスのヴェントリスによって解読された。図はクノッソス出土の線文字B。

1.　ギリシア人の世界

エーゲ文化　バルカン半島南端のギリシア本土や，エーゲ海の沿岸諸島は，山地が多く，大河や肥沃な平野に恵まれず，雨量も乏しかったから，穀物は常に不足がちであった。ただ空気が乾燥しているので，葡萄・いちじく・オリーブなどの果樹栽培には好適であった。また海岸線が発達し，多数の島々と良い港湾に恵まれていたため，住民は早く海上へ発展し，エジプトや西アジア文化の強い影響をうけて，まず前3千年紀の末からエーゲ海に新しい都市文化が栄えた。この**エーゲ文化**（2000～1200B.C.ころ）は，まずクレタ島を中心に発達し（クレタ文化），前1600年ごろから全盛期を迎えたが，やがて，ギリシア本土に中心が移った（ミケーネ文化）。

クレタ人は独自の象形文字と線形文字を残したが，まだ未解読の部分



クノッソス宮殿の壁画
クレタ島クノッソス宮殿の「玉座の間」とよばれる小室（6m×4m ぐらい）に獅子と百合を装飾風に描いた美しい壁画。



エーゲ文化の中心地とギリシア人の移動

が多く，社会の状態はよくわからない。しかしクノッソス宮殿の遺跡などから推して，強力な王に支配されていたと思われる。彼らは古くから通商航海民族として活躍し，宮殿建築や美しい金属工芸品・陶器・壁画などによって示されるように，オリエント文化の影響をうけながらも，海洋的な明るさと，繊細華麗で写実性と運動表現に富んだ，特徴ある芸術を生んだ。

エーゲ文化の発見　19世紀の末，ドイツのシュリーマン（Schliemann 1822～90）が，ホメロスの詩にうたわれた物語を歴史的な事実と考えて，トロイやミケーネの遺跡を発掘し，ついで，イギリスのエヴァンズ（Evans 1851～1941）が，クレタ島の遺跡を発掘した。(→p. 35) その結果，ギリシア文化のおこる前に，エーゲ海の沿岸や島々に，すぐれた文化が栄えていたことがわかった。

ギリシア人と初期の社会　前2000年ごろから，インド－ヨーロッパ語族のギリシア人のうち，まずアイオリス人・イオニア人などが，バルカン半島を南下してギリシアにはいった。彼らの一部はクレタ文化の影響をうけて，ミケーネ文化（1550～1200 B.C.ころ）を生んだ。その中心ミケーネ・ティリンス・ピロスなどには強力な専制王国が成立して東地中海上に発展し，小アジアに栄えていたトロイ文化もその影響をうけた。前1200年ごろ，エーゲ海一帯に鉄器をもつ新しい民族の移動が始まり，ドーリア人はペロポネソス半島のミケーネ文化を破壊した。

これらのギリシア人は，エーゲ海の島々や小アジアの西岸に植民し，ここにエーゲ海を中心とするギリシア人の世界が形成された。エーゲ文



アテネのアクロポリス　右からパルテノン，エレクテイオン，プロピュライアの各神殿の遺跡。

化は，ギリシア文化と直接につながるものではないが，大きな影響を残した。

ドーリア人移動後の初期のギリシア人の社会は，他の原始民族と大差のない氏族共同体であったが，その長である王はオリエントの専制王とちがって権力が弱く，長老会と相談して政治をおこなった。また，世襲私有地（クレロス*）をもつ全自由民の総会である**民会**があった。しかし，やがて私有地の大きさに差がうまれ，土地・家畜などを多くもつ者が権力を高めて，貴族と平民の別がおこった。

ポリスの成立

王に代わってしだいに政治・軍事の実権をにぎった貴族は，防衛に適した要害の地に集住（シノイキスモス）をおこない，平民の多くもこれに従い，ポリス (Polis) とよばれる都市国家**が多く生まれた。

ポリスの中心は守護神を祭る小高い城砦（さい）アクロポリス (Acropolis) で，そのふもとには，会議・裁判・取引・社交のおこなわれる広場アゴラ (Agora) があって，市民生活の中心をなし，市街の周囲には農地が付属していた。ポリスは，ギリシア本土や海外の植民地に多数成立***し，内には自治をおこない，外に対しては独立を守り，自給自足の経済をたてまえとした。各ポリスはつねに対立抗争してギリシア人としての政治的統一はついに実

---

* 籤（くじ）という意味。はじめは土地が共同体に属し，全自由民に平等に割り当てられていたと思われる。この時代にはすでにクレロスは私有地化していた。

** その領域は小さく，人口も数千から数万に過ぎず，例外的に大きいとされたアテネやスパルタでも東京都の面積の約1倍半であった。

*** ポリスの数は一時ギリシア本土で150以上，海外植民地を加えると1000にも及んだ。

現できなかったが，そこでは市民の強い自主性と公共性がはぐくまれた。

ギリシア人の同胞意識　ギリシア人は共通の言語と宗教をもち，ギリシア語を語らぬ異民族をバルバロイ* (Barbaroi) とよび，自らをヘレネス** (Hellenes) と称してこれと区別した。そして，統一国家を形成しようとする政治的な民族意識は持たなかったが，オリンポスの神々の神話，ホメロスの詩篇，デルフォイのアポロン神の信仰の示すように，共通の神の祭祀や神話を中心として結ばれた文化的な共同意識があった。同じ神を信仰するポリス間の隣保同盟や，オリンピア競技会も，この共同意識を強めるのに力があった。

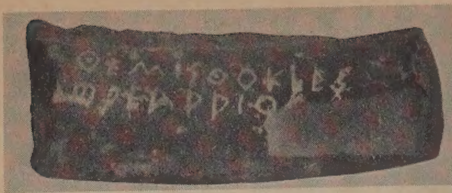
2.　ポリスの民主政治

貴族政治　ポリスではははじめ**貴族政治** (Aristocracy) がおこなわれた。しかし前8世紀中ごろから，ギリシア人は地中海・黒海沿岸にさかんに植民活動をおこない，これにともなって商業が活発となって，貨幣経済***がゆきわたり，手工業もさかんになった。この結果，中小市民(平民) が実力を持ち始め，彼らからなる**重装歩兵**は密集部隊を編成して国防の主力となった。やがて平民は，広大な土地を支配し政権を独占する貴族に対して不満を強めるにいたった。一方，貨幣の流通によって市民の中には債務のために奴隷になるものもあらわれ，また海外からも多数の奴隷が輸入されて，農業や鉱工業の生産に従事するようになり，ギリシアの**奴隷**



ギリシア人の植民

* 「聞き苦しいことばをしゃべるもの」という意味の語。英語の barbarism の語源。
** 共通の祖先ヘレンの子孫の意味。また彼らの国土をヘラス (Hellas) とよんだ。
*** 前7世紀に小アジアのリディアで作られた鋳造貨幣がギリシアにもたらされた。



オストラコン 陶器(オストラコン)の破片に，僭主となる危険のある人の名をしるして投票させ，有効投票のうち最多票を集めた人が，10年間国外に追放される。図にはテミストクレスの名がしるしてある。

制度はこの時期に確立した。

アテネの民主政治

平民と貴族の争いがはげしくなったアテネでは，前7世紀の末，貴族のドラコン(Dracon)が成文法を定めたが，ついで前6世紀初め，ソロン(Solon)が貴族派と平民派の調停者となり，市民の権利や義務を身分によらず財産の多少によって区別する**財産政治**(ティモクラシー)を実施し，また市民が負債によって奴隷となることを禁じた。

しかし政権の独占を失った貴族や，政治に参加できない無産市民は，なお不満で政争がたえず，これに乗じて平民の支持を得たペイシストラトス(Peisistratos)は武力により貴族政治を倒して**僭主**(せん)(タイラント Tyrant)となった。彼は平民の利益をはかり，アテネの地位を高めたが，後継者が暴政をおこなったため，まもなく**僭主政治***は倒された。やがて前6世紀末クレイステネス(Kleisthenes)が出て，貴族の政治的地盤であった選挙区制を改め，また「**陶片追放**(オストラシズム)」を制定して僭主の出現を防いだので，中小土地所有者である重装歩兵市民を中心とする**民主政治**(デモクラシー)(Democracy)の基礎ができた。他の多くのポリスでもこのころ民主政治へと向かった。

スパルタの制度

スパルタはドーリア人が建設したポリスで，征服した多数の先住民を不自由身分の農民(ヘロット Helots)**として土地を耕作させ，その支配を保つため，きびしい**軍国主義の政治**をおこなった。重装歩兵として軍の主力をなすスパルタ市民は，一定の土地とヘロットを割り当てられて，生活を保障されたが，国家は土地の譲渡や分割を禁じて市民の間に平等が保たれるようにした。一方，市民が商

---

* 他のポリスでも貴族政治から民主政治への過渡期に僭主政治がおこなわれた例が多い。

** その数はスパルタ市民人口の約10倍で，このほか，ペリオイコイとよばれる自由民も存在した。これは市民権をもたず，主として商工業にしたがった。

工業にたずさわることを許さず，鎖国をおこなって，貨幣経済の発達をおさえた。*



ペルシア戦争とアテネ・スパルタ

ペルシア戦争　オリエントを統一したペルシアは，領内のフェニキア(→p. 50)を通じて地中海の支配権をにぎろうとして，その競争者である小アジアのギリシア植民市を圧迫した。イオニアのギリシア人は反乱をおこし，本土のアテネなどが援助したので，これが原因となってペルシア戦争(492～449 B.C.)**がおこった。

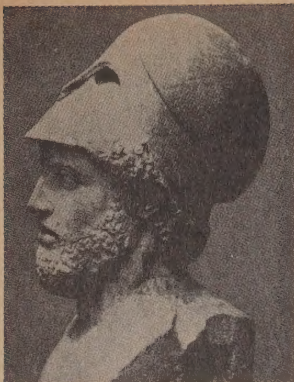
ペルシア王ダリウス１世はギリシアに遠征軍を送ったが，アテネは独力でこれをマラトンの戦いに破った(490 B.C.)。ダリウスの子クセルクセスは，大軍を率いて海陸からギリシアに侵入したが，最強のポリスであったスパルタとアテネは連合して防衛にあたった。アテネのテミストクレス(Themistokles)は**サラミス湾の海戦** (480 B.C.) でフェニキアを主力とするペルシア海軍を破り，翌年陸戦でもギリシア側が勝ってペルシア王の目的は失敗した。

ペルシア戦争はオリエントの専制国家に対するポリス市民団の勝利であり，ギリシアの社会と文化の発展をいっそうおしすすめるきっかけとなった。

民主政治の徹底と奴隷制度　戦争に最も功績のあったアテネは，ペルシアの報復にそなえて，小アジアやエーゲ海の大部分のポリスとデロス同盟を結んでその盟主となり，大艦隊を常備し，同盟資金の金

* 以上のようなスパルタの国制はリュクルゴス (Lycurgos) の制度といわれ，またそのきびしい訓育は，のちにスパルタ式教育の語を生んだ。鎖国や貨幣経済の抑制は，経済の変動による革命や反乱を防ぎ，重装歩兵民主政を維持する目的とみられる。

** 479B. C. に戦局が決した。しかし戦争状態が最後的に終わったのは449B. C. である。



ペリクレス　連年アテネのストラテゴス（将軍）に選ばれ，市民の最高指導者となった。

庫をデロス島よりアテネに移して，富強と繁栄を誇った。一方，サラミス海戦に水兵として活躍した無産市民は，戦後，政治に対して強い発言権をもった。こうして，ペリクレス（Perikles，495ころ～429 B.C.）が指導した前5世紀中ごろには，アテネの民主政治はいっそう徹底し，古典文化の最盛期を迎えた。

アテネで重要な政策を決定するのは，18歳以上の男子全市民が出席する民会であった。しかし，市民権をもつ者は，全盛期のアテネの自由民約20万人の中2割くらいで，婦人や市民以外の住民・奴隷には参政権がなかった。市民はだれでも役人になることができ，また民衆裁判所も市民の中からくじ引きで裁判官が選ばれた。これらの民会出席者・役人・裁判官には手当てが支給されたので，無産市民も権利を行使できるようになった。

市民はすべてポリスを守る義務を負い，自費で従軍するたてまえであったが，このことが市民の権利を高め，民主政治を発達させる基礎ともなった。しかし，このような民主政治の発達も，奴隷制度を土台として実現されたものであり，近代の民主政治と大きなちがいがあった。

奴隷制度　農業・手工業・鉱山業などの生産労働や公共・家内の雑役に服した奴隷は，人格も認められず，主人の財産として売買された。植民活動と交換経済が活発になるにつれ，海外から輸入された奴隷もふえ，アテネでは全人口の3分の1以上を占めた。プラトンやアリストテレスのような学者も，奴隷制度をポリス生活に必要なものとして肯定していた。

ポリスの衰退

かねてアテネと対立していたスパルタは，ペロポネソス同盟を率いてデロス同盟に対抗し，ペロポネソス戦争（431～404 B.C.）がおこった。ギリシアのポリスは植民市まで加えて二つに分かれて争ったが，ペリクレスの死後アテネの民主政治は野心ある民

衆煽動家 (Demagogue) たちにあやつられて衆愚政治となり，失政を重ねて戦いに敗れ，その覇権を失った。

このの ち，スパルタに続いて中部ギリシアのテーベが覇権をにぎったが，ともに長続きせず，こうした混乱に乗じて再びペルシアは金力を用いて干渉を試みた。ポリスの内部では貨幣経済が進み，富裕者への土地の集中や奴隷制度の影響によって，貧富の差が著しくなり，重装歩兵市民の没落によって，傭兵制度がひろがった。こうしてポリスの制度は内部からもくずれ始め，急速に衰えていった。

3. ギリシア文化

ギリシア文化の特質

ギリシア文化は，オリエント文化やエーゲ文化の遺産をうけつぎながらも，本質的には全く異り，ポリスの市民の中から生まれた文化であった。彼らは専制王や宗教の支配を離れた自由な人間として，自然と人間とを観察し，その本質をきわめようとした。

実用を離れ，純粋に理論の研究を目的とする合理的な思索への道は，ギリシア人によって開かれた。彼らはまた現世に生きることの喜びをたたえ，想像力に富み情操豊かな文学や，肉体と精神の調和をうつしたすぐれた美術を生みだした。このようなギリシア文化の**合理的・現実的**な精神は，西洋文化の根強い伝統となって，現代まで生き続けている。

ギリシア人は神々を，不老不死ではあるが，人間と同じような姿や心をもつものと考えた。オリエントのような神官も経典もなかったので，彼らは神々を自由に表現することができた。このようにして美しく，人間性にあふれたギリシア神話が生まれ，全ギリシア人が精神的に結びつけられた。オリンポス山上に住むと考えられた**十二神**は，とくに崇拝され，各ポリスはまたそれぞれの守護神を祭った。

文学と美術

ギリシアではまず**叙事詩**が発達した。ホメロス(Homeros)のトロイ戦争を主題とした「イーリアス」「オデュッセイア」の二



アテナ＝パルテノス像（模作） パルテノン神殿に収められていたフェイディアス作の守護神像の模作。原作は10メートル以上の巨像であった。

大詩篇（前9世紀ごろ）は，ギリシア人の教養と修養の糧(かて)であった。前7世紀ごろ出たヘシオドス(Hesiodos)は「神統記」によって神話を体系づけ，「労働と日日」において，農民の労働生活の苦しさと尊さをうたったが，奴隷制度がさかんになると，ギリシア人は労働を軽蔑(べつ)するようになった。

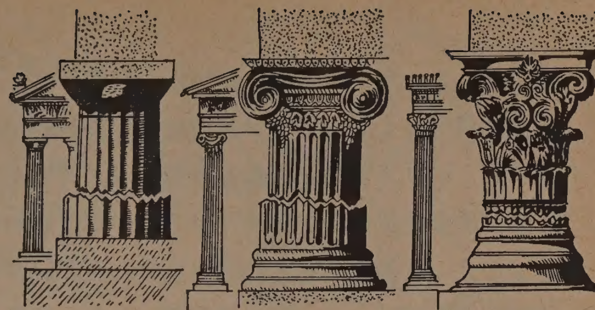
貴族の支配に対し平民の実力が著しく高まった前6世紀初めごろから，個人の意識のめざめによって**叙情詩**がおこり，女流詩人サッフォー(Sappho, B. C. 600ころ)につづいてアナクレオン(Anakreon, 563ころ～478ころB. C.)・ピンダロス(Pindaros, 522ころ～442ころB. C.)らが現われた。民主政期になると，酒神ディオニソスの祭礼行事からおこった**演劇**がさかんになり，国家的行事として露天の公共劇場で競演された。アテネでは，アイスキュロス(Aischylos, 525～456 B. C.)・ソフォクレス(Sophokles, 496ころ～406B. C.)・エウリピデス(Euripides, 485ころ～406ころB. C.)の三大悲劇詩人が出て，神々の力と人間の運命を主題とする多くの悲劇作品を残した。これに対し，民主政治末期の政治・社会・人物を鋭く風刺したのが喜劇作家アリストファネス(Aristophanes, 445ころ～385ころB. C.)であった。

ギリシアの美術は，豊富に産出する大理石を素材とした彫刻と神殿建築とによって代表される。彫刻には，フェイディアス(Pheidias, 490？～430ころB. C.)・プラクシテレス(Praxiteles, 前4世紀)らの名工が現われ，人間の肉体の観察からオリエントにみられぬ鋭い写実性と，さらに均斉(せい)と調和の理想を加えた，数々の傑作を刻んだ。建築は神殿に結びついて発達し，彫刻や浮き彫りがそれらを飾った。円柱の様式としては，荘重な**ドーリア式***，優美な**イオニア式**，ヘレニズム時代には華麗な**コリント式**が生まれた。

---

* ドーリア式建築で最も有名なのは，アテネのアクロポリスの丘上のパルテノン神殿で，古今最高の建築の一つといわれている（→p. 30）。

ギリシアの円柱　左よりドーリア式，イオニア式，コリント式。



真理探求の精神　ギリシア人は，宗教と学問をはっきり区別した最初の民族でもあり，哲学が愛知（フィロソフィア，Philosophia）という意味をもつことは，彼らの態度をよく示している。

哲学は，まず自然現象や万物の根元を，合理的に説明しようとする自然哲学として，イオニア地方に発達し，万物のもとは水であるとしたタレス（Thales，6世紀B.C.），同じく数であるとした数学者のピタゴラス（Pythagoras，582ころ〜497ころB.C.），原子論を唱えたデモクリトス（Demokritos，460ころ〜370ころB.C.）などの自然哲学者があいついで出た。

やがて中心はアテネに移り，前5世紀に民主政治がさかんになると，青年子弟の立身出世に必要な弁論術や修辞法を教えるソフィスト（Sophist）が現われた。プロタゴラス（Protagoras，481ころ〜411ころB.C.）が「人間は万物の尺度である」といったように，彼らは絶対の真理は存在せず，道徳も国法も相対的価値しかないと主張した。これに対し，真理の実在と知徳合一の教えを，独特の対話術でアテネの市民に説いたのがソクラテス（Sokrates，470〜399B.C.）*である。

その弟子（でし）プラトン（Platon，427〜347 B.C.）は，真実の存在としてイデア（観念）を考え，個々の物質的存在はその影にすぎないとして，西洋哲学における観念論の基礎をつくるとともに，政治にも関心をよせ，「国家」で理想国家を説いた。** アリストテレス（Aristoteles，384〜322 B.C.）はプラトンの弟子で，学問の研究に経験的方法を重んじ，論理学・倫理学・政治学・天文学・物理学・生物学などの各分野に体系をたてた。その学説はアラビア人をへて中世ヨーロッパのスコラ哲学に

---

* 彼は市民の誤解をまねいて告訴され，国法に従い自ら毒杯をあおいで死んだ。彼の思想や実践は，プラトンの「ソクラテスの弁明」「クリトン」などで伝えられている。

** 彼がアテネ郊外に創設したアカデメイアは以後6世紀まで学問研究の中心であった。

とり入れられて，キリスト教神学を基礎づけた。政治論では，ポリスの実証的研究にもとづいて「国家論」(→p. 120)を著わした。プラトンもアリストテレスも，ポリスを最上の政治形態と考えていた点では共通していた。

また歴史記述の上でもオリエントの年代記的な記録と異なり，市民の立場にたった個性のある作品が生まれた。ヘロドトス(Herodotos, 484ころ～425ころB. C.)は見聞した史実を忠実に伝えて，ペルシア戦争の「歴史」を物語風にしるして，「歴史の父」とよばれ，アテネのツキディデス(Thukydides, 460ころ～400ころ B. C.)はペロポネソス戦争の「歴史」を正確な史料にもとづいて記述し，近代の批判的な歴史学のみなもとをなした。

4. ヘレニズム時代

アレクサンドロス大王　ポリスがしだいに衰えた前4世紀の後半に，北方マケドニアの王フィリッポス2世(Philippos II)は，アテネ・テーベの連合軍を破って(ケーロネアの戦い)，はじめて全ギリシアの統一に成功した。ついでその子アレクサンドロス大王(Alexandros, 在位 336～323 B. C.)は前334年，マケドニア・ギリシアの連合軍を率いて，ペルシアに遠征した。

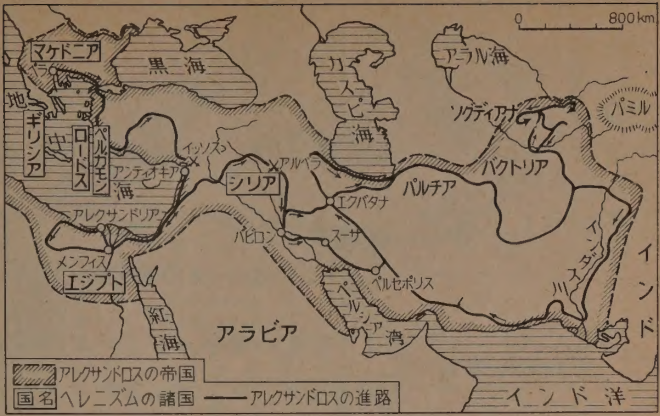
大王は前333年イッソスの戦いでダリウス3世を破り，小アジア・シリア地方を征服してエジプトにはいり，ナイル河口にアレクサンドリア(Alexandria) 市をたて，前330年ついにペルシア帝国を滅ぼした。のちさらに東進し，インダス川に達し，ギリシアとオリエントにまたがる大帝国の支配者となった。彼はこの世界帝国の中で，東西の民族・文化の融合をはかったが，十分に目的を果たさないで病死した。

貨幣に刻まれた
アレクサンドロス大王



ヘレニズム文化　大王の死後，その帝国はたちまち分裂し，ギリシア本土は衰えて，マケドニアおよびプ

トレマイオス朝のエジプト，セレウコス朝のシリアの3国が有力となった。こうして繁栄の中心がオリエントに移るとともに，ギリシア文化は東方にひろまり，オリエント文化との接触によって，世界的であるとともに地域的特性の強い文化を生んだ。これを ヘレニズム (Hellenism，ギリシア風) 文化という。* ヘレニズム文化の最大の中心は，商業の中心として栄えたアレクサンドリアで，学士院（ムセイオン）(Museion)・大図書館などの研究設備が整い，とくに自然科学がさかんになった。



アレクサンドロス大王の帝国とヘレニズム諸国

平面幾何学の大成者エウクレイデス（Eukleides）（ユークリッド），数学・力学に大きな業績を残したアルキメデス（Archimedes，287ころ～212B. C.），太陽中心説（地動説）を説いたアリスタルコス（Aristarchos，310ころ～230ころB. C.），大地を球と考えその子午線を計算した エラトステネス（Eratosthenes，275ころ～194ころB. C.） などが出た。イオニアのヒッポクラテス（Hippokrates，460ころ～375ころB. C.）に始まる医学も，この時代に著しく進歩した。

哲学はいぜんアテネにさかんで，禁欲を説いた ストア派（Stoa） と，快楽を重んじた エピクロス派（Epikouros） が現われたが，ポリス生活の衰えを反映して，世界市民主義 (Cosmopolitanism) の立場にたち，個人の安心立命を賢者の理想とした逃避的性格をもつことでは，両者とも共通していた。

美　術　美術では，肉体や精神の動きがいきいきと表現されたことは，「ラオコーン」「瀕（ひん）死のガリア人」などのすぐれた彫刻によって知られる。また「ミロのヴィーナス」のほか多くの写実的な女神像が刻まれ，同時に肖像や庶民生活・風景にも題材がひろまった。ヘレニズム美術は東伝してインドにガンダーラ美術を生み，さらに東アジアにまでその影響が及んだ。(→p. 55)

* 普通アレクサンドロス大王の東征以後，前30年ローマによるエジプト王国滅亡のころまでを，ヘレニズム時代とよんで，それ以前のポリス中心の時代と区別する。

第2節　ローマとキリスト教

1.　ローマの共和政

共和政の成立

前2千年紀の後半，ギリシア人が本土に定住したころ，インド-ヨーロッパ語族のイタリア人は，北方からイタリア半島の中部に移住した。その一派のラテン人は，前7世紀ごろチベル河畔(かはん)の七つの丘の上に小都市国家ローマをたてた。

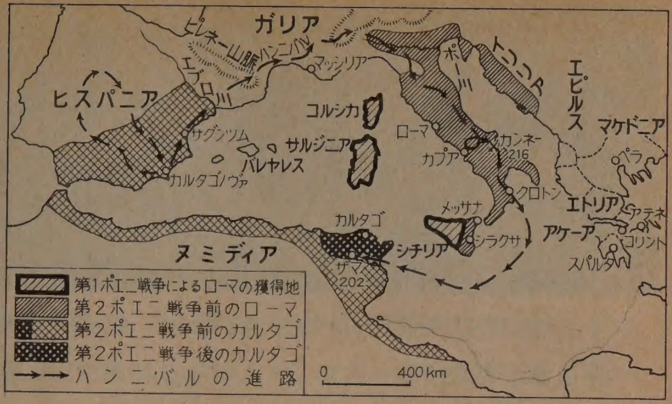
一方，前8世紀中ごろから，ギリシア人はイタリア半島の南部やシチリア島に多くの植民市をたてた。同じころ半島の北部には，小アジアから移動したといわれるエトルリア人が国をたて，またアフリカ北岸のフェニキア人の植民市カルタゴは，シチリア島西部やサルジニア・コルシカ島に勢力を伸ばし，三者はイタリア周辺の制海権を争っていた。

ローマは，はじめはエトルリア人の支配下にあって，その進んだ文化の影響をうけたが，前6世紀の末，独立して**共和政**をしいた。初めは，2名の**執政官**(コンスル)(Consul)，**元老院**の議員，非常時に任命される**独裁官**(ディクタトル)(Dictator)などの要職は**貴族**(パトリキ)(Patrici)だけで独占していた。しかし，重装歩兵として活躍する**平民**(プレブス)(Plebs)は，これに不満で，貴族と争うようになった。その結果，平民の権利を保護する**護民官**がおかれ，これを議長とする平民会が生まれ，前5世紀なかば**十二表法**(→p.47)により，平民にも法が公開された。ついで前4世紀に**リキニウス法**がで

牝狼(めすおおかみ)に養われるロムルスとレムスの兄弟
ローマは前753年，トロイ戦争の英雄アエネアスの子孫ロムルスが創建したといわれるが，これはのちに作られた伝説にすぎない。青銅製の狼は前500年ごろ，子どもは16世紀ごろの作。



きて，執政官のひとりは平民から選出されるようになり，その後ホルテンシウス法 (287B. C.) により，平民会の決議が法律として認められるようになると，貴族と平民の権利義務の差はなくなり，中小土地所有者である **重装歩兵市民** を中核とする民主政が成立した。しかし，国政の指導権は保守・伝統を重んじ，門閥の有力者を議員にした元老院がにぎっていた。



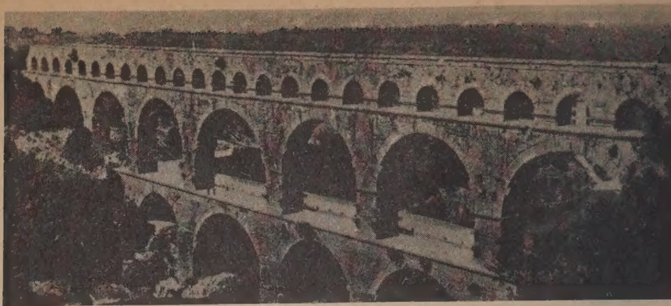
ポ　エ　ニ　戦　争

地中海統一　初めは小都市国家にすぎなかったローマは，剛健な重装歩兵市民団の活躍と巧みな分割統治によって，前 270 年ごろほぼイタリア半島を平定した。ついで西地中海の商権をにぎっていたカルタゴとの間に，3 回にわたる**ポエニ戦争** (264～146 B. C.) をおこした。第 1 回 (264B. C.～) にカルタゴを破ったローマは，第 2 回 (218B. C.～) にはハンニバル(Hannibal)の侵入をうけて危地におちいったが，スキピオ(Scipio)はこれをザマの戦い (202B. C.) に破り，第 3 回の戦いでローマはカルタゴを滅ぼした (146 B. C.)。これと同時に東地中海方面にも進出して **ヘレニズム諸国** と戦い，マケドニアを滅ぼし，ギリシア諸都市を支配し，さらにシリアを破って，小アジアを奪った。このようにして地中海は，ローマ人が「われらの海」とよんだように，ほとんど彼らの支配下におかれた。

共和政の変動　ローマは広大な海外領土を 属州(プロヴィンス) とし，総督を派遣して直接統治し，徴税請負人に税を集めさせた。

属州からは多数の **奴隷** が輸入され，貴族*は彼らを使って **大農場制** (ラテ

* このころ一部貴族と平民上層部が結びついた新貴族 (ノビレス) が支配層となった。



ローマの水道橋　アウグストゥス時代に作られ，導水路は最上層にある。南仏のガール県に残っている。

ィフンディウム*)を発達させた。奴隷は鉱・工業や見世物にも使われ，その取り扱いはひどかったので，しばしば奴隷の大反乱がおこった。前2世紀後半のシチリア島反乱や剣奴スパルタクス(Spartacus)の乱(73〜71 B.C.)は有名である。一方，重装歩兵市民団の中心であった中小自作農民は，多年の従軍に疲れ，また属州からの安価な穀物の輸入や大農場制に圧迫されて農地から離れ，貧民(プロレタリア)となるものが増加した。これら自由農民の没落により，国防力の減退を心配したグラックス(Gracchus)兄弟**は，前133年よりあいついで護民官となり，大土地所有者の土地をとりあげ，貧民に分け与えて自作農を創設する改革を試みたが，元老院を支配する閥族党(オプティマテス)に妨げられ失敗した。このため，市民皆兵というローマ本来の制度は維持できなくなり，政治・社会上に大きな変化がおこった。

独裁への動き　このころ商業や高利貸を営んだり，総督と結んで属州民を搾(さく)取する徴税請負などで巨利を得た**騎士階層**(エクイテス)が台頭し，閥族党・平民党(ポプラレス)と互いに対抗し，政争が激化した。ゲルマン民族のイタリア侵入や同盟諸市の離反運動も，あいついでおこった。このような内外の混乱に乗じて政権をにぎったのは，貧民出身の軍隊を，私兵のように養った将軍であった。彼らは，各党派を足場として政界に進出し，元老院中心の共和制を骨抜きにして独裁政治への道をひらいた。

共和政の終末　中でも閥族党のポンペイウス(Pompeius, 106〜48B.C.)は，各地に戦功をたて，元老院をおさえ，平民党のカエサル(Julius Caesar, 100ころ〜44B.C.)(シーザー)と結び，

---

*　奴隷制農業は果樹栽培や牧畜が主で，穀物生産にはあまり適しなかった。

**　兄ティベリウス(Tiberius)(在職133 B.C.)と弟ガイウス(Gaius)(在職123・122B.C.)。

さらに騎士出身の富豪クラッスス（Crassus, 114～53B.C.）を加えて**三頭政治**をたてた（60 B.C.）。カエサルは今のフランスにあたるガリアのケルト人を征服し，ローマの市民権を普及させ，文物・制度をうえつけて，のちの西ヨーロッパ形成に重要な役割を果たした（→p. 102）。ポンペイウスはカエサルの名声をねたみ，元老院と結んで彼を除こうとしたが，カエサルはこれを撃破した。

反対派を破ったカエサルは，終身独裁官（ディクタトル）をはじめ共和政の要職を兼ね，最高軍司令官（インペラトル）(Imperator) の称号を与えられ，ローマの独裁者となった。彼は無産市民のために植民市をつくり，属州の徴税請負制度を廃止し，太陽暦を採用（ユリウス暦の制定）するなど，すぐれた業績をあげたが，共和政を守ろうとする元老院派のために暗殺された（44B. C.）。カエサルの死後，彼の養子**オクタヴィアヌス**（Octavianus, 63B. C.～A. D. 14）は，アントニウス（Antonius, 82～30B. C.）らとともに第二回三頭政治をたてたが，両者はまもなく対立するにいたった。エジプトの女王**クレオパトラ**（Cleopatra, 69～30B.C.）と結んだアントニウスに対し，オクタヴィアヌスは，前31年，アクティウム(Actium)の海戦でこれを破り，翌年エジプトを平定して，全地中海世界をローマの支配下におさめた。

2.　帝政期のローマ

帝政の盛期

約一世紀にわたる内乱をしずめたオクタヴィアヌスは，共和政の伝統を尊重し，元老院と共同統治の形式をとったが，文武の要職を兼ね，軍隊命令権・官吏任命権・財政管理権をにぎり，また元老院より**アウグストゥス**（Augustus）(「尊厳者」の意)の尊号をうけ，ここにローマは事実上の帝政になった(27B. C.)。このような政治形態を**元首政**（プリンキパトゥス）(Principatus) とよぶ。

アウグストゥス（在位 27B. C.～A. D. 14）以後の歴代元首の中には，ネロのような暴君もいたが，1世紀から2世紀にかけて**五賢帝***として知られる有能な皇帝があいつい

---

*　ネルヴァ・トラヤヌス・ハドリアヌス・アントニヌス＝ピウス・マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス。

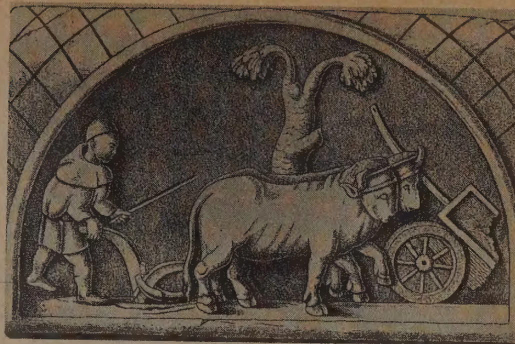


ローマ帝国の領域の拡大

で即位し，ローマ帝国は最盛期を迎え，トラヤヌス帝（Trajanus，在位 98～117）の時に最大の領域に達した。人民は中央の政治には参与できないにしても，地方都市の自治権はある程度許され，ローマの平和 (Pax Romana) を楽しんだ。このころは帝国内の経済活動が活発におこなわれたばかりでなく，対外貿易もさかんで，アラビアや南インドとの貿易が栄え，中国との絹貿易もひらかれた。(→p. 66)

帝政の末期　2世紀末から軍隊が横暴になり，勝手に皇帝を廃立する「軍人皇帝」の時代にはいって内乱が絶えず，外では新しくおこったササン朝ペルシアや，ゲルマン人がしきりに辺境をうかがった。3世紀末，ディオクレティアヌス帝（Diocletianus，在位284～305）(→p. 51)が出て内乱をしずめ，元首政に代わって官僚制度を支柱とする専制君主制（ドミナトゥス）(Dominatus) をしいて，地方自治を廃し，政治・経済・宗教などを統制したので，市民の自由は全く失われた。また，彼は帝国を4分して分国統治を始めた。ついでコンスタンティヌス帝（Constantinus，在位 306(副帝)～324～337）は，帝国を再び統一し，都をギリシアの植民市ビザンティウムに移してコンスタンティノポリス (Constantinopolis) と改名し，キリスト教を公

認し，官僚制度の確立や，人民の職業・身分の世襲固定などにより，帝国の崩壊をくいとめようとした。しかし，それもつかの間で，395年テオドシウス（Theodosius 在位379～395）帝の死とともに，帝国は東西に二分され，東ローマはなお約1000年つづいた(→p. 109)が西ローマは476年に滅びた。(→p. 103)



すきを使うローマの農民　ルクセンブルクのアルロンで発見されたローマの浮き彫り。ローマ後期の農夫がすきで耕している。

古代の終末

ローマ帝国衰亡の原因は，すでに共和政時代に根ざしている。もともとローマは，中小の土地所有農民の重装歩兵市民団を中堅として大国家へと発展したが，その間，**大土地所有と奴隷制の発達**にともなって，これらの自作農民が没落した。その結果，軍隊は傭（よう）兵化して素質が低下し，帝政期には属州民が兵士として採用され，末期になると，多数のゲルマン人が兵士または小作人になり，またその部族集団が帝国の辺境に移住するなど，すでに大移動(→p. 102)に先だって彼らのローマ領内への移動が始まっていた。

帝政初期から大所領の農業労働には，能率のあがらない奴隷の代わりに，解放奴隷や没落農民が小作人として用いられ，農耕に従うことが多かったが*，帝政末期になると，彼らは法律で小作地からの移動を禁ぜられて，コロヌス(Colonus)とよばれる不自由農民となった。大地主の中には，彼らを使うコロナトゥス制により所領経営をおこない，国家の課税や裁判権に服しないものが多く現われた。そのため中流の土地所有者階層に税の負担がかかって，彼らを没落させ，帝国の崩壊を早めた。

自由農民の没落に加えて，地中海を中心に栄えていた商業もまた著し

---

*　そのほかローマの征服事業が一段落して奴隷の大量供給が困難になったこと，たびたびの奴隷反乱を恐れたことも，奴隷制農業の衰えた原因としてあげられる。



ローマの道（アッピア街道）

く衰えた。すなわち，治安の悪化によって商品流通が減退し，職業の固定によって企業精神が失われ，貨幣制度の混乱も生じて，しだいに**自給自足**の経済へと移ってゆき，各地方が別々の歩みを始めるようになった。このようにローマ帝国は，内部的崩壊がすでに始まったところに，ゲルマン人の大移動の波をうけて滅亡したのである。

ローマの文化

ローマ人はギリシア人に比べ，学芸の分野では独創的才能において一歩をゆずったが，ギリシア文化をうけいれ，これをのちの西ヨーロッパ諸国に伝えた役割は重要である。さらにローマ人は，大帝国の建設・経営をなしとげたような現実的な才能においてすぐれ，法律や大土木工事などでは偉大な業績を残している。

文学では早くからギリシアの影響をうけたが，共和政後期には，独自のラテン語文学がおこり，アウグストゥスの盛時にいたって，その黄金時代を迎えた。ヴェルギリウス（Vergilius 70～19B. C.）は，「アエネイス」にローマの建国と使命を誇り高くうたって，ローマ最大の詩人とたたえられ，ホラティウス（Horatius 65～8B. C.）・オヴィディウス（Ovidius 43B. C.～A. D. 17ころ）らの詩人もこの時期に活動した。

哲学もギリシアの影響が著しかったが，ローマでは，哲学的体系の樹立よりも，実践的道徳の面が重んじられた点に特色があり，とくに**ストア哲学**の禁欲的な思想は，ローマ人の処世倫理の基準となった。共和政末期には雄弁家・文章家として知られたキケロ（Cicero 106～43B. C.）や，エピクロス派の独創的な哲人ルクレティウス（Lucretius 94ころ～55B. C.）が現われた。帝政期にはセネカ（Seneca 5ころB.C.～A.D.65），奴隷出身のエピクテトス（Epiktetos 55ころ～135ころ），皇帝マルクス＝アウレリウス＝アントニヌス（Marcus Aurelius Antoninus 在位161～180）がいずれもストア派哲学者として有名である。

史学では「ローマ史」を著わしたリヴィウス（Livius, 59B.C.～A.D.17），「ゲルマニア」の著者タキトゥス（Tacitus, 55ころ～117ころ）があり，カエサルの「ガリア戦記」は模範的な散文として知られている。また前2世紀の史家ポリュビオス（Polybios, 201ころ～120ころB.C.），「対比列伝」（「英雄伝」）の著者プルタルコス（Plutarchos, 46ころ～120ころ），地理書をつくったストラボン（Strabon, 64B.C.～A.D.21ころ），天動説を唱えたプトレマイオス（Ptolemaios, 2世紀）や前に述べたエピクテトスのように，ギリシア人の著作も多く，帝国の西半部にラテン語がひろまったのと相対し，帝国の東半部ではいぜんとしてギリシア語が文芸学術書の用語であった。



ポンペイ遺跡　前方はこのポンペイを灰でうずめたヴェスヴィオス火山。

土木・建築・農業のような実用技術はギリシアよりも発達し，とくに公共建築は規模の雄大なことを特色とした。

ローマの遺跡　道路・水道橋・闘技場（コロセウム）・公共浴場・凱旋門（がいせん）（→口絵）などの遺跡は，帝国内の各地に今日も残り，ローマの偉業を伝えている。ナポリ湾頭のポンペイは，ローマの都市の遺跡として名高い。

ローマ法は慣習法を成文化した十二表法に始まり，最初はローマ市民にだけ適用された「**市民法**」であった。その後都市国家から世界帝国への発展にともなって市民権が普及し，さらにストア哲学の思想と結合して，帝国内の全住民に共通な「**万民法**」が成立した。ローマ法は，中世の教会法や近代ヨーロッパ諸国における法の形成に大きな影響を与えた。

法典の編纂（さん）　帝政時代には有名な法学者が多く出て学説を発表し，ローマ法の発達に貢献したが，6世紀の初め東ローマのユスティニアヌス帝は，法典を編纂（→p. 108）させローマ法を集大成した。これは後世ローマ法大全とよばれた。

3.　キリスト教の発展

キリスト教の成立　ヘブライ人の間には，古くから，神に選ばれた僕(しもべ) **救世主**(メシア)*(Messiah)が出現して，地上に神の国をたて人類を救済するという思想があり，バビロン捕囚(→p. 20)の前後次々に預言者が現われて，その出現の近いことを人々に約束した。その後もユダヤ人の国土は大国の支配下におかれ，前1世紀中ごろには，ローマの属州となって搾取(さくしゅ)されたので，メシア出現を待望する声がさらに高まった。

このような事情の中で，アウグストゥス帝治下のユダヤに現われたのが，**イエス**(Jesus, 4ころB.C.～A.D.30ころ)であった。新約聖書によれば，イエスはヘブライ伝統の信仰や戒律を形式的に守ることだけを重んじたユダヤ教の指導者たちを痛烈に批判した。彼は人々に，「神の国は近づいた，悔い改めて福音を信ぜよ。」とよびかけ，神の愛と隣人愛はすべての人に及ぶことを説き，しいたげられた人，弱き人をいたわりいつくしんだ。しかし，ユダヤ教の指導者たちは彼の批判を憎み，また一時彼をメシアと信じた民衆も，その教えが理解できず，失望して離れ去った。やがてイエスは捕えられ，ローマへの反逆者として総督に訴えられ，十字架の刑に処せられた。しかし彼の死後，弟子(でし)たちの間にイエスこそ真のメシア，すなわち**キリスト**(Christ)であるとの確信が生まれ，ここにキリスト教が成立した。

キリスト教の伝播(ば)　キリストの教えは使徒ペテロ(Petros)やパウロ(Paulos)らの熱心な後継者たちによって，ローマ帝国の各地に伝道されるとともに，ユダヤ教という民族中心の宗教から，民族をこえた普遍的な愛の宗教へと変わっていき，世界宗教として大きな歴史的役割を果たすにいたった。

この間に信者の組織である**教会**がつくられた。またキリストや使徒の言行を記録した**新約聖書**(ギリシア語)が編集された。ローマ帝国は宗教に

---

* 油を注がれた（神に祝福された）ものという意味で，そのギリシア語が Christos, すなわちキリストである。

対して一般に寛大であったが，キリスト教徒がその信仰の上から皇帝崇拝を拒んだため，国家に対する忠誠をも拒むものとみなされて，ネロ帝からディオクレティアヌス帝にいたる約250年間に，たびたび迫害がおこなわれ，殉教者の数も少なくなかった。



カタコンベ　キリスト教徒の地下墓所。ローマほか各地に多数存在し，弾圧をうけた信者はここを集会場や連絡場所に利用してその信仰を守りぬき発展させた。

しかしきびしい迫害にも屈せず，キリスト教の信者は増してゆき，その組織である教会は4世紀には大きな社会的勢力となった。そこでキリスト教徒を敵としては，帝国の統一も困難となったので，コンスタンティヌス帝は，313年ミラノ勅令をもってまずキリスト教を公認し，のちテオドシウス帝はこれを国教とし(380)，ついで他の宗教を禁圧した(392)。この間にキリスト教の神学上の論争もしばしばおこなわれたが，325年**ニケーア公会議**(宗教会議)で，父なる神とその子なるキリストと聖霊とは本質的に同一であるとする**三位一体説**が正統教義とされ，この教義はのちアタナシウス(Athanasius 296ころ〜373)によって確立された。一方，キリストを神に最も近い人間とするアリウス(Arius 250ころ〜336)派は，このとき異端として追放され，以後ゲルマン人の間に布教した。*

このころの教会の指導者は教父とよばれ，多くの著作を残している。最後に出た最も偉大な教父はアウグスティヌス(Augustinus 354〜430)で，彼は「告白」や「神の国」の著者として中世の神学や政治思想の基礎を築いた。

アジアの宗教として生まれたキリスト教は，このようにしてローマ帝国にひろまり，ギリシア文化と並んでヨーロッパ精神の基礎となった。

---

* このほかネストリウス派も，5世紀前半に異端と宣告されると，東方への伝道に努め，ササン朝ペルシアを経て，中国（唐）に布教され，景教とよばれた（→p. 76）。（ネストリウス ?〜451ころ）

第3節　イラン文化の成立

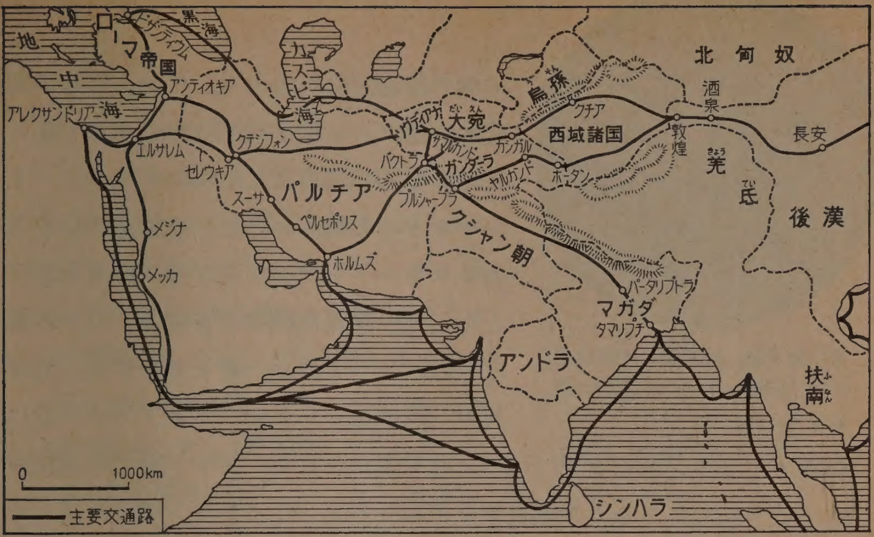
ペルシア帝国の統一　アッシリアの滅亡後，イラン高原にはメディア王国ができたが，やがてイラン南西部からペルシア人がおこって，メディアを倒し (550B. C.)，ダリウス1世(Darius I，在位522～486B. C.)のころにいたって，オリエントを統一する大帝国となった。この帝国を王家の名にちなんでアケメネス朝ペルシアという。

ペルシアは，ギリシア本土の征服には失敗したが（ペルシア戦争(→p. 33)），その領土は，東はインダス流域・西トルキスタンから，西はエジプト・小アジア・バルカン半島の一部にまで及んだ。全土は20州（のち28州）(→p. 18地図)に分けられて，王に直属する長官(サトラップ)が任命され，「王の目」「王の耳」とよばれる役人が巡察をおこなった。おもな道路には駅馬がおかれ，度量衡を統一し，貨幣を発行するなど，中央集権化が進められた。各地の崖(がけ)に刻まれた碑文（磨崖(まがい)）には，王の功業が楔形(くさびがた)文字で記録された。ダリウスの王室はゾロアスター教を信仰したが，被征服民の信仰には干渉しなかった。

ゾロアスター教　前7世紀の人と伝えられるゾロアスター(Zoroaster)が，古来のアーリヤ人の信仰に改革を加えた宗教で，善を代表する光明神アフラ＝マズダ(Ahura Mazda)と，暗黒の悪霊アフリマン(Ahriman)との闘争の末に，救世主が現われ，最後の審判・死者の復活によって，善と光明が支配する時代がくるとされる。ゾロアスタ

ペルセポリス宮殿浮き彫り　服属国の首長や使者たちを謁見するダリウス1世





2世紀ごろの西アジア

ー寺院では聖火の伝統を重んずるところから，**拝火教** ともよばれる。

パルチアとササン朝

前4世紀後半に，ペルシア帝国は アレクサンドロス (→p. 38) の侵入をうけて滅んだ。彼の死後，西アジアは部将セレウコスの統治する **シリア王国** となったが，前3世紀なかばに，その東方領土にイラン系遊牧民の **パルチア**（Parthia）が独立して，しだいに領域をひろげた。パルチアは前後500年にわたって西アジアを支配し，その間シリアおよびローマの勢力と対抗をつづけた。文化的にはヘレニズムの影響下にあったが，末期になるとイラン人として民族的自覚が高まった。ゾロアスター教の経典「**アヴェスタ**」（Avesta）の編纂がおこなわれたのも，パルチア末期からササン朝初期にかけてのころである。

後3世紀，パルチアの衰退に乗じてイラン高原西南部からおこったのが，同じイラン系の**ササン朝**（Sasan）である。**シャープール1世**（Shapur I，在位241〜272）は，東方ではクシャン朝 (→p. 54) を討ち，西方ではローマと戦って領域をひろげ，ゾロアスター教を国教とした。5世紀後半には，はげしい内乱と遊牧民 **エフタル*** や東ローマの攻撃によって動揺したが，**ホスロー1世**（Khosrau I，在位531〜579）によって立ち直り，ササ

* エフタルは，同じころ，グプタ朝時代の西北インドにも侵入し，「白匈奴（きょうど）」とよばれた。



帝王の狩猟　銀製盃(はい)の代表的なもの。図柄はホスロー2世の騎馬像といわれる。

ン朝の最盛期を現出して，イラン民族の文化的自覚はいっそう高まった。ササン式とよばれるその美術文化には，ギリシア・インドなどの影響がみられ，建築様式はのちのイスラム・ビザンティン様式のさきがけとなった。華麗な織物や青銅器・ガラス器などは，ゾロアスター教とともに隋(ずい)・唐時代の中国に伝えられた(→p. 76)。ゾロアスター教に仏教・キリスト教を折衷(せっちゅう)したマニ教も説かれたが，ササン朝では禁止され，のちに北アフリカや中央アジアにひろまった。ササン朝はホスロー1世以後ふるわず，7世紀にはいるとイスラム教徒の攻撃をうけて滅んだ(→p. 93)。以後イラン人はイスラム化し，宗教的にもシーア派(→p. 94)のイスラム教が主流になった。

第4節　インド文化の成立

カスト制の成立　前2千年紀以後インド西北部に侵入したアーリヤ人は，前1000年ごろからガンジス流域にもひろがって，定住的な農耕生活にはいった。先住民を征服・追放しながら村落をつくっていく中で，彼らは，カスト制(Caste)を成立させた。これは祭祀(し)をつかさどる神官バラモン(Brahmana)を最高とし，第二は王侯・武士などのクシャトリヤ(Kshatriya)，第三は農・工・商業に従事する庶民ヴァイシャ(Vaisya)，最下層は先住民を含む奴隷シュードラ(Sudra)の四身分を基本とする身分秩序である*。人は生まれながらにして，どれかのカストに属し，職業は世襲され，異なるカスト間の通婚や，飲食をともにすることは忌(い)むべきこととされた。

---

* 後世，職業の分化とともに，カストも数千に細分化された。1947年の独立以後，法律上では廃止されたが，実際には現代のインドに根づよくのこっている。

ヴェーダ　アーリヤ人は元来，太陽・水・火・雷などの自然現象を神として崇拝し，「ヴェーダ」(知識の意) とよばれる賛歌をささげた。ヴェーダには最古の「リグ－ヴェーダ」をはじめ四つある。ヴェーダを誦(しょう)し，犠牲をささげて神々を祀(まつ)るのがバラモンの特権であった (バラモン教)。しかし前8世紀以後になると，バラモンの中にも神々の祭祀のみにあきたらず，宇宙(ブラフマン)と我(アートマン)との一致を説く神秘的なウパニシャド (奥義書) の哲学もおこった。



マウリヤ朝時代のインド

新宗教運動　ガンジス流域の経済的発展につれて，各地に都市が成長するとともに，バラモンに代わってクシャトリヤやヴァイシャの力が伸びてきた。このような状況を背景として，前6世紀ごろ繁栄した**マガダ国**では，新しい宗教運動がひろがった。**ジャイナ教***は苦行による清浄な精神の解放と極端な不殺生を説き，商人の間に信者を得た。**仏教**は，王子の身分を捨てて修行を重ねた**ゴータマ＝シッダールタ**(Gautama Siddharta)** (466ころ～386ころB.C.(または564ころ～484ころB.C.)) によって説かれた。彼は，人間が生老病死の煩悩(ぼんのう)をたちきって解脱(げだつ)し，さとりを開いた者 (仏陀)(Buddha) となるには，難解な哲学や極端な苦行は必要でなく，八正道***の実践によって中道を歩めばよい，そこにはカストの差別はないと説いた。この教えには，国王・商人や賤(せん)民の帰依(きえ)者もふえた。

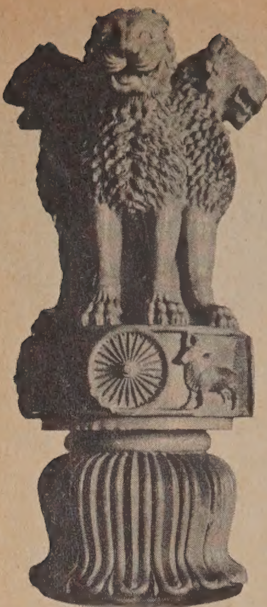
マウリヤ朝の統一　アレクサンドロスのパンジャブ遠征の直後，**チャンドラグプタ**(Candragupta) (在位322ころ～297ころB.C.) は，ギリシア勢力を撃退して北インドを統一し，パータリプトラを都として**マウリヤ朝**を始めた。彼の孫**アショーカ王**(Asoka) (在位268ころ～232ころB.C.) にいたって，マウリヤ朝の勢威はインドの大部分に及んだ。アショーカ王は，

---

* ヴァルダマーナ(448～376B.C. ころ，または549～477ころB. C.)によって説かれた。彼はマハーヴィーラ(大勇)あるいはジナ (勝者) とも称される。

** 彼をシャカ＝ムニというのは，「シャカ族出身の賢者」の意味である。

*** 正しい考え方，正しい言い方，正しいおこないなど，悟りへの8つの方法をさす。



アショーカ王建立の石柱
石柱の柱頭のかざりで，下部の法輪の意匠(いしょう)は現在のインド国旗に用いられている。この頭部の下にアショーカ王の政治方針を示す詔勅文が刻まれていた。

東南海岸の征服に多大の犠牲をはらった経験から，武力よりも仏法(ダルマ)による統治を理想とするようになり，インド各地に石柱や磨崖をつくり，仏教の慈悲と寛容の精神にもとづく統治方針を刻んだ。また仏教の典籍(てんせき)を整理編集（結集(けつじゅう)）し，シャカの遺骨を納めた仏塔(ストゥーパ)をつくり，布教の使節をセイロンや地中海方面にまで送った。しかし王の死とともにマウリヤ朝は急速に衰退した。

クシャン朝と仏教　イラン高原にパルチアがおこったころ，西トルキスタンにはギリシア系のバクトリア(Bactria)王国ができ，西北インドにも勢力を伸ばした。しかし，やがて西トルキスタンの地は，匈奴に追われて東方から移動してきた**大月氏**(だいげっし)の支配下におかれた。(→p. 64)後1世紀になると，大月氏支配下の土侯の一つクシャンが独立して，**クシャン朝**(Kushan)を始めた。第3代**カニシカ**(Kaniska)（在位140ころ〜170ころ）王の時代になると，西北インドに進出してプルシャープラを都とし，西方のパルチアと並んで東西貿易路の要衝を占めた。カニシカ王も仏典の結集をおこない，各地に寺院・仏塔を建てるなど，アショーカ王と並ぶ仏教の厚い保護者であった。この時期に，バクトリアいらいのギリシア系文化の影響をうけて，ガンダーラ地方を中心に，ギリシアの神像に似た仏像がつくられ始めた。**ガンダーラ式**とよばれるこの美術様式は，同じころ発展した**大乗仏教**とともに，中央アジアを経て東アジアに伝わった。

大乗と小乗　シャカの死後100年もたつと，仏教内部に教義の解釈をめぐる論争がおこり分裂した。やがて戒律を重んじ，自己の解脱(げだつ)に専念する小乗と自己の解脱よりも衆生(しゅじょう)の救済を悲願とする大乗*とにわかれた。小乗仏教は

---

* 大乗教義は後2～3世紀のナーガールジュナ（龍樹）によって基礎が築かれた。



ガンダーラの仏像



雲崗の石仏



飛鳥時代の仏像

ガンダーラ—雲崗・龍門—日本の飛鳥時代という流れを遺物によってはっきりつかむことはむずかしいが，左は3世紀ごろのものでギリシアの手法がはいっており，中は第20洞の大仏で，たくましさをもった傑作。右は法隆寺夢殿の救世観音である。

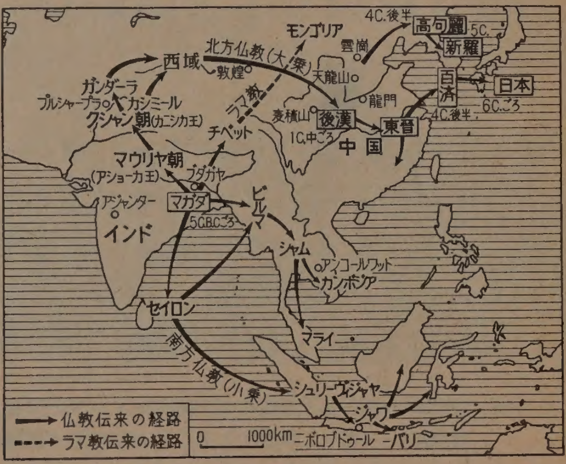
セイロンや東南アジアなど南方にひろまったのに対し，大乗仏教は，中国・朝鮮・日本など北方に伝わった。

グプタ時代

クシャン朝が衰えた4世紀ごろ，ガンジス流域にグプタ（Gupta）朝が現われ，北インドを統一した。チャンドラグプタ2世（在位380ころ～414ころ）（超日王）時代には，古代インド文化の最盛期を迎えたが，エフタルの（→p. 51）侵入をうけて衰弱した。その後7世紀には，ハルシャ＝ヴァルダーナ（Harsha Vardhana，在位606～647）（戒日王）によって，一時統一が回復されたが，彼の死後数百年にわたって北インドは小国分立の時代にはいった。グプタ朝以後におけるインドの分裂状態は，一面では北インドの先進地域の優位に代わって，インド各地域が独自な発展を始めた現われでもあった。

グプタ時代には，民衆に基礎をおくインド的な生活倫理や信仰が形成された。ブラフマン（創造神）・ヴィシヌ（維持神）・シヴァ（破壊神）三神を信

仏教の伝播





アジャンター壁画　第一窟の観音菩薩頭部，法隆寺金堂の壁画を思わせるものがある。

仰の中心とする**ヒンドゥー教**(Hindu)が形を整え，カスト制を基本とする社会倫理や祭祀を規定した**「マヌ法典」**が影響力をもつようになった。このような傾向の中で，仏教はごく特殊な哲学的研究に限られるか*，包容性のあるヒンドゥー教の支派とみなされるようになった。

グプタ時代の文化　アジャンター・エローラなどの石窟(くつ)寺院の，この時期に属する壁画は，ガンダーラ的な要素を脱して完全にインド的となっており，グプタ式美術の代表とされる。古来伝承されてきた二大叙事詩「マハーバーラタ」「ラーマーヤナ」の定本ができたのもこの時代であり，戯曲「シャクンタラー」の作者カーリダーサ(Kalidasa)のような文学者も出て，サンスクリット(梵(ぼん)語)文学が栄えた。数学では位どりに0(ゼロ)を使う十進記数法が用いられ(4〜5世紀)，天文学でも地動説があらわれた。

南インドの歴史　南インドの海岸地方は，早くからオリエント方面と交通があり，東南アジアへの植民もおこなわれた。紀元前後のころになると，ローマとの通商もさかんになり，インドからは香料・綿布・真珠などが輸出され，ローマからは陶器・ガラス器・金貨などがもたらされた。

デカン地方は前1世紀ごろ**アンドラ国**が統一したが，このころから，ようやく南インドにもアーリヤ系文化が影響を与えるようになった。6世紀なかば以後デカン地方を支配したチャールキヤ朝や，ついで南部からおこって10〜11世紀に半島を統一したチョーラ朝などは，その代表的な勢力である。チョーラ朝は東南アジアに遠征をおこない，海上貿易

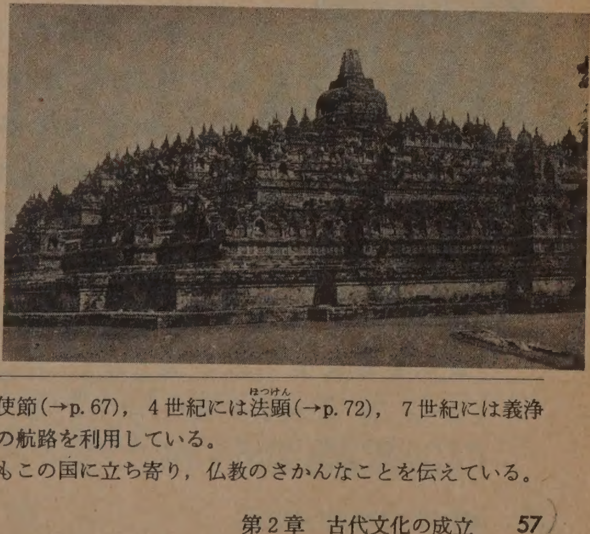
* 東晋(しん)の法顕(ほっけん)(→p. 72)はグプタ時代にインドに渡来し，唐の玄奘(げんじょう)(→p. 76)は戒日王の時代にナーランダ学院で大乗仏教を研究して帰国している。

を独占して富強を誇った。

東南アジアの歴史　インド沿岸から東南アジアを経て華南にいたる航路が活発化した紀元以後になると*，その要衝にあたるインドシナ半島東海岸に，扶南やチャンパ(林邑，占城)などの王国がおこった。扶南はクメール人がカンボジア地方にたてた国で，一時はシャムやマライ半島の大部分を従えたが，6世紀には，同族の真臘に倒された。扶南はインド文化の影響をうけ，ヒンドゥー教や仏教が信仰されたが，ベトナム南部に建国したチャンパでも，公用語はサンスクリットで，カスト制もおこなわれるなど，インド文化の影響が大きかった。チャンパはまた北ベトナムに進出した中国勢力(南朝から唐にかけて)と抗争をつづけた。

7世紀なかばになると，南スマトラからおこったシュリーヴィジャヤが，急速に海上王国として発展し，8世紀にはカンボジアを支配下におき，チャンパへも遠征して，東南アジアに富強を誇った。この王国でも仏教が信仰され**，9世紀なかばにおこったシャイレンドラ朝は，中部ジャワのボロブドゥールに石造寺院を完成した。半島部のクメール人のもとでも，ヒンドゥー文化がひきつづいて栄え，壮大な石造寺院アンコール-ワットが12世紀につくられた。

ボロブドゥール石造寺院　8世紀後半～9世紀前半の創建。高さ31.5m，最下層は一辺111.5m。方形5層と円形3層を積み重ねた複雑な構造であるが，仏塔の一変形とみられる。1814年イギリスのラッフルズによって発見され，その後復原修理がおこなわれている。



*　2世紀には大秦王安敦の使節(→p. 67)，4世紀には法顕(→p. 72)，7世紀には義浄(→p. 76)らの中国僧がこの航路を利用している。

**　義浄(→p. 76)は，往復ともこの国に立ち寄り，仏教のさかんなことを伝えている。

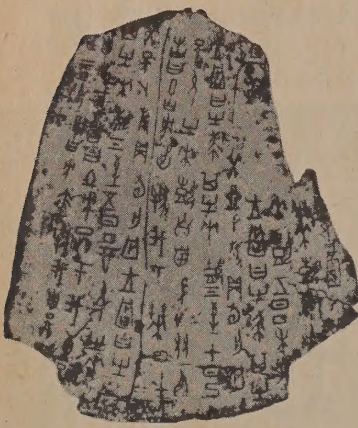
第5節　中国古代文化の成立

1.　殷・周王朝と春秋戦国時代

殷王朝の成立

黄土地帯に成立した村落(邑)のあるものは，氏族を中心とする国家に成長し，やがてそれらを統合した最初の王朝として殷が出現した*。黄河下流域の商（河南省安陽付近のいわゆる殷墟）を都とした前15～12世紀が殷王朝の最盛期で，殷王の宮殿の土台や地下の大墓**が，20世紀になって，考古学的発掘によって現われた。

殷の文化は，**青銅器**と文字を有する点で，先行する黒陶文化との間に大きなひらきがある。祖先神の祭祀が重んじられたので，殷では種々な形の青銅製祭器が多数つくられ，その表面の怪奇な文様は，青銅鋳造技術が高度に発達していたことを示している。ただし農耕の道具としては，まだ木器・石器が使われていた。


殷の甲骨文字

殷王は戦勝や豊穣を期待して，卜官に命じ，亀甲・獣骨を用いて天(上帝)の意思を卜わせた。その卜いの内容を甲骨の表面に刻んだのが**甲骨文字**(卜辞)で，漢字の最も古い原型にあたる。これらの点からみて，殷王朝の支配は一種の神権政治であった。末期の殷王は，遠征や奢侈のために，支配下の諸国の支持を失い，黄河上流の渭水流域におこった**周**の攻撃をうけて，前11世紀ごろ滅ぼされた。

---

* 伝説では，堯・舜の聖王や，禹のひらいた夏王朝があったといわれる。

** 地下の大墓の周囲からは数百人にのぼる殉死者の骨も出土した。これを奴隷制社会の証拠とみる説もある。

周の封建制　周は，進んだ青銅器文化や文字を殷から学んだが，自らは，天命が殷から周へとあらたまった結果，周が天子となったのだと主張した(易姓革命思想)。周の都は鎬京におかれたが(西周時代)，東方の領域を統治するために，洛邑を築き，さらに周の同姓一族や異姓の功臣を諸侯として各地に**封建**した。諸侯は周王に貢納と軍隊提供の義務を負い，周王と諸侯とは，本家と分家(あるいは姻戚)の血縁関係によって結ばれた。そして血縁内の身分秩序を規定する「礼」が，周の政治の原理となった。* 封建された諸侯の国内でも，嫡系の家長が一族をまとめる宗法制を基本とする血縁的身分秩序が重んじられた。



殷・周の文化圏

ところが前8世紀に，王室の内乱や遊牧民の侵入によって都を洛邑にうつして以後(東周時代)，周王の権威は衰え，諸侯間の戦争があいつぎ，各国内での政権争奪も激しくなってきた。周の封建制をささえる血縁的身分秩序が動揺して，次の新時代へ転換しはじめた前8～5世紀の時期を，**春秋時代**という。これは前8世紀末から前5世紀初めまでの事件をしるしている魯の年代記「**春秋**」にちなんだものである。

春秋時代の政治　この時代の強国は斉・晋・楚などで，馬車を中心とした戦争が諸国間にくり返されたが，小国を含めた会盟もしばしばひらかれた。会議の有力な主宰者(**覇者****)は，権威を失った周室に代わって，一時的に秩序の維持者となったが，一応は周王を尊び，夷狄の侵入から中華を守ることを自分の任務と称した(尊王攘夷)。

* この点で，周の封建制は，血縁関係によらない主従制度からなるヨーロッパの封建制度(→p. 111)とは別な性格のものである。

** 斉の桓公・晋の文公をはじめとする5人の覇者を「春秋の五覇」という。



戦国時代の形勢図

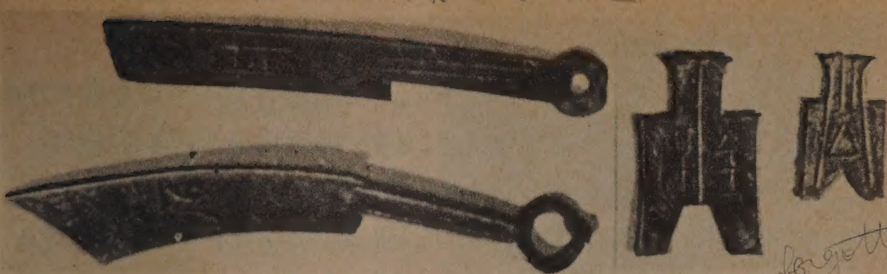
戦国時代の社会発展　前403年以後の**戦国時代**にはいると，周の封建制の崩壊は決定的となった。この新情勢に対して，戦国時代の各国君主は，血縁関係のない者の中からも有能な人材を登用し，内政・外交・軍事の各面で腕をふるわせて，富国強兵を実現しようとした。こうして，人材の自由な登用にもとづく**官僚制**や，かつての封建諸侯の国を直轄領に編入する**郡県制**が，各国できそって進められた。この激烈な競争に勝ちのこったのが，**燕**(えん)・**斉**・**楚**・**秦**の辺境四国*と晋の分割によってできた**韓**(かん)・**魏**(ぎ)・**趙**(ちょう)のいわゆる**戦国の七雄**である。中でも秦は商鞅(おう)(?～338B.C.)の説を用いて，貴族をおさえ，県を増設し，農民と戦士を政府の手に確保する改革をおこなって，国力強化に成功し，前3世紀末に中国全土の統一に成功した。

このような社会・政治上の変動の基礎は，春秋時代なかば以後，**鉄製農具**が使われ，牛に犂(すき)を引かせる耕法が普及して，農業生産力が向上したことにある。また治水・灌漑(かんがい)の整備による荒地や低湿地の開拓は，戦国君主の財政を豊かにするとともに，農民を従来の氏族から切り離し，夫婦単位の家族を分立させることを可能にした。生産力の向上は繁華な都市を生み**商業流通をさかんにし，**青銅製貨幣**(刀(とう)・布(ふ)など）も使われ，塩や鉄を扱う富裕な商工業者も現われた。しかしこのような経済の発達は，農民を大土地所有者と小作人・奴隷とに分化させるもととともなった。このような動きは，次の秦・漢統一時代にさらに発展していくのである。

---

*　春秋時代には，宮廷の楽歌や華北各地の民謡を集めた「詩経」ができたが，戦国時代になると楚の歌謡集「楚辞(そじ)」が生まれ，中国文化圏はひろがりをみせた。

**　斉の首都臨淄(りんし)は成年男子だけで21万人をこえた。



戦国時代の青銅貨幣　左二つは刀，右は布とよばれる。

諸子百家

戦国時代には，それぞれ自分の学説をもって君主に接近しようとする多数の思想家が出た（**諸子百家**）。そのうち戦国君主の富国強兵策に直接影響を与えたのは**法家**の学説である。* **商鞅**は秦に用いられて政治改革を断行し，**韓非**（?～233B.C.）は君主権力強化のための官僚操縦術を理論化した。この法家思想の採用によって，秦は天下統一に成功した。

法家が，人間は賞罰によって左右される利己的なものとみるのに対して，人間の道徳性に信頼をおくのが**儒家**である。その祖**孔子**（551～479B.C.）は，西周時代の「**礼**」の精神を重視し，孝・悌（てい）という家族道徳を天下にひろめることによって，混乱した秩序を回復できると考えた。彼はこの主張を春秋末期の諸侯に説いてまわったがうけいれられなかった。** 戦国中期の**孟子**（もう）（372ころ～289B.C.）は，仁義を重んずる心は人間の本性であるから（**性善説**），仁義の政治をおこなう君主のもとに天下はおのずと帰服（きふく）すると論じたが，これもうけいれられなかった。戦国末の**荀子**（じゅん）（298ころ～238ころB.C.）は，人間の本性はそのままでは善ではないが（**性悪説**），君主の定める礼法に従うことによって善になると説いた。荀子の立場は，法によって人民を操縦しようとする法家に近い。

墨子（470ころ～390ころB.C.）を祖とする墨家の集団は，城の防衛技術などに長じていたが，同時に博愛・戦争否定・賢才登用などを主張した。墨家の家族道徳軽視や礼楽無用論は，**楊朱**（よう）の快楽主義とともに，孟子によって異端者として排撃された。

---

* より現実的な政策を説いたものに，兵法を論ずる孫子などの**兵家**や，外交策（合従（がっしょう）連衡（れんこう）策）を述べた蘇（そ）秦・張儀らの**縦横家**がある。

** 現実の政治に志を得なかった孔子は，晩年は弟子の教育に専念し，種々の階層出身者を弟子として学団を形づくった。このような学団の例は孔子が最初である。

このほか儒家の説く道徳を人為的なものとして否定し，自然の秩序（道）に復帰せよという無為自然を説く**老子・荘子の道家思想**も生まれた。この思想は，混乱した政治の中で一身の安全を求める立場を代表したものである。儒家思想が天下国家の秩序を正面から論じる表向きの思想であるのに対して，道家思想は消極的な態度をとることがかえって大きな利益をまねくことを説く哲学として，後世の中国人に愛好された。

戦国末の思想の動向　斉や魏の君主は，各種の立場の学者を広く招いて，討論をおこなわせ，その中から政治に適用できるものを採用した。戦国時代末期になると，そういう討論などを通じて，諸学説の論理は精密になると同時に，互いに影響を与えあうようになった。用語に明確な定義を与えようとする**名家***や，自然・人事の変遷に一定の法則性を与えようとする**陰陽五行家**(いんようごぎょうか)**の説などからは，多くの学派が影響をうけている。また諸学派の折衷(せっちゅう)・総合の動きは，秦から漢の初期にかけての思想界の一般的傾向となった。

2.　秦・漢統一帝国の成立

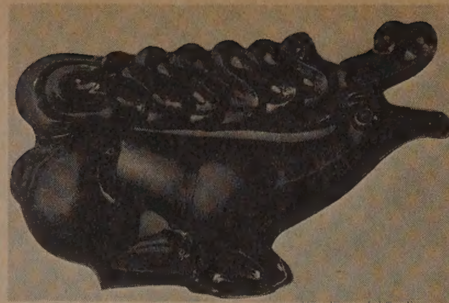
秦の統一　前221年天下を統一した秦王は**始皇帝**（在位221～210B.C.）と称し，李斯(りし)（?～210B.C.?）の献策によって，全国を36郡（のち48郡）に分けて県を統轄させ，郡・県には中央から官吏を派遣する**郡県制**を施行し，中央集権化をはかった。また，度量衡や文字を統一し，革新政治批判のもとになる儒家などの書物を焼き（焚書(ふんしょ)），始皇帝を批判したとか，世人をまどわしたという理由で学者数百人を穴埋めにした（坑儒(こうじゅ)）。さらに北方モンゴル高原で強力になってきた遊牧民（匈奴(きょうど)）の侵入に備えて，**万里の長城**を修築した。

このように急激な秦の中央集権政策は，土豪(どごう)勢力や農民の反感をまねき，始皇帝の死とともに反乱が各地におこった。楚の武将**項羽**(こうう)（232～202B.C.）と農民出身の**劉邦**(りゅうほう)との激しい勢力争いの中で秦は滅び（206B.C.），やがて，劉邦が

*　「白馬非馬」の詭弁(きべん)論で有名な公孫龍など。
**　木・火・土・金・水の五行の循環に応じて王朝が興亡すると説いた鄒衍(すうえん)など。

漢の皇帝となった(漢の高祖)。在位202～195B.C.

匈　奴　モンゴル高原に散在していた遊牧民は前500年ごろまでに，西方のスキタイ式*青銅器文化の影響をうけて騎馬民族化し，戦国時代の北辺諸国に侵入し始めた。秦末の混乱期に，冒頓(?～174B.C.)という指導者が現われて諸部族を統一し，西域のオアシス諸国家を支配下において，単于(天子の意)と称した。建国まもない漢は，これと和親して国境の安全をはからなければならなかった。



うずくまる鹿　金製，高さ30cm。鉄製の楯の中心につけられた装飾で，スキタイ工芸の特徴をよくあらわしている。

武帝時代　漢は初め都の長安に近い地方を直轄の郡県とし，東方・南方の遠隔地には，功臣(のちに劉氏一族)を王として分封した(**郡国制**)。しかし，しだいに諸王の領地をけずって，中央集権化を進めたので**呉楚七国の乱**(154 B. C.)をまねいた。この反乱をおさえてからは，全国をしだいに中央政府が直轄するようになり，**武帝**(在位141～87B.C.)の時代にいたって漢は最盛期を迎えた。



前2世紀のアジア

武帝は南越(広東方面)・西南

* スキタイ人は前7～4世紀ごろまで南ロシア地方にいたアーリヤ系の遊牧民。

夷(雲南方面)・朝鮮*に出兵して，漢の領域をひろげたが，とくに匈奴に対しては，その南下を防ぐとともに，**西域**の支配権を奪いとるため，長期にわたって激しい戦いをつづけた。**張騫**(?～114B.C.)を派遣して大月氏**と同盟を結ぶ計画は成功しなかったが，漢の遠征軍はしばしば匈奴を撃破し，西域諸国を服属させた。しかしこのような積極政策は漢の財政を苦しくし，武帝は塩・鉄専売などの経済統制***や，売官などによってこれを補おうとしたが，しだいにいきづまり，武帝の死後，漢の内外政策は消極化した。

王莽から後漢へ

武帝時代の政策がいきづまったあと，前1世紀なかばごろから豪族勢力の進出がめだってきた。とくに外戚となった有力豪族は，皇帝を擁して実権をにぎったが，その勢力は皇帝が代わるごとに交替した。やがてその中から，外戚王氏に属する**王莽**が現われ，儒教思想や迷信を利用して，漢から帝位を譲らせ，**新**という王朝を始めた(A. D.8)。彼は土地・奴婢の売買禁止，商業の国家統制などによって，政治を彼の理想とする西周時代にもどそうとしたが，豪族・商人はこの抑圧を喜ばず，農民層にも歓迎されなかった。そのため各地に反乱がおこり，王莽は殺されて，新は滅んだ(A. D. 23)。

王莽に対して挙兵した諸勢力の中から，漢の一族**劉秀**が他の豪族軍を統合し，農民反乱(赤眉の賊)を鎮圧して，漢を復興した(後漢の**光武帝**(在位25～57))。彼は国内安定に力を注ぎ，対外政策には消極的であったが，1世紀後半になると，後漢政府は**班超**(32～102)を派遣して，前漢末いらい放置していた西域諸国を，再び漢に服属させた。その結果，匈奴の勢力は後退し，その主力は遠く西方に移動するにいたった****。

---

* 戦国末，燕から亡命した衛満がたてた衛氏朝鮮が北鮮にあったが，武帝はこれを滅ぼし，楽浪・玄菟・臨屯・真蕃の4郡をおいた。

** 大月氏はもと中国の西辺にいたが，匈奴に追われて西トルキスタンに移動していた。

*** 物産を全国に平均させる均輸法，物価調整をはかる平準法なども施行した。

**** 5世紀に東ヨーロッパに現われ，民族大移動をひきおこしたフン族が，この匈奴と同一民族であるともいわれ，この問題は100年以上にわたって論争されている。

しかし2世紀にはいると，後漢宮廷では，幼少の皇帝をめぐって外戚と宦官が争いをくりかえし，中央・地方の官僚・豪族も党派をつくって争いに加わった。やがて太平道によって組織された農民反乱（黄巾の乱）(→p. 72)が始まると（184），豪族は各地で武装割拠し，激しい戦乱の時代にはいった。この間，皇帝の存続は名目的になり，やがて政権争奪の中からおこった曹氏(→p. 70)に位を奪われ，後漢は滅亡した（220）。



狩猟と収穫　煉瓦に焼かれた漢代の日常生活を描いた絵。上は池のほとりで鳥を射る人，下は田園で長い鎌をふるって穀物を収穫する農民。

漢の豪族　戦国時代の階層分化によって生じた大土地所有者(→p. 60)は，有力な大土地所有者の家を中心に一族が結合したので豪族とよばれた。豪族はその地域に権威をもち，秦・漢の郡県制による支配も，彼らの協力を必要としたので，前漢中期以後いっそう政治的・経済的に発展した。ところが小農民からの田租や人頭税を収入の中心とした漢政府は，豪族が小農民から土地を奪うことをおさえる必要があり（限田策），小農民保護のために，商人も抑圧された。王莽も豪族や商人の抑圧を企てたが失敗し，豪族の連合政権的な性格をもつ後漢政府のもとで，彼らはさらに力をたくわえ，やがて次の時代の門閥(→p. 71)貴族へと発展していった。

中国古典文化の成熟　秦・漢統一帝国の成立は，戦国時代いらいの政治的変動を一応終わらせたが，思想の面でも，百家争鳴の状態に代わって，他学派の長所をとり入れた儒学だけが公認されることとなった。武帝は董仲舒の献策にもとづいて五経*博士をおき，儒学の精神によって，民を教化するという理論（儒教）によって，実際にはきびし

* 易経・書経・詩経・礼記・春秋の5種の儒学の古典を五経という。



銀の飾り板 北モンゴリアのノイン－ウラ古墳出土。西方文化と漢文化の影響をうけた匈奴の作品。

い人民支配を合理化した。以後，漢では儒教が政治の基本方針となり，儒教的な徳目に合う人物が豪族や官僚の間で尊ばれた。

儒教の権威確立にともなって，古典に対する研究が深まった。後漢の訓詁(くんこ)学がそれで，学派によってテキストや解釈に対立があったが，後漢末の鄭玄(じょうげん)(127〜200)は諸説を折衷・総合した。

武帝の時代に，司馬遷(145ころ〜86ころB.C.)が「史記」を著わしたが，これは彼が漢による天下統一の意味を，強く感じたからである。後漢の班固(32〜92)は，それと同じ紀伝体*の形式を用いて，前漢一代の歴史書「漢書(かんじょ)」をまとめた。

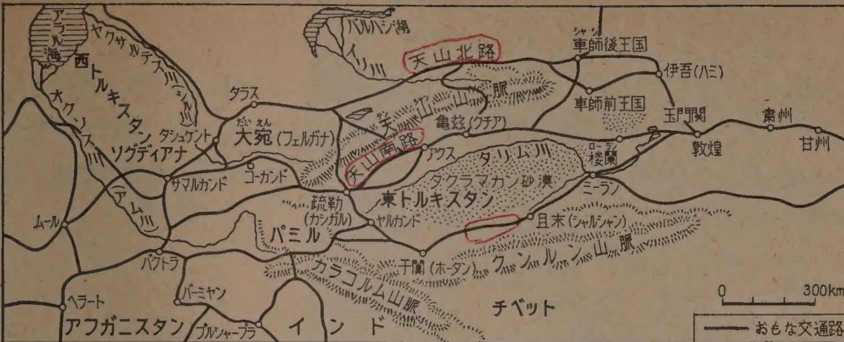
漢文化のひろがり 北朝鮮におかれた楽浪郡などを通じて，南朝鮮や日本に，鉄器をともなう漢文化が伝わった。紀元前後には，満洲・北朝鮮地方に扶余(ふよ)・高句麗(こうくり)などが建国され，日本でも多数の部族国家が成立した。北九州で出土した「漢委奴国王(かんのわのなのこくおう)」の金印は，委奴国王の使者が後漢の光武帝から賜わったものといわれる。ベトナム北部にも，秦・漢の郡がおかれた。また後漢時代に蔡倫(さいりん)が発明した紙の製法は，後世イスラム世界から，さらにヨーロッパに伝わって，世界文化史上に大きな貢献(こうけん)をした。(→p. 94)

絹の道と海の道 紀元前4〜3世紀ごろから，地中海―西アジア―東アジアを結ぶ通商が活発になってきた。とくに，東に漢帝国，西にローマ帝国が並び立っていた紀元前後の数世紀間は，東西交渉上でめざましい時期であった。漢には，西方産の馬や植物，音楽などが，またインドの仏教が仏教美術とともに伝わり，ローマへは東方産の絹がもたらされた。

この時代になると，東西間の通商路として，トルキスタンのオアシス

---

* 帝王の事蹟の「本紀」と，個人の伝記の「列伝」を中心に構成された形式。



西域交通要図

都市国家を通る道，いわゆる「絹の道*（シルクロード）」が使われるようになった。その通商に従事したのは，それら都市国家の住民たち，中でも西トルキスタンのソグディアナ地方出身のソグド人であった。彼らは隊商をくんで，点在するオアシス国家をたどりながら砂漠を横断し，珍奇な物資を東・西間に交流させて利益をあげた。東方で漢と匈奴が，西方ではローマとパルチア（のちササン朝）が，長年にわたって争い続けたのも，この通商の利益の一部をそれぞれ自分の支配下におこうとしたからである。前漢は張騫を大月氏に送ったのをはじめとして，トルキスタン地域に軍隊や商人を送りこみ，いわゆる「西域」の支配を確保しようとした。後漢のとき，西域都護となった班超が派遣した甘英のように，パルチア領から地中海まで足をのばした人もいる。

一方，メソポタミアからペルシア湾，またはエジプトから紅海を経てアラビア南部に達し，季節風を利用して南インドにいたる海路も，紀元前3世紀ごろから利用されるようになった。こうしてローマからインドを経て中国にいたる「海の道」が開かれ，後2世紀，ローマ皇帝マルクス=アウレリウス=アントニヌス（大秦王安敦）の使節も，この道によって中国に到達した。

草原の道　絹の道，海の道とは別に，内陸アジアの草原を舞台とする遊牧

* ローマでは絹が非常に珍重され，その産地を漠然と「絹の土地（セリカ）」，その住民を「絹の人（セレス）」とよんだ。「絹の道」は19世紀にドイツの学者が命名したことば。

民が東西文化の交流に大きな割役を果たした。たとえば，紀元前6世紀ごろからスキタイ民族が青銅器文化を東方にもたらした。その後，匈奴・鮮卑・柔然・ウイグルなどが得意の馬にのって，ユーラシア大陸の東西の連絡にあたった。

課 題

1. アテネの民主政治を，近代国家の民主政治と比較して討論してみよ。
2. プラトンの対話篇「ソクラテスの弁明」「クリトン」「プロタゴラス」などを読み，彼とその師ソクラテスの思想について調べてみよう。
3. ローマの共和政は，どのような社会的基盤の上に成立し，また衰退したか。グラックス兄弟の改革を共和政末期の経済社会上の変化とあわせて考えよ。
4. ギリシア・ローマ人がオリエントの文化遺産をうけついだ事実を，次の語句を使って短い文章で説明せよ。

   天体観測　　アルファベット　　太陽暦　　ユダヤ教　　キリスト教
5. 近代以前の東西交渉はどのような経路で行なわれたのか。地形の略図を書き，重要な地名を書き入れてみよう。
6. 周の政治の基礎となった封建制はどのようなものであったか。西ヨーロッパの封建社会（第4章）と比較してみよう。
7. バラモン教や仏教はどのようにしておこり，発展したか整理してみよう。



雲崗石窟

第3章　東アジアとイスラム世界

北方諸民族の華北への侵入や，絹の道・海の道などによる西方との交渉は，中国固有の文化に新たな特徴をつけくわえた。仏教がしだいに一般民衆にひろまり，南北朝・隋・唐時代を通じて，中国の政治・文化に大きな影響をあたえたのはその一例にすぎない。唐帝国と同じころ，西アジアでもイスラム教の大帝国が建設され，この二大帝国は中央アジアで接触し，東西文化の交渉をふかめた。また同じころ，コンスタンティノープルに東ローマ帝国が栄え，西ヨーロッパは，フランク王国のカール大帝によって統一された。こうして8～9世紀ごろ，世界各地に大帝国が生まれ，そのいずれもが一民族一国家のわくにとどまることなく，国際的性格をもつ文化をつくり出していた。たとえば唐の国際的性格はその周辺諸国をふくめた東アジア文化圏を成立させた。東西交流はユーラシア大陸のほとんど全域にまたがるモンゴル帝国時代に，いっそう発展したことはいうまでもない。

いっぽう，中国内部をみると，南北朝時代からはじまる漢民族の江南地方開発は，その後ますます進み，この地方の経済上の比重はましてきた。宋時代以降，水田耕作にもとづく農業生産力の発達は，「江浙（江蘇・浙江）熟すれば天下足る」といわれるようになった。こうした経済的発展は唐末五代以前と宋代以後との間に政治・文化の上でも変動をひきおこした。旧来の門閥・貴族にかわり，社会の支配層として登場した新地主層（形勢戸）を中心とする官僚制の成立，商業・都市の発達による庶民文化の開花がそのあらわれであった。

第1節　東アジア文化圏の形成

1.　魏・晋・南北朝時代

三国の分立と晋の統一　黄巾の乱後，豪族の割拠する情勢の中で，後漢の皇帝を擁した曹操は，華北の統一を進め，その子曹丕(文帝)(在位220～226)は漢から帝位を奪い，ついに魏をたてた。これに応じて揚子江上流には劉備が蜀を，江南には孫権が呉をたて，* ここに約50年にわたる**三国時代**が始まった。三国のうち，華北の魏がもっとも有力で，やがて蜀を併合したが (263)，将軍の司馬氏が実権をにぎるようになり，ついに司馬炎(武帝) が帝位を奪って晋をたて(265)，呉を滅ぼし(280)，天下の再統一に成功した。

外民族の活動　晋は帝位をめぐる王室内の対立 (八王の乱) によって動揺し，それとともに後漢いらい中国内地に移住していた外民族の動きが活発になった。その中の匈奴の一軍は洛陽・長安をおとしいれ，晋は一時滅亡した(316)。以後，華北では，匈奴・羯・鮮卑・氐・羌の**五胡**が各地に政権をたて，はげしい争いをつづけた(**五胡十六国時代**)。他方，江南では司馬氏の一族により**東晋**が再建され (317)，建業（建康，今の南京）が都となった。

南北朝時代　華北の政治的混乱は，鮮卑の拓跋氏がたてた**北魏**によって5世紀前半に統一された。孝文帝(在位 471～499)は都を平城 (大同) から洛陽に移し(494)，鮮卑風の服装・言語を禁じて中国化を進めたが，帝の死後，北魏は東魏・西魏に分裂し，さらにその後，東魏は北斉に，西魏は北周にかわった。北魏以降の諸王朝を**北朝**とよぶ。

一方，華北の混乱をのがれて移住した漢人豪族や農民によって，江南

---

* 稲作の可能な江南デルタ地帯には，漢代以後華北農民の移住がさかんで，呉以後の江南によった諸王朝は，この経済的基盤の上に成立した。

の開発はいっそう進んだ。しかし東晋は，5世紀はじめ，部将に帝位をうばわれて滅び，以後，宋・斉・梁・陳の諸王朝が交替した。これが**南朝**であり，この南北対立の約150年間を**南北朝時代**とよぶ。



南北朝時代の中国

東北アジアの形勢　3世紀なかばごろ倭の邪馬台国は魏や晋に使いを送っていたが，* 4世紀になると，大和政権による日本統一が進み，南鮮の一角に任那を領有するにいたった。そのころ朝鮮でも**新羅**・**百済**が成立したが，満州におこった**高句麗**の勢力が南下して，両国に圧迫を加えた。日本は朝鮮半島の支配をめぐって高句麗と戦うともに，** 5世紀にはしばしば南朝に使者を送り，朝鮮における優越権を認めさせようとした。6世紀になると，任那は新羅の侵略をうけ，日本の勢力はしだいに朝鮮から後退した。しかしこの時期には百済からの帰化人を通じて儒教や仏教をはじめ，高級織物などの技術がわが国に伝わった。

門閥貴族の形成　後漢末いらいの戦乱によって，華北の土地は荒廃し，窮乏した農民は，ますます豪族の隷属民となっていった。三国の魏では屯田をおこなって，貧民の生活安定と財政の確保をはかるとともに，九品中正制***とよばれる官吏登用法によって，地方豪族勢

* 「三国志」の魏志倭人伝に，邪馬台国に関する記事がある。

** 高句麗の広開土王（好太王）の碑文に，日本との戦いの記事がある。

*** 漢代には郡守が直接人材を推薦していたが，魏ではそれをやめて，州・郡に中正官をおき，その地方の人物を9等に評価し，中央に推薦させる制度を始めた。しかし実際には，中正官と地方豪族が結びついて，有力豪族の上級官職独占を合法化する結果となった。

力をおさえようとした。しかし有力豪族はかえってこの制度を利用して上級官職を独占し，しだいに門閥貴族層を形成するようになった。晋代に発布された占田・課田の法*も，強大化する豪族勢力をおさえる力とはならなかった。

南朝ではとくに貴族の勢力がつよく，仏教寺院も豪族的な経営をおこなって，王朝の統制に服さなかった。一方，華北にとどまった豪族は異民族政権の武力に結びついたので，北朝皇帝の権力は比較的強く，仏教や道教の教団も，王朝に依存する傾向が大きかった。北魏の孝文帝は，荒廃した土地の回復と農民の確保を目的として**均田制**をしいた(485)。その中には，奴婢・耕牛を多数もつ豪族層への特恵的規定**も含まれていたが，均田制はその後北朝を通じておこなわれ，隋・唐にうけつがれた。(→p. 75)

南北朝時代の文化

後漢末以後の政治的混乱は，知識人の儒教的世界観を動揺させ，老荘思想への関心を深めた。俗事を超越して人間の本性などを深く論議する風潮(**清談**)が，魏・晋から南北朝にかけて流行した***のは，そのあらわれである。

紀元前後ごろ西域から伝わった仏教も，このような風潮の中で流行するようになった。4世紀には，仏図澄・鳩摩羅什ら西域出身の僧が仏典を漢訳し，五胡の君主や東晋で重んじられた。**雲崗・龍門・敦煌**などの石窟寺院も，北魏時代から王朝の保護のもとに彫り始められた。仏教教義は，はじめ老荘的に理解されていたが，しだいに本格的に研究されるようになり，東晋の**法顕**(337ころ〜422ころ)はインドへ求法におもむいた****。(→p. 56)

後漢末には，黄巾の乱をおこした太平道や五斗米道などの呪術的な民

---

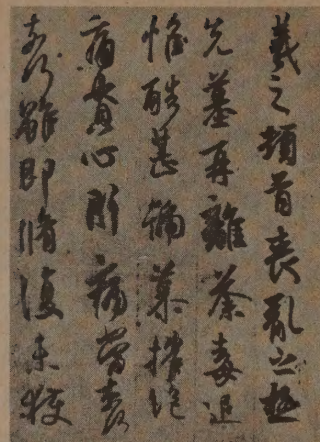
* 占田法は土地所有の制限を目的とし，課田法は農民に土地をわりつけて現物税をとる制度といわれるが，法文があいまいなので，解釈が一定していない。

** 奴婢・耕牛に対しても土地が支給され，かつそれに割り当てられる税率は低い。

*** 魏・晋時代の阮籍や嵆康を中心とする「竹林の七賢」は有名である。

**** 法顕は60歳をすぎてから，陸路インドへおもむき，東南アジア経由の海路で帰国した。旅行記に「仏国記」がある。





女史箴図（部分）女史箴は婦人の戒めを説いた文章。これを顧愷之の筆と伝えられる画面に書き，絵と文とを対照させている。初唐の模本。

喪乱帖（部分）（王羲之の筆）　王羲之は書道史上，古今第一といわれる。「喪乱帖」はわが国に古く伝えられたもので，彼の典雅な筆跡をよく伝えている。

間教団が発生した*。南北朝時代になると，仏教の隆盛に刺激され，その組織をまねて，中国古来の神仙思想や呪術信仰をもとに，老子を教祖に仰ぐ**道教**が成立した。北魏の**寇謙之**（?～448）はその大成者で，新天師道の教団を組織し，仏教教団と対抗した。

南北朝時代には，とくに南朝のもとで**六朝文化****とよばれる優美な貴族文化がさかえた。詩人では**陶潜（淵明）**（365～427）・**謝霊運**（385～433），絵では**顧愷之**（344ころ～405ころ），書では**王羲之**（307ころ～365ころ）が名高い。文章では対句と韻を重んじる華麗な文体（**四六駢儷体**）が流行し，名文集**「文選」**が梁の**昭明太子**（501～531）によって編纂された。一方，この時代には，「**水経注**」（地理）・「**斉民要術**」（農業技術）・「**傷寒論**」（医学）などの学術書もつくられた。

---

*　太平道は病気の治癒を目的とする呪術的な信仰。五斗米道は張陵が蜀で始めた宗教結社で，病気をなおす謝礼として米５斗（約５升）を出させたのでこの名があり，天師道ともよばれる。

**　三国時代の呉と，東晋と，南朝４王朝を加えて六朝とよぶ

2. 隋・唐の統一

隋の統一

三国時代からの南北の政治的分裂は，北周の外戚楊堅(せきようけん)の始めた隋王朝によって，589年再統一された。楊堅（文帝）(在位581～604)の子煬帝(ようだい)(在位604～618)は，江南と華北を結ぶ大運河をひらいた。これはその後長く中国の政治的・経済的動脈となった。隋は北朝の諸制度を継承して，均田・租庸調(そようちょう)の制や府兵制を実施する反面，九品中正制を廃して，試験によって官吏を選抜する選挙(のち科挙とよばれる)を始めた。隋から唐の初期にかけて，南北朝いらいの貴族層はなお有力であったが，これらの諸制度の運用によって，隋・唐王朝は中央集権の強化をめざした。

一方，モンゴル高原では，5世紀には鮮卑にかわって柔然(モンゴル系)が強力となったが，6世紀中ごろには，突厥(とっけつ)(トルコ系)が大遊牧国家を形成した。彼らは東方では西域諸国をおさえて北朝を圧迫し，西方では絹の交易などを通じてササン朝ペルシアや東ローマと交渉をもった。* 隋は外交政策によって突厥を東西に分裂させ，西域への進出を企てたが，南満・北鮮に勢力をはっていた高句麗遠征に3回失敗し，国内各地に反乱がおこった。その混乱の中で，巡幸中の煬帝は殺され（618），帝位は山西の豪族李淵(りえん)父子の手に奪われて，唐王朝が成立した。



隋代の運河

唐の全盛期

唐の統一事業は，李淵（高祖）(在位618～626)およびその子李世民(太宗)(在位626～649)によっておこなわれた。** 唐はほとんど隋の制度を継承したが，

---

* 突厥ではアラム文字（→p. 22）系統の突厥文字を用いたが，これは内陸アジア遊牧民で自分の文字を使った最初である。

** 太宗は多くの名臣を用いて治績をあげ，その治世は「貞観(じょうがん)の治」とよばれる。

589~618~907



唐 代 の ア ジ ア

律令格式*として整備された行政体系は，日本や朝鮮など周辺諸民族の政治制度に大きな影響を及ぼした。門閥貴族をおさえるために，唐でも選挙制を実施したが，官界では貴族がいぜんとして有力で，選挙出身者は数も少ない上に，低い地位しかあたえられなかった。唐の三省六部の制は，中書省が起草した詔勅を，門下省が審議し，尚(しょう)書省がそれを六部(りくぶ)（吏・戸・礼・兵・刑・工の各部）を通じて施行する制度であったが，貴族層は門下省によって，皇帝の立案する政策を制約する力をもった。

北魏いらいの均田法も施行され，定期的に編成される戸籍にもとづいて，成年男子ひとり当たり100畝(ぼ)（永業田20畝，口分田(くぶんでん)80畝）を支給し，租(穀物)・庸(労役)・調(各地特産物)を納入させて，政府収入の確保をはかった。北魏の均田法では，奴隷や耕牛に対する給田の規定があり，それらを多数もつ豪族に有利であったが，隋・唐ではそのような特恵的配慮はなくなった。しかし官吏には永業田・職分田などの名目で給田され，

* 律は刑法，令は行政法，格は律令の変更・補充の規定，式は施行細則。



龍耳瓶 唐代では緑・黄・藍などの三種のうわぐすりをかけた唐三彩が完成し，西アジアの陶器にも影響を与えている。この瓶の形は，ペルシアに起源し，正倉院の水瓶へもつながることを示すものである。高さは45.8cm。

また豪族の土地も没収はしなかったから，やがて官僚・貴族・寺院などの荘園が増加していった。

府兵制も北朝末期に始まり，隋・唐にうけつがれた徴兵制度で，均田農民を交代で全国630余所の折衝府に徴集し，都の長安や辺境の防備に当たらせた。この兵力を基礎に，太宗・高宗の時代を中心とする7世紀の唐の外征はすこぶる活発化し，東北では新羅と結んで百済・高句麗を滅ぼし，北方では突厥を倒して西域諸国を服属させ，南方ではベトナムを討ち，拡大した領域を統治するため6か所に**都護府**をおいた。

東アジア文化圏の形成 唐の西域発展は，ちょうどイスラム勢力の拡大期にあたったため，東西の文化交流がさかんになった。ゾロアスター教（拝火教・**祆教**）・マニ教・ネストリウス派キリスト教（**景教**）・イスラム教（清真教・**回教**）が陸路伝わり，ササン式美術や西域の音楽も，唐に伝来した。長安は国際都市として繁栄し，西域からの商人*や周辺諸国からの遣唐使，留学生・留学僧によってにぎわった。**玄奘**（602〜664）・**義浄**（635〜713）はインドにおもむいて仏教を研究し**，帰国後，多くの経典を新たに翻訳して新宗派(→p. 56)をひらき，皇室や貴族の信仰を集めた。唐文化は，当時の国際文化を包容・融合した国際的性格の濃い文化であった。

このような唐文化は，遣唐使や留学生を通じて，**日本・新羅・渤海**などにもち帰られた。それらの国では，整然とした都市プランや完備した律

---

* 唐から宋以後になると，東南アジア経由の海路で中国の広州などに渡来するイスラム商人が増加してくる。

** 玄奘は「大唐西域記」，義浄は「南海寄帰内法伝」という旅行記を残している。

令政治制度をはじめ，儒教思想・仏教思想や芸術様式を唐から学びとった。唐の文化は，また雲南方面の南詔や吐蕃にも及び，ここに唐を中心とする**東アジア文化圏**が形成されるにいたった。

唐と日本と朝鮮　唐と日本とは，7～8世紀に緊密な関係にはいった。7世紀前半の日本では，天皇中心の統一政権をつくる動きがおこった。遣隋使を派遣した**聖徳太子**(574～622)の新政治方針が出発点となった。中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)(626～671)が，隋から唐への変革をみて帰国した留学生らとともに進めた**大化改新**以後，公地公民を原則とする律令制への変革が始まった。8世紀の律令政治の運営と天平文化の開花は，唐の成熟した文化の影響下に展開したもので，**正倉院**の御物にも，唐を経由したササン式美術の影響を残している。


大秦(しん)景教流行中国碑　長安の大秦寺に建てられた碑 (781) から模作したもの。高野山にある。

朝鮮では7世紀後半，百済について，高句麗も唐に滅ぼされ，新羅一国に統一された。**新羅**には骨品制という古い氏族制があり，出身の氏族によって，地位・身分がきめられた。中国とは盛んに交通し，支配組織や文物を取り入れた。首都の金城（いまの慶州）付近には，壮大な王陵や，すぐれた仏教美術，建築が残っている。また，7世紀末，満州中部から沿海州にわたる地方を領土に**渤(ぼつ)海国**が生まれ，中国の制度を取り入れ，整った国家をつくった。この国は日本にも来航し毛皮・薬・にんじんをもたらし，わが国の工芸品を持ち帰った。

唐の衰退　唐の宮廷では高宗の死後，その后(きさき)の**則天武后**が政権をにぎり，一時，唐を廃して国号を周と改めた*（690～705)。

* これを「武周革命」という。これにつづいて，韋(い)皇后の専権時代（705～710）があり，合わせて「武韋の禍」という。このころから選挙出身官僚の進出がめだってくる。

それにつづく混乱期のあと即位した玄宗(在位712〜756)は，ウイグル人[*]（トルコ系）の侵入に備えて辺境に**節度使**を増置するとともに(計10か所)，**募兵制**を採用し，くずれ始めた均田・府兵の制に対応して，秩序の回復につとめた（開元の治）。ところが節度使は私兵を養って軍閥化し（藩鎮），やがて華北の3節度使を兼ねたトルコ系混血人**安禄山**(ろく)(?〜757)が反乱をおこして，長安は占領され，玄宗は退位した。その後唐はウイグルなどの援軍を利用して，ようやく乱を鎮定した(安史の乱[**]755〜763)。しかしこの乱をきっかけに節度使は内地にも多数おかれるようになり，中央に対してなかば独立の地位をもつようになった。

安史の乱によって華北の土地は荒廃し，戸籍も乱れて，均田制の施行が不可能になった唐は，780年，楊炎(ようえん)(727〜781)の献策によって，**両税法**を実施した。各州県ごとに算定した税額を，土地所有高と資産の多少に応じて住民に割りあて，夏・秋の二期に分けて納税させるもので，ここにいたって均田制は全くその生命を失い，有力者の大土地所有が公認された。

9世紀にはいると，節度使の地方割拠の形勢はますます顕著(けんちょ)となり，中央では官僚内部の派閥対立が激化した。やがて9世紀後半の**黄巣の乱**(こうそう)(875〜884)をきっかけに唐の権威は全く衰え，907年，朱全忠のために倒された。

荘園の発達　均田制のもとでも，貴族や寺院の大土地所有は存続し，官吏にも給田規定があったが，8世紀以降，彼らの**荘園**はさらに広大となり，均田農民も過重な租税・兵役の負担をのがれて，小作人（客戸(きゃくこ)・佃戸(でんこ)）として荘園の隷民となる者がふえた。荘園では農業経営のほかに製油業・製粉業などが営まれたが，完全な不輸不入の権はもたず，公の租税を負担した。また農業生産[***]や商業の発達にともなって成長した在地の富豪が地主となり，小作人を

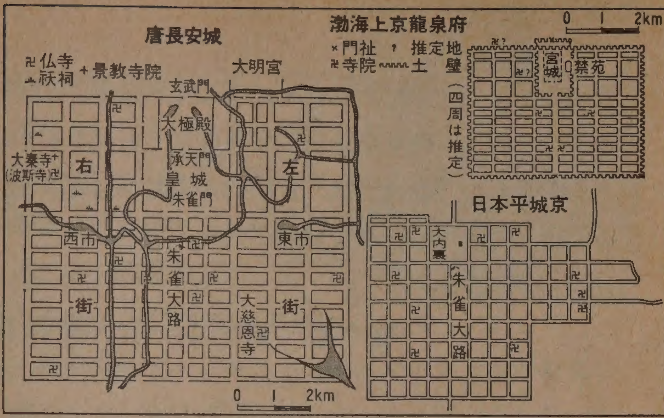
---

* このころ，ウイグル人はマニ教を信仰していた。のちトルキスタンに定住後はイスラム化する(→p. 86)。

** 安禄山がその子に殺されて以後，部将のトルコ人史思明（?〜761）にうけつがれたので，この乱を安史の乱とよぶ。

*** 唐中期以後，江南・華北での農業生産力は著しく高まったが，とくに江南を中心として，茶・甘蔗・漆などの商品農作物が増産されるようになった。

使役して荘園経営をおこなうようになった。これら在地の新地主層が，宋代以後の支配層になっていくのである。



都 城 復 原 図

唐代の文化　唐の代表的文学である詩をはじめ他の学芸も，初唐（7世紀）・盛唐（8世紀前半）・中唐（8世紀後半～9世紀初め）・晩唐（9世紀以後）の4期に分けることができる。

初唐期は南北朝時代の気風をうけつぎ大成させた面が強い。訓詁学は**孔穎達**（574～648）らの「**五経正義**」の集成によって，経書の標準的な解釈が定められた。仏教で天台宗や華厳宗が大成され，禅宗・浄土教が確立されるとともに，道教も宮廷・貴族の保護下に発展した。詩では，宮廷詩人を中心として，六朝的な詩風が重んじられたが，盛唐期（玄宗時代）になると，詩人の個性がゆたかに展開されるようになった。奔放に情熱をうたいあげた**李白**（701～762），自然や人事に深い洞察を加えた**杜甫**（712～770），自然の美をうたった**王維**（701～761）は，その代表である。

中唐期にはいると，平易な表現で詩を書いた**白居易**（772～846）（楽天），古文*で思想を自由に表現しようとする**韓愈**（768～824）（退之）・**柳宗元**（773～819）らが現われた。彼らはまた，訓詁にとらわれずに，儒学本来の精神を復興する運動もおこし，やがて宋代の新儒学にうけつがれた（→p. 85）。晩唐期の詩には，虚無的・唯美的な傾向が強まり，楽器の伴奏で歌われる俗語を混えた詞も生まれた。

初唐と盛唐以後との気風の差は，他の芸術分野においてもみられる。

---

*　六朝風の装飾的な韻文に対して，それ以前の秦漢ごろの簡素な散文体を古文という。

絵では初唐の宮廷画家閻立本(?～673)に対して，盛唐には強い線といきいきした運筆で，新しい画風をひらいた呉道玄(7～8世紀ごろ)・王維があり，水墨山水画もこのころ成立した。書道では，貴族的な書風の初唐の褚遂良(596～658)に対して，盛唐には，剛建な筆致の顔真卿(709～786ごろ)がでた。

第2節　東アジア史の新展開

1.　宋の統一と北方民族の南下

五代から宋へ

黄巣の乱は，貴族層を多く没落させ，荘園は各地に割拠する節度使や，新地主層の手に移った。やがて黄巣の部下から唐にくだって節度使となった朱全忠(852～912)は，唐を倒して後梁をたてたが (907)，その力は華北の一部にしか及ばず，まもなく滅んだ。唐の滅亡後の約半世紀間に，華北には短命な5王朝*が興亡し，地方では藩鎮が独立して，五代十国の分裂時代となったが**，960年，後周の部将趙匡胤(太祖)(在位960～976)が宋をたて，次の太宗(在位976～997)の時代にかけて統一事業を推進した。

宋は節度使から軍事権・行政権・財政権をとりあげて，皇帝直属の軍隊を強化し，節度使の後任には文官を起用して中央集権を強化した。それらの官吏は，在地の新地主層から科挙によって選ばれ，皇帝が直接に最後の試問をおこなう制度 (殿試) が加えられた。こうして宋以後は官吏の地位は世襲されることなく，官僚機構が皇帝に直属するようになった。

遼・西夏と宋

東突厥の没落後，モンゴル高原にはウイグルが勃興したが，やがてその支配下にあった契丹族がしだいに勢力をのばし，916年耶律阿保機のもとに東モンゴリアを中心に遼を建国

*　後梁・後唐・後晋・後漢・後周の5王朝で，汴 (開封) と洛陽を含む華北中心部を確保していたにすぎない。

**　この時代は，統一王朝こそなかったが，唐中期いらいの経済発展の上にたって，江南の南唐や四川の後蜀などの地方政権は，安定した文化的発展をとげた。

し，渤海を滅ぼし，五代時代の混乱に乗じて長城南部の燕(えん)雲16州を獲得した。さらに宋との間に和約を結び（澶淵(せんえん)の盟1004），宋が兄，遼が弟という関係で，毎年多額の銀・絹を宋が贈ることになった。以後，遼と宋の国際関係は安定し，遼は中国文化の影響をうけて，国力を充実させた。


王　安　石

同じ11世紀前半に，北西方面でも，チベット系タングート人が西夏を建国し，宋の辺境に侵入した。宋は西夏に対しても銀・絹・茶を贈って和平をたもつことにつとめた。しかし11世紀後半の神宗（在位1067～85）時代に王安石（1021～86）が宰(さい)相に起用されると，莫大な軍事費・外交費を調達するための富国強兵策が展開された。均輸・青苗・市易・募役などの諸法によって，特権的な官僚・地主・商人の地位をおさえ，保甲・保馬の法によって兵馬の供給をはかった*（王安石の新法）。

しかしこの革新政策は，司馬光（1019～86）らの保守派官僚や大地主層の反対をうけ，王安石はまもなく引退した。その後は，改革を支持する新法党と，それに反対する旧法党との間の党争が激化し，宋は辺境防備に対して有効な対策をうちだせなかった。

金と南宋

12世紀にはいると，満州の奥地で半猟半農の生活をしていたツングース系の女真人が遼から独立し，阿骨打(あくだ)（在位1115～23）を皇帝に金を建国した（1115）。遼の圧迫に苦しんでいた宋は，新興の金を利用して遼を滅ぼした**（1125）。しかし，金は宋の不信な態度を怒って，華北に侵入し，1127年首都開封をおとしいれ，徽宗(きそう)（在位1100～1125）をはじめ皇族や重臣

---

* 均輸法は政府の物資買上げによる物価調節法。青苗法は農民に対する，市易法は中小商人に対する低利融資法。募役法は，租税の徴収・運搬などの役(えき)を免除されていた官戸(かんこ)からも助役銭をとり，希望者を募(つの)って業務に専従させる法。保甲法は兵農一致の国民皆兵制。保馬法は民間に馬を飼わせ，戦時に軍馬として徴用する法。

** この時，西へのがれた遼の一族は，東トルキスタンに西遼(カラキタイ)をたて，遼文化を一時西方で維持した。

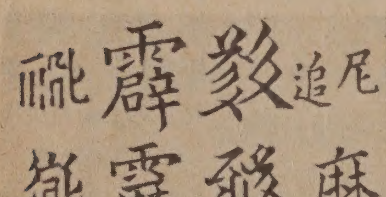


南宋・金・西夏

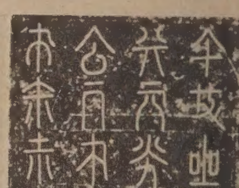
3000余人を捕虜とした(靖康(せいこう)の変)。こうして華北は金の占領下におかれたが，その際，宋の一族は江南にのがれ，臨安(りんあん)（杭州）を都に宋を再建した（南宋）。

南宋では，主戦論者の岳飛(1103～41)らが一時失地を回復したこともあったが，平和論者の秦檜(しんかい)(1090～1155)の主張によって，金を君，宋を臣として，毎年多額の貢物(みつぎもの)を送る約束をした（1142）。こういう現実を反映して，華夷(い)の別や，君臣の大義名分を論ずる風潮が高まった。一方，金は，都を燕京（北京）に移し，中国文化を積極的にとり入れたが，経済政策の上で失敗が多く，官僚は腐敗し，軍規もゆるんできた。そこでモンゴルの勃興に際し，南宋はモンゴルと同盟して金を倒すことに成功したが（1234）(→p. 86)，やがて自らもその攻撃をうけて滅亡した（1279）。

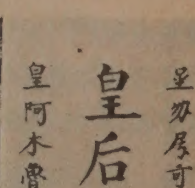
遼・金と中国文化　華北に侵入した北方民族のうち，北魏のように中国文化に同化されたものもあった(→p. 70)。遼や金は，統治に際して中国風の官僚制度・郡県制を利用する一方，契丹・女真固有の部族制度を残し*，また漢字の影響を



西夏文字



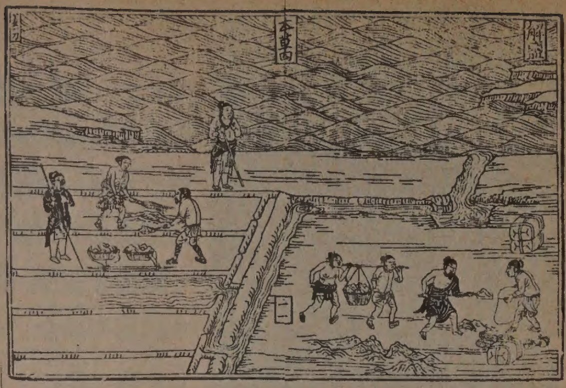
契丹文字



女真文字

* 遼では郡県民統治のための南面官と，契丹人統治のための北面官が併置され，金では軍事力として猛安(もうあん)・謀克(ぼうこく)制が存続した。

受けつつ**契丹文字***・**女真文字**など彼ら自身の文字をもつようになった。西夏も宋の官僚制をとり入れるとともに独特な**西夏文字**を制定した。



宋の専売塩の生産風景

宋代の社会と経済　貴族・豪族にかわって支配層となった新地主は，かれらの荘園を**佃戸**とよばれる農奴的小作人に耕作させた。佃戸は主家に隷属し，土地とともに売買され，小作地の収穫の約半分を地主に納めたほか，種々の労役に服した。地主は一族から科挙を通じて官吏をだすことを念願とした。官吏をだした家は官戸として付加税や諸種の役を免除され，**士大夫**(したいふ)ともよばれて一般の尊敬をうけた。

唐中期以後，江南の経済発展は著しくなったが，とくに南宋時代になると，農業生産力は上昇し，茶などの商品作物の栽培が普及したほか，景徳鎮(けいとくちん)をはじめとする各地の窯(かま)で，**青磁**や**白磁**のすぐれた陶磁器が生産された。南宋の首都臨安は商業の中心として繁栄し，市舶司の設けられた明州(寧波(ニンポー))・泉州・広州(広東(カントン))などの海港都市も，イスラム商人の来航とともに発達して，主に絹織物・陶磁器・漆器を輸出した。国内商業も発達し，各地に商業都市の成立をみた**。遠距離間の取引の便宜のために，金融業者の発行する手形も唐末から用いられたが，宋はその発行権を中央に集めて交子・会子などの紙幣を発行し，銅銭・鉄銭と並んで通用

---

* 契丹文字にはウイグル文字の要素もある。ウイグル文字はアラム系(→p. 22)のソグド文字の系統をひくもので，のちのモンゴル文字・満州文字の母体ともなっている。

** 従来の都市の郊外や地方の集落に立つ市（草市）から，商業都市に発展するものもあった。従来あった都市の商業区域や営業時間の制限も，宋以後の商業都市では，なくなった。



桃鳩図(とうきゅうず)(徽宗筆)徽宗は皇帝としては無能であったが，絵の名手で，色彩の美しさと均整のとれた構成にすぐれている。この絵は26歳の時の作で，真筆と称されるのはこれくらいとされる。

させた。商人や金融業者は行(こう)，手工業者は作(さく)とよばれる同業組合を組織して，重要な商品を独占的にあつかい，利益増大のために官吏との関係を深めようとした。こうして地主・官僚・商人の三者は一体となって宋以後の社会・政治の支配層を形成することとなった。

宋代の文化　宋の文化は，地主・官僚の士大夫的文化と，都市の商工業者の庶民的文化を中心として，充実した発展を示した。士大夫層は，再建された統一王朝による政治を儒教にもとづいて理論化しようとした。それが北宋の周敦頤(とんい)(1017～73)に始まり南宋の朱熹(しゅき)(1130～1200)によって大成された**朱子学**(宋学)で，儒学の経典に対して新しい解釈を下し*，君臣・父子・華夷などの差別を絶対化する大義名分論を展開した。欧陽修(1007～72)の「新五代史」，編年体による司馬光の「資治通鑑」などの史書も，王朝の正統性や君臣の分を歴史を通じて明らかにしようとした。

商業都市の繁栄は，商工業者の娯楽生活を向上させ，劇場では講談や戯曲が演じられ，伴奏入りの詞(しょう)(→p. 79)も愛誦された。また唐末から，庶民の間に，浄土信仰によって結ばれた念仏教団がひろまったが，同時に，庶民に身近な道徳規範を説く**民衆道教**が，道教の教団組織**とは離れて成長し，庶民生活に深くしみこむようになった。

唐中期におこなわれ始めていた**木版印刷術**は，宋にはいって普及した。11～12世紀には**火薬・羅(ら)針盤**も発明されたが，これらの知識はイスラム

---

* 朱子学では「五経」(→p. 65) とならんで「四書」(「礼記」中の2篇，大学・中庸と論語・孟子) を重視した。

** 金朝治下の華北で，儒・仏・道3教の調和をはかる改革派の全真教がおこり，元の保護をもうけて，江南の正一(せいいち)教と並ぶ大勢力となった。

商人を経てヨーロッパに伝わった。

新儒教に対する仏教の影響　宋代の新儒学は，唐中期の韓愈らに端を発して(→p.79)いる。韓愈は外来の仏教を激しく排撃したが，新儒学は仏教教義の影響をうけて理論を深め，朱熹と同時代の陸九淵(象山)1139〜92 は，学問知識より心の修養を重んずる点で禅に近く，のち明の王陽明(→p.174)にうけつがれた。一般に士大夫は，個人的教養の面で禅の影響が大きく，彼らの詩や水墨画（文人画*）にはその傾向が濃厚である。北宋第一の詩人かつ書家の蘇軾（東坡）にも仏教の影響がみられる。

2.　モンゴル帝国

遊牧民と内陸アジア史　内陸アジア草原地帯の遊牧民は，衣・食・住を家畜類に依存するとともに，古くから穀物や布を求めて農耕民と交渉をもっていた。「絹の道」による東西貿易が活発になると，遊牧民は統一国家をつくって，トルキスタン（西域）の都市国家を制圧し，商業利潤の一部を吸いあげようとした。そのため，漢と匈奴，隋・唐と突厥のように，華北に基礎をおく中国政権の西域進出としばしば衝突することをまぬがれなかった。しかしこの対立はいずれも大局的には中国側の優勢が確保されてきた。

ところが9世紀なかば，ウイグル人が東トルキスタンの諸都市に南下定住して以後になると，中国勢力は，西夏や遼・金におさえられ，西域へ支配をひろげることができなくなった。一方，13世紀になるとモンゴル人が内陸アジアの東西貿易路を制圧し，やがて東アジア・西アジア・南ロシアをもふくむ大帝国を建設するにいたった。

内陸アジア史は「絹の道」の支配権をめぐる遊牧民と農耕民の対立を軸として展開してきたが，モンゴル帝国の成立によって，遊牧民は東西間

---

* 宋代の宮廷では徽宗の画に代表される院体画（のちの北宗画）があった。文人画はこれと異なった境地の画風であるが，のち様式化して南宗画（南画）とよばれた。



チンギス汗　即位式をおこなうチンギス汗と息子たちを描いたミニアチュール。

の貿易をほぼ完全に掌握した。しかし，16世紀以後，海路ヨーロッパ人が渡来するに及び内陸アジア経由の貿易の重要性はしだいに減少していった。

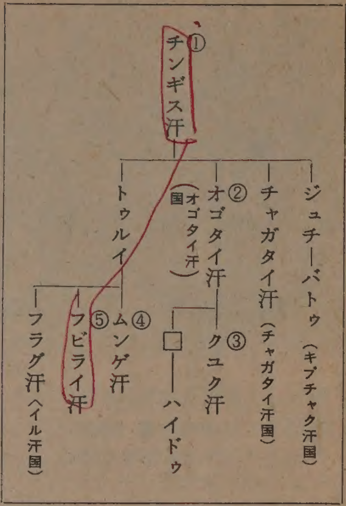
トルキスタン　この地には，元来アーリヤ系の民族が住み，雑多な宗教があったが，ウイグル人の南下定住以後，トルコ系住民の土地（トルキスタン）となり，彼らはやがてイスラム化した。トルキスタン東部（東トルキスタン）はのち清朝に併合され(→p. 175)，新疆(しんきょう)とよばれた。

モンゴル帝国の成立　12世紀初め遼が滅んだころから，モンゴル高原の遊牧民の間に，自主的な統一の気運が高まった。やがて諸部族の激しい対戦の末に，モンゴル部のテムチン(1167～1227)は，1206年チンギス汗の尊称を得て，全モンゴリアの支配者となった。彼は従来の部族組織を解体して，全遊牧民を千戸単位の集団に組織する行政・軍事制度を確立し，その組織の指導者の子弟による親衛軍(しんえいぐん)をつくり，モンゴル軍の中核とした。彼はトルキスタンの諸勢力を滅ぼして，西北インドに侵入し，ついで西夏を滅ぼし，金の攻撃に向かう途中で病死した。また彼は，こうして拡大した領土に子供たちを分封し，次子チャガタイによる**チャガタイ汗国**(東西トルキスタン)，三子オゴタイによる**オゴタイ汗国**（西モンゴリア）などが成立した。

チンギス汗の死後，**クリルタイ**(集会の意)の決定によって，**オゴタイ**(在位1229～41)が大汗の位に推戴(すいたい)されると，**カラコルム**に都城を築き，華北農耕地帯への侵入を本格化して金を滅ぼした。またジュチの子バトゥはヨーロッパに遠征し，ドイツ・ポーランド諸侯の連合軍を，**ワールシュタットの戦い**で破って(1241)，ヨーロッパ人を脅かしたが，オゴタイ死去の報をうけて

帰途につき，南ロシアにとどまってキプチャク汗国をたてた。

チンギス汗の第4子トゥルイの子であった第4代大汗ムンゲ（在位1251〜59）は弟のフビライに南宋攻撃を，フラグに西アジアへの進撃を命じた。フラグはバグダードをおとしいれてアッバス朝を滅ぼし(1258)（→p. 96），やがてその領域をついでイル汗国をたてた。大汗の位がトゥルイ系に移ってから，他の汗国は分離の傾向を強めたが，フビライが大汗となるにいたって諸汗国は独立し，汗国間の抗争もおこった。*



テムチン家系図

元朝の中国統治　フビライ（元の世祖）（在位1260〜94）は，中国の農耕経済に基礎をおく国家体制をつくろうとして，都を大都（北京）に移し，国号を中国風に元と定め(1271)，やがて南宋を滅ぼして中国を統一した(1279)。こうして元は，モンゴリア・満州・中国を中心とし，チベットや高麗（こうらい）を属国とする東アジアの大国家となった。

元は中国統治にあたって，主として民族の区別によって，モンゴル人・色目人（しきもく）・漢人・南人の4身分差別をたて，**治安維持や徴税は，それぞれの固有の習慣にしたがって実施した。官僚機構は中国のものをほとんどそのままうけついだが，モンゴル貴族が高官を世襲独占し，それ以外のモンゴル人や色目人が中級官僚を占めた。漢人と南人は，従来からの土地所有を認められたものの，科挙の停止によって出世の機会を失い，科挙が復活された14世紀以後も，下級官僚の地位しかあたえられなかった。

---

* オゴタイ系のハイドゥは，フビライの権威を認めず，自ら大汗位について，数十年にわたって対抗をつづけた（ハイドゥの乱）。

** 色目人はイスラム教徒を中心とする西域の諸種族。漢人はもと遼や金の支配下にあった渤海人・契丹人・女真人・華北の中国人など。南人は南宋統治下にあった住民。



モンゴル帝国

このようにモンゴル人は中国文化に対して劣等感をいだかず，公用語にはモンゴル語を用い，公文書にはウイグル文字やパスパ文字*を使った。

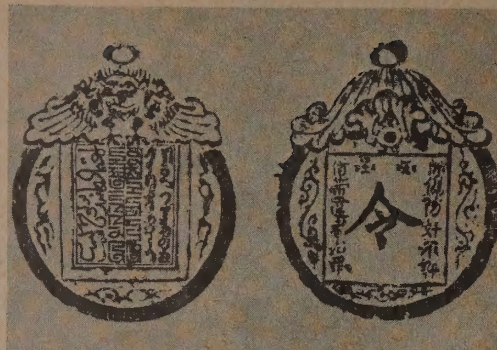
中国人の士大夫層は，このような冷遇のもとで，文人画・雑劇(元曲)・小説などに才能を発揮した。「水滸伝(すいこでん)」・「西遊記(さいゆうき)」・「三国志演義(さんごくしえんぎ)」などの**白話小説**の原型ができ，恋愛劇「西廂記(せいそうき)」，夫婦愛を描いた「琵琶記(びわき)」などの元曲が生まれたのはこのころである。

宋・元時代の朝鮮と日本　唐の衰退と平行して新羅も分裂状態におちいり，10世紀初めに王建(在位918〜943)がでて開城を都に**高麗**(こうらい)をたてた。高麗は中国王朝との交流につとめ，中国風の官僚制度をととのえた。しかし北方から遼軍の侵入をうけ，遼の滅亡後は，金と南宋の双方に服属し，やがて侵入したモンゴル軍に対しては半世紀にわたって抵抗したのち13世紀なかばに屈服した。高麗時代**には仏教が栄え，青磁をはじめとして美術・工芸にすぐれた作品を生んだ。

* フビライがチベットから招いたラマ僧パスパにつくらせた文字であるが，やがて使われなくなった。またパスパの影響で，モンゴル人の間にラマ教信仰がひろまった。

** 高麗では元軍侵入の危機に際し，難局打開を祈って「大蔵経」が出版された。

日本からの遣唐使は894年以後廃止されたが，その後も両国間の私貿易は増大した。12世紀半ばに平氏が政権をにぎると，日宋貿易の促進をはかり，鎌倉幕府も宋との交易をつづけた。南宋時代には禅僧の往来もみられ，朱子学や喫茶の風も日本に伝わった。



元の海青牌（はい）　駅伝を通る使節の証明書として発行されたもの。左が表で，左列からアラビア・パスパ・ウイグルの各文字が書かれている。

元は高麗を服属させた直後に(1274)日本に対する第一次の進攻（文永の役）を，南宋を滅ぼした直後に(1281)第二次の進攻（弘安の役）を試みたが（元寇（こう）），いずれも失敗*した。高麗は元軍に協力したが，その後倭（わ）寇（こう）の沿岸進攻に悩まされて衰退し，元が倒れるとまもなく李朝にかわった。

東西交流の発達　モンゴル帝国は，フビライ以後，宗主国の元と4汗国との連合国家となったが，通商上の必要から，帝国内の交通には十分な配慮がはらわれ，陸上の交通路にそって，くまなく駅伝制が完備された。また南宋を併合して江南を確保して以後は，陸海両ルートによって西アジア・地中海方面と連絡するようになった。元初にはイタリアの商人マルコ=ポーロ（Marco Polo 1254~1324）が陸路で，元の末ごろにはモロッコの旅行家イブン=バトゥータ（Ibn Battutah 1304~77）が海路で中国を訪れたほか，カトリック宣教師**も派遣され，教会堂を建てることが認められた。

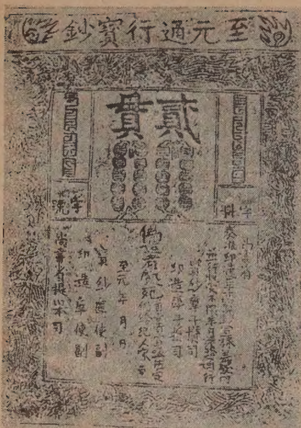
色目人の中国移住や，イスラム商人の海上貿易の発達にともなって，イスラム教も中国各地にひろまった。それとともに，天文学・暦学***・医

---

* 元軍はジャワへも遠征軍を送って，一時占領したが，マジャパヒト朝（13世紀~16世紀）がおこって，元軍は撃退された。

** プラノ=カルピニ（1200ころ~52），ウィリアム=ルブルック（1220ころ~93ころ）はカラコルムを，モンテ=コルヴィノ（1247ころ~1328）は北京をたずねた。

*** 元代の郭守敬の「授時暦」は中国独自のものといわれる。



元の交鈔　上段の至元は元の世祖の元号（1264～94）。中央の下段の記載を見ると尚書省が管轄していることがわかる。また「偽造者は死に処す」とあり，にせ札造りはきびしく処罰された。

学・地理学・砲術などに，イスラム科学の影響が加わった。一方，中国産の陶器も多数西アジア方面に輸出され，西アジアで作られた陶器の文様には中国の影響がみられる。

元の衰亡　フビライの死後，元の宮廷では相続争いがつづき，色目人貴族が台頭して政権をにぎった。元は金の制度をうけついで紙幣（交鈔（こうしょう））を通用させていたが，ラマ教信仰のために浪費が重なり，その対策として専売を強化し，紙幣を乱発した。そのため，政治・経済は混乱に陥り，14世紀なかばごろになると，各地に反乱がおこった。中でも，黄河中流域から揚子江中流域にかけて，白蓮教（びゃくれんきょう）によって結ばれた紅巾の賊（こうきん）の勢力が強くなり，やがてその中から朱元璋（しゅげんしょう）がでて明（みん）をたて，江南をおさえて，北方への物資輸送路を断った。元朝は経済的基盤を失って動揺し，明の北伐軍が大都に迫ると，モンゴル高原に退いた（1368）。こうして元朝による中国支配の時代は終わりを告げた。(→p. 170)

第3節　イスラム世界の成立

1.　イスラム教の成立

アラビア半島の情勢　南アラビアのイエメンでは古くから灌漑（かんがい）農耕が発達し，この地にはやくから形成された王国は，東西貿易の中継地として栄えた。これに対して半島の大部分を占める他の地域では，砂漠と草原の中に点在するオアシスを中心に商業と小規模な農業が営ま



アラビア半島

れたほかは，ラクダ・馬・羊を飼う遊牧生活がおこなわれていた。定着民・遊牧民の各部族は，互いに「血の復讐(しゅう)」をともなう激しい分裂・対立をくりかえした。またイエメンの王国も，プトレマイオス朝やローマがインドとの直接貿易を拡大したために圧迫され，また，キリスト教徒のエチオピア王の攻撃をうけて，しだいに衰えた。

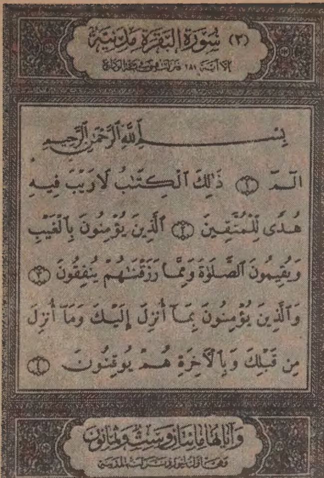
しかし，3世紀から7世紀初めにわたるローマおよび東ローマ帝国とサザン朝ペルシアとの抗争により，シリアからイランにぬける商業の幹線ルートが，麻痺(まひ)したため，ヒジャーズ地方を経由する隊商路が重要性を増すようになった。カーバ神殿*があって多神教崇拝の中心地であったメッカでは，毎年各地から巡礼が集まって大きな市(いち)がひらかれた。こうして6世紀のメッカは，莫(ばく)大な利益をあげる商人貴族クライシュ族の支配のもとで，国際商業の重要拠点となった。

一方，エジプトやシリアなどの周辺地域では，異端とされたキリスト教諸派の勢力が強まって東ローマ帝国に反抗し，アラビア半島内にもユダヤ教やキリスト教がしだいにひろまって，その影響から一神教を求める運動も起こってきた。

マホメットとイスラム教　こうした情勢を背景に，唯一神アッラーを奉ずるイスラム教を創始して，アラビアに活力を与えたのがマホメット(原名ムハンマド)である。マホメットは，隊商に加わってシリア方面に往復し，ユダヤ教やキリスト教の影響を強くうけた。アッラーは本来アラビア諸部族の共通の最高神であったが，マホメットは雑多(ざった)な部族神を否定し，アッラーへの服従による諸部族の結合に道をひらいた。し

Muhammad
571ころ〜632

* 黒石をはめこんだ方形の建物。アラビア諸部族は自然物（黒石のような岩石など）や偶像を崇拝し，精霊(ジン)の存在を信じた。



コーランの序章

かし彼の布教が伝統的な偶像崇拝を攻撃し，カーバ神殿による利益を独占していた商業貴族と対立するようになると，当然迫害が激しくなった。そこで彼は信徒とともにヒジュラ[*]（移住）をおこなってメジナにのがれ（622），この町の部族間の紛争を解決し，ユダヤ人勢力をおさえて政治的手腕を発揮した。こうしてイスラム教徒（ムスリム）の教団が確立した。ついで彼はメッカ征服に成功し，改宗を誓わせた。アラブ諸部族も使節をメジナに送ってマホメットの宗教的・政治的権威を認めるようになり，彼の生涯(がい)のうちにアラビア半島はほぼ統一された。

イスラム教の特徴は，啓示が地上における最後の預言(よげん)者マホメットの口によって，アラビア語で伝えられたというところにあり，この啓示を記録したのが「コーラン」である。この教えの基本は唯一神アッラーに「身をゆだねること(イスラム)」である。マホメットは神の前には階級の別や貧富の差を認めず，偶像崇拝をきびしく禁じ，神と人との間に介在する聖職者の存在を認めなかった。また信徒の義務としては，信仰告白・礼拝・救貧税(ザカート)[**]をとくに重んじ，定期的な断食や聖地メッカ[***]への巡礼なども定められた。

2. イスラム帝国の発展

正統カリフ

マホメットの死後，教団は指導者を選出してカリフ[****]とし，諸部族の動揺をおさえた。以後，4代のカリフは選挙に

* 一般にヘジラといわれる。この年をイスラム紀元の元年としている。
** 貧者への施しを制度化して，農産物や家畜などに課した税。
*** かつてのカーバの神殿はアッラーを祭る殿堂にかえられ，礼拝もこの方角に対してなされることになった。
**** アッラーの使徒（マホメット）の代理者の意。



イスラム帝国の発展

よって決められ，宗教上・軍事上の指導者としてのぞんだ。この正統カリフ時代（632～61）には，異教徒に対する聖戦（ジハード）が進められた。遊牧民の機動力を生かして，シリアに進撃し，さらにエジプトを征服して，東ローマ帝国から重要な経済的拠点を奪った。また東方ではメソポタミアを占領し，ついでササン朝ペルシアを滅ぼして（651），西トルキスタンまで進出した。

こうして豊かな先進文明地帯と重要な商業ルートは，またたくまに新しいイスラム国家の支配下に置かれた。「コーランか，貢納（こうのう）か，剣か」ということばが示すように，彼らは，キリスト教徒やユダヤ教徒などいわゆる「啓典の民*」に対しては改宗を強制せず，人頭税（ジズヤ）と地租（ハラージュ）を納めれば，その立場を保護するという態度をとって，財政的基盤をかためた。

ウマイヤ朝

イスラム国家がひろがるにつれ，カリフの選挙をめぐって教団内に不和と対立がおこり，ウマイヤ家出身のシリア総督ムアーウィアは，第4代カリフのアリーからその地位を奪った。彼はシリアのダマスカスに都をおき，ウマイヤ朝(661～750)を始め，イスラム世界を強力に統一して，8世紀前半に全盛期を現出した。

* 啓示の書物を与えられた民ということ。イスラム教ではアダムからモーセ，キリストにいたる預言者を認めている。

その領土は，東は唐とパミル高原で接し，パンジャブ地方にまで及んだ。西は東ローマ軍によってバルカン方面への進出をくいとめられたが，北アフリカからイベリア半島を征服して，西ゴートを滅ぼした（711）。そしてなおも北進をはかったが，ツール・ポアチエ間の戦いでフランク軍に敗れて阻止された（732）。しかし，この大帝国は，ヨーロッパを東西から圧迫し，断然優勢となった。

この王朝ではカリフの地位は事実上世襲となり，しだいに専制君主化していった。また領土の拡大にともなって，農耕地への定住化が進み，土地の私有も許されたので，新しい貴族層が形成されるようになった。大帝国を維持するために，政治組織が整えられ，通貨が統制され，アラビア語が全領土の公用語とされた。しかし，ウマイヤ朝はアラビア人第一主義をとり，被征服民族の改宗者に対しては徴税などの面で社会的差別待遇をひどくしたので，これらの改宗者やシーア派の人々のウマイヤ朝に対する不満がしだいに増大した。

スンナ派とシーア派　イスラム教徒の大多数を占めるスンナ派（正統派）に対して，アリーの系統をマホメットの真の後継者と考え，ウマイヤ朝の正統性を否定する反対派がシーア派であり，これからさらに多くの分派がでた。

東西カリフ国の分立　このような情勢を利用して，マホメットの伯父（おじ）の子孫がウマイヤ朝を倒し，アッバス朝（750～1258）をたてた。この王朝はまもなくバグダードに新都を建設し，東方において強盛を誇り，8世紀末，ハルン=アッラシード（Harun al-Rashid 在位786～809）の治世に，政治・文化の黄金期を現出した（東カリフ国）。一方，ウマイヤ家の一族は，イベリア半島にのがれてコルドバを都に後ウマイヤ朝（756～1031）をひらいた（西カリフ国）。

東西カリフ国の分裂以後，イスラム国家の領域は前よりも縮小し，征服による領土の拡大もほとんどみられなかった。* しかし東西両カリフ国

* アッバス朝成立直後（751），その遠征軍はタラス河畔で唐軍を撃破した。この際中国人の捕虜中にいた紙漉（すき）職人によって製紙法がイスラム世界に伝わり，のちに西カリフ国を経てヨーロッパにもたらされた。

のカリフたちは壮大な宮殿や後宮(ハレム)をもち，競って諸文化の発達に努めた。**バグダードとコルドバ**は，商業の大中心地，学芸の都として栄えた。その繁栄は，農業・手工業の発達にもよるが，とくに東西貿易の莫大(ばくだい)な利益を基礎としていた。

イスラム商人は，東は中央アジア・中国・東南アジアへ，西はイベリア半島から北のキリスト教諸国へ，南はインド・東アフリカへと進出して**東西貿易を独占**した。これらの商人の活動にともなって，イスラム教は陸路・海路の貿易ルート沿いに拡大していった。

異民族の台頭　アッバス朝の下では，その成立に協力したイラン人やいろいろな民族の改宗者が統治組織や文化の面に進出してきた。またトルコ人の奴隷(マムルーク)が傭(よう)兵として使用された。9世紀以後になると，これらのイラン人やトルコ人傭兵が内政を混乱させ，シーア派の活動がさかんになり，総督や将軍は各地で豪族化し始め，地方小政権が生まれて，アッバス朝カリフの権威は急速に低下した。西カリフ国でも北アフリカ原住民であったベルベル人（ムーア人）などの傭兵が横暴をきわめ，国家の統一が失われて，やがてキリスト教勢力に圧倒されていくことになる。

第4節　イスラム諸国家の発展

1.　イスラム世界の拡大

北アフリカのイスラム政権　東西カリフ国の中間にあたる北アフリカでは，8世紀から小政権が興亡したが，10世紀の初め，エジプトを中心にファーティマ朝(909～1171)が現われ，カイロを首都に，一時はほとんど北アフリカ全土を統一した。この王朝はシーア派であり，スンナ派の東西両カリフ国に対抗するカリフ政権であった。

その後，エジプトを中心として，アイユーブ朝(1171～1250)，ついでマ



11世紀後半のセルジュク国家

ムルーク朝(1250～1517)が支配した。前者は十字軍(→p. 115)にさいして活躍したサラディン(在位1171～93)によってひらかれ，後者はモンゴル軍の侵入をシリアで撃退したことによって有名である。そしてアッバス朝滅亡後は，エジプトのカイロ(→p 87)がイスラム文化の中心になっていった。*

また，これより西のアフリカ北岸ではベルベル人のイスラム諸国家が交替し，イスラム商人の進出を通じてイスラム教が伝わった。サハラ以南のアフリカでも，黒人諸王国**が発展した。

トルコ系民族の活躍 イラン東部で自立したイラン人の王朝**サーマン朝**(874～999)の支配下で，中央アジアにいたトルコ系民族も10～11世紀のころにイスラム化していった。*** アフガニスタンを本拠としたガズニ朝(962～1186)や，グール朝(ゴール朝)(1186～1215)はトルコ系である。

トルコ族の一派セルジュク-トルコは，11世紀にはいると大発展を始め，バグダードを占領して(1055)，西アジア一帯を支配下においた。その首長はアッバス朝のカリフから正式にスルタンの称号をうけ，アラビア人に代わってイスラム世界の主導権をにぎった。歴代のスルタンはイラン人をよく用い，イラン文化の開花がみられた。セルジュク国家は十字軍の攻撃をうけて弱まり，12世紀のなかば，国内の分裂と，ガズニ朝から

---

* 972年に造られたカイロのアル-アズハル大学は世界最古の大学である。

** ガーナ，マリ，ソンガイなどの諸王国が，つぎつぎと西アフリカにおこった。

*** ウイグル人もそのひとつで，中国でイスラム教を回教と呼ぶのは回紇(ウイグル)人の宗教と考えられたためらしい。

起こったホラズムの攻撃などによりやがて滅んでいった。ホラズム（フワーリズム）は，ペルシア全土をおさめ，西遼を破って東方に領土を拡大したが，13世紀初め，チンギス汗に滅ぼされた。

インドのイスラム化　前述のガズニ・グール両朝のインド遠征により，北インドはイスラム教徒の支配下にはいった。基本的な宗教となっていたヒンドゥー教のほかに，イスラム教がはいってきたことは，インドにとって大きな問題*であったが，イスラム教は租税をはらえば旧来の制度を保持させたため，インド社会に適応していった。グール朝のあと，16世紀のムガール帝国成立まで，デリーを都とするイスラム諸王朝(→p. 168)（デリー＝スルタン朝という）がつづき，その間激しい混乱を重ねながら，インドにおけるイスラム化が徐々に進行した。そしてヒンドゥー教とイスラム教の対立はインドの歴史の中で長く尾をひくことになった。

インドネシア　ジャワでは，スマトラを中心としたシュリーヴィジャヤに代わって，13世紀末マジャパヒト王国がおこった。はじめヒンドゥー教を奉じたこの王国でも，15世紀いらいイスラム化した勢力が強大となり，インドネシアもイスラム圏にはいった。

モンゴル三汗国のイスラム化　13世紀なかばから14世紀にかけて，中央アジア・西アジアはモンゴル帝国の支配下にはいった。モンゴル人は各宗教に差別をつけなかったから，住民の大多数がイスラム教徒であることに応じて，チャガタイ汗国・キプチャク汗国・イル汗国の支配者もイスラム化していった。中でも，アッバス朝を倒し，セルジュク＝トルコに代わって西アジアに君臨したイル汗国は，エジプトのマムルーク朝と対立して，はじめヨーロッパのキリスト教勢力と接近したが，13世紀末にはイスラム教とその文化の熱心な保護者となり，イラン人のめざましい文化的活動がみられた。

---

* 基本的カストの最下位であるシュードラや，カストの外の不可触賤(せん)民は，神の前に人は一切平等であるというイスラムの教えにひかれて改宗したものが多かった。



イドリーシー（1100～66）の構想による世界地図　アラビアを中心として右下がヨーロッパ，左がアジア。

2.　イスラム文化

東西文化の結合　イスラム帝国治下のイスラム文化は，学問においても芸術においても，唐およびビザンティンの文化とともに，当時の世界における最高の水準を示した。その文化は広い帝国の領域に応じて，地域的な相違はみられたが，いずれもイスラム教を中心として，各地域のすでにすぐれた伝統をもつ文化を融合させた点に特色があった。このころ西ヨーロッパには，まだ独自の文化が発達しておらず，古代文化の正統はむしろアラビア人にうけつがれた。そして，彼らの文化は地中海貿易や十字軍を通じてヨーロッパに伝わり，これに強い刺激を与えて，ルネサンス(→p. 133)をおこさせる原因の一つとなった。

イスラム化とアラブ化　イスラム帝国の政治的分裂の進行は，イスラム教が各地域で深く根をおろし，土着化したためにおこった現象でもあった。イスラム化（イスラム教への改宗，他宗教のイスラム的支配体制への編入）とアラブ化（アラビア語の使用，アラビア人との混血）とが離れ，または，からみあいながら進行して，イスラム世界はひろがり，充実していった。シリア・エジプト・北アフリカは，イスラム化すると同時にアラブ化していったが，イラン・インドやトルコでは，イスラム化はしたが，アラブ化はしなかった。イスラム文化は，このような多彩な要素の発展によって，豊かな内容を得たのである。

学芸の発達　神学と法学が結びついて発達したことはイスラム文化の一特色であるが，それは文法学・修辞学とともに，「**イスラム固有の学問**」とよばれた。他方「**外来の学問**」としてギリシアの哲学・幾何学・医学などの古典がアラビア語に翻訳され，これにインド数学の影響も加わって，数学・物理学・化学・天文学・医学などが発達した。



アル－アズハル大学　世界最古の大学は，いまもイスラム神学研究の中心となっている。

このようなイスラム世界の学芸の発達の背景には，イスラム教徒の活発で広範囲な商業活動があった。インド数字を改良して**アラビア数字**がつくられ，三角法や代数学の研究が進んだ。また卑金属を貴金属に変えようとする**錬金術**は，化学の発達をうながした。航海術や暦法，商業理論なども進歩した。彼らは中国から伝わった火薬・羅(ら)針盤を改良し，すぐれた測天儀を作り，郵便・為替(かわせ)・信用状を考案した。広い世界に対する知識は，地理学や歴史学の基礎となり，大地が球であるというギリシア人の考えはアラビア人にうけつがれた。また，遊牧民の歴史的役割を強調して独特な歴史哲学を展開したイブン＝ハルドゥーン（Ibn Khaldun 1332～1406）のような歴史家も現われた。

イスラムの「外来の学問」は，交易や十字軍を通じてヨーロッパに流入した。イブン＝ルシュド（Ibn Rushd 1126～98）（ラテン名・アヴェロエス）のアリストテレス注釈，イブン＝スィーナー（Ibn Sina 980？～1037）（ラテン名・アヴィケンナ）の医学書などは，16，17世紀までヨーロッパの大学で基本文献とされた。*

イスラム教では，偶像崇拝が禁じられたので，彫刻や絵画は発達しなかったが，丸屋根と尖(せん)塔をもつイスラム寺院（モスク）建築，アラビア文字・植物・幾何文様を基調としたアラベスク模様が発達した。

ただイラン人やトルコ人の間にイスラム教がひろまるにつれて，のち

---

* アルジェブラ(Algebra)，アルコール(Alcohol)，アルカリ (Alkali)，砂糖 (Sugar) など，ヨーロッパのことばの中に，アラビア起源のものも多い。

には細密画（ミニアチュール）がさかんになった。またヨーロッパへの影響では，築城術や楽器・音楽理論が注目される。アラビア・イラン・インドなどの物語を集めたアラビアン-ナイト（千夜一夜物語）は，8世紀から16世紀にわたってまとめられていった。

イラン人の活躍　セルジュク帝国の数学者で詩人であったオマル=ハイヤーム（Umar Khaiyam ?～1123），イル汗国の歴史家で宰相も勤めたラシードゥッディーン（Rashidu'd-Din 1247ころ～1318）をはじめ，イスラム世界でイラン人の果たした文化的役割も大きかった。

サラセン　ヨーロッパ側からは，イスラム教徒をサラセン（Saracens）とよんだ。これは古代ではギリシア・ローマ人が，辺境を侵すアラビア砂漠の遊牧民をさした名称であり，中世ではキリスト教徒が，その敵としてよんだ名である。また中国では大食（タージー）とよんだ。

課　題

1. 儒教と仏教と道教はそれぞれ中国の政治とどのように結びつき変化していったか。漢代から宋代にいたる経過を調べてみよう。
2. モンゴル高原の遊牧民勢力（匈奴・突厥・ウイグル・モンゴル）の活動を次の二つの面についてまとめてみよう。
   ㋐華北地方への侵入・移住　㋑トルキスタン地方への進出
3. 中国と朝鮮と日本の政治的交渉を，次の各時代についてまとめてみよう。
   ㋐漢代　㋑魏・晋・南北朝時代　㋒隋・唐時代　㋓宋・元時代
4. イスラム教はいつ，どのような条件のもとで成立したか。それが世界の三大宗教といわれるまでに発展したのは，どのような理由にもとづくか。
5. イスラム帝国はなぜあのように急速に領土を拡大しえたか。その理由を信仰・政治・経済の面から考えてみよう。
6. 現在，アラブ諸国とよばれている地域のイスラム化の歴史を調べ，アラブ人の意識が形づくられてきた背景を，考えてみよう。



フランス封建社会の農業生活

第４章　ヨーロッパ文化圏の成立と発展

ヨーロッパは，幕末・明治いらいわが国によく知られ，理解されているが，ある意味では現在でも私たちから遠いところにある。たとえば，現実に数多くの血なまぐさい闘争をひきおこしてきたキリスト教や，ヨーロッパ人の徹底した自己防衛的または攻撃的な生活態度と，これをささえる合理主義的な考え方などは，日本人の情緒的な和の生き方，相手の気持ちをおしはかり，対立・闘争を決定的な破局にまで進めない性格とは正反対であるといえよう。

このヨーロッパが，強烈な個性をもつ独自の地域文化圏として成立したのは，12～13世紀のことであった。今日の農村や都市のほとんどは，またキリスト教世界としてのヨーロッパは，このときを本当の出発点としており，これを直接に準備したのは，７～８世紀から10～11世紀のあいだであった。本章では封建社会とその崩壊，地理上の発見，ルネサンスと宗教改革，そして17～18世紀の絶対主義時代までを一括してとり扱うが，この時期は，ヨーロッパが近代市民社会と近代国民国家の形成をめざし苦闘をつづけた数世紀であった。この苦しみの中から，近代思想，市民的合理主義が生まれる。そしてその普遍的な性格のゆえに，やがて19世紀には「ヨーロッパの世界化」がもたらされたのであった。

第1節　ヨーロッパ文化の形成

1.　ゲルマン民族の大移動

大移動前のゲルマン社会　ゲルマン民族*は，もとはスカンジナビア南部・ユトランド半島や北ドイツ沿岸地方に住んでいた，インド－ヨーロッパ語族の一派であった。彼らは，のちドイツ地方のケルト族を追って南に移り，前1世紀にカエサルがガリアを征服したころには，ライン川・ドナウ川を隔ててローマと境を接した。彼らはときには移動することもあったが，おおむね一地域に定着し，牧畜・狩猟を主とし，それに農業を加えた生活を営んでいた。ローマ帝政時代になると，彼らの一部は，個々に傭兵や小作人として，または集団的に帝国の辺境守備のため土地を与えられて，ローマ領内に移住してきた。(→p. 45)

ゲルマンの社会　古代ゲルマンの人々は数十の小国に分かれ，それぞれ国王や数人の長老をいただいていた。彼らは全員が武装して民会に参加し，重要な国事については全会一致の形式で議決したが，実際には長老が民会の運営をにぎった。長老や国王は，多数の私兵をもって国内に勢力をふるっていた。

民族大移動と建国　4世紀の後半に，アジアから西進してきた遊牧民のフン族は，突然黒海の北岸地方にいたゲルマンの**東ゴート**族を襲った。このため，**西ゴート**は375年，西南進してドナウ川を渡り，保護を求めてローマ領のバルカン地方にはいった。つづいて**ヴァンダル・フランク・ブルグンド**などが次々にライン川を越えて西ローマ領内に移動し，5世紀から6世紀にかけて，ヨーロッパ各地やアフリカ北岸に部族国家をたてた。また西ヨーロッパ北部にいたアングル族・ジュート族・サク

---

* 紀元前後のゲルマンの状態については，カエサルの「ガリア戦記」とタキトゥスの「ゲルマニア」にその記録が残っている。



ゲルマン民族の移動

ソン族は，5世紀中ごろ海を渡ってブリタニアに移住し，先住民のケルト人を追って，やがてアングロ-サクソンの七王国をたてた(イギリスの起源)。一方，5世紀の中ごろには，フン族の王アッティラ(Attila, 406ころ～453)がゲルマン諸族を従えてガリアに侵入したが，彼の病死により，その帝国はまもなく解体した。この大移動のさなかに，西ローマ帝国は，476年，最後の皇帝がゲルマン傭兵隊長オドアケル(Odoacer, 434ころ～493)によって廃され，ついに滅亡した。

2.　フランク王国

フランクの発展

5世紀に，フランク・ブルグンドなどはガリアに，西ゴートはヒスパニア（スペイン）に，ヴァンダルはアフリカ北岸に建国し，西ローマ滅亡後のイタリアには，テオドリックに率いられた東ゴートが国をたてた。しかし6世紀の中ごろ，ブルグンド王国はフランクに，ヴァンダルと東ゴート王国は東ローマ皇帝ユスティニアヌスに，それぞれ滅ぼされた。また，そのあとイタリアに南下・建国したロンバルドも，8世紀後半フランクに滅ぼされ，また西ゴートは8



フランクの兵士　当時はまだ穀物生産がふるわず，人々は豊かでなかったから，王や豪族に従う兵士の武装も，のちの封建貴族に比べてかなり粗末であった。

世紀の初め，イスラム教徒の侵入によって滅亡した。

このようにゲルマン民族のたてた部族国家の多くは，5～8世紀の間に滅亡した。彼らは故郷の地を遠く離れ，ローマの農耕社会と文化のただなかにはいったため，部族国家を発展させていく適応力をもたなかった。これに対し，ライン川下流方面にいたフランク族は，ローマ帝国辺境のライン沿岸・北ガリア地方に進出し，適度にゲルマン文化とローマ文化を融合させ，着実な発展をとげた。

フランク王国は，メロヴィング王朝のクローヴィス（Clovis 在位481～511）によって，5世紀末に統一された。彼はゲルマン諸族を討つとともに，正統派のアタナシウス派キリスト教を信仰した。当時のゲルマン諸族には，異端のアリウス派がひろまっていたから，これによって彼はローマ教会の支持をうけ，キリスト教布教の名のもとに，異端や異教を信じる他のゲルマン諸族を征服し，領土を拡大することができた。ローマ教会(教権)とフランク王国(俗権)は，これよりのち，互いにあい提携しながら発展した。

フランク社会の変化　しかしクローヴィスの死後，王国にはしばしば分裂と内乱がおこった。7～8世紀ごろから北ガリアを中心に，荘園（しょう）領主が現われ（→p. 111），荘園ごとに農民を実力で支配するようになると，この状態はいっそう強まった。

この新たな有力者の代表として事実上王国を支配したのは，王国の最高官である宮宰（マヨル-ドムス）であった。宮宰カール＝マルテル（Karl Martell 689～741）は，732年，イスラム教徒の侵入をツール・ポアチエ間の戦い（→p. 94）で防ぎ，その子ピピン（Pipin 在位751～768）はついに王位を奪ってカロリング王朝をたてた(751)。彼はローマ教会の首長である教皇の同意を得て，新王朝を権威づけ，その子カール大帝（Karl der Grosse 在位768～814）（シャルル

マーニュ Charlemagne の時代に，フランク王国は最盛期を迎えた。



カール大帝　15世紀の彫像。チューリヒの，グロスミュンスター大聖堂の地下にある。

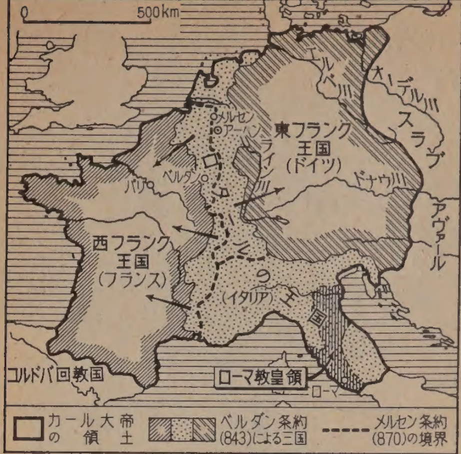
カール大帝　カールはイタリアを平定し，スペインのイスラム教徒を討ち，さらに現在のドイツ地方の大半を征服して，かつての西ローマにほぼ匹敵（ひってき）する大領域を支配した。またゲルマンの制度をローマの制度に調和させて，行政・司法・軍事上の諸改革をおこない，豪族の勢力をおさえて王権の強化と王国の統一に努力した。さらに学芸の復興に意を用い，ヨーロッパ各地から有名な学者・文人を彼の宮廷に招いた。* 800年，ローマ教皇レオ3世（Leo III，在位795～816）は，カールに皇帝の冠を授けて西ローマ帝国を再興し，こうして西ヨーロッパ世界に俗権を代表する皇帝がつくられた。一方，教皇は東ローマ皇帝から独立し，東方教会との関係を断った。(→p. 109) それは同時に，ゲルマン・ローマ・キリスト教の三要素にもとづく西ヨーロッパ世界の誕生を象徴するものであった。

独・仏・伊（い）の起源　しかし，カールの偉大な才能によっても，地方有力者の勢力を打ち破ることは，ついにできなかった。彼の死後，ベルダン条約（843）・メルセン条約（870）によってフランクは東・西フランクとイタリアに分かれ，のちにドイツ・フランス・イタリア三国が形成される源（みなもと）となった。

東フランクでは，10世紀の初めにカロリング朝の王統が絶え，これよりのち有力な諸侯が王に選ばれることになった。なかでもザクセン朝のオットー1世（Otto I，在位936～973）はすぐれた君主で，国内諸侯をおさえ，東方より侵入した

---

* 宮廷学校もひらかれ，イギリスから招かれたアルクイヌスなどがその指導に当たった。これをカロリング朝ルネサンスともいう。



フランク帝国の領土とその分裂

マジャール人やスラブ民族を撃退し，イタリアの内乱を平らげて，教皇権の伸張を助けた。962年，教皇は彼にローマ皇帝の冠を授け，皇帝の権威はフランク国王からドイツ国王に移った。ここでは封建社会の形成が遅れ，国王は当時の(→p. 111)西欧世界で最も強力な姿をとることができた。

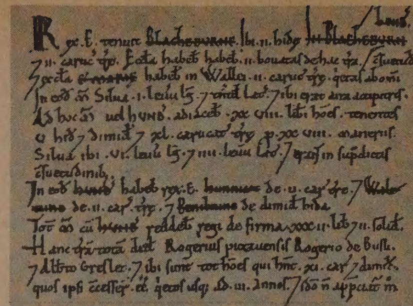
帝国はのちに神聖ローマ帝国(Holy Roman Empire)とよばれ，皇帝は理念的には他の諸君主の上に立ち，ここに皇帝権と教皇権という二つの権威を中心として，西欧世界がつくり出された。しかし別名ドイツ帝国ともよばれるように，その支配は，実際にはドイツと北イタリア以外にあまり及ばなかった。

他方，封建社会の先進地帯を形成しつつあった西フランク(フランス)では，その支配をめぐってフランク国王と地方の有力者が激しく争い，10世紀の末カロリング の王統が絶えたのち，有力者のひとりパリ伯ユーグ(Hugues)=カペー(Capet)(在位987~996)がカペー(Capet)王朝をひらいた。しかしフランスではこれ以後2世紀ほどのあいだ封建貴族が割拠し，王権はきわめて弱かった。なお中部に教皇領をもつイタリアでは，諸侯・都市の分立や神聖ローマ皇帝の干渉などによってまとまりがなく，政情は不安定であった。

3. ノルマン人の活動

ノルマンの移動　9世紀から11世紀にかけて，ノルマン(Norman)とよばれる北ゲルマン人により，ゲルマン民族最後の移動がおこなわれた。彼らはスカンジナビアからデンマーク一帯に住んでいた民族で，航海に長じ，交易とともにヨーロッパ沿岸の各地を荒らしま

わって，ヴァイキングとして恐れられた。ことに西フランクの被害は大きく，国王はやむをえずその首長をノルマンジー公に封じた。デンマーク地方の一派デーン人はイングランドにも侵入したが，アルフレッド大王（Alfred the Great 在位 871～899）に破られて，北東部地方にとどまった。さらにデンマークのクヌートは，



ドゥームズデー－ブックの一部　ウィリアム1世が全イギリスの国勢を知るために調査させた土地の統計的調査簿で，当時の社会研究の貴重な史料である。

11世紀前半に一時イングランド・デンマーク・ノルウェーの王を兼ね，北海に一大勢力をうちたてた。

1066年，ノルマンジー公ウィリアム（1027～87）は，イングランドの王位継承権を要求して，大挙この島に攻め入り，ウィリアム1世（Willam I 在位1066～87）（征服王）としてノルマン王朝をひらいた(ノルマンの征服)。ノルマンは支配者としてアングロ－サクソン人にのぞみ，* 中央集権的な政治体制と強力な王権を生み出した。ノルマンの海上活動は地中海沿岸にも及び，11世紀初めには南イタリアを征服してナポリ王国をたて，12世紀前半にはイスラム教徒を追って**両シチリア王国**（シチリア・ナポリ王国）に発展した。またスウェーデンにいたノルマンの一派は，ルーリックに率いられて9世紀にロシアにはいり，スラブ人を征服して**ノブゴロド公国**をたてた。(→p. 110)これがロシアの起源である。さらに彼らは島づたいに，アイスランド・グリーンランドや北アメリカ沿岸にまで達したといわれる。

諸民族の移動と西欧社会　このころ，フランク王国の東方にはアジア系民族が侵入し，マジャール人は**ハンガリー国**をたてた。また西アジア・北アフリカ・イベリア半島はイスラム教徒に征服された。

ノルマンをはじめこれら諸民族の活動は，さきのゲルマン大移動に対し，第二次民族移動ともよばれている。それは西ヨーロッパを孤立させ，

* 今日の英語にフランス語系の借入語が多いのは，これが一つの契機になっている。



ユスティニアヌス大帝
北伊ラベンナの聖ヴィターレ寺院に残るモザイク画(部分)。

東ヨーロッパと異なる独自の文化圏を形成する助けとなり，さらに，フランク王国の崩壊と封建社会の発達を大きく促進することとなった。

4. 東ローマ帝国とロシア

東ローマ帝国の発展　ゲルマン民族大移動の際，ローマ帝国の東半分は，その影響をほとんどうけることなく存続し，やがて首都コンスタンティノープルを中心に，政治・経済・文化の上で西ヨーロッパとは異なる世界を生み出した。これが東ローマ帝国である。*

6世紀に出たユスティニアヌス大帝(Justinianus I 在位 527~65)は，積極的に領土を広め，外には東ゴート王国やヴァンダル王国を滅ぼして，西ローマの旧領を統一しようとし，内にはローマ法を集大成して**ローマ法大全**をつくり，行政改革をおこなって，国力の回復に努めた。

帝の死後はスラブ人・ペルシア人・イスラム教徒など異民族による攻撃があいついだが，8世紀から10世紀まではよくそれを防ぎとめ，ヨーロッパの防波堤としての役目をも果たした。そして当時のヨーロッパで最も富んだ，軍事力の強い，また最も文化の高い国家となった。

ローマ法大全　帝は法学者たちに命じて歴代皇帝の勅法・学説集成・法学提要・新勅法を編纂(さん)させた。これは後世「ローマ法大全」あるいは「ユスティニアヌス法典」とよばれ，近代諸国の法典編纂に大きな影響をあたえた。

東ローマの社会と聖像崇拝論争　東ローマ初期の社会には，大所領をコロヌスに耕作させる大土地所有者と，軍役や租税を負って国家をささえた自作農とがあった。7世紀にはいると，帝国は全領土をいくつかの

---

* この国は，首都の古名ビザンティウムにちなんで，ビザンティン帝国ともよばれる。

軍管区(テマ)にわかち，それぞれ司令官のもとに，帝国から土地を分けあたえられて軍役を負う兵士をおき，軍政をおこなった。皇帝はこれによって軍事・政治・経済上の基礎をかため，西ヨーロッパにみられない皇帝専制と ギリシア正教 の首長としての立場をつくりあげた。しかし一方では，8～9世紀ごろから，大土地所有制もしだいに進展した。

ところでキリスト教会は，絵画・モザイク・彫刻などによるキリストや聖者の聖像を，布教の手段として早くから用いてきた。しかし民衆は，聖像を手段とみないで信仰の対象とする傾向があったので，知的・思索的な性格の強い小アジア地方の聖職者の間からは，聖像排斥の声がおこり，皇帝レオ3世(Leo Ⅲ 在位717～41)は，最初の聖像(偶像)禁止令を発布した(726)。* これに対し，布教のために聖像を認めたローマ教皇は，禁止令に従わず，東ローマ皇帝とローマ教皇の間には，激しい論争と対立が生じた。やがてローマ教皇がフランク国王カールを西方世界の皇帝とするに及んで，両者の関係は事実上たち切られ，キリスト教会は西方のローマ-カトリック教会と東方のギリシア正教会に分離した。**

11世紀にはいると，大所領をもつ豪族が各地に現われ，小農民や兵士を支配下におさめるにいたった。これよりのち東ローマ帝国は衰退の一途をたどり，東からはセルジュク-トルコに侵され，また十字軍以後は，コンスタンティノープルの商業的繁栄も，北イタリア都市に奪われて，1453年ついにオスマン-トルコによって滅ぼされた。(→p. 166)

ビザンティン文化　東ローマ帝国に生まれた独特の文化はビザンティン文化とよばれる。その中心地である首都コンスタンティノープルは，東西交通の要地で，東方・西方の産物の集散地として栄え，ヨーロッパ最大の人口を擁した。ビザンティン文化もそういう事情の中か

---

* これは，聖像を容認する国内修道院が，当時しだいに大土地所有者となりつつあったのをおさえるための政策でもあった。

** 聖像崇拝論争は9世紀なかばごろまでつづけられ，両教会は11世紀なかばごろ最終的に分離した。



聖ソフィア寺院　この寺院は世界の名建築といわれる。尖塔と周辺部は，後世イスラム教徒によって加えられたものである。

ら生まれたもので，ヘレニズム文化を主流として，ギリシアの古典をよく保存する一方，西アジアの文化をこれに融合させた。そして，やがて西欧にも伝えられ，ルネサンスにつながった。

聖ソフィア寺院　ビザンティン様式の建築の代表は，ユスティニアヌス大帝が再建した聖ソフィア寺院である。美術ではモザイク模様と細密画が代表的であった。

スラブ民族とロシア　ゲルマン民族の大移動にともない，スラブ民族の一部は，西に進んでポーランド人・チェック人などとなり，一部は南に進んでセルビア人・スロヴェニア人などとなった。西スラブおよび南スラブ族は，西欧文化圏やビザンティン文化圏と接触して強い影響をうけた。これに対して東に移動した東スラブ族はロシア人となり，スラブ族のうちで最も有力となった。彼らはやがて西欧とは著しく異なった社会と国家を生み出すにいたり，最初はノルマンの支配の下にノブゴロド公国が，ついで9世紀末からは，キエフ公国がその中心となった。10世紀末のウラディミル1世の時代には，ギリシア正教が国教と定められ，ビザンティン文化が導き入れられた。

双頭の鷲



ロシアとギリシア正教　のち，15世紀後半，モスクワ大公イヴァン3世(→p. 154)は，東ローマ帝国最後の皇帝の姪と結婚し，帝国滅亡後のギリシア正教首長の後継者をもって自任した。皇帝の紋章であった双頭の鷲はロシア皇帝の紋章となり，モスクワは「第三のローマ」として，クレムリンの教会堂はギリシア正教の総本山（府主教庁）となった。

第2節　西ヨーロッパの封建社会

1.　封建社会のしくみ

西ヨーロッパの成立と封建社会　フランク王国の崩壊ののち，11～13世紀には北フランスや西ドイツのライン川流域などの先進地帯を中心に，本格的な農業社会が成立した。それとともに開墾運動，人口の増大，都市の発生など，人々の経済活動は急激に活発となり，西ヨーロッパはここにはじめて独自の個性をもつ文化圏として誕生した。

封建社会は，農業経済にもとづく西ヨーロッパ独自の新しい政治と社会のしくみであった。それは，封建貴族が各地に独立割拠して，それぞれ封建領主として領内の農民を支配し保護するとともに，互いに封土をなかだちとして主君・臣下の封建的主従関係を結んだ社会であった。

しかし主君と臣下の結びつきは必ずしも強くなく，封建貴族の間には戦争が絶えなかった。*



封建社会の騎士と国王　12世紀の石彫で，最古の騎士像の一つ。右端は国王。

荘園の形成　古代末期から奴隷使用の大農場経営がすたれたあと，西ヨーロッパの先進地帯では，7～8世紀ごろから**荘園**が形成され，世俗の有力者や教会・修道院などが領主となり，近隣の農民を支配し始めた。

当時の荘園は，自分の土地（保有地）を耕作する農民（保有農）が，領主の保護を

* この主従関係のしくみは封建制とよばれる。イギリスをのぞき，臣下がふたり以上の主君をとる場合が多く，最高の主君である国王も実力の点ではふるわなかった。



封建社会の農耕風景　12～13世紀に，牛をたてにつないですきを引かせる方法が発達した（14世紀イギリスの祈禱書）。

うける代わりに，領主の土地（直営地）で耕作や雑用などの賦役に使われる形をとった。* 領主は直営地からの収穫物で生活し，国家の役人は，荘園に対して徴税や裁判をおこなうことができなかった。

農業革命と封建領主

これに対し12～13世紀には農業革命が進行し，三圃制**その他の技術革新が農村に普及して，*** 西ヨーロッパの農業生産は著しく高められた。それとともに農村は，生産の上でまとまりをもった共同体となり，村民は種まき，収穫，放牧その他，農業生活の全般にわたって共同体の規制に服した。これに応じて荘園領主の中には，いくつかの村を含むまとまった領域を，強力に支配する者が現われた。このような領主が代表的な**封建領主**（封建貴族）である。その他の小荘園領主は，騎士として彼に仕えた。

村と城

封建貴族（封建領主）は堅固な城を構え，武力によって村人すべてを支配するとともに，彼らを外敵から防ぎ，村の治安と生産の秩序を守った。そのために，村人にさまざまの賦役や生産物年貢を要求し，また彼らが入会地として共同で利用する牧草地や森林の支配権をにぎった。さらに水車・パン焼きかまど・葡萄しぼり器などを独占して村人に使用料を払わせたり，のちには領内を通行し市をひ

---

* このような形の荘園は，古典荘園とよばれる。

** 耕地は秋畑・春畑・休耕地の三つに分かれ，一つの畑はこの三つを順ぐりにくり返し，農民は共同で各畑を耕作した。

*** 水車の普及，農具を牛馬にとりつける方法の発達，蹄鉄の使用，車輪を備えた鉄製のすき（重く湿った肥沃な土を掘りおこせる）の登場など。

らく商人から税を取り立てたりした。一方，直営地と直営地賦役はしだいに縮少された。

農奴　封建社会の農民は，農奴ともよばれる。近代市民が国家の保護と支配をうけるのに対し，農奴は領主個人の保護と支配をうけ，そのもとで，自ら土地（保有地）や農具・種子・家畜などを保有して生産に従事する，自作農であった。



封建社会での村の概念図　耕地は多数の細長い地条からなり，休耕地は共同放牧に使われた。

2.　カトリック教会の権威

ローマ教会の発展　封建社会の成立とともに，西ヨーロッパ世界は本格的にキリスト教世界となり，ローマ-カトリック教会の権威は精神界を支配するにいたった。

ローマ教会は，古代末期のキリスト教五本山*の一つであったが，6世紀ごろから積極的にゲルマン人の教化に努め，やがて東方のコンスタンティノープル教会に対して，西方教会を代表するにいたった。教皇はローマ教会を創設したといわれる使徒ペテロの後継者として，西欧世界の司教たちの上にたち，8世紀なかばごろには教皇領**も設けられ，8～9世紀の聖像崇拝論争をきっかけとして，東ローマ皇帝と東方教会から独立した。(→p. 109)

教皇の下には，大司教・司教・司祭など聖職者の階層制が生じたが，教皇をはじめ司教・修道院長などの高位聖職者は，世俗諸侯と同様に，

---

*　ローマ・コンスタンティノープル・アレクサンドリア・アンティオキア・エルサレムの5教会。このうちあとの三者は，7世紀いらいイスラム教徒の手におちた。

**　フランク王国カロリング朝初代の国王ピピンは754年教皇にラベンナを献じた（ピピンの寄進）。これが，教皇領の始まりとされている（→p. 104）。



カノッサ城のハインリヒ4世　ハインリヒ4世(中央)は，カノッサ城門前の雪中に3日3晩たたずんで教皇へのとりなしを頼み，ようやく許されたといわれる。

所領内の民衆を支配する封建領主・封建貴族であった（聖界諸侯）。

教皇の権威　10〜11世紀にフランス南東部のベネディクト派クリュニー修道院は，修道院の改革運動をおこしたが，さらに教皇グレゴリウス7世（Gregorius VII 在位1073〜85）は，教会全体に及ぶ改革をおこない，聖職売買や聖職者の結婚を禁止した。彼はまた国王が聖職（司教・修道院長職）の叙任権をもつことに反対して，神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世（Heinrich IV 在位 1056〜1106）と争い，皇帝を破門*した。これをきっかけにドイツ国内の諸侯は反乱の動きをみせ，驚いたハインリヒは，北イタリアのカノッサで教皇に謝罪し（カノッサの屈辱，1077），その後ウォルムスの協約（1122）で，叙任権闘争はいちおうおさまった。

グレゴリウス7世の改革いらい，教皇の権威は大いに高まり，カトリック教会は拡大発展し，キリスト教はヨーロッパの精神的土壌（どじょう）を形づくった。インノケンティウス3世（Innocentius III 在位1198〜1216）のころ，教皇権は絶頂に達したとされる。イギリス王ジョン（→p. 124）は，大司教任命をめぐって彼に破門され，イギリス全土を封土としてやっと許されるありさまであった。

修道院運動　はじめオリエントにおこった修道院生活は，隠遁（いんとん）して禁欲苦行のもとに，ひたすら瞑想（めい）にふけったが，イタリアのベネディクトゥス（Benedictus 480ころ〜543）に始まる西ヨーロッパの修道院は，社会的・活動的であった。6世紀前半，彼はカシノ山に修道院を創設し，「祈り働け」の精神

* 教会法により，いっさいのキリスト教徒の世界からしめだされることで，国王といえども破門されれば，臣下は彼に服従の義務がないとされた。

で，学問(写本・読書)と労働(農耕・開墾・手工業) を重んじ，清貧・貞潔・服従のもとに，修道士を戒律にもとづく規則正しい共同生活に従わせた。

さきに述べたクリュニー修道院の改革運動はこの精神にもとづいたものであり，さらに12世紀のシトー派修道会，13世紀前半のアッシジ(イタリア)のフランチェスコ(St. Francesco 1182〜1226)とスペインのドミニクス(St. Dominicus 1170ころ〜1221)による托鉢(たくはつ)修道会なども，修道院の世俗化に対する改革として創設された。



ドミニクス　これは彼の肖像のうち，最も信ぴょう性の高いものである。

当時の修道院は学問研究の一中心であり，手写本を通じてギリシア・ローマの文献を伝え，西欧文化の形成に大きな役割を果たした。

3. 十 字 軍

商品経済と都市の発生　西ヨーロッパの封建社会では，農業生産の向上にともなって余剰の農産物が生まれ，手工業製品と交換・売買されるようになった。こうして農村の中から手工業者が現われ，さらに商人の動きも活発となり，**商品経済**が始まった。

商品の運搬に便利な地点や，地方的な特産物を生産する中心地には，やがて商人と手工業者が多く集まって定住するようになり，**都市**が発生した。都市には定期的に市(いち)が立ち，手工業製品は周辺の農村からの農産物（手工業原料や食料）と交換・売買された。大諸侯や国王は，領内の商工業の安全と自由を守るかわりに，市民や外来商人から市場税・通行税などを徴収して豊かになり，権力を強めた。

イタリアの都市　都市のうち最も早く発達したのは，地中海を交通路とする東西貿易に絶好の位置を占めた **ベネチア・ジェノバ・ピサ**などの北イタリア諸都市であった。これらの都市は，富裕な西欧の諸侯を目あてに，東方から



十字軍から帰った兵士とその妻　胸に大きな十字の徽章をつけ，敬虔な雰囲気が漂う(12世紀初め)。

胡椒・肉桂などの香辛料をはじめ，絹織物・宝石など珍奇なぜいたく品を運び，中継貿易・遠隔地貿易によって繁栄した。十字軍は，このような事情を一つの背景として始まった。

十　字　軍

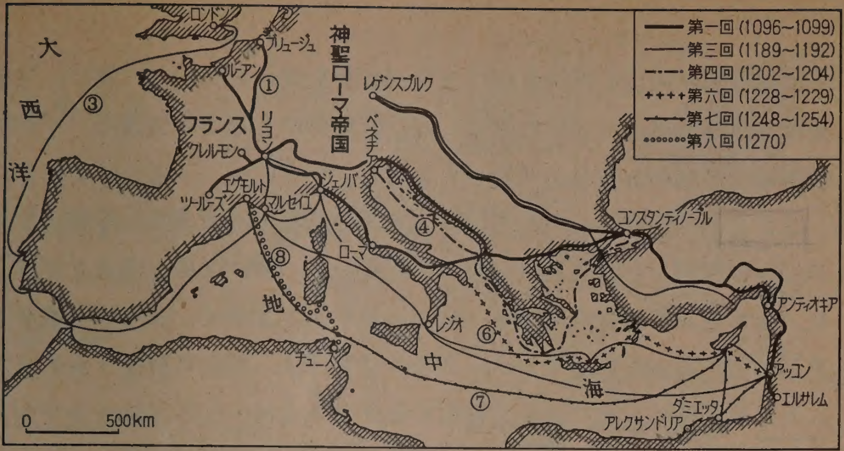
封建社会が生まれる11世紀ごろ，西ヨーロッパのキリスト教徒の間には，キリストの墳墓の地といわれる聖地エルサレムに巡礼して罪のあがないを得ようとする習慣が生じた。聖地は，すでに7世紀前半いらいイスラム国家の支配下におかれていたが，11世紀後半からは代わってセルジュク－トルコが西アジアの支配者となり，東ローマ帝国領の小アジア地方にも攻撃を加えた。こうしてローマ教皇と対立していた東ローマ皇帝も，ついに教皇に助けを求めた。

教皇ウルバヌス2世(Urbanus II，在位 1088～99)は，これを機会に東西両教会を統一しようとして，1095年フランスのクレルモンに公会議をひらき，西欧の諸侯や国王に聖地を回復せよと号令し，広く人々によびかけた。一方，封建社会の成立により力を増した封建諸侯たちも対外発展を望み，東方に植民定住したり，東方から数々の財宝を持ち帰ろうとした。さらに北イタリア諸都市は，東ローマ帝国領内の商業圏を支配し，地中海東部沿岸(レバント)地方に貿易の根拠地を確立しようと考えた。三者の意図は，宗教的雰囲気の中に一つに包みこまれ，聖戦を旗印として**十字軍**が結成された。

十字軍は，11世紀から13世紀の後半まで(1096～1270)，8回*おこなわれた。第1回十字軍は，長い労苦の末，聖地を回復し，**エルサレム王国**をたてた。北イタリアの諸都市は十字軍に船舶を貸した功により，この

---

* 数え方によっては7回ともなる。



十字軍の進路

地と貿易をおこなう特権を得た。しかしエジプトのサラディン(→p. 96)に率いられたトルコ人は，まもなくエルサレム王国を滅ぼした。12世紀末の第3回十字軍*は，このためにおこされたが，聖地回復の目的を果たせなかった。第4回十字軍は，船主のベネチア商人にあやつられて，海路コンスタンティノープルをおとしいれ，ここにラテン帝国をたてた(1204)。東ローマ帝国は一時滅亡**し，ベネチアと十字軍将兵たちは，分捕品(ぶんどり)や占領地を分けあった。この遠征は，十字軍をささえた現実的な一面をよく現わしている。第6回十字軍は聖地を再び回復したが長つづきせず，第7回・第8回十字軍は敵の本拠エジプトをついたが，成功しなかった。

騎士団の活躍　この時代に，聖地の守備や病人の巡礼を看護するためつくられたヨハネ・テンプルの宗教騎士団は，のちヨーロッパで活動し，ドイツ騎士団は13～14世紀にバルト海沿岸の開拓と教化にあたった。

十字軍の影響　十字軍はついに失敗に終わったが，西ヨーロッパの経済的・文化的発展に大きな影響を与えた。経済上では，遠隔地商業，とくに東方貿易がさかんになった。北イタリア諸都市は，

* 第3回十字軍の指導者は，神聖ローマ皇帝フリードリヒ1世，フランス王フィリップ2世，イギリス王リチャード1世(獅子心王)であったが，内輪争いのため目的を達しなかった。

** 東ローマ帝国は1261年再建された。なお1212年にはフランスやドイツの少年少女たちによって，子ども十字軍がおこされたが，その末路は悲惨な運命をたどった。

十字軍将兵を輸送した帰り船で東方の商品を西ヨーロッパに運び，地中海貿易圏を独占して大いに繁栄した。貨幣経済と都市の発達は，やがて封建社会の崩壊をうながす原因となった。

文化上では，東ローマやイスラム世界の高度に洗練された学問・文物が地中海貿易とともに西ヨーロッパにはいり，西欧文明の向上を促進した。イスラム系の哲学・医学・化学・数学・天文学や，イスラム教徒を通じて伝えられたアリストテレスの哲学などは，西欧の哲学・自然科学に大きく貢献し，北イタリア都市の繁栄とともに，やがてはルネサンスへの道をひらくこととなった。

4. 都 市 の 発 達

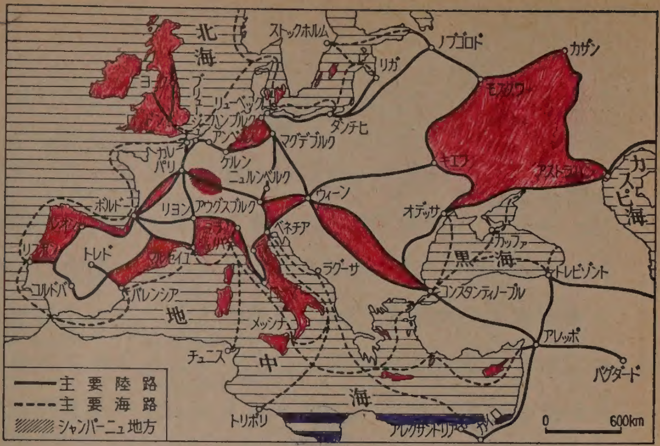
貿易と交通　十字軍を通じて，北イタリア諸都市が地中海貿易圏を支配したのに応じて，ヨーロッパ北部にも，フランドル地方や北ドイツ地方の諸都市を中心に，北方貿易圏が形成された。中でも，フランドルのブリュージュ・ガンなどの諸都市は，毛織物の生産によって大いに繁栄した。一方，リューベック・ハンブルクなど，主としてエルベ川以東の北ドイツ諸都市は，海産物・木材・穀物・毛皮などをとり扱った。南北二つの貿易圏を結ぶフランス北東部のシャンパーニュ地方には，12～13世紀に定期市がひらかれて繁栄した。また，商品の運ばれた陸路や河川沿いには，数多くの都市がおこった。*

14～15世紀になると，国際的商取引の中心は，ブリュージュやアンベルスに移り，これと同時にイタリア商人は，羅針盤を利用して海路により直接北ヨーロッパにおもむくようになった。ルネサンス文化の中心となったフィレンツェが台頭したのも，このころのことである。

---

* フランスでは，パリ・ルーアン・リヨン・マルセイユ・ボルドーなど，ドイツではイタリアに通じる道にアウグスブルク・ニュルンベルク，ライン川沿岸にケルン・マインツ・ストラスブールが栄え，東方ではノブゴロド・キエフ，イギリスではロンドン・ヨークなどが発達した。

都市生活　商人や手工業者は，職業別にギルドとよばれる同業組合をつくった。手工業者には，親方のもとに技術をみがく職人と見習いの徒弟があり，親方だけがギルドに加入できた。* 手工業ギルドは，製品の品質・規格・価格・労働時間などについてきびしくとりしまった。また自由競争や個々の注文取引は禁止され，手工業者が農村で生産したり，非組合員が生産したりすることも許されなかった。このように手工業者は，一定の制限と平等の原則のもとに共同して利益を守り，生計の向上をはかった。



12～15世紀のおもな交通路

ギルドを支配し，市政の実権をにぎったのはおもに大商人で，彼らは原料の仕入れや製品の販売にあたり，遠隔地貿易で大きな利潤を得ていた。一方，手工業者は，商品生産が始められたばかりであったから，経済的・政治的に弱い立場におかれていた。

都市の人口　都市の周囲には，商工業の自由と平和を守るために，堅固な城壁がめぐらされた。都市の人口は，12世紀末のベネチア・ミラノ・パリで10万ぐらい，13世紀のロンドンで4万ぐらいであったが，これらは例外的な大きさで，普通は5千から1万ぐらいであった。

* 手工業者のギルドは，クラフト－ギルド，ツンフトともよばれる。13～14世紀には手工業者の代表もしだいに市政に加わるようになった。フランドルやドイツの諸都市，フィレンツェなどでは，そのための闘争が激しくおこなわれた（ツンフト闘争）。

5. キリスト教文化

スコラ哲学 西ヨーロッパ封建社会において，文化の基調となったのは，キリスト教である。当時の学問はスコラ哲学とよばれ，9世紀から14世紀ごろにかけて，神学を中心に発展をとげ*，キリスト教をはじめて理論づけ，体系化した。スコラ哲学は，はじめアウグスティヌスの思想をとり入れ，アンセルムス（Anselmus 1033～1109）やアベラール（Pierre Abélard 1079～1142）によって発展したが，13世紀にはいり，アリストテレスの諸著作が知られるに及んで，最盛期を迎えた。なかでも南イタリアのトマス＝アクイナス（Thomas Aquinas 1225ごろ～74）は，「神学大全」を著わし，スコラ哲学を大成した。

実在論と名目論 スコラ哲学者の間では，真の実在は抽象的な概念（普遍）であるか（実在論），個物であるか（名目論）という問題をめぐる「普遍論争」が最も論議された。名目論は12世紀ごろからアベラールによって唱えられ，しだいに優勢となり，論争は活発となったが，14世紀にはウィリアム＝オヴ＝オッカム（William of Occam 1300ころ～49ころ）がでて極端な名目論を唱えるにいたった。またロージャ＝ベーコン（Roger Bacon 1214ころ～94）はスコラ哲学のうちにあって，自然哲学（物理学）の研究に数学を重視し，また観察と実験による経験を尊重した。スコラ哲学は，教義の体系化や論争を通じ，ヨーロッパの近代科学・近代思想の形成に大きな役割を果たした。

大　　学 学問の中心は，はじめ教会や修道院であったが，12世紀ごろから貨幣経済が始まり，人と物の交流がしだいに活発になるとともに，各地で大学**が設立された。封建社会の学問は，すべてラテン語でおこなわれ，大学が学問・思想をヨーロッパ全体にひろめた功績は大きい。学部は7教養科目***を含む哲学と，神学・法学・医学の4つ

---

* ここからスコラ哲学は「神学の婢女（はしため）」といわれた。

** ユニヴァーシティ（University）は，同業団体（ギルド）を示すことばで，大学では教授や学生の組合を意味した。

*** 論理学・文法・修辞学・算術・幾何・天文・音楽の7科目で，これらはヨーロッパの大学の伝統的な教養科目となった。

があり，神学のパリ大学と法学のボローニャ大学は，最も歴史が古く有名であった。このほかオックスフォード大学や医学のサレルノ大学などがあり，15世紀の末までに約80の大学が生まれた。



12～15世紀のおもな大学分布図

文　　学　文学にもキリスト教的な倫理が支配したが，学問がラテン語であったのに対し，普通，俗語で人々の間に語りつがれ，おもな題材は封建社会の貴族・騎士であった。*

騎士道は，もともと戦場でのきびしい倫理として生まれたもので，「ローランの歌」(フランス)など，カール大帝伝説を中心とした武勲詩がそれをよく現わしている。ところが封建社会の崩壊期にはいり，騎士が衰える一方，国王や大諸侯が大きな権力をもつようになると，彼らの宮廷を中心に，貴婦人への尊敬，教養と社交術など新しい宮廷儀礼が生まれ，騎士道が完成された。かつてアングロサクソン人に征服されたケルト人が生み出したアーサー王伝説は，数々の**円卓騎士物語**に発展し，騎士道文学の代表となった。これらは12世紀ごろから南フランスのトルバドゥールその他の吟遊詩人により，宮廷で吟じられた。

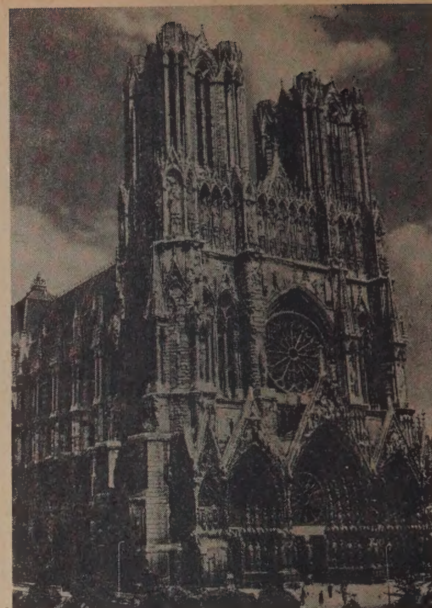
美　　術　キリスト教美術の中心は教会・修道院の建築であった。11～12世紀には西ヨーロッパ各地に**ロマネスク様式**がひろまり，また13世紀には，ヨーロッパ北部に北フランスを中心として，**ゴシック様式**が発達した。

ロマネスクは西ヨーロッパ最初の独自な建築様式で，前代の古代的・

* 「ニーベルンゲンの歌」(ドイツ) などの最古の民族叙事詩には，まだ異教的な精神が濃厚で，ゲルマン的な勇気と忍耐が，あざやかに描き出されている。



ベズレーのキリスト　フランス東部，ブルゴーニュ地方の修道院にあり，ロマネスク彫刻の傑作（1120年ころ）。



ランスの大聖堂　ランスはパリ北東165km，大聖堂は13世紀ゴシックの傑作で，フランス国王は代々ここで戴冠式をおこなった。

東方的な模倣*から脱け出し，諸要素を単純化しながら豊かな表現をとった。太い柱や広い壁が重い石の穹窿天井をささえ，荘重・重厚で，水平感をもった。フランスのベズレーの修道院とその彫刻，ポアチエの教会堂，ドイツのシュパイエル大聖堂などが有名である。

これに対しゴシックは，尖頭アーチと穹窿天井によって垂直感を強調し，パリのノートルーダーム，北フランスのシャルトル，サン－ドニ，アミアン，ランス，ドイツのケルン，スペインのブルゴスの各大聖堂など(→口絵)，ヨーロッパ各地に冷たく澄みきった明るさと知性を生み出した。**数多くの大きく，細長い窓には，青，赤，黄などの色濃いステンドグラスがはめ込まれ，聖堂の内部に神秘的で敬虔な雰囲気をつくり出した。

* ロマネスクに先だつバシリカ建築は，ローマ時代に法廷や商業取引に使用された公共建築物（バシリカ）の建築様式を教会堂建築にとり入れたものといわれる。

** ゴシック建築は，当時の西ヨーロッパに噴出した力強い精神的エネルギー，都市の経済力，それに人々のあつい信仰の中から生まれ出たものであった。

第3節　封建社会の崩壊

1.　都市民と国王

都市の自由と国王の中央集権

商品の生産と流通がさかんとなり，経済的活動の範囲がひろがるにつれて，都市民は，封建諸侯に対抗して，新たに国王と結びその支配下にはいった。こうして14世紀以降，イギリス・フランスでは，国王が経済力・軍事力を強化して中央集権化を推し進めた。一方，都市民は自由身分を享受し*，国王に租税その他の義務を負う代わりにその強い保護をうけ，近代に向かって力強く成長した。

これに対しドイツやイタリアでは，商品生産の発展が地方ごとにばらばらだったり，都市の発達が商品生産よりも中継貿易に大きくたよったりしたために，国内統一を生み出す経済的基盤がつくられず，都市と王権の提携はみられなかった。このため，リューベック・ハンブルク・ブレーメンその他の北ドイツ諸都市は，自衛の手段として14世紀にハンザ同盟をつくり**，ベネチア・ジェノバ・フィレンツェなどの北イタリア諸都市は，さらに進んで都市貴族が支配する都市国家の姿をとった。このようにしてドイツ・イタリアの諸都市は，15～16世紀まで繁栄し，アウグスブルクのフッガー家(Fugger)やフィレンツェのメディチ家(Medici)のような大富豪も現われたが，ともに近代社会を生み出す主体とはなりえなかった。

封建社会の崩壊

14～15世紀のイギリス・フランスでは，直臣にしか命令が及ばない非能率的な封建軍隊に代わって，傭(よう)兵軍隊が使用されるようになった。また弓の改良や火器の使用で，歩兵がしだいに重要になってきたことも手伝って，封建諸侯や騎士は没落の途

* 「都市の空気は自由にする」といわれた。

** 加盟都市は一時90市にのぼった。



ワット＝タイラーの乱　馬上の人は反乱農民に説教するジョン＝ボール。

をたどった。*

農村では，都市の発達によって農産物の需要と生産が増す一方，領主権が弱まったから，農奴の賦役や年貢(ぐ)は廃止または軽減され，** 農民の生活は向上した。彼らは，ペスト(黒死病)の大流行(1348)，**百年戦争**による重い税金や兵士の村荒らしなど，社会的な混乱のなかでいっそうの自由を要求し，しばしば富裕な農民を先頭に反乱をおこした。フランスのジャクリーの乱(1358)やイギリスの**ワット＝タイラーの乱***(1381)などがそれで，いずれも国王や諸侯に鎮圧されたが，やはり時代の大きな変化を示すものであった。

2.　英仏の中央集権化と教皇権の衰退

イギリス議会の起源　イギリスでは，12世紀の後半にフランスのアンジュー伯がヘンリー2世(Henry II 在位1154～89)としてプランタジネット(Plantagenet)王朝(1154～1399)をひらいてから，他国にさきがけ貨幣経済の進展と強力な中央集権化がみられた。これは，そのころから良質の羊毛が多量に生産され，フランドル諸都市その他にさかんに輸出されたためであった。

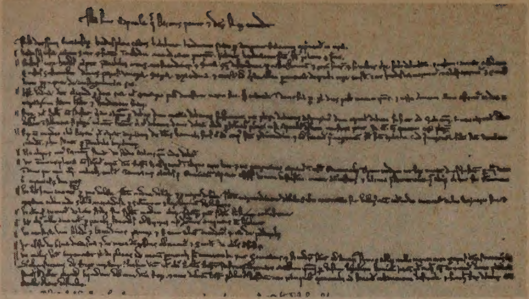
13世紀の初め国王ジョン(John the Lackland 在位1199～1216)は教皇から破門されたうえ，(→p. 114)フランス西半部に保有した広大な領土を失い，王室の財政も苦しくなって，多額の税を課した。これに対し，諸侯や都市は結束して反抗し，王に迫って1215年**マグナ＝カルタ**(Magna Carta 大憲章)を承認させた。

* イギリスの騎士は早くから軍事的性格を失い，地主層(郷紳層(ジェントリー))を形づくった。

** イギリスでは，年貢の金納化がいち早く進められた(14世紀後半)。

*** このとき，ウィクリフ派(→p. 128)のジョン＝ボールは農民たちに「アダムが耕し，イヴが紡いだとき，だれが領主だったか」と説いた。

マグナ－カルタ　これは，王権を制限し，封建貴族や都市の特権を認めさせたもので，課税には貴族の承認を必要とすること，自由人は国法や正しい手つづきによらずには逮捕・監禁されないこと，商人の自由通商を保護し都市の特権を尊重することなどを規定し，イギリス最初の憲章として，後世に大きな意義をもつにいたった。



マグナ－カルタ

さらに次王ヘンリー3世（Henry Ⅲ　在位1216～72）がマグナ－カルタを無視する態度に出ると，シモン=ド=モンフォール（Simon de Montfort　1208ころ～65）は貴族やロンドン市民の助力を得て，武力で国王を破り，1265年国内の支持を確保するため，大貴族・高位聖職者による封建会議に，州の代表（郷紳）と都市の代表をも参加させた。これがイギリス議会（パーラメント）(Parliament)の起源である。*

その後，エドワード1世の治世に模範議会が開かれたが(1295)，地方行政や財政の面で王権をささえつつ，めざましく成長した郷紳層や都市に対し，大貴族・高位聖職者は利害の相違を感じるようになった。そのため，エドワード3世（Edward Ⅲ　在位1327～77）の治世を通じ，議会は上院(貴族院)と下院（庶民院）に分かれ，二院制となった。下院は国王による課税要求の承認のほか，14世紀後半から，しだいに立法の機能をも獲得するようになった。**

フランス王権の伸張　ヨーロッパで最も封建社会が発達したフランスでは，フィリップ2世（PhilippeⅡ　在位 1180～1223）が，フランス国内にあったイギリス王ジョンの所領を多く没収して王領を拡大した。またこの時代に南フランスのアルビ地方にひろまったアルビジョア派***の異端討伐運動の結果，ルイ（Louis　在位1226～70）

*　州代表と都市代表は合わせて庶民（コモンズ）とよばれた。

**　15世紀には議会内での討論の自由や身体の自由などの原則が現われ，16世紀にはいると，下院が自ら「法律案（ビル）」を作成するようになった。

***　十字軍とともに東方からはいったマニ教の影響を強くうけ，善(神)と悪(悪魔)の二元主義をとったキリスト教思想。カタリ派ともいう。

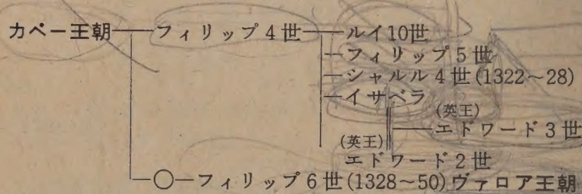
9世(IX)(聖ルイ王)の時代に同地方の王領化が進められた。さらにフィリップ4世(Philippe IV 在位1285～1314)の時代になると，フランスははじめて国家としてのまとまりをもつようになった。王は国内聖職者への課税問題をきっかけに教皇ボニファティウス8世(Bonifatius VIII 在位1294～1303)と争い，1302年に**三部会**をひらいて聖俗大諸侯・都市など，国内有力者の支持を得たうえで，教皇をローマ郊外に捕えた。

身分制議会　このころのフランス三部会やイギリス議会は，普通，身分制議会とよばれる。これに出席したのは特権身分であり，議会のおもな権限は国王課税の協賛にあった。今や強大となりつつあった国王は，身分制議会を通じて財政的・政治的な統一を進めようとし*，他方弱まりつつあった聖俗諸侯は議会に結束し，国王課税の承認と引きかえに，旧来の特権を守ろうとした。さらに新興の市民勢力は，議会によって王権との結びつきを強め，発展をはかった。身分制議会は，絶対王権の確立とともに衰えた。

英・仏の百年戦争

中央集権化しつつあった英・仏の王権は，フランドル地方とギュイエンヌ地方（南西フランス）の支配をめぐって対立した。毛織物生産の原毛をイギリスに頼るフランドル諸都市は親英的であり，また英領ギュイエンヌ地方の首府ボルドーは，イギリスへの葡萄(ぶどう)酒積出港として重要であった。1328年フランスのカペー王朝が断絶して，傍系の**ヴァロア**(Valois)**王朝**(1328～1589)があとをつぐと，英王エドワード3世は仏王位の継承権を主張し，これを口実としてフランスに出兵し，**百年戦争**(1337～1453)が始まった。

はじめフランス国王側は，イギリスのエドワード黒太子の活躍などによって大敗し，国内には農民や市民の暴動があいついだ。15世紀にはいり，有力



---

* フランス国王は，全国三部会のほか，14～15世紀に各地で多くの地方三部会をひらき，国内各地の統一を推し進めた。

な封建貴族の一派がイギリス側と結ぶにいたって，事態はさらに深刻となった。このとき少女ジャンヌ=ダルク（Jeanne d'Arc 1412～31）が現われ，熱烈な信仰と戦闘精神によってフランス国王側の将兵をふるい立たせ，オルレアンの囲みをとき，イギリス側を破って国王シャルル7世（Charles VII 位在1422～61）の戴冠式を挙行させた(1429)。ジャンヌはやがて敵軍に捕われ，処刑されたが，これをきっかけにフランス人の間に国民意識が芽ばえ，敵対していた国内貴族は結束してイギリスに大勝し，ほぼフランス全土を国王の支配下に回復した。



ジャンヌ=ダルク　1429年，パリ高等法院記録の余白に描かれたもの。

絶対主義への道　百年戦争を通じて，フランスの諸侯・騎士勢力は著しく衰えた。シャルル7世は大商人を重用して財政を整え，傭兵常備軍の創設や官僚制の整備をおこない，さらに国内の教会をその支配下においた。こうして15世紀末，フランスは絶対主義国家に向かって第一歩をふみ出すこととなった。

イギリスでは，百年戦争ののち，ランカスター（Lancaster）・ヨーク（York）両家の間で，王位の争奪をめぐってばら戦争*(1455～85)とよばれる内乱がおこり，国内の諸侯すべてが，これにまきこまれた。その結果，諸侯の多くは衰えたり断絶したりして，1485年テューダー家のヘンリー7世（Henry VII 在位1485～1509）が内乱を収めて王位についた時，もはや王権を脅かす勢力はなかった。彼は商工業を奨励して市民勢力を育て，輸出入関税やヨーク派諸侯領没収により豊かな王室財政をうちたてた。さらに，星室庁裁判所**の前身を強化して，王に対する反抗をおさえ，混乱の拾収につとめた。こうしてイギリスの絶対主義は，テューダー(Tudor)王朝とともに始まった。

* この名称は，ランカスター家が赤ばら，ヨーク家が白ばらの徽章をつけて戦ったからとされている。

** 国王直属の裁判所で，後に，天井の装飾から星室庁(Court of Star Chamber)とよばれた。

教皇権の衰退　国王はイギリスやフランスのように封建貴族をおさえて王権を強大化すると，もはや教皇の権威を恐れる必要はなくなった。国内教会の支配権は教皇から国王へ移り，教皇権は衰退に向かった。

王権に対する教皇権の優位を主張したボニファティウス８世は，14世紀の初めにフランス国王と争ってとりこにされ，教皇庁はその後約70年の間（1309～77）南フランスのアビニョン(Avignon)に移され,* フランス国王の支配下におかれた。さらにローマ帰還後は，教皇がローマとアビニョンの二か所に立って互いに争った（教会の大分裂，1378～1417)。

それとともに，各地で教会改革の声がしだいに高まった。オックスフォード大学のウィクリフ（Wycliffe，1320ころ～84）は，聖職者の腐敗・堕落を激しく攻撃し，また教皇に対するイギリスの宗教的独立を主張した。彼は教皇から異端を宣せられたが，その教説はボヘミアのフス（Huss，1369ころ～1415）をはじめ人々に大きな影響を与えた。** また聖書を英語に翻訳して，キリスト教を民衆に深く浸透させた。

15世紀前半になると，教会の主導権は教皇の手を離れて公会議（宗教会議）に移った。**コンスタンツの公会議**（1414～18）ではローマ教皇の正統性が確認され，また異端者フスを処刑して教会の再建統一をはかったが，公会議は背後で世俗の諸権力にあやつられ，結果は教皇権をますます弱めるだけであった。

3. その他の諸国

スペイン・ポルトガル　8世紀初めごろからイスラム教徒に支配されていたイベリア半島では，キリスト教徒がしだいに北部から南進してイスラム教徒を圧迫し，11～12世紀にカスティラ・アラゴンなどの諸小

* これをヘブライの故事にたとえて「教皇のバビロン捕囚」という。

** ウィクリフやフスの教説は，イギリスのワット＝タイラーの乱や，チェコ人のドイツ人に対する反感にもとづくフス戦争(1419～36)と深く結びついて，封建社会を大きく動揺させ，また宗教改革への道をひらくにいたった。

国をおこした。1479年カスティラとアラゴンは合併してスペイン王国をつくった。*その王フェルナンド(Fernando)(在位1479～1516)は，1492年イスラム教徒の最後の拠点グラナダをおとしいれて半島から追い出し，統一を完成した。一方ポルトガルは12世紀にカスティラから独立して別の王国をつくり，15世紀に統一国家に成長した。



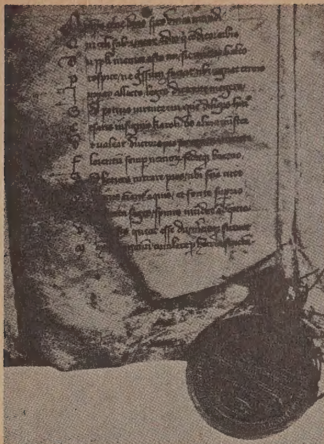
15世紀のヨーロッパ

ドイツ　ドイツでは，神聖ローマ皇帝と教皇との叙任権闘争ののち，12～13世紀を通じて，独立的な封建貴族層が台頭し，帝国は分裂に向かった。以後，皇帝権は弱まり，皇帝は眼を本国からイタリア経営に転じてローマ帝国再現の夢を追い，13世紀には，20年近くも皇帝のいない**大空位時代**(1256～73)が現われた。1356年皇帝カール4世(Karl Ⅳ)(在位1347～78)は**金印勅書**を発布して，4人の諸侯と3人の大司教を選挙侯とし，国王選挙の権限や所領内での主権を確認した。15世紀からはオーストリアに領土をもつハプスブルク(Habsburg)家が代々皇帝に選ばれたが，聖俗諸侯や都市などはそれぞれ各地に独立し，ドイツとしては統一がないまま，領邦ごとにいくつかの国家が形成されることとなった。** なおエルベ川以東では，12世紀から14世紀にかけてドイツの封建貴族により大規模な**東方植民**がおこなわれ，ブランデンブルク辺境伯領や**ドイツ騎士団領**が形成された。

---

* カスティラ女王イサベルとアラゴン王フェルナンド(両者は1469年に結婚)は，この年，後者の即位を機会に両国を合併した。

** 14～15世紀のライン川・エルベ川・ドナウ川などには，地方的な権力による数十の通行税取立所があり，貨幣経済の発展に大きな障害となっていた。



金印勅書　右下に見えるのが金印で，羊皮紙にラテン語で書かれ，31章から成っている。写真はその第1ページ。

スイス・イタリア その他の諸国　スイスは神聖ローマ帝国の一部であったが，13世紀末から独立を求めてハプスブルク家としばしば戦い，その軍隊を破った。そして14世紀には事実上独立をかちとった。*

イタリアは，ドイツ同様，分裂がはなはだしく，教皇領・ベネチア共和国・フィレンツェ共和国・ナポリ王国など，多くの都市・諸侯権力が分立して，政情はきわめて不安定であった。イタリア都市が中継貿易で大きな経済力をもったことは，一方ではルネサンスの花を咲かせるもととなったが，他方，手工業者や周辺の農村を都市経済のために強く束縛し，商品生産の展開を遅らせることとなった。このため国内を統一する経済的基盤に欠け，教皇派(ゲルフ)と皇帝派(ギベリン)の政争が激しかった。

東ヨーロッパでは，ほぼ10世紀のころポーランドが国家をたて，14世紀にはヤゲロ王朝のもとに東欧の強国となった。また北ヨーロッパには，ノルウェー・スウェーデン・デンマークの3国がノルマン系の民族によってたてられた。中でもデンマークの力が強く，14世紀末には三国を連合王国にまとめた(16世紀に解体)。

第4節　地理上の発見

1.　東洋航路の発見

東方貿易　ヨーロッパの東方貿易は，これまでイタリア商人とイスラム商人を通じてなされていたが，中央集権化を進めた

*　正式の独立承認は，1648年のウェストファリア条約でなされた(→p. 152)。

ヨーロッパ諸国では，やがてこの東方貿易の利益を，彼らの手を経ないで直接獲得しようとする機運がおこった。* 15世紀の中ごろオスマン＝トルコ（→p. 166）が黒海周辺に進出し，東西貿易路がいっそう不安定となったこともこれを促進した。こうした中で，地理的位置の有利さを利用して新通商路の発見にのりだしたのは，新興の中央集権国家ポルトガルとスペインであった。また航海・造船の技術や羅針盤による航法も進歩して，大洋を航海することが可能となっていた。

インドへの道

15世紀の中ごろ，ポルトガルの王子エンリケ（Henrique 1394～1460）（航海親王）は，アフリカの奥地にいると信じられていたキリスト教徒と結んでイスラム教徒を討とうと考え，アフリカ西海岸を南下する航路の発見に努力した。彼の努力は，その死後に実を結び，1487～88年バルトロメウ＝ディアス（Bartholomeu Diaz 1450ころ～1500）は，アフリカ南端の喜望峰に到達した。そののち，1498年ヴァスコ＝ダ＝ガマ（Vasco da Gama 1469ころ～1524）はさらにこれを回航して，インド西岸のカリカットにたどり着き，新しい東洋航路がついに開かれた。ポルトガル商人はただちにインドのゴアに根拠地をつくり，マラッカ・セイロン，さらに中国のマカオを手に入れ，東洋の物資を直接ヨーロッパに輸入するようになった。こうしてポルトガル人は，アラビア人に代わって東洋の富を独占した。

2. 新大陸の発見とヨーロッパの拡大

アメリカ大陸の発見

イタリアの船乗りコロンブス（Columbus 1446ころ～1506）は，フィレンツェの天文学者トスカネリ（Toscanelli 1397ころ～1482）に影響され，東洋へ行く近道は大西洋を西に航行することであると主張し，スペインの女王イサベル（Isabel 在位1479～1504）の援助を得て，1492年パロスの港を船出した。彼の船隊は，72日間の苦しい航海ののち，西インド諸島の一つに到達した。コロンブスはその後3回も探検

* また当時のヨーロッパ人の間には，マルコ＝ポーロの「東方見聞録」などによって，東洋の富に対する幻想的なあこがれも植えつけられていた。



コロンブス

に出かけ，アメリカ大陸にも上陸したが，死ぬまでそれをインドの一部と信じていた。* これを正し，ヨーロッパ人に知られていなかった新大陸であることを確認したのはバルボア(Balboa 1475ころ～1517)やアメリゴ＝ヴェスプッチ(Amerigo Vespucci 1451～1512)**らの探検であった。

スペインはただちに植民を開始した。アメリカ大陸には，インカやアステカの文化があったが，(→p. 25, 26) それらはピサロ(Pizarro 1478ころ～1541)やコルテス(Cortez 1485～1547)らの征服者たちによって絶滅された。また彼らは原住民を鉱山の開発などの強制労働に使役したので，その人口は急速に減少した。

世界の周航　1519年スペイン王の命をうけたポルトガル人マゼラン(Magellan 1480ころ～1521)は，スペインの港を出発し，南アメリカの南端を通って太平洋に出，フィリピン群島に到達した。*** 彼はそこで横死したが，部下はさらに西航をつづけ，ついに3年1か月を費やして最初の世界一周に成功した(1522)。これによって，大地が球体であることも実証された。

ポルトガル・スペインの植民地分割　コロンブスのアメリカ発見直後，教皇の調停を経て大西洋を東西に分かつ線が引かれ(1494)，ポルトガルは東半分，スペインは西半分を勢力範囲とした。これによってブラジルを除く新大陸はスペインのものとなり，東洋はポルトガルの勢力にゆだねられたが，マゼランの発見によってフィリピンはスペイン領となった。日本に渡来した最初のヨーロッパ人がポルトガル人**** であったのも，このためである。

地理上の発見の影響　新たにひらかれた新大陸や東洋との交通により，スペインとポルトガルは急速に繁栄した。ことに，アメリカ大陸の開発によって豊富な銀を独占したスペインは，やがてポルトガルの

---

* アメリカの土民をインディアンとよぶのは，これにもとづいている。

** アメリカの名称はアメリゴからおこったものである。

*** マゼラン海峡は彼によって発見された。太平洋も彼が名づけたものである。また，フィリピンは20年後スペイン王子フェリペ(のちの2世)にちなんで名づけられたもの。

**** 1543年(天文12年)ポルトガル人は種子島(たねがしま)に漂着し，鉄砲を伝えた。



銀の採掘　スペイン人に酷使されて銀の採掘に従事するアメリカの原住民（インディオ）たち。

東洋貿易をも支配するにいたった。イタリアの諸都市(→p. 146)や，これと結びついて銀を供給していた南ドイツの繁栄は衰え，商業の中心地は，地中海から大西洋に移った。新大陸から流入した豊富な銀は，ヨーロッパに激しい銀価格の下落と物価の暴騰（**価格革命**）をもたらし，広大な新市場の出現とあいまって，商業上の大きな変化をひきおこした（**商業革命**）。西ヨーロッパの商業資本は大きく成長し，商品生産も活気を与えられて，これ以後，新興の市民層は，強力な王権を背景に国際的な経済活動を活発におこなうようになった。

また，地理上の発見によって地球の形や，未知の国についてのさまざまな迷信がうちくだかれ，封建社会の神学的な権威がくずれる一因となった。従来別々に発展してきたヨーロッパ・アメリカ・アジアは，ここに結びつけられ始め，この拡大された世界でのヨーロッパ人の活動と優越は，以後しだいに大きなものとなっていった。

第5節　ルネサンスと宗教改革

1.　初期のルネサンス

市民文化

封建社会の崩壊とともに，西ヨーロッパ諸国では，聖職者や貴族に対し，市民層が社会的・政治的に大きく台頭してきた。彼らは，地中海貿易や十字軍を通じて伝えられたイスラム文



ルネサンス時代のイタリア

化や古典古代の文化から多くのもの(→p. 98, 118)を学びとりながら，豊かな創造的精神により，14 世紀から 16 世紀にかけて，より現実主義的・個性的な，生の躍動に満ちた市民文化を生み出した。これをルネサンス(Renaissance) という。14世紀から15世紀前半までの初期ルネサンスでは，まず文学の面でイタリアおよびイギリスが現われ，それぞれ日常使われる俗語を，かおり高い文学用語にまで高め，純化させた。

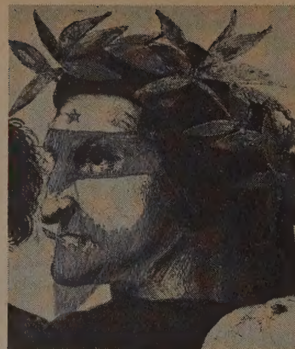
ルネサンスの始まり イタリア－ルネサンスの中心は，北イタリア諸都市のうち，14世紀ごろに台頭したフィレンツェであった。

まずダンテ(Dante, 1265〜1321)は，不滅の古典とされる代表作「神曲」を，トスカナ地方の口語で書いてイタリア国民文学のさきがけをなし，カトリックの精神にたちながらも，現実の世界を鋭く批判した。ついで叙情詩にひいでたペトラルカ(Petrarca, 1304〜74)や，「デカメロン」で名高いボッカチオ(Boccaccio, 1313〜75)が現われた。「デカメロン」は聖職者の偽善的生活を鋭く風刺しながら，健康な明るさで人間の欲望をあからさまに描き，近代小説のさきがけとなった。

イギリスでは，ウィクリフが聖書を翻訳して，標準英語の形成に貢献し，また詩人チョーサー(Chaucer, 1340ころ〜1400)は「カンタベリー物語」を書いて，さまざまな人間像を生き生きと描きだし，イギリス国民文学の基礎をつくった。

美　術 建築には，市民勢力の象徴ともいうべきフランドル諸都市の織物会館や市庁舎などが現われ，またイタリアのブルネレスキ(Brunelleschi, 1377〜1446)はフィレンツェ本寺の上に創造的なドームを造りあげた。彫刻は，イタリアのドナテロ(Donatello, 1386ころ〜1466)らにより，力強く写実的な表現となった。絵画ではネーデルラントにファン＝アイク兄弟(van Eyck, 兄1370ころ〜1426，弟1380ころ〜1441)による現実主義的な風景画・肖像画が始められ，イタリアではジョットー(Giotto, 1266ころ〜1337)が，聖フランチェスコ伝の「小鳥説法」の壁画に自然へのすなおな眼をひらいた。

ヒューマニズム　現実生活を肯定し，人間と自然を直視するルネサンスの精神は，ギリシア・ローマの古典をありのままの姿で研究しようとする態度とも結びついた。ペトラルカ・ボッカチオらはすぐれた古典の研究家であり，人々は古典古代の文芸に，彼らの求める豊かな人間性の模範をみいだそうとした。このような人間性の探求と結びついた古典研究の新学風を，ヒューマニズム（人文主義），これを身につけた人をヒューマニスト（人文主義者）という。



月桂(けい)冠を戴(いただ)くダンテ（ラファエロ筆）ローマ教皇庁の壁画に残る大作「論議」の一部。

イタリアが，ローマ帝国の故地であったこと，また早く東方貿易を通じて，古典文化を伝えるイスラム教徒や東ローマと交渉していたことは，この点に多大の刺激と便宜を与えた。また，15世紀にオスマン-トルコが進出していらい，東ローマの学者は，ギリシアの古典を携えて難をイタリアに避け，イタリアにおけるギリシア古典の研究を促進した。

2.　盛期のルネサンス

イタリア　イタリア-ルネサンスは，15世紀の後半から16世紀の前半に最盛期を迎えた。* 建築は，ブラマンテ（Bramante 1444～1514）やミケランジェロ（Michelangelo 1475～1564）の設計によるローマの聖ペテロ寺院に，ルネサンス建築の最高傑作を生んだほか，都市貴族の大邸宅や市庁舎に豊かな水平感を示した。

絵画や彫刻もいちだんと進歩し，ボティチェリ（Botticelli 1444ころ～1510）を経てレオナルド=ダ=ヴィンチ（Leonardo da Vinci 1452～1519），ラファエロ（Raffaello 1483～1520），ミケランジェロの三大天才があいついだ。彼らは見事な写実と豊かな表現の中に高い精神性を示した。

三人の天才　「最後の晩餐(ばんさん)」や「モナ=リザ」の絵で有名なレオナルドは，ルネサンスの理想とした万能の天才で，美術・科学・技術の各方面に驚異的な業

* このころ，ルネサンス文化の中心はフィレンツェからローマに移った。

績を残した。ラファエロは，端正優雅な筆に女性の理想美を求める多くの聖母像を描いた。ミケランジェロは，彫刻に「ダビデ」・「モーセ」その他の傑作を残し，また絵画では，ローマのシスティナ礼拝堂に雄渾(こん)な「天地創造」や「最後の審判」を描いて，バロックへの動きを示した。



モナ=リザ

イタリア-ルネサンスの終末　イタリア-ルネサンスは，諸都市の豊かな経済力にささえられたもので，フィレンツェの大金融業者メディチ家(Medici)その他の大商人は熱心に学問や芸術を保護した。また，メディチ家出身のレオ10世(Leo X, 在位 1513～21)のような教皇や貴族も学芸の保護者となった。

しかしながらイタリアでは，統一権力が生まれず，諸都市は分立・抗争をつづけ，フランス・ドイツ・スペインなど諸国の侵入をまねくにいたった（イタリア戦争)。やがて世界の通商路が変化し，強力な王権を背景に各国の市民層が世界商業と植民地活動に覇(は)を競うようになると，イタリア諸都市は衰退し，ルネサンス文化の輝きは失われていった。

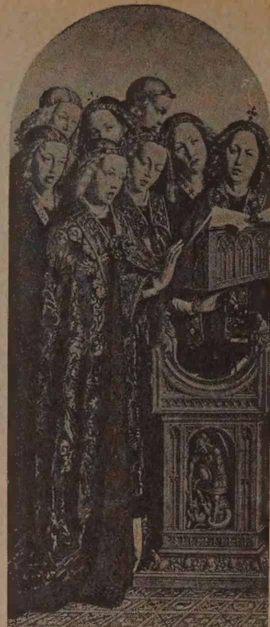
マキァヴェリ　このような政治的分裂の中で，マキァヴェリ(Machiavelli, 1469～1527)は「君主論」を著わし，強力な君主の出現を待望して，君主の権力拡大のためには，政治は道徳に優先し，目的は手段を選ばないという国家理性の概念をうち立てた。彼は現実の政治をありのままに観察・分析し，近代政治学の祖とされている。*

ネーデルラント・ドイツ　西欧諸国では，16世紀にルネサンスの盛期を迎えた。まずネーデルラントは，ヨーロッパ北部とヨーロッパ南部を結ぶ商業の中心であるとともに毛織物工業もさかんで，市民生活

* 彼の立場は，後世マキァヴェリズムとよばれ，その国家理性の概念は，西欧絶対主義の理論的支柱となった。

が活発であったから，ここにはイタリアについでルネサンスの開花がみられた。美術は堅実な市民生活を描写して一般に民衆的な色が濃く，ブリューゲル（Brueghel 1525ころ～1569）は農民画家として名高い。16世紀最大のヒューマニストといわれたエラスムス（Erasmus 1466ころ～1536）は，ロッテルダムの生まれで，仏・英・独・伊（い）の各地で活動した。彼は「新約聖書」をギリシア語の原典について研究し，「愚神礼讃（らいさん）」を著わして教会の腐敗を痛烈に風刺した。

ドイツの人文主義は，ロイヒリン（Reuchlin 1455～1522）のヘブライ語原典による「旧約聖書」の研究のように宗教との関連が強く，のちの宗教改革に一つの道をひらいた。デューラー（Dürer 1471～1528）やホルバイン（Holbein 1497ころ～1543）の絵画も同様に敬虔（けいけん）で，また素朴（ぼく）であった。



合唱の天使　ベルギーのガンにあるサン－バヴォン寺の祭壇画の一部（ファン＝アイク兄弟筆）

フランス・スペイン　フランスの人文主義は宮廷の保護もあって大いに栄え，ラブレー（Rabelais 1494ころ～1553）の「ガルガンチュア」やモンテーニュ（Montaigne 1533～92）の「随想録」など，いずれも鋭い風刺精神につらぬかれている。スペインのセルバンテス（Cervantes 1547～1616）は，「ドン＝キホーテ」に没落してゆく騎士層を浮き彫りしながら，風刺と愛情の眼をもって人間を追求した。絵画には内面的・神秘的な傾向をもつグレコ（Greco 1541ころ～1614）が出た。

村の祭り　バッグパイプを吹く農民の姿に，作者ブリューゲルの暖かいまなざしが感じられる。





初期の印刷機　活版印刷術の発明は，宗教改革をはじめ，当時の文化や事件に大きな影響を与えた。

イギリス　トマス＝モア(Thomas More 1478～1535)は，エラスムスと親交を結び，「ユートピア」の中で一種の社会主義的な理想社会を描いて当時の世相を風刺した。16世紀後半，エリザベス1世時代に現われた経験主義哲学者フランシス＝ベーコン(Francis Bacon 1561～1626)，詩人スペンサー(Edmund Spenser 1552～99)，偉大な劇作家 シェークスピア(Shakespeare 1564～1616)なども同じ流れに属し，ことにシェークスピアは「ハムレット」・「マクベス」・「ベニスの商人」など幾多の傑作を残して，イギリス国民文学の黄金時代をもたらした。

3.　科学精神の発達

技術の発達　14～15世紀からルネサンス期にかけて，火薬・羅(ら)針盤・活版印刷の三つの改良ないし発明がなされて，社会の変化に大きな刺激を与え，文化の向上に貢献した。紙の製法はアジアからアラビア人の手を経て伝わり，ドイツ人 グーテンベルク(Gutenberg 1394ころ～1468ころ) の発明とされる活版印刷は，15世紀に始まった。高価な羊皮紙を使用した従来の写本に比べ，今や知識・思想の普及ははるかに容易となった。

科学的精神の芽ばえ　ルネサンス期には市民的な経済活動の必要もあって，実験と観察にもとづく経験が重んぜられ，新しい科学的精神が発展した。

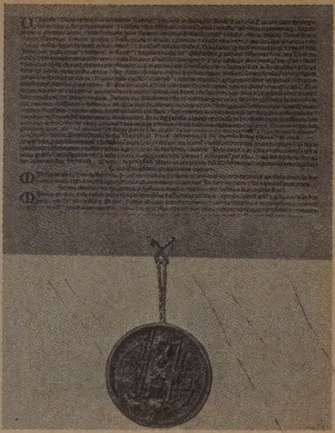
16世紀の中ごろ，ポーランド人コペルニクス(Copernicus 1473～1543)は「地動説*」(太陽中心説)を発表した。彼の学説は，イタリア人 ガリレイ(Galilei 1564～1642) やドイツ人 ケプラー(Kepler 1571～1630) によって確かめられ，完成された**。ガリレイは望遠鏡を実用化して天体を観測し，ケプラーは太陽を中心とする惑星運行の法則を発見した。

---

* 地動説は，すでに古代の学問でも知られていた (→p. 39)。

** ガリレイは教会の圧迫をうけ，宗教裁判で地動説を撤回したが，「それでも地球は動く」といったと伝えられる。

4.　ドイツの宗教改革



免　罪　符

ドイツの分裂とローマ教会　アルプス以北の地では，ルネサンスとならぶ大きな市民的精神運動として **宗教改革 (Reformation)** がおこり，それはまずドイツに始まった。当時のドイツは分裂と対立を重ねており，統一権力は事実上存在しなかった。しかもその中で，農民の経済力はおそまきながら向上し，領主との対抗が始まっていた。中央集権化したイギリスやフランスで力を弱めていたローマ教会は，このような事情のドイツを，なお勢力をふるう大きな地盤として利用した。*

ルターの改革　宗教改革の口火を切ったのは **マルティン＝ルター** (Martin Luther, 1483～1546) であった。彼はウィッテンベルク大学の神学教授であったが，免罪符の販売に反対したのをきっかけに，1517年同市の教会のとびらに **95か条の意見書** を発表した。**

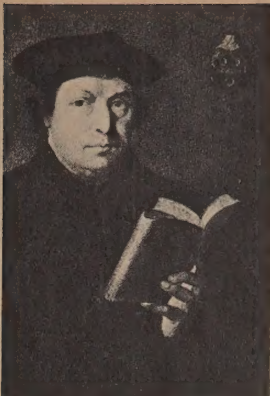
ルターは，救いはただ「信仰によってのみ」与えられるものであることを主張し，聖書だけが唯一の権威であるとして，ついにはカトリック教会そのものを否定するにいたった。彼の意見は，発明されたばかりの印刷術によって急速にひろまり，独立をかためつつある領邦諸侯，没落する騎士，政治力と独立性を失い始めた都市，向上する農民などは，それぞれの側からこの改革思想に大きく注目した。

(→p. 136) イタリア戦争でフランス国王フランソア１世 (François I, 在位1515～47) と争っていた神聖ローマ皇帝カール５世 (Karl V, 在位1519～56) は，教皇と結んで帝国の統一を保ちたいと考え，ウォル

---

* 当時のドイツは，「ローマの牝牛」とさえいわれた。

** もともと教会は，罪を悔い改めた人に対し，教会への浄財喜捨や善行によって，宗教上の罰を加えるのを免じたが，当時ローマ教皇庁(教皇レオ10世)は，聖ペテロ寺院建立の財政不足を補おうとして，免罪符(免償符)を買えば，悔い改めなくても罪そのものがあがなわれると民衆に説きまわって，ルターを憤激させた。



ル　タ　ー

ムスの国会にルターをよんで改革思想の撤回を迫った (1521)。ルターはここで決定的にカトリック教会に反対の態度を示し，皇帝に追放されたが，やがて反皇帝派のサクソニア侯にかくまわれ，新約聖書のドイツ語訳をなしとげた。

抗議する人々

1524 年から翌年にかけて，ドイツでは大規模な農民反乱（**大農民戦争**）がおこった。それは農村工業が展開した西南ドイツで始まり，富裕な農民層を先頭に，領邦諸侯に対し農奴的な諸負担の廃止を要求した。ルターははじめ農民たちに同情的であったが，やがて運動が中部ドイツに移ってトマス＝ミュンツァー（Thomas Münzer 1489～1525）の指導下に急進的となり，社会制度の変革を企てるにいたって，かえって諸侯の側に味方した*。農民戦争はついに領邦諸侯によって鎮圧され，失敗に終わった。

政治的に分裂していたドイツでは，信仰上の抗争は政治上の利害関係と深くからみ合い，諸侯の間にルター派とカトリック派の激しい対立抗争が生まれ，ルター派諸侯はシュマルカルデン同盟を結成してカトリックの皇帝派諸侯と争った**。その結果，1555 年アウグスブルクの**宗教和議**が締結され，諸侯の領内や自由都市に，カトリック派とルター派のいずれかの信仰をおこなう自由が認められた。そして，ルター派はその後ドイツ以北のヨーロッパ諸国にひろまったが，個人の信仰の自由はまだ実現されず，宗教をめぐる争いは17世紀の前半にいるたまでつづいた。

---

* ルターは，あくまでも内面的・精神的な自由と神への服従だけを求め，神がつくった現世での不自由は耐え忍ぶべきであると考え，秩序の破壊に反対した。

** 当時オスマン＝トルコが，フランス国王フランソア１世と結んでウィーンに迫ったため，皇帝は一時ルター派諸侯に譲歩して信仰の自由を約したが，のちそれをとり消したので，ルター派はこれに抗議し，プロテスタント（抗議する人）とよばれた。ここから，カトリシズム（旧教）に対し，改革諸派を一般にプロテスタンティズム（新教）という。

5.　西ヨーロッパ諸国の宗教改革


カルヴァン

カルヴァン派　ドイツとほぼ同時に，スイスにもツウィングリ(Zwingli, 1484～1531)の改革運動がおこった。彼は旧教徒との戦争で戦死したが，やがてそれは，フランス人ジャン＝カルヴァン(Jean Calvin, 1509～64)にうけつがれた。彼は，フランスで弾圧されてスイスのジュネーブに移り，同市の政権をにぎり，神の権威のもとに，厳格な規律によって神政政治をおこなった。

カルヴァン派は，スイスをはじめネーデルラント・イギリス・スコットランド・フランスなど，商工業のさかんな各地にひろまった。この派の新教徒は，イギリスでは清教徒(ピューリタン)(Puritans)，スコットランドでは長老派(プレズビテリアン)(Presbyterians)，フランスではユグノー(Huguenots)といわれた。

ルターの宗教改革が，個人的・内面的なものであったのに対し，カルヴァンのそれは組織的であり，独自の神学と教会を整えた。彼は神観念を徹底させ，人が救われるか否かは，永遠の昔から神により予定されていて，人がはかり知ることはできないというきびしい予定説をうち立て，キリスト者は救いに選ばれた者としての自覚をもって，神の御心をこの世に実現しなければならないと説いた。ここから，働くこと自体が祈りであるという積極的な職業倫理が生まれ，営利や蓄財も認められた。彼の教説は現実的・実践的な社会性をもち，自立しつつあった市民層・富裕農民層に力強い精神的なささえ，生活倫理を与えた。

イギリスとフランス　イギリスの宗教改革は，信仰上の問題としてよりは政治上の問題としておこった。国王ヘンリー8世(Henry VIII, 在位1509～47)は，王妃を離婚しようとして教皇の反対にあったので，1534年議会の同意を得て教皇と断絶し，首長令によって自らイギリス国教会(Anglican Church)の首長



聖バルテルミの虐殺　1572年8月24日教会の鐘の音を合図に，新教徒におそいかかる旧教徒軍。

となり，また修道院を解散して土地・財産を没収した。新教義の確立は，エドワード6世をへて，エリザベス1世の時にようやくおこなわれたが，イギリス国教会は，新教の中でもカトリック的特徴を強く残している。*

フランスでは，権力を集中しつつあった国王が，14〜15世紀いらいすでに国内のカトリック教会を支配し，大勢としては旧教の国にとどまった。シャルル9世(Charles IX，在位1560〜74)が幼くして即位すると，母后カトリーヌは国内貴族の対立を利用しながら王権の安定をはかろうとし，16世紀後半，深刻な内乱(ユグノー戦争，1562〜98)がひきおこされた。それは互いに王権への寄生(きせい)をはかる，国内諸貴族の政治的な争いであったが，内乱は旧教徒とカルヴァン派ユグノーとの宗教戦争の形をとり，聖バルテルミ(バーソロミュー)の虐殺(ぎゃくさつ)(1572)では，5万にのぼる新教徒側が大量殺戮(さつりく)された。

ブルボン(Bourbon)王朝をひらいたアンリ4世(Henri IV，在位1589〜1610)は，自ら旧教に改宗して1598年ナントの勅令**を発し，ユグノーに信仰の自由と市民権を認めて内乱をしずめ，絶対主義による国家統一を始めることとなった。

近代カトリック教会の形成

ローマ教会は16世紀の中ごろ，トリエントに公会議をひらいて(1545〜63)，カトリック側のたて直しをおこなった。そして内部の弊害をとり除いて教会の結束をかためるとともに

* イギリスの宗教改革は，絶対主義以降の国家が教会を従属させ，利用していく特色をよく示している。

** ナントの勅令は，個人に信仰の自由を許した点で，ドイツのアウグスブルク和議より一歩を進めている。

に，教皇の至上権を認めて正統教義を確立し，また新教の進出に備えて，宗教裁判を組織した。こうした動きは**反宗教改革**とよばれるが，これはいわばカトリック側の宗教改革であり，近代カトリックへの脱皮であった。



16世紀中ごろのヨーロッパ宗教分布図

さらにスペイン人イグナティウス＝デ＝ロヨラ（Ignatius de Loyola 1491ころ～1556）により，イエズス会（ヤソ会）が創設され，厳格な軍隊的規律のもとに，新教に対する巻き返しと強力な布教活動がおこなわれた。イエズス会は一時新教に奪われていた西南ドイツを再び旧教の勢力下に取りもどし，さらにポルトガル・スペインの植民事業にともなって，海外への布教に努めた。*

宗教改革の意義

神による救いについて，旧教は神と人の仲介者としての聖職者，救いの施設としての教会を認めたのに対し，新教はこれを否定して直接に神の権威に服し，聖書をもととする信仰それ自体により救われると主張して対立した。しかしながらキリスト教は，この時代に旧教・新教を問わず近代宗教への歩みを進め，ともに庶民の精神生活を力強くささえるにいたった。

新教は，あくまでも精神的な神の前での自由・平等を説き，現実的な自由・平等への戦いはむしろ否定する傾向が強かった。しかし神の権威だけを絶対と認める精神態度には，自我のめざめにつながるものがあり，その意味では，近代精神の出発点をなすものであった。さらに宗教改革

* マテオ＝リッチ（→p. 174）はその半生を中国の伝道にささげ，また日本にはザヴィエル（Francisco de Xavier　1506～52）が1549年（天文18年）に渡来して，はじめてキリスト教（キリシタン）を伝えた。

運動は，宗教戦争や資本主義精神の形成などとも深くからみあい，その結果として国家や社会の近代化に大きな影響を与えた。

第6節　西欧諸国の絶対主義と植民活動

1.　絶対主義と重商主義

絶対主義の成立　**絶対主義国家** の国王は，各地の封建貴族から大幅に権力を奪い，他にならぶ者のない強大な権力者となった。それまで封建貴族の支配下におかれていた領民は，新たに国王によって支配・保護され，租税と軍役を負担して王権をささえた。商品経済の進展とともに，新たな社会のにない手となった富裕な市民層は，有力地主，新貴族として旧貴族とともに国王の官僚層を形づくった。

都市や上層市民との密接な提携によって国内経済の発展を強力に推し進めつつあった国王は，直接税・間接税・輸出入関税などによって財政を豊かにし，**常備軍**をおき，**官僚制度**を発展させた。徴税機構の整備とともに，身分制議会(→p. 126)は歴史的意味を失ってあまり召集されなくなった。しかし，フランスで官職が大々的に売買されたり，世襲されたりしたように，絶対主義国家は，まだ，近代国家への第一歩を踏み出したものにすぎなかった。

絶対主義と専制政治　絶対主義（Absolutism）ということばは，国王がさまざまの地方的な慣習に束縛されないで立法できるようになった状態を意味している。しかしながら国王は決して単なる専制君主ではなく，王位の継承や王領の分割など，国家の大事に関する事がらについては，自分ひとりの意のままにはならなかった。

重商主義　絶対君主は，官僚制や常備軍を維持し，また他国と競争しながら自国の勢力を伸ばしてゆくために，国の富を増



地理上の発見前後のヨーヨッパ経済地図

し，国庫を充実させる必要があった。このため最初は直接に金銀を求めて植民地や国内の鉱山採掘などに力を注いだが（重金主義），のちには貿易の差額による貨幣の蓄積をはかり，商人の海外進出を奨励し，植民地開拓のための会社には，特許を与えてその活動を支援した。一方では輸出をさかんにし輸入を制限して，国内産業を保護・育成した。国内産業の保護を土台にした，この国家の商業政策は**重商主義**(Mercantilism)とよばれ，商品生産の発達したイギリス・フランスで推し進められた。

問屋（とんや）制度

当時の工業生産は，まだ規模が小さく，大商人の支配下にあった。**ギルド制度**もなお勢力をもっていたが，一方，特産物の生産地帯では，**問屋制度**とよばれる方法がとられた。すなわち大商人は，商品経済の発達とともに，できるだけ多くの商品を確保して活動の規模をひろげる必要があり，商品の売買だけでなく生産にも直接携わるようになった。彼らは，ギルドの手工業者や，副業として家内工業を営む農民に対し，原料・道具や資金を貸しつけ，その製品を出来高払いによって買い占めた。この問屋制度の発達したところでは，手工業

者は賃金労働者に似た状態におちいった。ギルド制度や問屋制度のもとでは，生産は手工業者により個別になされたが，やがてこれに対し，工場制手工業(→p. 196)がしだいに勢いを増していった。

2.　フェリペ2世とエリザベス1世

フェリペ2世　スペインでは，カルロス1世（Carlos I，在位1516～56）（神聖ローマ皇帝，カール5世）のときに絶対主義を確立し，相続によって，オーストリア・ネーデルラント・アメリカ・イタリアなどに及ぶ広大な国家をつくり出した。その子フェリペ2世（Felipe II，在位1556～98）は，オーストリアを除く全領土をうけつぎ*，当時地中海の諸島を占領して地中海貿易を脅かしていたオスマン-トルコを，1571年レパント沖の海戦に破り，地中海の覇権（はけん）をにぎった。(→p. 167)また中南米の銀で南ドイツの銀を圧倒し，(→p. 133)南ドイツの銀と東洋の胡椒（こしょう）との中継貿易によって栄えていたポルトガルを併合して（1580年から1640年まで），世界の海と商業をほとんど支配するにいたった。彼はこの大勢力を背景として，支配地に旧教政策の励行をはかり，ネーデルラント反乱の重要な一因をつくった。

オランダの独立　スペイン支配下のネーデルラントは，毛織物工業と中継貿易で栄え，当時ヨーロッパで最も富んだ地方として知られていた。フェリペ2世が重税を課して商工業を圧迫し，自治権を奪って新教徒を弾圧すると，同地方に駐留するスペイン軍の支配に大きな不満をいだいていたネーデルラント貴族**は，都市とともに反乱をおこした。こうして1568年独立戦争がおこり，オランイェ（Orange）（オレンジ）公ヴィレム（Willem，1533～84）が総督に推された。旧教徒の多い南部10州（今日のベルギー）は途中でスペインに服したが，カルヴァン派の新教徒市民が多かった北部7州は，イギリスの援助をうけて抗戦を継続し，1581年独立を宣言してネーデ

---

*　ハプスブルク家はカール5世の後，オーストリアとスペインの両家に分かれた。
**　彼らはスペイン貴族がつけた蔑称（べつ）から，ゴイセン（乞食）とよばれた。

ルラント連邦共和国（オランダ*）を建設した。戦争はなお続いたが，1609年休戦し，スペインに独立を認めさせた。



無敵艦隊の敗北　イギリス側は火船を放って無敵艦隊を混乱におとしいれた。

イギリスとスペイン　テューダー王朝初代のヘンリー7世とともに絶対主義が開始されたイギリスでは，ヘンリー8世によってイギリス国教会が設立されたのちも，なお宗教上の動揺があり，熱心な旧教徒の女王メアリー Mary 在位1553～58 は，スペインのフェリペ2世と結婚して旧教を復活した。しかし，次の女王エリザベス1世 Elizabeth I 在位1558～1603 は新教に復帰し，1559年統一令を発布して国教会の基礎をかため，スペインとの交わりを断った。当時のイギリスは，毛織物工業の発展がめざましく，貿易においてもスペインに対抗して，積極的に海外進出を開始した。エリザベスはスペインに反抗するオランダの独立を援助し，またイギリスの艦隊は，銀など植民地の富を積んで帰国するスペイン船隊を襲った。これに対しフェリペ2世は1588年無敵艦隊（アルマダ）を派遣し，一挙にイギリスを屈服させようとしてかえって撃破され，海上権と国勢に致命的打撃をうけた。

エリザベス時代　これよりイギリスは，北米やインドに活発な植民活動を開始した。1600年には東インド会社が設立され，のちにイギリスがインド支配をおこなう基礎となった。エリザベス女王の治世は，イギリス絶対主義の最盛期で，彼女はたくみに議会をあやつり，国内の統一を維持するとともに，貨幣の改革・救貧法**・徒弟条令***など，

* オランダの名称は外国人によってよばれたもので，独立戦争で活躍したホラント州からおこった。

** 1601年の法令に代表され，貧民の救済と工業労働者としての養成を規定した。

*** 1563年の法令で，農業・都市工業保護のために，雇人の労働条件を定めた。



ルイ 14 世

重商主義政策を展開した。文運もさかんで，国民文学の黄金時代を現出した。(→p. 138) 女王は特許状により多数の会社に貿易上・産業上の独占権を与えたが，その末年には，下院を中心に中産層による独占反対の動きが強まり，ピューリタン革命への道につながることとなった。(→p. 198)

3. ルイ14世とフランスの絶対主義

ブルボン王朝

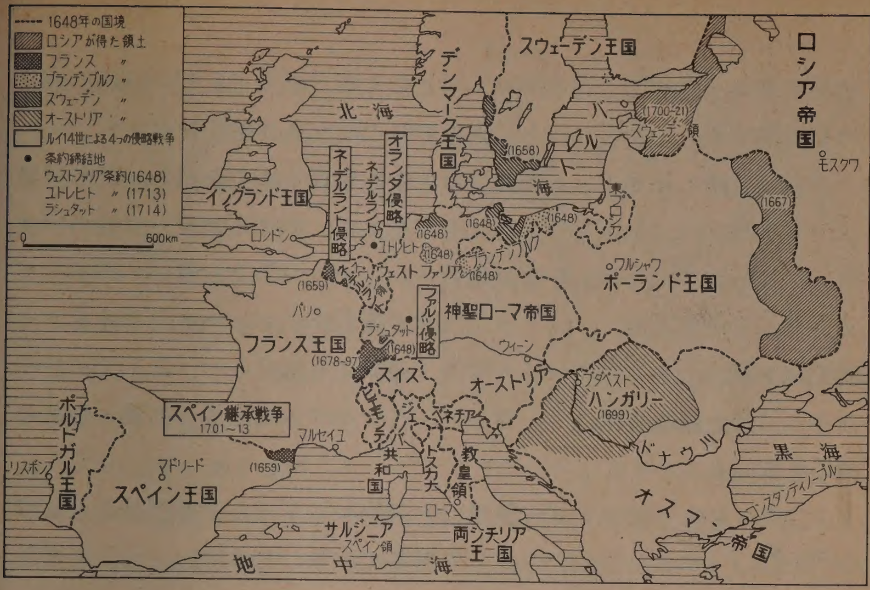
フランスではユグノー戦争の結果，国内諸貴族の勢力が決定的に弱まり，1589年アンリ4世のはじめたブルボン(Bourbon)王朝において，絶対主義が確立された。つづくルイ13世(Louis XIII 在位1610～43)からルイ14世(Louis XIV 在位1643～1715)の時代にかけ，宰相リシュリュー(Richelieu 1585～1642)・マザラン(Mazarin 1602～61)は三十年戦争(→p. 151)にドイツの新教徒を助けて干渉し，ハプスブルク家の勢力を弱めて，フランスの地位をさらにかためた。この間，国内の中央集権化も進み，三部会は1614年を最後に召集されなくなり，また勢力の回復をめざす大貴族の反抗*も制圧された。ルイ14世は，この基礎の上に1661年から親政を開始し，フランス絶対主義の黄金時代を現出した。

ルイ14世時代

ルイ 14 世の親政時代，財政総監コルベール(Colbert 1619～83)は，王立製造所をつくって国内工業を振興するとともに，外国製品の輸入を制限し国内製品の輸出を促進して，典型的な重商主義政策を推進し，国富の増進に貢献した。王は代表的な絶対君主**で，王権神授説の信奉者であり，ヴェルサイユに壮麗な宮殿を造り，はなやかな宮廷生活をくりひろげた。その宮廷を中心にフランス語が洗練され，古典主義文学が栄えた。しかし王がナントの勅令を廃止した結果(1685)，有能な商工業階層を含む25万以上のユグノーは国外に追放され，フランスの経済

* 1648年貴族たちはかつての特権を回復しようとして，パリ高等法院をよりどころに反乱をおこした。これをフロンドの乱という。

** 彼は「朕は国家なり」といったと伝えられたほどである。



ルイ14世時代のヨーロッパ

にとって大きな損失となった。王は富強を頼んで，しばしば**侵略戦争**をおこした。その目標はハプスブルク家の打倒であり，また東部国境の拡大であった。しかし，その結果はいたずらに莫(ばく)大な国費を費やし，財政の困難をまねいて，のちの革命を導く一因となった。

侵略戦争　ルイ14世は，スペイン領ネーデルラント侵略(1667～68)・オランダ侵略(1672～78)・ファルツ侵略(1688～97)につづいて，**スペイン継承戦争**(1701～13)をおこない，イギリス・オランダ・オーストリアとの間に大戦争をひきおこしたが，1713年**ユトレヒト条約**において，ブルボン家のスペイン王位継承は，フランスと合併しないことを条件として認められた。*

4. 植　民　活　動

スペインとオランダ　絶対主義国家はいずれも重商主義政策をとって植民地獲得に努力し，海上権・商業権の争奪をめぐって激しい戦いが展開された。最初に覇権をにぎったのはスペインであったが，その

* 翌1714年の条約でスペインはオーストリアにネーデルラントをゆずった。

植民政策は掠奪的で，貿易の裏づけとなる国内産業（とくに毛織物工業）の発達が不十分であったから，無敵艦隊の敗北後は勢力を失った。

ついで台頭したオランダは独立戦争中から海上にのり出し，1602年東インド会社，1621年西インド会社を設立して，東洋ではジャワ島のバタヴィア（今のジャカルタ）を根拠地にポルトガルの勢力を追い，東インド諸島などを手に入れ，アメリカでは北米東海岸にニューネーデルラント植民地を設け，さらにアフリカの西・南岸にも植民した。* そして17世紀前半には海上覇権を確立し，首都アムステルダムは世界の商業・金融の中心となった。

イギリスとフランス

オランダの繁栄は毛織物の加工業と中継貿易にもとづいていたが，その覇権に挑戦したのは，イギリスであった。イギリスはエリザベス1世の時いらい，バージニア植民地を手始めに北アメリカに進出し，また1600年東インド会社を設立して，マドラス・ボンベイ・カルカッタを中心にインドに勢力をうえつけた。そして17世紀後半，3回にわたる蘭英戦争 (→p. 199) を経てオランダが衰えたあと，** 代わってイギリスの相手となったのはフランスであった。フランスも17世紀には，植民地獲得にのり出し，とくにコルベールの政策によって積極的となり，北アメリカではケベックを中心にカナダ・ルイジアナを領有し，東洋でも，17世紀なかば東インド会社を設立して，インドのポンジシェリー・シャンデルナゴルを拠点にイギリスと対抗した。

英仏植民地戦争

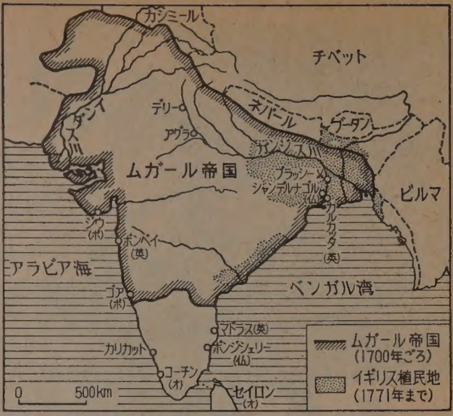
島国イギリスはフランスとの争覇戦に全力を傾け，スペイン継承戦争に際して北アメリカのニューファンドランドその他を手に入れた。オーストリア継承戦争 (→p. 153) の時には，インドでは総督デュプレクス (Dupleix 1697～1763) の活躍によりフランスが優勢であったが，北アメ

---

* 南アフリカ地方に植民したオランダ人の子孫は，ブーア人とよばれた(→p. 254)。

** その間にイギリスはニューネーデルラント植民地を占領し，その拠点ニューアムステルダムをニューヨークと改名した。

リカではイギリスが有利であった。つづいて七年戦争(→p. 153)がおこると，イギリスは全力を植民地戦争に注ぎ，インドではイギリス東インド会社の書記**クライヴ**(Clive, 1725~74)が1757年の**プラッシーの戦い**に勝利をおさめ，北アメリカでもフランスを圧倒し，1763年の**パリ条約**でカナダとミシシッピ川以東の地を獲得した。ここに長年にわたる英仏の植民地戦争はイギリスの勝利に終わり，世界におけるイギリスの海上覇権が確立した。



インドの植民地化

イギリス勝利の原因　英仏植民地戦争の帰結も，結局は，毛織物工業を国民的な産業として発達させたイギリスと，国王の保護・育成政策にもかかわらず，イギリスほど工業が発達しなかったフランスとの経済力の差に基づいていた。

第7節　東欧諸国の発達

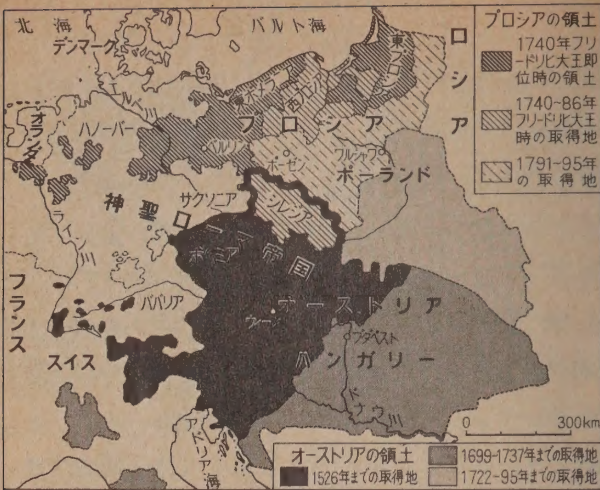
1.　プロシアの発展とフリードリヒ大王

三十年戦争

ドイツではアウグスブルク宗教和議の不十分さのため，その後も新旧両教徒の対立はやまず*，ついに1618年，ハプスブルク家に対するボヘミア新教徒の反抗をきっかけに**三十年戦争**が始まった。この戦争は，旧教を背景に帝権の回復をめざす皇帝と，それに反対して領邦的な支配権を強化しようとする諸侯や都市との争いにとどまらず，自国の強大化と安全をねらっていたスペイン・フランス・スウェーデン・デンマークなどの介入によって国際的な大戦争となった。

---

* アウグスブルク宗教和議にはカルヴァン派は認められていなかったので，新教勢力内部での，ルター派とカルヴァン派の争いもおこっていた。



プロシアとオーストリアの発展

とくに，新教側を助けたスウェーデン王グスタフ＝アドルフ（Gustaf Adolf 在位1611～32）の活躍はめざましかったが，最後に皇帝側の将ワレンシュタイン（Wallenstein 1583～1634）と戦って戦死した。また旧教国フランスは，皇帝側の勝利によるドイツの強大化を恐れて新教側を援助した。このことは，宗教紛争のうちに，自国の利害を第一とする政治的野望が強く現われてきたことを示している。

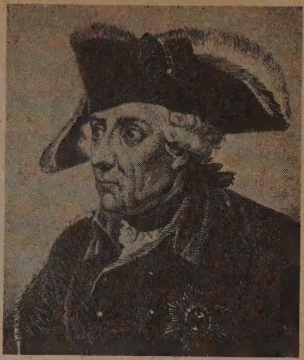
ウェストファリア条約

三十年戦争は，1648年のウェストファリア条約によって終わり，旧教派・ルター派・カルヴァン派の信教の自由が平等に認められて，長年の宗教紛争に終止符を打った。しかし，長い戦争の舞台となったドイツの国土は悲惨な荒廃に見舞われたうえ，諸侯はほとんど独立国に近い主権を認められて分裂状態はさらに固定化され，神聖ローマ帝国は有名無実となった。

スイスとオランダの独立もこの条約で正式に認められ，またフランスはアルザスの大部分を，ブランデンブルク（のちのプロシア）は東ポメラニアを獲得し，スウェーデンもドイツに領土を得た。

プロシアの発展

ドイツの政治的分裂は，基本的には，経済的発展の地方差がひどく，全体が一つの経済的統一体となることができなかったためであった。そして三十年戦争によって経済的・社会的に進んでいた西ドイツが大打撃をうけると，復興の中心は東ドイツに移った。その中でとくにめざましかったのはホーエンツォレルン家の支配するプロシアであった。



フリードリヒ2世

プロシアは，12世紀にできたブランデンブルク辺境伯領(→p. 129)と16世紀にドイツ騎士団領をもとに成立したプロシア公国とが17世紀に合併してできた領邦で，三十年戦争に参加して地位を高め，1701年**プロシア王国**となった。フリードリヒ＝ヴィルヘルム1世（Friedrich Wilhelm I，在位1713～40）は貴族をおさえ，重商主義によって産業の振興をはかり，軍備を強化するなど，絶対主義の確立に努めたので，プロシアの勢力は急速に強まった。

フリードリヒ大王　次の王フリードリヒ2世（Friedrich II，在位1740～86）(大王)が即位した1740年，オーストリアでもマリア＝テレジア（Maria Theresia，在位1740～80）が即位したが，この時彼女の継承権に対して，フランスやドイツ国内の諸侯が反対したことから**オーストリア継承戦争**がおこった。フリードリヒ2世はこの機会にシレジアに出兵し，戦争の終結 (1748) に際して，その領有を認めさせた。そこでマリア＝テレジアは，シレジア奪回のために，ロシアおよび長年敵対してきたフランスと結び，1756年プロシアとの間に，**七年戦争**を開始した。イギリスの支援を得たフリードリヒは，苦しい戦いをよくたえしのび，1763年の講和条約でシレジアを確保した。

フリードリヒ2世は啓蒙（もう）思想(→p. 159)の影響をうけ，ポツダム郊外にたてたサン－スーシ宮殿にフランスのヴォルテールを招いたほどで，「君主は国家第一の僕（しもべ）」と称した。そして産業を奨励し，司法制度を改め，法典を編集させるなど，開明的な政策を実行した。しかし一方では，官僚制を整備し，常備軍を拡張するなど，プロシアの絶対主義は王のもとで確立した。このような君主を**啓蒙専制君主**とよぶ。

啓蒙専制王権の基礎　啓蒙専制君主には，そのほか，オーストリアのヨーゼフ2世，ロシアのエカテリナ2世があげられる。啓蒙専制君主が出たのはいずれも後進国であった。たとえば東ドイツでは，土地貴族（ユンカー）が自らの所領内に直営地をつくり，隷属的な農民を使って販売目あての穀物生産を

おこない，同時に政治的な権力をもった。フリードリヒ2世の王権もこの土地貴族の勢力の上にたったもので，後進国として，進んだ西欧諸国に対抗して国家を統一強化するためには，彼らの経済的利益をはかり，政治的な権力もある程度認めざるをえなかった。したがって，農奴制は廃止されず，農民はいぜんとして社会的・政治的に低い地位におかれた。

2. ピョートル1世とロシアの発展

ロシアの発展

ロシアは13世紀いらい，モンゴル人の支配下にあったが，15世紀末ごろモスクワ大公イヴァン3世（Ivan III，在位1462～1505）がキプチャク汗（かん）国から独立し，東ローマ帝国滅亡後のギリシア正教の後継者をもって任じた。雷帝と称されたイヴァン4世（Ivan IV，在位1533～84）は弾圧政治によって貴族勢力をおさえるとともに国家の強大化に努めた。コサックの酋（しゅう）長エルマーク（Ermark，?～1584）はシベリアを征服して彼に献（けん）じた。雷帝の死後，政治は一時乱れたが，1613年混乱をおさめてロマノフ(Romanov)王朝が成立した。

ピョートル1世

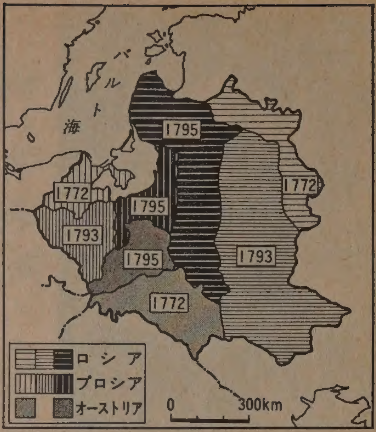
ピョートル1世（Pyotr I，在位1682～1725）(大帝)の治世に，ロシアは急速に国力を高めた。彼は自ら西ヨーロッパを視察して進んだ技術や制度をとり入れることに努め，国力の充実と絶対主義の確立をはかった。国力の充実には商業の振興が望まれたが，ロシアには良港がなかった。そこで彼はバルト海への進出を試み，**北方戦争**(1700～21)でスウェーデンを破るとともに，新都**ペテルブルク**を建設した。これによりロシアはバルト海を制圧する足場を築くとともに，西欧諸国への窓をひらいた。シベリア経営もひきつづきおこなわれ，1689年清朝と**ネルチンスク条約**を結んで国境を定めた。

エカテリナ2世とポーランド分割

彼の事業はエカテリナ2世（Ekaterina II，在位1762～96）にひきつがれた。彼女は啓蒙専制君主として開明的な政策をおこなったが[*]，農業生産力が低く，商品経済の展開が遅れたロシアでは，皇帝権力も地

＊ 彼女もヴォルテールと文通し，ディドローたちに助言を求めたりした。

主に依存し，農奴制は強化されたため，**プガチョフの反乱**(1773～75) などの農民一揆がおこった。そこで彼女は貴族の権力を増大し，官僚支配を強化して治安の維持をはかり，農奴制はさらに固定化された。



ポーランドの分割

対外政策では，地中海に通ずる黒海への進出を企て，トルコと戦ってクリミア半島を確保した (1774)。また西方にも進出し，16世紀後半ヤゲロ王朝が絶えて以来政治の乱れていたポーランドに侵略の手をのばし，プロシア・オーストリアとともに，1772年・1793年・1795年の３回にわたって **ポーランド分割** をおこない，ポーランドを完全に消滅させた。

第８節　17・18 世紀の文化

1.　文 学 と 美 術

文　学

この時代には，代表的な絶対主義をつくり上げたルイ14世時代のフランスと，いち早く市民革命をおこなったイギリスに，それぞれ宮廷的・市民的な文学が生まれた。

フランスでは，宮廷生活の確立とともに，サロンやフランス学士院(アカデミー*)によってフランス語が洗練され，ルイ14世時代にいたって，悲劇のコルネーユ (Corneille 1606～84)・ラシーヌ (Racine 1639～99)，喜劇のモリエール (Molière 1622～73) らの劇作家が現われ，古代文学を手本として理性と節度を重んじる古典主義文学の隆盛がもたらされた。

イギリスでは，ピューリタン革命 (→p. 198) に活躍したミルトン (Milton 1608～74) の「失楽園」，

*　1635年リシュリューの努力により創立された。



自画像　レンブラント作

同じくバンヤン(Bunyan, 1628~88)の「天路歴程」など，ピューリタン文学の傑作が生まれた。名誉革命を経て18世紀にはいると，中産層の堅実な向上を背景に小説がさかんとなり，題材も理性や良識に移っていった。「ロビンソン＝クルーソー」を著わしたデフォー(Defoe, 1660~1731)と「ガリヴァー旅行記」によって知られるスウィフト(Swift, 1667~1745)はその代表者であった。

ドイツでは文学の発達もおくれたが，18世紀末にいたり，ゲーテ(Goethe, 1749~1832)・シラー(Schiller, 1759~1805)らがはげしい感情を表わした「疾風怒濤(シュトルム・ウント・ドラング)運動」をおこした。

美　術　ルネサンスの芸術には節度があり，秩序と調和があったが，やがて芸術はそれを突き破る意欲をみせるようになった。それがバロック(Baroque)芸術で，16世紀末ごろから，まずイタリアで建築様式に現われ，ついで彫刻や絵画にも及んだ。彫刻ではイタリアのベルニーニ(Bernini, 1598~1680)が代表者であり，絵画ではスペインのムリリョ(Murillo, 1617~82)・ベラスケス(Velásquez, 1599~1660)，オランダのレンブラント(Rembrandt, 1606~69)が知られ，とくにフランドルのルーベンス(Rubens, 1577~1640)は激しいリズム感や華麗な表現においてバロック絵画の典型を示した。

バロック芸術はフランスでは絶対主義の隆盛と結びつき，躍動する生命感を理知的な節度の中に吸収して王権の栄光をたたえた。ヴェルサイユ宮殿はその代表作である。そして18世紀には生命感の流動から感覚の洗練へと移ってロココ(Rococo)芸術となり，繊細な装飾趣味となって宮廷を飾った。ロココの画家としてはヴァトー(Watteau, 1684~1721)，ブーシェ(Boucher, 1703~70)らがあげられる。

ロココ様式は建築にも及び，ドイツにも伝えられて，プロシアのサン－スーシ宮殿などが造られた。ドイツはまた音楽においてバッハ(Bach, 1685~1750)・ヘンデル(Händel, 1685~1759)を生み，中世いらいの音楽様式を完成させるとともに，新しい可能性をきりひらいて近代音楽の源となった。

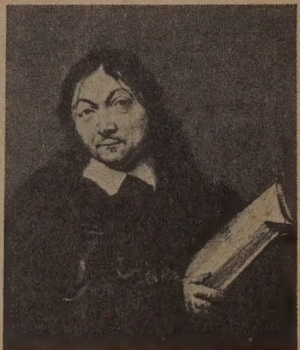
2. 自然科学と哲学

自然科学　市民層の勃(ぼっ)興にともない，産業と実生活の必要にもうながされて，科学は急速な発達をとげた。この時代は，迷信や伝統的考えから脱して，理性と観察にもとづく近代科学の基礎が確立された時期であった。

ガリレイののち，イギリス人ニュートン(Newton 1643～1727)は，天文学・数学・物理学などに偉大な業績をあげ，ことに微積分や万有引力の法則の発見は，近代科学の大きないしずえとなった。「理性の世紀」とされる18世紀には，フランス人ラヴォアジエ(Lavoisier 1743～94)が，燃焼や呼吸の現象を研究し，質量保存の法則を発見して化学の基礎を築いた。またフランス人ラプラス(Laplace 1749～1827)は天体力学を集大成して宇宙進化説を唱えた。生物学ではフランス人ビュフォン(Buffon 1707～88)が生物進化論に先鞭(せんべん)をつけ，スウェーデン人リンネ(Linne 1707～78)は植物分類学を創始した。医学ではイギリス人ジェンナー(Jenner 1749～1823)が種痘法を発見し，免疫接種の基をひらいた。

近代哲学の発展　自然科学の発達にともなって，哲学思想においても理性や経験を重んじる傾向が強まり，また方法論の上でも数学や自然科学の影響が強くみられた。一般に当時の哲学者には，数学や物理学にもすぐれた業績を残した者が多かった。

デカルト



イギリスでは帰納(きのう)法にもとづく経験論が，フランシス＝ベーコンを祖に，ホッブズ(Hobbes 1588～1679)・ロック(Locke 1632～1704)らによって深められていった。これに対し，大陸ではフランスのデカルト(Descartes 1596～1650)が，「われ思う，故にわれあり」のことばを出発点に，演繹(えんえき)法にもとづく理性論（合理論）の立場を確立し，汎神論を説いたオランダ人スピノザ(Spinoza 1632～77)，単子論を唱えたド

イツ人ライプニッツ(Leibniz, 1646~1716)らによって発展させられた。

理性論につちかわれた理性尊重の態度は，18世紀にはいると，時代の中心的風潮となり，啓蒙思想を生んだ。それを経過して，ヒューム(Hume, 1711~76)によって進められた経験論への批判と，ライプニッツにおいてゆきづまった理性論を総合しつつ，理性に対する批判哲学をうち立てたのがカントであった。(→p. 245)なお，フランス人パスカル(Pascal, 1623~62)は「パンセ」などでカトリック的な哲学思想を述べた。

3. 政 治 思 想

国家理論の成立　絶対主義による国家統一の形成とともに，国家や王権に関する理論が生まれた。まずフランス人ボーダン(Bodin, 1530~96)は，立法権を中心とする主権は国家の属性であるとして，主権理論を確立した。この理論の上に，主権者は神から神聖な権利を授けられた国王であると説いて，絶対王権を擁護したのが**王権神授説***である。

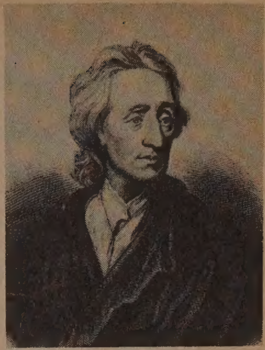
自然法　全人類に普遍的に妥当する自然法は，封建社会では神の法と考えられていた。ところが，合理的な考え方の普及とともに，自然法は，万人共通の理性にもとづく法とみなされるようになった。オランダの**グロティウス**(Grotius, 1583~1645)は，そうした考えをもとに「海洋自由論」や「戦争と平和の法」を著わし，国際法学の父とされる。そして，王権の強大化とともに，その専制化を阻止する根拠として，自然法は以後の政治理論展開の基礎となった。

社会契約説　ホッブズは，自然状態は「万人の万人に対する戦い」であったが，人々は自然法にしたがって契約を結び，自然の権利を主権者にゆだね，したがって主権者の権力は絶対的であるという思想を「リヴァイアサン」のなかで述べた。これに対し，ロックは「市民政府二論」を著わして，人間は生命・自由・財産の自然権を確保

---

* これを唱えた代表者は，イギリスのジェームズ1世(在位1603~25)，フランスのボシュエ(1627~1704)らである。しかしイギリスでは受けいれられなかった。

するため，社会契約によって支配者に権力を委託したにすぎず，支配者がその契約を破って人民の権利を侵したときは，人民はこれを変えることができると説いて，名誉革命を擁護した。彼の理論は，フランスの啓蒙思想やアメリカ独立にも影響を与えた。



ロ ッ ク

啓蒙思想

理性的な傾向の強かったフランスでは，18世紀に，中産層の立場から，理性をよりどころにした社会批判と政治思想が生まれた。それが**啓蒙思想**である。

まずモンテスキュー(Montesquieu 1689～1755)は「法の精神」において，諸国の法律制度を分析し，立法・司法・行政の三権分立を唱えた。つづいてヴォルテール(Voltaire 1694～1778)は，教会の腐敗など社会の現状を鋭く批判した。またディドロー(Diderot 1713～84)・ダランベール(d'Alembert 1717～83)らは「**百科全書**」を編集して，理性的な考え方や知識の普及，社会への批判につとめたが*，彼らの理性万能の態度に対してルソー(Rousseau 1712～78)は感情を重んじて批判した。彼はまた，自然状態を理想と考え，私有財産が不平等発生の原因であり，文明とともに社会は堕落したとして，自然にかえれ，と説くとともに，万人の自由平等や主権在民を主張した。著書には「人間不平等起源論」「社会契約論」などがある。

4. 経 済 思 想

重農主義

国家が商業や工業に介入する重商主義(→p. 144)に対し，やがてフランス・イギリスでは，個人の自由な経済活動を主張する自由主義的経済思想が，自然法思想と結びついて芽ばえてきた。

工業の発達が不十分で生産の中心がなお農業にあったフランスでは，ケネー(Quesnay 1694～1774)やテュルゴー(Turgot 1727～81)が，経済活動の基礎は農業にあり，農業こそが利潤を生む源泉であると説いた。そのため彼らは**重農主義者**とよばれる。彼

＊ 彼らは百科全書派(アンシクロペディスト)とよばれる。

らは，人間は自然を利用する自然権を与えられており，国家はその行使を助けるべきであって，これに干渉してはならないと考えた。ここから「自由放任（レッセーフェール）」というスローガンが生まれ，自由貿易が説かれた。

アダム＝スミス

これに対し，工業生産が諸国に先がけて順調に発展したイギリスでは，産業革命が始まった18世紀後半に，アダム＝スミス（Adam Smith 1723～90）が，「諸国民の富」(「国富論」1776) によって工業の自由放任を唱えた。彼は，農業だけでなく工業をも生産的とみなし，その自由放任による生産力の向上，国富の増大を説いた。またリカード（Ricardo 1772～1823）は生産物の分配法則を追求して「生産物の価値を生む源は労働にある」と考え，のちのマルクスによる労働価値説に影響を与えた。

課　題

1. 西ヨーロッパ世界は，古典古代世界と民族・風土・社会・文化などの点でどのように異なっているか。この章をもう一度読みかえして考えよう。
2. 十字軍をひきおこしたいろいろな原因について考えてみよう。ここで，十字軍の時代が西ヨーロッパ封建社会の最盛期と一致すること，また十字軍が西ヨーロッパ世界にとって最初の対外的な働きかけであったことに注意しよう。また十字軍は，経済上・社会上・文化上，西ヨーロッパにどのような影響を与えたか。
3. 主題学習「西ヨーロッパの都市と農村」を読んで，その特徴を，近世日本と対比しながら考えてみよう。
4. イタリアールネサンスを生み出した原動力と，その後のイタリア社会の発展が遅れた原因について考えてみよう。
5. 封建社会，宗教改革の時代を通して，ヨーロッパにおけるキリスト教の意味，宗教と政治・経済との結びつきについて考えてみよう。イスラム教や仏教の場合はどうであろうか。
6. 絶対主義国家と近代国家との差を考えてみよう。国王だけが主権をにぎる形をとり，近代的国民議会がまだ形成されなかったのはなぜであろうか。

主 題 学 習

西ヨーロッパの都市と農村

小さくまとまる西ヨーロッパ都市

こんにち飛行機から見ればすぐ分ることであるが，西ヨーロッパの都市の景観は，わが国のばあいといちじるしく異なっている。すなわちわが国の場合には，しわだらけに見える山地の間にわずかばかりの平野がひろがり，そこに大都市を中心として様々の建物が，密集し，連なり，散らばっており，どこまでが都市部でどこからが農村部なのかは一向にはっきりしない。見方によっては日本全体が，水平にひろがった一つの都市のようにも見えるであろう。これと対照的なのが西ヨーロッパの都市である。それはちょうど，大海原の田園地帯に点々と浮かぶ小島のごとく，農村部とははっきり区別される輪郭を持ち，まるい水滴のように凝集的で立体的である。日本の拡散的・水平的な都市のあり方との相違は，どこから生じたのであろうか。

都市と封建社会

西ヨーロッパの都市が誕生したのは，12～13世紀のことであった。この時期は，西ヨーロッパ世界がひとつの独自な性格をもつ地域文化圏として形成され，出発した大事な時期である。そして同時に，封建社会が本格的に成立し，集村による農村共同体が形成されたときでもあった。その意味を少し考えてみよう。

当時の都市は，あつい城壁でとり囲まれ，周辺の農村から保護されていた。その内部には，農村とは違った特別の法と平和が支配し，都市民だけが国王や大諸侯から自由身分を与えられていた。ここでの都市は，日用品・生活必需品の工業製品を生産し，交換する場として初めて登場したものであり，その点では近代の都市と共通した性格をもっている。したがって都市の経済は，人（生産者や商人）と物（原料や製品）と技術を，できる限り広い範囲で，またできるだけ活発に，交換し合うことによって発展する開かれた性質をもっており，農村の経済のように，土地

との結びつきを不可欠とする，閉ざされた性質のものではない。

農村に奉仕する封建都市

しかしながらそれにもかかわらず，封建社会での都市はあつい城壁に固められ，農村と同じく地方的な，閉ざされたあり方を示していた。それは第一に，西ヨーロッパの農村が三圃農法などにより，わが国の農村よりもはるかに共同体としてのまとまりが強く，この農村を支配し防衛する立場にあった封建貴族は，農村に不可欠な塩・鉄・染料などを入手するため，商品交換の拠点である都市を支配下におこうとして，互いに激しく戦い合ったからであった。都市はできるだけ小さな形でかたく守られねばならなかったのである。都市はいきおい上へ上へと伸び，なかでもひときわ高いカテドラルやギルドホールは，都市民の心のよりどころであった。

第二に，都市民の食料はもちろん，当時の工業原料は，主として農産物からなっていたから，都市は周辺の農村から離れることができなかった。当時の都市は土地と強く結びつき，農村のために農器具や生活必需品などの工業製品をつくって農村に奉仕し，農村に支配される存在であった。商人や手工業者がギルドを作って経済活動に従事したのも，農村共同体のあり方が都市に強く作用したためであった。

わが国との対比

西ヨーロッパの諸都市の大半が今日にいたるまで面積・人口ともに小規模の凝集的・立体的な姿で点在せざるをえなかったのは，都市と農村との対立，ないしは農村による都市の封じ込めがいかに長い間にわたってつづけられたかをよく物語っている。

18世紀前半，江戸はすでに100万の人口を擁し，京都・大阪も50万～40万ていどの都市人口があったのに対し，同じころのヨーロッパで40万人以上の都市はロンドンとパリの二都市だけであった。ほかに20万以上としてはナポリ，また10万以上としてはアムステルダム，ローマ，ベネチア，ミラノ，マドリッド，ウィーンなどがあったにすぎない。日本の都市が農村との明確な対立関係には立たず，水平に広がっていったのに

対して，西ヨーロッパ諸都市は，限られた範囲内で垂直に発達した，文字通り人工的な施設であった。今日でも，たとえばパリの人口と面積は，東京23区のそれぞれ4分の1か，5分の1にすぎない。

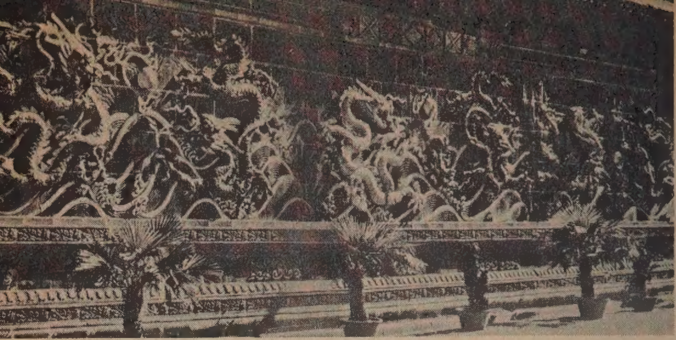
農村と戦う近代都市

都市の城壁は，いま南フランスのカルカソンヌや南ドイツのローテンブルクなどに，往時の美しい姿(→口絵)をよくとどめている。しかしながら大半の都市では，城壁は封建社会の崩壊期以降，ときとともにくずれるに任せられた。それは，都市の成長とともに都市間の結びつきが強められ，その結果，絶対主義いらい形成される国民国家が，あらたに都市にとっての見えざる城壁となったからであった。

市民は，国王と手を結んで成長し，地方的な農村の支配から脱して広い範囲に市民の経済秩序と政治体制をうちたてるために，農村社会の現実と激しく戦った。この戦いのために彼らが手にした普遍的・世界的な精神的武器が，17世紀のデカルトに始まる合理主義思想であり，またそれにもとづく近代市民社会の理念であった。19世紀にいわゆる「西ヨーロッパの世界化」が出現するのは，この普遍的・世界的な武器のゆえである。市民革命により完成された19世紀国民国家と近代市民法は，長期にわたった都市と農村との対立と抗争が，ついに都市の勝利に帰したことを示している。

広がる地平線

20世紀後半の高度産業社会の段階にいたって，都市も農村も大きく変貌(ぼう)し始めた。それぞれの閉鎖的，地方的な姿は消え，かつて点と線の関係でしかあらわされなかった都市の原理は，あらたに面としてのひろがりを持つにいたった。西ヨーロッパの各地にはメガロポリスが形成されつつあり，また欧州経済共同体(ＥＥＣ)の成長とともに，個々の国民国家の主権性，独立性は弱められ，あらたに欧州連合ないしは欧州合衆国への途が開かれようとしている。これらは，かつての国民国家をこえた新しい「都市時代」の到来を予告するよい例証といえよう。



北京の九龍壁

第5章　アジアの専制国家

14世紀にはいると，東アジアでは明朝が漢民族の主権を回復し，西アジアではオスマン国家が強力となり，モンゴルの支配をうけなかったインドにもムガール朝が成立した。これらの王朝は，各地域の伝統をうけつぎながら，専制権力のいっそうの強化をはかることによって，それぞれ強盛を誇った。オスマン国家のスルタンは，カリフの地位をも兼ねることによって西アジア統治の正統性を確保し，ムガール朝はヒンドゥー的社会秩序の上に立つイスラム支配を築きあげた。中国では，明・清両王朝とも，儒教的皇帝政治の伝統をうけついだ。しかもこれらの諸地域では，このころに農村のしくみの変化や手工業の発達がみられ(→p. 170, 177, 179)，各王朝はそれぞれの地域の伝統によりながらも，さらにそうした動きに対応する新しい支配体制をつくりあげていった。

19世紀にはいると，産業革命を経た欧米諸国は原料・市場を求めて，たがいに角逐を続けながら，アジア諸地域に進出してきた。オスマン国家の解体，インド，東南アジアの植民地化，中国の相つぐ敗戦というように，欧米諸国の前に次々と屈服していった。しかしその過程を通して，イランのバーブ教運動，インドのセポイの反乱，中国の太平天国がほぼ時を同じくしておこり，欧米諸国への抵抗，国内封建勢力への戦いを続けた。それらの運動はその後のアジア民族運動の種子となっていった。しかし欧米諸国はこうした抵抗を打破しながらアジア諸地域を分割し，勢力範囲を設定し，帝国主義世界を現出するのであった。

第1節　オスマン－トルコとムガール帝国

1.　オスマン帝国

チムールの帝国　モンゴル帝国の崩壊とともに，西アジアには広大な地域を統一したチムール（Timur 1336～1405）の帝国が出現した。チムールはチャガタイ汗国の一部将で，チンギス汗の子孫と自称し，モンゴル系イスラム教徒であった。彼はイスラム化したトルコ人の部下を率い，サマルカンドを都としてチャガタイ汗国，イル汗国の領域を統一し，キプチャク汗国や北西インドへも遠征して，中央アジア・西アジアにまたがる大帝国を建設した。また，小アジアで勢力を増していたオ



15世紀初めのアジア



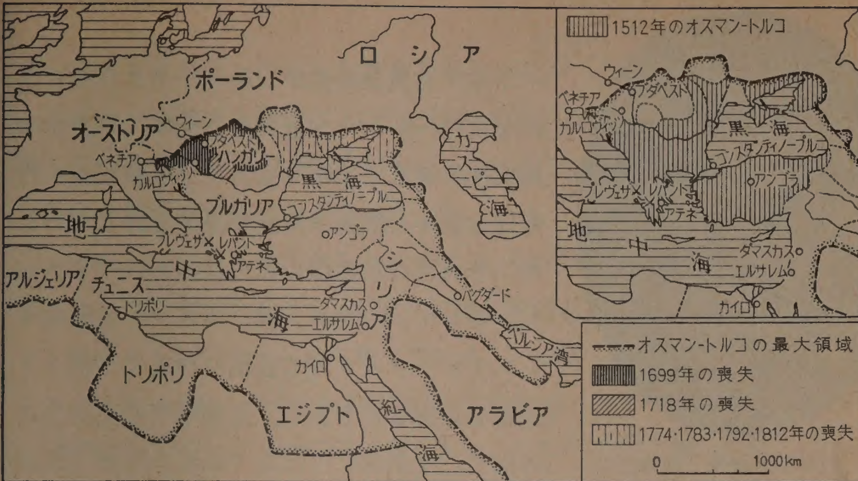
恋する少女(細密画)　サファヴィー朝の全盛をいろどったレザー=アッバースィーの作。

スマン-トルコを**アンゴラの戦い**(1402)で破り，オスマン国家の発展を一時中断させた。ついで明と決戦を企てたが，東征の途上で病死した。彼の死後も，東西交通の要地サマルカンドを中心にイスラム的貴族文化の花がひらいた。しかし各地の支配者に貢納を約束させただけであった帝国の支配は，しだいに解体に向かった。そして16世紀には中央アジアにトルコ系ウズベク族のボハラ汗国・ヒヴァ汗国がおこり，ややおくれてコーカンド汗国がたてられた。ペルシアでは**サファヴィー朝**　(1502～1736) がおこり，シーア派が国教とされ，ペルシア語が国語とされて，イラン人の国家として自立することになった。

オスマン帝国の発展　オスマン-トルコは13世紀末に小アジアからおこり，バルカンに進出した。一時はチムールの攻撃によって危機におちいったが，チムールの死後，その帝国の衰弱に乗じて再び勢いをもりかえし，コンスタンティノープルを攻め，1453年ついに**東ローマ帝国**を滅ぼした*。16世紀初めまでに黒海周辺を制圧してクリミア汗国を服属させ，サファヴィー朝ペルシアを圧迫し，エジプトのマムルーク朝を倒した。トルコ人のスルタンは，カリフの称号を得て，スンナ派イスラム教徒全体の指導者となり，**スルタン-カリフ制度**が成立した。こうしてオスマン帝国は，セルジュク帝国いらいのトルコ族の社会制度を発展させ，ビザンティン文化をうけつぎながら，イスラム世界帝国を完成させたのである。

---

* 彼らはこれ以後，コンスタンティノープルをイスタンブールと改名し，首都に定めた。



オスマン帝国の拡大と縮小

オスマン帝国はスレイマン大帝（Sulayman I 在位 1520～66）のもとで絶頂期を迎えた。東ヨーロッパの国々まで領土に加え，ウィーンを包囲して，ヨーロッパ諸国に大きな衝撃を与え (1529)，さらにスペイン・ベネチア・ローマ教皇の連合艦隊を破って，地中海の制海権を獲得した（プレヴェザの戦い 1538)。こうして，アジア・ヨーロッパ・アフリカにまたがる大帝国を維持し，法制を整備し，軍備を増強し，学芸に厚い保護を加えるなど，内政面でも業績をあげた。宰相以下の官吏に一定の土地と人民の支配をまかせ，それとともに軍役を義務づける体制が，国家機構の支柱であった。

東西貿易の要地をおさえたことは，オスマン帝国に巨大な利益をもたらしたが，それはヨーロッパ人のアジア進出を刺激する一因ともなった。(→p. 131)

軍事組織　軍役を課せられた領主たちは，騎兵軍団を構成した。またキリスト教徒の少年を選抜し，イスラム的訓練を施して養成した帝国直属の常備歩兵軍団イェニ-チェリは，16世紀まではヨーロッパ最強の軍団であった。

オスマン帝国の衰退　オスマン帝国は，スペイン・ベネチア連合艦隊にレパント沖の海戦(1571)で敗れて制海権を失い，また新航路発見による貿易変更で，経済的利益を失った。その上，政治の腐敗や軍隊の質の低下のため，国家の統制力がしだいに弱まってくると，ヨーロッ



アクバル太帝　18世紀の細密画

パの絶対主義諸国家から逆に圧迫されるようになった。オスマン帝国の支配は，異教徒や異民族に対して比較的寛大で，少数民族の自治権を認め，宗教や習慣の保持を許していたが，それだけに帝国の統一は破られやすかった。そして，17世紀以後，オスマン帝国はロシア・オーストリアの進出に対して，次々と後退を余儀なくされた。貴族の享楽生活などの面で，文化的にははなやかにいろどられたこの時期[*]に，暗いかげがさし始めていた。

2. ムガール帝国

ムガール帝国の成立　12世紀の末，イスラム教徒のアフガン人が北インドを征服し，ついで奴隷王朝に始まるデリー諸王朝の時代[**]，この地方には異民族の支配がつづいた。支配者はヒンドゥー教を圧迫し，イスラム教を強制したので，激しい対立がおこり，政治的混乱がたえなかった。

16世紀になると，チムールの子孫と称するバーブル（Babur，在位 1526～30）がインドに侵入し，アフガン人の支配者を倒し，まもなく，この地に **ムガール帝国** を建設した (1526)。彼の孫アクバル（Akbar，在位 1556～1605）はヒンドゥー教徒のラジプト族を征服し，アグラを都として北インドの主要地域に安定した政権をうちたてた。

アクバルはイスラム教徒であったが，イスラム教徒とヒンドゥー教徒の対立をやわらげるため寛容政策をとり，人頭税（ジズヤ）を廃止するなどヒンドゥー教徒に対する圧迫を除いた。また，イスラム・ヒンドゥー・ゾロアス

---

* オスマン帝国のもとで歴史編纂（さん）や詩・工芸・建築が発達した。18世紀初めにはチューリップが広く愛好され（チューリップ時代），貴族は別荘での饗（きょう）宴を楽しんだ。

** 13世紀初めから320年間，イスラム系の5王朝がデリーを都とした時代。

ターなどの諸宗教を折衷した新宗教を始めたが，これは失敗に終わった。

ムガール帝国の全盛期は17世紀前半までであったが，この間，綿織物・奢侈(しゃし)品などの生産・取引を中心とする商工業の発達，デリーやダッカなどの都市の繁栄がめざましかった。ペルシア風の建築様式や細密画(ミニアチュール)がうけ入れられ，イスラム文化がインド固有の文化と融合して，はなやかなインド-イスラム文化が開花した。その面影は，ムガール絵画やタージ-マハル廟(びょう)(→口絵)に残っている。

ウルドゥー語　帝国の公用語はペルシア語であったが，北インドの口語を基礎としてペルシア語の語彙を多く含み，アラビア文字で書かれるウルドゥー語(現在のパキスタンの国語)が発展し始めた。

ムガール帝国の衰退　第6代皇帝アウラングゼーブ(Aurangzeb，在位 1658~1707)は領土拡張に熱心で，その時代に帝国は最大の領域を獲得した。しかし，彼は寛容策を全くすてて，イスラム教を強要し，他の宗教を圧迫した。財政難と帝位継承をめぐる争いは国勢を著しく弱め，ヒンドゥー教徒の反乱は統治機構を根本から動揺させ始めた。18世紀のムガール帝国は，マラータ同盟*やシク教徒**の台頭によって，いよいよ分裂と衰退の勢いを強めた。(→p. 179)

ムガール帝国のインド支配の発展と並行して，ポルトガル・オランダ・イギリス・フランスが次々に進出してきた。各国は，それぞれ商館をたてて商業活動をおこない，激しい競争を展開していた。しかしムガール帝国の弱体化につれて，インドはやがて，植民地へ変わっていくことになる。しかもカストが細分化し，宗教的対立や政治的混乱が激化したために，インドでは，商人や手工業者も十分に成長できず，カルカッタのような外国の商業根拠地に経済の中心が移り始めた。インドの社会の土台は，いぜんとして自給自足の閉鎖的な村にあった。

---

* マラータ同盟は，デカン高原の西部に住むヒンドゥー教徒のマラータ人王侯の同盟で，デカン地方を統一し，デリーを攻撃して(1737)強勢を誇った。

** シクは16世紀いらいパンジャブ地方で，とくに下層カストの間に拡大した新興教団で，イスラムの教えをとり入れてヒンドゥー教を改造したもの。

第2節　明・清時代の東アジア



魚鱗図冊　一区切りずつの土地をかきつらねた形が魚のうろこに似ているのでこの名が出たという。

1.　明代の東アジア

明の統一　元朝に対する反乱の中から台頭(→p. 90)した朱元璋(太祖洪武帝)(在位 1368～98)は1368年金陵(南京)を都として明をたて，やがてモンゴル勢力を中国全土から一掃して，漢民族の主権を回復した。

洪武帝は王子20余人を国内要地に分封して王とし，明の安泰をはかるとともに，行政機構に種々の改革を加え，権力が一部の官僚に集中するのを防ごうとした。中央では中書省を廃し，元朝以後これに属していた六部を独立させて皇帝の直属とし，地方各省には，皇帝直属の軍事・行政・監察官を並立させて，互いに牽制させた*。また，唐からの律令を改め，大明律・大明令(のち改編されて大明会典)を制定した。

彼はまた戸籍を軍戸と民戸などに分け，全国的に**魚鱗図冊**とよばれる土地台帳をつくり，戸口を調査して**賦役黄冊**とよばれる賦税台帳を整備して，徴税・賦役をおこなった。さらに村落を**里**・**甲**に編成して，徴税や治安に役だたせ，**六諭**を公布して民衆の教化をはかった(**里甲制****)。

洪武帝の死後，孫が即位すると，その叔父の燕王が反乱をおこし(靖難の変)，南京を攻略して成祖**永楽帝**(在位 1402～24)となった。永楽帝は都を北京に移し，

---

* ただしこの制度は永続せず，やがて中央には内閣ができて，殿閣大学士が宰相に近い権力をもつようになり，地方にも長官として総督・巡撫がおかれるようになった。

** 110戸を単位として，うち10戸を里長戸，他の100戸を甲首戸とし，毎年輪番で里長・甲首となり，里甲内の徭役の割当や田租の運送にあたる制度。

万里の長城を大規模に築造して北方民族の侵入に備えた。また四書五経の注釈を集大成し，科挙を通じての思想統制に役だたせるなど，明の支配の基礎固めができあがった。

明初の対外発展

モンゴル高原に退いた元（北元）は，洪武帝の討伐によって衰弱したが，やがて**タタール部**として勢力を回復し，高麗とも結んだ。永楽帝は自ら北征してタタール部を破り，さらに西モンゴリアの**オイラート部**をも撃破した。また，黒龍江下流方面にまで支配をのばして，女真人をおさえ，高麗のあとにおこった**李氏朝鮮**をも服属させた。南方では安南（陳朝）・雲南・ビルマを服属させ，チベット・ネパールなどをも朝貢させた。

鄭和の遠征

永楽帝はまたイスラム教徒の宦官**鄭和**に命じて大船隊を率い，東南アジア・セイロン・インド南岸・ペルシア湾・アラビア・アフリカ東岸にまで，前後7回にわたって遠征させ，明への朝貢をうながした。しかしこの企ては，ほぼ永楽帝一代でうちきられ，継続的な発展をみずに終わった。

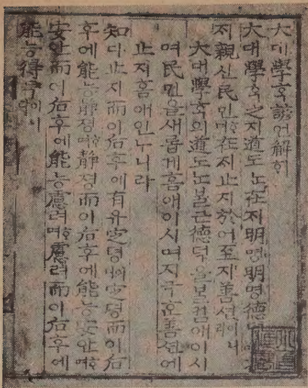
李氏朝鮮の成立

元に服属したころから，高麗は沿岸を**倭寇**に荒らされて苦しんだ。中国本土で元が北方に追われた時，高麗では親明派と親元派に分かれて争ったが，やがて倭寇討伐で名声を得た**李成桂**（李朝の太祖 在位 1392～98）が，親明派を率いて**朝鮮**を建国した。

朝鮮はやがて明の属国となり，明にならって官僚制度を整備し，儒教（朱子学）を国教とした。銅活字による活版印刷もさかんとなり，15世紀中ごろには**ハングル**（訓民正音・諺文）とよばれる表音文字が発布された。しかし，政治は**両班**とよばれる名門官僚層*が官職を独占し，党争が激しかった。16世紀末の豊臣秀吉の侵入（文禄の役・慶長の役）は，明の救援と秀吉の死によって救われたが，やがて17世紀前半には清軍の侵入をうけ，その属国となった。

---

* 高麗時代いらいの文武の世襲官僚で，文班と武班に分かれていたので，この名がある。李朝の官位を占めると同時に，地主・高利貸としても絶大な権力をふるった。



大学諺解（げんかい） 「大学」の漢字音を諺文でしるし，節ごとに注がついている。1585年刊。

倭寇と日明貿易　倭寇は 14 世紀後半に，高麗沿岸や，江南の沿海地方までも襲った。明は海防設備を設けると同時に，室町幕府に倭寇の取り締まりを要請し，15世紀前半には，日明間の**勘合貿易**がおこなわれて，倭寇は一時おさまった。博多（はかた）・堺（さかい）などの商人は，有力な守護大名の支持のもとに，勘合符を持って寧波（ニンパウ）におもむいて取り引きをおこなった。16 世紀にはいると，明船は平戸に来航して銀などを買い入れたが，やがて明が海外との往来を禁止すると，沿海の中国商人は日本商人と結んで，密貿易をさかんにおこなった。これがいわゆる後期倭寇で，明は結局商人の出航を許可せざるをえなくなった(1567)。

明の衰退　永楽帝以後，明では幼少の皇帝が立つようになり，宦官（かんがん）が勢力をのばして，官僚内部の党争も激化した。北方ではオイラート部が長城を越えて侵入し，1449年，エセン汗は英宗（在位 1435～49）を捕えた(土木の変)。16 世紀にはいると，再興したタタール部が強力となって明を圧迫し，東南海岸の倭寇もふたたび活発化した(**北虜（りょ）南倭**)。

このころになると，里甲制にもとづく課税・賦役は，農村の階層分化にともなって実情に合わなくなってきた。そこで 16 世紀なかばごろになると，州・県ごとに田賦（でんぶ）と徭（よう）役の総額を算出し，それを一括して毎年銀納させる**一条鞭（べんぽう）法**という新税法が，おこなわれ始めた。これは両税法いらいの大改革で，清代の地丁銀にうけつがれた。(→p. 177)

明の国力は万暦帝（在位 1572～1620）(神宗)の時代，張居正（1525～82）によって一時回復したが，彼の死後は各地に内乱がおこった。そのうえ，朝鮮に援軍を送るために，各種の増税を強行した結果，農民は窮乏して流賊が横行し，宦官勢力と東林（とうりん）党(→p. 174)官僚グループの対立もさらに激化した。その間，満州では女真人がおこって北辺に迫りつつあった。この情勢の中で，**李自成**（1606～45）の率いる農

民反乱軍は 1644 年北京をおとしいれ，皇帝は自殺して明は滅亡した。



鉄の精錬（「天工開物」より）右手の炉で，ふいごの風を送りながら鉄鉱をとかし，左手の四角なはこに送り，柳の棒でかきまわして鉄をつくる。

経済の発展

明の中ごろになると，華中・華南では米の二毛作が盛んになり，農業生産力が向上したが，とくに江南の都市や周辺農村では，すぐれた技術の絹織物・綿織物工業が成長した。16世紀以後になると，外国貿易にともなってメキシコや日本から銀が流入*し，国内の銀も増産されて，銀による**貨幣経済**が農村にまで浸透した。一条鞭法もこのような状況を背景にしていた。貨幣経済の進展とともに商業活動も活発となり，山西省出身の**山西商人**や安徽省出身の**新安商人**は，全国的規模の商取引をおこなった。商人は都市に，出身地別の**会館**，業種ごとの**公所**などの組織をつくり，取り引きの便宜をはかった。大地主や官僚で，外国貿易や国内商業に関係する者も多く，江南では農村を離れて都市に住む地主もふえた。**

明末になると，福建方面の住民の中には，海禁政策を犯して南洋各地に渡り，密貿易に従事する者がふえた。これら南洋華僑は，同じ時期に発展した南洋日本町と異なって，その土地で根強い生活力をもち，現在にいたっている。

明代の文化

明代には朱子学者の説を集めた「四書大全」・「五経大全」などが編纂され，科挙試験のための経書解釈の基準が定められ，朱子学は出世のための学問に形式化した。これに対して明の中

---

* 最初に来航したポルトガル船（1517）はマカオを根拠地とし，スペイン人はマニラによって中国貿易を始め，絹・茶・陶磁器などを買いつけて，銀で支払った。オランダ人は 1604 年に来航したが，通商の目的を達しえず，倭寇が開拓した台湾を根拠地とした。しかしここもやがて鄭成功に追われた。

** 明末ごろになると，佃戸の地主への隷属性が弱くなり，地主に小作料を納めるだけの関係となった。佃戸が共同して小作料納入を拒否する抗租運動が盛んになった。



万暦赤絵　神宗（1572～1620）の年号をとったはでな五彩の磁器。

期に出た王守仁(1472～1528)(陽明）は，宋の陸九淵の禅的な悟りを重んずる学風の影響をうけ，「心即理」「知行合一」などを説いて，人間の心のはたらきと実践とを合致させようとした（**陽明学**)。陽明学派は，のちに，心の自由を極端に強調して反権威思想を展開した李贄(1527～1602)(卓吾）の一派と，空論を排して現実の政治・社会に有用な学問(経世致用の学）を重視する一派とに分かれた。後者は明末の東林党*の黄宗羲(1610～1695)・顧炎武(1613～1682)らにつながるが，彼らは明が滅んでのちは清朝に仕えなかった。

明中期以後の経済発展を背景に，実用的な学問も発達した。薬学・植物学では李時珍(1518～93)の「本草綱目」，農学では徐光啓(1562～1633)の「農政全書」，各種の産業技術を図解した宋応星(1590ころ～1650ころ)の「天工開物」，銃器の研究書「神器譜」が編纂された。また明末に渡来したイエズス会宣教師によって，ヨーロッパの数学・天文学・地理学などが紹介された。マテオ=リッチ(Matteo Ricci, 1552～1610)(利瑪竇）は「天主実義」を著わして中国人にキリスト教を説くとともに，徐光啓らとともに「幾何原本」を訳し，世界地図「坤輿万国全図」を刊行した。アダム=シャール(Adam Schall, 1591～1666)(湯若望）は清朝時代まで欽天監監正（天文台長）をつとめ，学術の普及に努力した。

宋・元いらいの庶民文学も発達し，「西遊記」・「三国志演義」・「水滸伝」が完成され，「今古奇観」・「金瓶梅」などの小説も出版された。絵画には南北二宗があり，北画(院体画系)では仇英，南画(文人画系)では董其昌(1555～1636)が出た。工芸では，**景徳鎮**で染付・赤絵の名器がつくられ，遠くヨーロッパにも輸出された。

---

* この名は紅蘇無錫の東林書院で講義する顧憲成を慕って集まった在野勢力に由来する。

2. 清朝の中国統治

清の統一 満州東・北部に住む女真人は，金の滅亡後は元・明に服属していたが16世紀後半にいたり，建州部の長ヌルハチ(1559～1626)は女真人を統一し，八旗*の軍隊を編成して南満州に進出し，国号を金(後金(こうきん))と称した(1616)。その子太宗(在位1626～43)はモンゴル高原のチャハル部を征服して，国号を清と改め(1636)，投降した漢人を積極的に登用して中国風の官制を整えるとともに，朝鮮に出兵してこれを属国とし，長城地帯に迫った。1644年，北京が李自成の軍に占領されると，北辺防備の将軍呉三桂(1612～78)は清に降服し，清軍は長城を突破して北京に入城し，李自成を追った。清朝は租税の減免や科挙の実施によって民心の安定をはかるとともに，華南に残存している明室の一族や流賊の討伐をつづけ，1661年中国の統一を達成した。この間に清朝は，女真人の風習である弁髪(べんぱつ)を漢人に強制し，反満的な思想を弾圧した。



清の銀貨(上)と馬蹄銀(ばてい)　明朝の末から清朝の初めごろ，ヨーロッパとの貿易で銀が中国に流れ込んだ。銀は馬蹄の形に鋳(い)つぶされて，秤量(ひょうりょう)貨幣として用いられることも多かった。

清朝ははじめ，呉三桂以下の有力な降将を，雲南・広東・福建の王に封じて優遇したが，康熙帝(こうき)(在位1661～1722)が即位すると，この三王が連合して清朝への反乱をおこした。康熙帝はこの三藩の乱(1673～81)をたくみに処理し，さらに台湾によって明朝復興の運動をつづけていた鄭成功(ていせいこう)(1624～62)一族の抵抗を鎮圧して(1683)，清朝の基礎をかためた。その後，雍正帝(ようせい)(在位1722～35)を経て乾隆帝(けんりゅう)(在位1735～95)にいたる3代130年の間に，清は満州・中国・台湾を直轄領とし，モンゴリア・青海・東トルキスタン**・チベットを藩部とし，朝鮮・安南・シャ

* 女真人の部族制度にもとづいて編成された8軍団。

** ズンガル部を討ってできた準部と，イスラム教徒を従えて設けた回部をあわせて新疆(きょう)と名づけられた。



清代のアジア

ム・ビルマを属国とする大帝国となった。その間清朝統治を脅かす周辺諸民族の侵入やヨーロッパ人の圧迫もなく，中国伝統文化に対する自尊心(中華思想)はいっそう強固になった。

清の官制　清は官僚機構を明からうけついだが，中央官庁の定員を偶数にして，満人と漢人を併用した。満・漢ほぼ同数の大学士より成る**内閣**が政務の最高機関で，六部を統轄したが，実権は満人の議政王大臣がにぎっていた。のち雍正帝がズンガル討伐作戦のため設けた**軍機処**が最高機関となり，満人の軍機大臣が実権をにぎるようになった。モンゴリアなどの藩部の統治は**理藩院**が統轄した。軍制では満人八旗のほかに蒙古八旗・漢軍八旗も編成されたが，漢人からの募集兵によって**緑営**を編成し，地方の治安維持にあたらせた。

清代の経済と社会　明中期いらいさかんになった手工業生産や銀の流通は，清代にはいっていっそう発展した。国内では大規模な商業取引がおこなわれ，主要都市には明代にひきつづいて会館・公所が

設けられた。清初は海外貿易を禁じていたが，鄭氏一族を滅ぼしたのち，マカオなどを開港した（1684）。しかし，18世紀なかば以後は広東（カントン）（広州）のみが外国貿易港に指定され，公行（コーホン）とよばれる一群の特許商人が貿易を独占した。貿易相手国も，しだいにイギリス一国にしぼられ，絹・茶・陶磁器が輸出された。とくに茶の輸出額が増加したため，多額の銀が流入した。なおシベリアを東進したロシアとの間には，**ネルチンスク条約***(1689)，**キャフタ条約**(1727)を結んで，国境を定め，通商上のとりきめをした。



マテオ＝リッチと徐光啓
1667年アムステルダムで刊行された「支那（しな）図説」のさし絵。左がリッチ，右が徐である。

18世紀にはいると，租税の銀納化はいっそう簡便化された。明末から施行された一条鞭法は，丁賦（人頭税）と地租（地税）を基本にしていたが，雍正帝の時に，丁賦を地租の附加税にくり入れてしまう**地丁銀**制度が確立した**。これによって中国の伝統的な税源の一つであった人頭税が廃され，課税対象は土地所有額のみにしぼられることになった。

康熙・乾隆時代は清朝の全盛期で，国庫収入も豊かであったが，すでに官吏は中央・地方を問わず腐敗していた。高官は私財を蓄積し，退官後も**郷紳**（きょうしん）とよばれて権勢を保った。また，下級官吏（胥吏（しょり））は，官と民の間にあって中間搾取をほしいままにし，中小地主や自作農の没落を早めた。清朝政権に寄生する満漢の特権官僚・地主層と一般農民とのへだたりは，19世紀にはいるとますます大きくなり，揚子江中流地方には**白蓮**（びゃくれん）

---

* ネルチンスク条約は，中国が外国を対等の相手国とみて結んだ最初の条約である。それまでは中国側は外国貿易を，相手国の中国への「朝貢」とみなしていた。

** 康熙50年（1711）の丁男数を固定数とし，各県ごとに，その丁賦額を地租の附加税として合算した。



粉彩人物図連瓶　乾隆時代の作。ギリシア神話のパリスの審判を題材とし，カスティリオーネが下絵を書いたという説もある。磁器製作の精巧さを示すとともに，西欧文化の流入のあとを物語る作品である。

教徒の乱(1796～1804)，華北には天理教の乱*(1813)が続発した。**太平天国の乱**(1850～64)も，このような反乱の発展したものである。(→p. 185)

清代の文化　清朝は漢人の反清思想を警戒して，しばしば**文字の獄**とよばれる思想弾圧をおこない，数百種の「禁書」を指定したが，その反面，「康熙字典」・「古今図書集成」・「四庫全書」などの大規模な編纂事業をおこして，中国の伝統文化への理解を示した。これらの編纂事業は，民間学者の古書研究熱を刺激し，17～18世紀にかけて，**考証学**とよばれる綿密な文献学がさかんになった。

庶民文学は明代にひきつづいてさかんで，戯曲には，「長生殿伝奇」・「桃花扇」，小説では満人貴族の生活に取材した曹雪芹の「紅楼夢」，学者の腐敗をあばいた「儒林外史」，蒲松齢の妖怪物語「聊斎志異」などが書かれた。

明末いらいのイエズス会宣教師によるヨーロッパ文化の導入も，ひきつづきみられた。マテオ=リッチやアダム=シャールにつづいて**フェルビースト**(Verbiest 1623～88)(南懐仁)は，暦学・天文学・数学・砲術などを伝え，**ブーヴェ**(Bouvet 1656～1730)(白進)らは中国全土を実測して「皇輿全覧図」を作成した。さらに，**カスティリオーネ**(Castiglione 1688～1766)(郎世寧)は西洋画法を紹介し，**円明園離宮**の設計に加わった。

イエズス会宣教師は姓名・衣服・言語を中国風に改め，布教にあたっても中国人の習俗に妥協的であった。そこで，彼らとのちに中国に渡来したフランシスコ派・ドミニコ派などの宣教師との間に，中国人の祭天の儀礼を認めるか否かの論争(**典礼問題**)がおこった。18世紀初め，ロー

＊　天理教は白蓮教系の秘密結社で，1813年反乱をおこし，一部は北京城内に潜入した。

マ教皇はイエズス会の布教方法を非とする結論を出したが，清朝側はイエズス会士のみを認め，やがて雍正・乾隆時代には，学芸・技術によって宮廷に仕える者以外の宣教師は追放された。*

考証学　清代には，音韻・制度・歴史・地理・暦学・金石などあらゆる分野にわたる細密な古典研究がおこなわれた。戴震（たいしん）(1723〜77)・銭大昕（せんだいきん）(1728〜1804)はその代表的学者である。考証学の端緒は明末清初の顧炎武ら(→p. 174)にあるが，清朝中期の考証学者になると，顧炎武の「経世致用」の精神が失われ，古典の詮索（せんさく）に専念した。

第3節　列強の進出とインド・イスラム諸国の変動

1.　インドの植民地化

ヨーロッパ列強のアジア進出　15・16世紀くらいまでヨーロッパ・アジア両文化圏は，商業上・文化上の交流や人間の往来はあったものの，ほぼ独自に発展をとげ，その交流は対等の対場に立っておこなわれてきた。ところが17世紀から本格的に開始されたヨーロッパ諸国の進出は(→p. 150〜151)，経済的・政治的にアジア諸国を植民地化しようとしたため，対等の立場がくずれてアジア諸国がヨーロッパ勢力に服属させられるようになった。

18世紀後半のイギリスから始まって，19世紀前半に他の諸国にも及んでいった産業革命(→p. 213)により，ヨーロッパ諸国が資本主義化し，工業生産が高まると，製品の販売市場や原料の供給地としてアジアの役割はいっそうう重要になった。19世紀後半には，ビスマルクの外交(→p. 235)，ナポレオン3世の遠征(→p. 226)，ロシアの南下政策(→p. 237)など，国際政治が緊迫して，政治的・軍事

---

* 典礼問題をめぐる論争を通じて，中国の習俗に関するヨーロッパ人の関心が高まり，17〜18世紀のフランス宮廷では，中国の美術品が愛好された。ヴォルテールらは，当時のフランス絶対王政批判の武器として，中国の儒教的官僚政治に関心と尊敬を寄せた。

的見地からアジアに進出する動きもうながされた。19世紀には，イギリスによるインドの植民地化が完成し，また，フランスはインドシナに侵入した。列強諸国の利害が鋭く対立したエジプトやバルカン方面では，オスマン帝国（トルコ）が解体されて領土を失い，清朝末期の中国はイギリスを先頭とする諸国の圧力に屈して領土の割譲や開港をよぎなくさせられた。このように，ヨーロッパ勢力のアジア進出はきわめて露骨になり，アジア諸国民はこれらの列強の支配や重圧に苦しむとともに，政治や社会の面においても深刻な影響をこうむるにいたった。

イギリスへの従属

18世紀のムガール帝国は，マラータ同盟・シク教徒などインド内部の反ムガール勢力や，イギリス・フランスなど外国勢力の激しい競争の場となったが，結局，指導権をにぎるにいたったのはイギリス東インド会社であった。

七年戦争後，東インド会社はベンガル地方で実権をにぎり，総督のもとに徴税権・行政権をも手中におさめ，インド内部の分裂や動揺を利用しつつ，次々と各地を併合・征服していった。マラータ同盟やシク教徒などの抵抗も壊滅し去り，有名無実化したムガール皇帝は，会社の単なる年金受領者にすぎなくなった。こうして，18世紀なかばから100年たらずの間に，インドはイギリスの植民地へと変わっていった。

インド社会の変化

イギリスの支配はインド人の社会生活に激しい変化をひきおこした。併合が進むにつれて，新たな地税制度が確立されたが，これは伝統的な村落生活を動揺させ，新しい地主層をつくりだしつつ，農民を零落させることになった[*]。インド社会の変化は，さらに，イギリス産業革命の進行によって決定的となった。

18世紀までインド最大の輸出品であった手織綿布は，イギリスの綿製品に圧倒され，職人は仕事を失い，ダッカなどの都市はすっかりさび

---

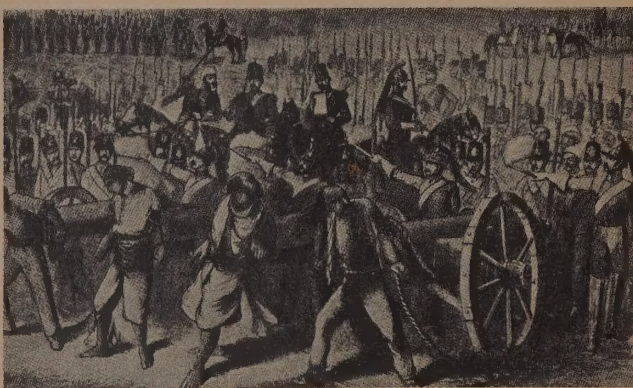
* イギリス人は，支配の必要から，それぞれの地方で地税の負担者を土地所有者として設定することを試みた。徴税請負人が地主とされるようなこともおこった。

れてしまった。19世紀にはインドのおもな輸出品は綿花・アヘン・藍(あい)に代わった。本国で自由貿易の声が高まるにつれて，東インド会社は貿易独占の特権をしだいに奪われ，1833年には商業上の機能を全面的に停止され，単なるインド統治機関となるにいたった。* これにより，インドは，いよいよイギリス産業資本にとって，原料生産地および商品販売市場として重要な意味をもつようになり，道路・鉄道・灌漑(かんがい)施設などの開発が進められた。インド農民はしだいに資本主義の国際市場に結びつけられ，孤立した封鎖的な農村経済は崩壊に向かった。



綿布輸出量の変化

インド帝国の成立　イギリス支配の強化は，インド社会の各階層に大きな不満を与え，各地で反抗運動がおこった。1857年，ベンガルにおこったセポイ(Sepoy)（インド人傭(よう)兵）の反乱はたちまち全国的に拡大し，反乱軍はデリーを占領してムガール皇帝をおしたてた。重税・飢饉(ききん)・作付強制・機業の破滅に悩む農民・手工業者や，地位を失った旧支配者層などのさまざまの不満がここに爆発した。


セポイの乱　イギリスは，本国から多数の軍隊を増援し残酷に討伐を行なった。絵は，英軍が捕えたセポイを大砲の先にくくりつけておどしているところ。

---

* この年，ベンガル総督はインド総督と改められ，インド政庁の機構が整えられた。



ディズレーリから，インド帝冠をうけるヴィクトリア女王（「パンチ」紙に出た風刺画）

しかし，反乱諸勢力は，ただイギリス支配を排除して昔に帰るという目標しかもたず，また内部の統一がなかったので，各個に撃破されていったが，東インド会社は鎮圧のために2年を費やした。ヒンドゥー教徒・イスラム教徒の別を問わず，広大な地域をまきこんだこの反乱は，**インド民族運動の出発点**とされている。

イギリスは，これを機としてムガール皇帝を廃し，東インド会社を解散して，インドをイギリス政府の直轄支配のもとにおいた（1858）。さらに1877年ヴィクトリア女王が皇帝を兼ねることになり，**インド帝国**の成立が宣言された。

イギリス支配の拡大　イギリスはネパールにも進出し，また，3回にわたるビルマ戦争によって，全ビルマを併合した（1886）。さらに，シンガポールを買収し（1819），マラッカを獲得して海峡植民地もひらかれた。

イラン・中央アジア

イギリスのインド支配を脅かしたのは，インド人の民族的反抗とともに，**ロシア南進**の動きであった。ロシアはイランの**カジャール朝**（1779～1925）に治外法権を認めさせ（1828），またアフガニスタンにも勢力を伸ばし，さらに19世紀後半には，ボハラ・ヒヴァ・コーカンドの3汗国を併合して，中央アジアの支配をかためた。イギリスもこれに対抗して進出をはかったから，イランやアフガニスタンは，イギリス・ロシア両勢力の対立にはさまれてたえず動揺し*，カジャール朝は多くの利権を奪われることとなった。

---

* アフガニスタンは，2回のアフガン戦争により，1881年イギリスの保護国となった。

2. オスマン帝国の衰退

東方問題

18世紀のオスマン帝国(トルコ)は，ロシア・オーストリアなどヨーロッパ列強の圧迫をうけて衰退の一途をたどった。とくにロシアの進出は著しく，国境はじりじりと南へおし下げられた。ロシアは黒海周辺の支配から，さらにダーダネルス・ボスフォラス両海峡における通航の自由の確立をめざすようになった。

一方，18世紀末，ナポレオンの率いるフランスのエジプト遠征軍に対し(→p. 210)，イギリス軍はオスマン帝国の軍隊と連合して，フランスの意図をくじいたが，19世紀にはいるとオスマン帝国の領域内部の問題処理について，ヨーロッパ列強は互いに鋭く対立しながら，いよいよ露骨な干渉を展開し始めた。19世紀のヨーロッパの外交は，常にこの**東方問題**と重大な関連をもっており，このような国際問題の背景には，オスマン帝国内部の分裂的な動きがあった。バルカン・エジプト・小アジアで，スルタンに公然と反抗する勢力も，あるいは忠誠を誓いつつ地方的実権を強める勢力も，すべてオスマン帝国を蚕(さん)食する列強の利用するところとなった。

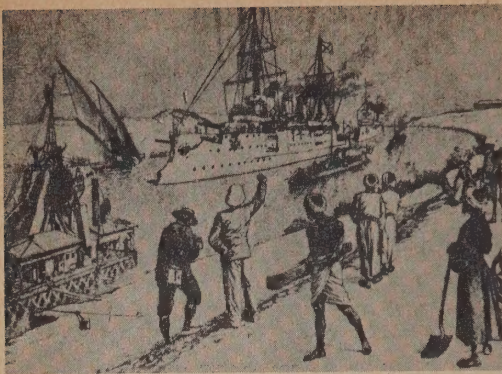
エジプト問題

ナポレオン遠征の失敗ののち，エジプトで権力をにぎったのは，オスマン帝国の傭兵隊長としてエジプトにきたアルバニア人のムハンマド＝アリー(Muhammad Ali, 1769～1849)(メフメト＝アリ)である。彼はエジプトのパシャ*となり(1805)，フランスの援助をうけながら，近代的陸海軍の建設，綿花栽培の拡大，政府専売や貿易独占の整備などを進め，またアラビア半島・スーダンなど周辺の征服をおこなった。

彼は，ギリシア独立運動に対立してトルコを援助したので，やがてその代償を要求してトルコと戦った(第1回対トルコ戦争1831～33)。その際

---

* パシャとはトルコの高級官吏の称号。この場合は総督である。ムハンマド＝アリーは，ナポレオンのエジプト遠征失敗後イギリスやオスマン帝国と結びついて勢いをもり返そうとした旧マムルーク領主たちを倒して，エジプトの実際上の支配者となり，その地位をスルタンに認めさせた。



スエズ運河　この運河の開通により，ヨーロッパとアジアの距離が縮まり，エジプトの重要性が増大した。

ロシアはトルコ援助を口実に南進をはかり，これを恐れたイギリス・フランスは，スルタンに譲歩を強要して，ムハンマド＝アリーにシリアなどを譲らせた。ついで彼は，その領域の世襲権を要求して再びスルタンにそむいて勝利をおさめると（第2回対トルコ戦争1839～40），エジプトはオスマン帝国から独立したかにみえた。しかしトルコを救うと称して再びロシアの南進の動きが迫ると，イギリスは1840年**ロンドン会議**で四国条約を結び，ロシアの単独行動をおさえるとともに，フランスを孤立させ，エジプトを屈服させた。ムハンマド＝アリーは征服地を奪われ，スルタンへの臣従を誓った。

1869年**スエズ運河**が開通すると，エジプトの重要性は飛躍的に高まった。エジプトの財政破綻をめぐってイギリス・フランスの競争が展開され，やがてオスマン帝国の名目上の宗主権のもとで実質的なイギリスのエジプト支配が確立されていくのである。(→p. 252)

オスマン帝国の解体　セルビアのキリスト教徒の反乱に悩まされ，ギリシアの独立を承認したオスマン帝国は，さらにエジプトの攻撃で首都イスタンブールさえ危機にさらされ，一時はダーダネルス・ボスフォラス両海峡の通行権を認める(1833)という大きな犠牲を代償に，ロシアに援助を求めなければならなかった。今やオスマン帝国の運命は，すべてヨーロッパ列強のかけ引きにゆだねられる形となった。

19世紀なかば，スルタンは，軍事・司法・行政・財政・文化の各方面で，ヨーロッパ文明を採り入れようとする一連の改革を試みた。ヨーロッパ資本に全面的に依存しておこなわれたこの改革事業は，かえって国

家財政の破綻をもたらすにいたり，**青年トルコ党**の運動によって1876年，国会の設立と責任内閣制を定めた憲法が発布された。しかしバルカンの動揺と**露土戦争**(→p. 238)を境にして，この立憲改革はうちきられ，スルタンの専制政治が復活した。サン－ステファノ条約によるロシアの南進は，列強のオスマン帝国分割を誘発し，ベルリン条約(→p. 239)(1878)は，そのヨーロッパにおける領土の大部分を喪失させた。オスマン帝国は，「瀕(ひん)死の病人」にたとえられるにいたった。

第4節　清朝の動揺と日本の近代化

1.　アヘン戦争と清朝の動揺

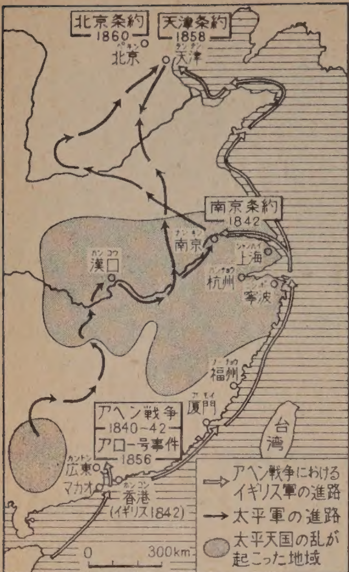
アヘン戦争

産業革命を進行させていたイギリスは，マカートニー使節団(1793)，アマースト使節団(1816)を派遣して，公行(コーホン)による中国側の貿易制限の緩和(かんわ)を求めたが，清朝はこれをうけつけなかった。

イギリスは，17世紀末いらい東インド会社の独占下に，中国から茶や絹を買いこみ，その代価を銀ではらう片貿易をおこなっていたが，インドで優位を確立してからは，本国の製品をインドへ売りこみ，インドからは会社領でつくったアヘンを中国に輸出して絹・茶・陶磁器を買いこむという**三角貿易**を始めた。とくに東インド会社の貿易独占権が停止されてからは，自由貿易商人も参加して，中国に対するアヘンの輸出量は年々増大し，それにつれて，中国側からの銀の流出は増大した。そのため，1830年代には中国内の銀価は高



東インド会社の茶運送船



アヘン戦争と太平天国

くなり，地丁銀を納める地主・農民層をいっそう苦しめるようになった。

満州貴族や官僚の中にはすでに，アヘンの密輸を容認するものもあったが，漢人官僚の**林則徐**(1785～1850)は，アヘン密貿易を国家財政の面からも，国民の保健・風紀の面からも許しがたいと考えて，その根絶を皇帝に訴えた。皇帝の命をうけて広東におもむいた彼は，アヘン密輸をきびしくとりしまり，イギリス商人から多量のアヘンを没収した。しかし，密輸はやまず，英人水夫の中国人殺害事件もおこったので，林は通商を禁じた。これに対して，イギリスは武力行使を決意し，1840年**アヘン戦争**となった。イギリス軍は，広東の民衆の抵抗をうけたりしたが，やがて弱体な清軍を近代兵器で圧倒し，沿岸諸港を攻撃した。これに驚いた清朝政府は，林則徐を罷免したが，まもなく屈服し，1842年**南京条約**を結んだ。これによって清朝は広東・福州・厦門・寧波・上海5港の開港，多額の賠償金，公行の廃止，低率関税，香港の割譲を認め，翌年には治外法権も許した。こののちアメリカ・フランスも同様の不平等条約を清と結び*，中国の国際的立場は著しく不利となった。

太平天国とアロー号戦争　その後も，アヘン密輸はやまず賠償支払いも重なって，民衆の生活はいよいよ苦しくなった。久しく異民族の支配をうけてきた漢人の間には，清朝の統治に対する不満が急激に高まり，華中・華南の各地では，農民が秘密結社によって暴動をおこした。

科挙に失敗してのちキリスト教にひかれた**洪秀全**(1813～64)は，地上に平等の天国を実現する目的で，**上帝会**という秘密結社をつくり，1850年，広西省

＊ 1844年アメリカとは望厦条約，フランスとは黄埔条約を結んだ。



太平天国の教会での礼拝　その制度や儀式はキリスト教のそれとよく似ている。

で反乱をおこした。彼らは「排満興漢」を叫び，儒教の排撃，アヘンの禁止，租税の軽減などを主張し，民衆の支持をうけつつ移動をつづけ，ついに南京を攻略した (1853)。南京を都として**太平天国**と称し国家機構をととのえ，天朝田畝制とよばれる土地均分策を発布した。その勢力は一時，華南を中心に16省に広がった。清朝は，無能な官軍 (緑営) に代わって漢人地主の**曽国藩**(そうこくはん)(1811〜72)・**李鴻章**(りこうしょう)(1823〜1901)らに，湘(しょう)軍・淮(わい)軍という郷土を守る自衛軍をつくらせて，太平天国を攻撃させた。

太平天国の乱のさなかに，1856年広東港外におこった**アロー号事件***により，清はまた外患をまねいた。

英仏両国は連合して広東を占領し，天津も攻略して**天津条約**を結んだ (1858)。これによって南京・牛荘(ニューチャン)など10港の開港，キリスト教布教の自由，アヘン貿易の公認などが決められたが，清朝が条約批准をさまたげたことから戦争が再開され，英仏両軍は北京を占領し，円明園を破壊した。ロシア公使の仲介で，1860年**北京条約**が結ばれ，新たにイギリスへ九龍(りゅう)(カオルン)半島の一部を割譲し，天津の開港，賠償額の増加などがきめられた (アロー号戦争。第二次アヘン戦争ともいう)。太平天国に対して，諸外国は，はじめ中立の態度をとり，貿易の拡大を期待していた。しかし，清朝が北京条約をうけいれ，また不平等条約の破棄をのぞむ太平軍が上海を攻撃するに及んで，諸外国は太平天国を敵視し始めた。英人ゴルドン(1833〜85)の率いる外人部隊 (常勝軍) は，湘軍・淮軍と協力して，南京を攻撃した。

* イギリス国籍のアロー号の中国人船員が清朝官憲に捕われたさい，イギリス国旗が侮辱されたというのが事件の発端である。フランスもこのころ宣教師が広西省で殺害されたことを理由に，イギリスに同調した。

一方，南京を都として以後しだいに王朝化し，内部分裂をおこしていた太平天国は，1864年ついに滅んだ。時を同じくして，山東，河南地方におこっていた捻匪(ねんび)の反乱も前後しておさまった。

洋務運動

太平天国の滅亡後，清朝の内部にも改革の機運がおこった。とくに乱の鎮定に功のあった曽国藩・李鴻章ら漢人官僚の地位が著しく高まった。彼らは列強のすぐれた武力をまのあたりにみて，富国強兵の必要を痛感し，改革をはかった。これを年号の同治(1862～74)にちなんで，同治中興とよぶ。かれらはいわゆる洋務運動とよばれる西洋技術の導入，工場の建設，軍事力の強化をはかる政策を進めた。その間約30年間，軍事企業・運輸企業，製鉄所などが建設されたが，これらはすべて有力な官僚の軍閥化を助けるものとなり，やがて日清戦争においてその欠陥をあらわすにいたった。

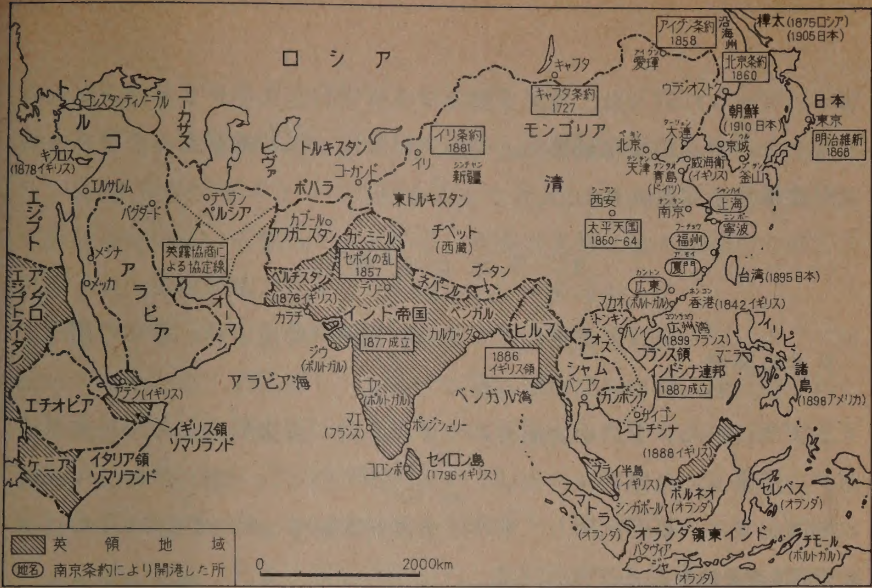
2.　中国周辺の情勢

ロシアの進出

アヘン戦争で清の弱体が暴露されると，ロシアの攻勢も激しくなった。東シベリア総督ムラヴィヨフ(Muraviyov, 1809～81)は，太平天国の乱と英・仏の攻撃に悩む清の苦境に乗じて，1858年**アイグン条約**を結び，黒龍江を国境としてその北側の地を得た。またアロー号戦争を調停した代償に1860年**北京条約**を結び，ウスリー江以東の沿海州をとり，その南端にウラジオストクを建設して極東経営の基地とした。さらに1875年，日本と条約を結んで千島(ちしま)と交換に樺太(からふと)を領有した。一方，中央アジアにも進出して，イギリスとの対立をまねいた。さきにクリミア戦争に敗れてバルカンへの進出を一時断念したロシアは，目標を中央アジアに向けて領土の拡大をはかり，清と**イリ条約**を結んで国境をひろげ(1881)，さらにアフガニスタンからインドに迫って，イギリスと対抗した。

フランスのインドシナ支配

フランスはインドでイギリスとの競争に敗れたが，19世紀にはいってインドシナ支配に力を注いだ。



列国のアジア進出

フランスはベトナム全土を統一した阮福映(げんぷくえい)(在位1802～1820)を援助して勢力の拡大をはかったが，ベトナムはしだいに排外的となった。そこでナポレオン3世の時，フランス人宣教師の殺害事件を機会に，ベトナムを攻めてコーチシナを奪い(1867)，カンボジアをも保護国とした。ついで第三共和政は北ベトナムの支配をめざした。農民は反乱をおこし，太平天国の残党(黒旗軍)とともにフランスに抵抗したが，ついにやぶれ，1883年阮朝は屈服して，ベトナム全土をフランスの保護国とすることを約した。ベトナムの宗主権を主張する清朝はこれを認めず，翌年フランスと開戦したが敗れ，1885年天津条約を結んでフランスのインドシナ領有を承認した(清仏戦争)。フランスは1887年，コーチシナ・ベトナム・カンボジアを合わせた仏領インドシナ連邦をつくった。その後ラオスを保護国とし，さらにシャムから土地を



黒旗軍を組織した劉永福

奪い，ビルマに迫った。ビルマをインドに併合したイギリスはフランスと対立したが，結局は妥協し，シャムは両国の緩衝(かんしょう)地帯として辛くも独立を維持することとなった。

3. 日本の近代化

日本の開国　アジアに進出してきた欧米諸国の圧力は，日本の鎖国をついにうち破った。

まず北辺からロシアが，南方からイギリスが姿を現わしたが，太平洋方面に進出してきたアメリカは，ペリー(Perry, 1794～1858)を派遣して，1853(嘉永(かえい)6)年強硬に開国を求め，幕府は屈して翌年に**日米和親条約**，1858(安政5)年には**日米修好通商条約**を結んで開国した。

オランダ・ロシア・イギリス・フランスもこれにならって条約を結んだが，これらの条約は治外法権を認め，関税自主権のない不平等条約であった。こうして日本は他のアジア諸国と同様に，欧米列強の植民地政策のもとに従属するにいたった。このような外からの圧力は，動揺をつづける幕藩体制の崩壊をうながした。

徳川幕府の崩壊　開国後の経済の混乱や生活の窮乏から，1860年代にはいると百姓一揆(き)や都市の打ちこわしは，これまでにみられないほど高まり，支配層を脅かした。一方，薩摩(さつま)・長州などの下級武士は，列強の武力攻撃をうけてその威力を知らされると，従来の攘夷(じょうい)運動を改めて幕府打倒に専心するにいたった。こののちイギリスは討幕派を，フランスは幕府を援助する態度をとり，幕末の争乱は列強の干渉をともないながら展開したが，ついに1867年12月王政復古となり徳川幕府は崩壊した。

日本の近代化　日本の近代化は，産業革命を完了して資本主義をいよいよ高度に発展させようとする欧米列強の，世界的進出の動きの中にくみこまれていく中で始まった。このような状況のもとで明治の新政権は強力な中央集権国家をめざし，富国強兵を目的に，欧

米諸国にならって多方面にわたり新政策を展開した。

やがて**自由民権運動**がたかまり，政府も国会開設を約束するにいたった。1889(明治22)年ドイツの憲法を範とした**大日本帝国憲法**が発布され，立憲政治体制が一応整った。しかし，天皇の大権は強く，議会の権力は制限され，国民の権利は十分なものとはいいえなかった。

一方，日本の資本主義は政府の保護をうけて急速に発展し，アジア諸国の中で最初の工業国として成長する道を歩んだ。また，地主層が新たな社会勢力として登場し，彼らの地位は**地租改正**によって法的に確認された。しかし，地主・小作人の関係には前近代的性格がつきまとい，零細な農民の生活水準はきわめて低かった。

日鮮修好条規
(江華島条約)

日本は明治初年から，朝鮮に開国を求めたが，朝鮮は日本の申し入れを拒絶したので，征韓論がさかんになった。1875(明治8)年，日本軍艦が測量のため江華島水域にはいり，朝鮮側から砲撃されて武力衝突となった。日本は強硬に朝鮮の開国を要求し，翌年には江華島条約が成立した。内容は朝鮮が清国との従属関係を断ち，独立国であることを宣言し，釜山・元山・仁川を開港し，日本人の領事裁判権を承認することであった。

課　題

1. オスマン帝国・ムガール帝国・清朝と，ヨーロッパ勢力との接触の歴史を年表としてまとめてみよう。
2. 江南地方の経済的発展を，次の各時代について，華北との関係を考えながら，調べてみよう。
   ⓐ南北朝時代　ⓑ隋・唐時代　ⓒ宋・元時代　ⓓ明・清時代
3. 次の都市の成立の時期から，18世紀末までの移り変わりを，整理しよう。
   ⓐコンスタンティノープル　ⓑカイロ　ⓒデリー
4. 太平天国の乱は，それまでの中国農民反乱とどのような点がちがうか考えてみよう。

主題学習

中国における西洋の受容

地大物博（土地広く，物多し）　中国人は，外国に対して，自国を地大物博ということばで表現していた。18世紀いらい，イギリスをはじめとする西洋諸国の通商・開港の要求に対しても，この態度で応じていた。広東の公行（コーホン）による制限された通商はおこなわれていたが，それは西洋各国の希望があるので，天朝は恩恵をほどこすという意味でだけ認められていたのであった。

南京条約と日米和親条約が結ばれた19世紀中ごろは，ひとつの世界史の誕生の時代といわれている。というのは，それ以前の世界は各文化圏，各地域，各国などがそれぞれ個別的な交流をもちながらも，なお，ばらばらに存在していた。ところがアヘン戦争の敗北により，地大物博の中国が資本主義世界にひきこまれ，また日本が日米和親条約で開国したことにより，西洋と東洋は相互に連関し，規定し合う構造をもつ世界史となった。

アヘン戦争と日本　南京条約と日米和親条約の間に，約10年の差がある。この10年はその後の両国の歴史に大きな影響をあたえている。南京条約が締結された1842年，林則徐の友人である魏源（ぎげん）は「海国図志」をあらわし，西洋事情を伝えるとともに，富国強兵の方策をたてた。しかし魏源の思想は中国で十分継承されることなく，かえって，この書物は，幕末の日本にはいり，約20種類もの和刻本となり，広く読まれ，佐久間象山，吉田松陰，橋本左内などにも影響をあたえた。したがってアヘン戦争は日本人の海外事情への関心をたかめ，ひいては，日本の開国の一因となったといえる。

中体西用（中学を体となし，西学を用となす）　1860年代から約30年にわたる洋務運動の指導的立場

にあった曾国藩，李鴻章，左宗棠らは，アロー号戦争の敗北を経験し，また太平天国の乱の鎮圧に当たって外国軍隊の援助をかりた当事者だけに，西洋諸国の軍事力の優秀さを切実に感じていた。かれらは揺らぎかけた清朝統治体制の再編のために，何よりも軍備の充実が必要であると考え，西洋の科学技術をとり入れた近代的軍事工業を創設した。安慶や金陵の兵器廠，福州の船政局などがその例である。また江南製造局は兵器製造だけでなく，科学技術書の翻訳，出版もおこなった。1870年代にはいると洋務運動は軍事工業だけでなく，運輸・紡績・鉱業などの部門にひろがっていった。しかし，この一連の洋務企業を設立した官僚は心の底から西洋の優位を認めたわけではなかった。むしろ根本的なものはあくまで中国の伝統的学問，思想であり，西洋の技術は補助的なものにすぎないと考え，清朝専制統治の維持につとめた。監督にあたる官僚は儒学の古典教養を身につけることが大切であって，生産技術は知る必要はないと考えていた。そのため，外国機械購入の時も，技術的知識がないため，時代遅れのものを売りつけられていた。李鴻章のほこる北洋海軍はドイツ，イギリスの援助の下に1888年完成したが，結局各国の様々な種類の軍艦兵器が雑然としてまざり，日清戦争に際してもその威力を発揮することができなかった。

変　法

清仏戦争と日清戦争の敗北は中国の知識人に深刻な反省をうながした。洋務運動を批判し，変法が主張されるようになった。変法とは日本が明治維新後，わずか30年足らずで，文明開化・富国強兵をなしとげたことの原因は西洋に学んだことにあるとし，清朝を立憲君主制に改革しようとする運動であった。改革の中には最も伝統的な制度である科挙もはいっていた。しかし，変法を主張する人々も西洋思想・学問に全く屈服することをいさぎよしとせず，受け入れる西洋思想・制度の淵源を中国の古典にもとめ，伝統的な思想に読み変えようと努力していた。たとえば，康有為の著わした「大同書」には，墨家思想

に天賦人権の西洋政治思想や仏教思想などが取り入れられて，理想社会が描かれている。変法派の譚嗣同も，また清朝打倒を主張した革命派の章炳麟も，諸子百家の中に改革，変革の拠りどころを求めたのであった。
1869~1936

伝統と抵抗

中国の官僚，知識人にみられるこうした西洋への対応は，アヘン戦争の時，イギリス兵と戦った三元里村民の平英団にはじまる一連の民族運動と深く関連している。とくに19世紀80年代にはいると，フランス領インドシナの成立，ビルマの植民地化，朝鮮をめぐってのイギリス・ロシアの角逐などにみられるように，中国周辺地域はほとんど侵蝕され，以後列強勢力は中国内部に侵入を深めていった。この情勢の中で，教会の破壊，宣教師殺害という反キリスト教運動が各地におこり，ついには外交施設機関，商館などに攻撃が加えられるにいたった。その後すべての世界の強国を相手にたたかった義和団，利権回収運動，外国品ボイコットなどの民族運動が激しく続き，辛亥革命，五・四運動，国民革命へと経過するのであった。この時代の指導者であり，今日でも革命の父として尊敬されている孫文は，中国革命同盟会の機関誌民報の発刊にあたって，「欧米は強いには強いが，その民衆は貧困に苦しんでいる」と，欧米社会のかかえる矛盾を指摘し，「政治革命と社会革命を同時にやり」，欧米に追いつき，追いこさなければならないという意味の主張をしている。晩年，彼は「私の革命を謀るにあたって抱く主義は，一部はわが国の固有の思想を踏襲し，また一部は欧州の学説と事象を斟酌し，他の一部は私の独創による」と述べている。そこには伝統の墨守や，過去の安易な肯定による復古主義こそみられないが，西洋近代の単なる模倣を克服して，民族的伝統の継承すべき基盤を新しく見直し，当面する革命，民族運動の方向をみつけ出そうとしている。この姿勢は孫文死後の中国の歴史が具体的に示しているといえよう。



球戯場の誓い
（ダヴィッド筆）
(→p.206)

第6章　ヨーロッパ市民社会の成立

ヨーロッパの非ヨーロッパ世界に対する挑戦，両者の政治・経済上，文化上の接触は，すでに十字軍のときから，すなわち，ヨーロッパ世界の成立とともに始められたが，それが世界的な規模で展開されたのは，19世紀のことであった。「ヨーロッパはアジアの半島にすぎない」とはフランスの詩人ポール＝ヴァレリ（Paul Valéry 1871〜1945）のことばであるが，文化的にはアジア・イスラム諸地域よりもはるかに遅れて出発したこの小さな地域が，19世紀にはいってその経済力と軍事力，それに文化を誇示し，「ヨーロッパの世界化」をもたらすようになったのはなぜであろうか。

19世紀は，ヨーロッパ諸勢力がアジア・イスラム諸地域に大規模に進出，文字通りの「世界史」が開始されると同時に，これによって西洋と非西洋の社会的，文化的な体質の違いがあらわにされた時代であった。そしてヨーロッパがこのようなめざましい発展をとげたのは，まさに世界史上この地域だけが，封建社会の崩壊とともに，合理的・普遍的な近代市民社会と近代市民意識をはぐくみ，19世紀にその最盛期をもたらしたからであった。近代市民の担い手は，はじめ商人や地主層であったが，17〜18世紀からは，しだいに生産者も加わり，19世紀には，産業資本家層に成長して，市民勢力の主流を形づくるにいたった。イギリスやフランスにおこった市民革命は，市民が政治的な諸権利を要求して絶対王制を否定し，近代市民社会を政治的に準備した点で重要であった。

第1節　イギリス革命とアメリカの独立

1.　社会の近代化と市民革命

マニュファクチュアの形成

絶対主義時代の西ヨーロッパには，工場制手工業（マニュファクチュア manufacture）とよばれる資本主義的な工業生産のしくみが現われた。工場制手工業は，一定の仕事場で，分業にもとづく協業によってなされる生産の方法である。ただし近代的な工場制度とちがって，生産用具はまだ機械ではなく，手の延長としての道具であり，生産には熟練を必要とした。労働に従事する者は経営者自身とその家族が主で，それに少数の賃金労働者が加わり，ここでは資本家と労働者の間に，まだはっきりした区別と対立がみられなかった。

工場制手工業は，ことに**農村工業**としてひろく展開され*，まずイギリスにおいて，16世紀後半から17世紀にかけて急速にひろまった。イギリスの農村工業は，毛織物生産を中心に，14世紀後半から始まっていたが，ここに飛躍的に発達し，それとともに地主や富農（ヨーマン）は，村の入会地を新たに牧羊地として囲い込んだ。これを**第1次囲い込み運動**（エンクロージュア）(1st. enclosure movement)という。これによって土地から追われた農民たちは賃金労働者となり，工場制手工業の経営者や農業経営者の下で働くこととなった。フランスの工場制手工業は，イギリスよりおくれて18世紀に北部でひろまった。

農村工業の展開に応じて，**農業生産の資本主義化**も始まった。中世末いらい農民の間から現われた富農層は，地主となって小作人から地代を取り立てるようになったが，彼らの一部はさらに農業経営者（大借地農）

---

* 工場制手工業の経営者となったのは，自立的な企業を営むために都市のギルド規制をのがれて農村に移住した職人層（小親方層）や，地主・富農・商人などであった。

としての性格を強め，広い面積の借地を，家族や賃金労働者とともに耕作するにいたった。

議会政治と市民革命

こうして商人・地主をはじめ，産業市民である工場制手工業経営者や農業経営者などが，いずれも中産層として経済的に主体性をもち始めると，絶対主義のしくみは，しだいに実情に合わなくなった。そこでこれら中産層は，国の行政や立法にも主体的に参加しようとして絶対主義に反対し，近代的議会政治の確立を求めるにいたった。他方，王権におさえられた貴族の一部は，かつての政治的な特権を回復しようとし，また没落しつつあった小手工業者や小農民層・日雇い労働者などは，昔の共同体的な平等を望んでいた。

以上の三者はそれぞれ目的がちがいながら，やがて中産層を中心に，絶対王政を倒す大きな政治的事件をひきおこした。これが**市民革命**である。市民革命がどのような結果を生んだかは，それぞれ新興中産層の成長の度合いによって異なった。市民革命は，のちに資本主義と議会政治を典型的に発展させたイギリスにおいて，最も早く現われた。

2.　専制君主と議会

ステュアート王朝の絶対主義

1603年，エリザベス1世の死によってテューダー王朝が断絶すると，傍系のスコットランド王が王位を継承し，ジェームズ1世（James I　在位 1603～25）として**ステュアート（Stuart）王朝**をひらいた。

このころ議会の下院には郷紳層（ジェントリー）をはじめとする中産層が数多く議員としてはいり，重税や商業上・産業上の独占などに強く反対した。さらにジェームズ1世および次のチャールズ1世（Charles I　在位 1625～49）が**王権神授説**を信奉し，国王の統治権は古来の習慣や議会によって制限されることはないとの態度をとったため，議会と国王の対立が深まった。

国王と議会の衝突

議会と国王とは，信仰上でも対立した。国王とその側近は国家統一の精神的支柱として，また，教区制度を行政組織



チャールズ1世のころのイギリス議会

に利用しようとして，国教の奨励をはかった。ところが中産層には，カルヴァンの流れをくむ清教徒(ピューリタン) (Puritans) が多く，彼らは国王から種々の圧迫をうけたので，政治上の対立は，ここに国教徒と清教徒の対立となった。清教徒の一団が政治上・信仰上の自由を求めて，はじめてアメリカに渡ったのも，このころのことである。

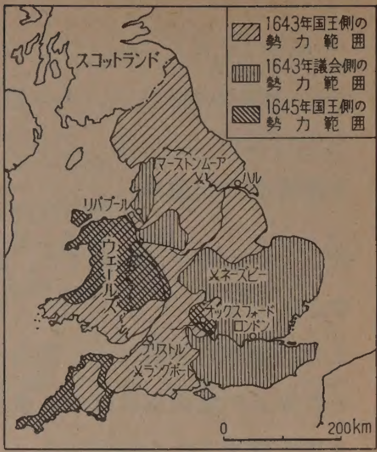
チャールズ1世の治世にいたって，対立はますます激しくなり，議会は国王の専制に抗して，1628年 **権利の請願**(Petition of Right) を提出し，マグナ-カルタを引いて，議会の承認しない課税や不法な逮捕などの禁止を，国王に確認させた。ところが王は翌年議会を解散し，その後11年間議会を召集することなく，不当な税を課して専制的な政治をおこない，国教政策を強化した。王がさらに国教をスコットランドにまで強制するや，ついにスコットランドに内乱がおこった。国王はその鎮圧費を得るため，1640年やむなく議会を召集したが，議会は激しく王の政策を非難し*，対立は深まって，その結果，清教徒革命 (Puritan Revolution) がおこった。

3. ピューリタン革命

議会軍の勝利　国王と議会は，それぞれ兵を集めて対立し，1642年から戦闘をくり返すにいたった。議会側は先進地帯のイングランド東南部に勢力を占め，中産層の利害を反映して郷紳・商工業者を多く含んだ。一方，国王側は後進的な北部・西部に優勢で，一部の大貴族や大商人がこれに加わった。初めは国王側が優勢であったが，議

* この議会は1653年まで存続したので，長期議会とよばれる。

会側にクロムウェル(Cromwell 1599~1658)の率いる清教徒の軍隊*が現われて形勢を転じ，チャールズ1世は捕えられて，議会側の勝利となった。その後議会側は，穏健な**長老派**（Presbyterians)と，急進的なクロムウェルらの独立派(Independents)に分かれた。クロムウェルは武力で長老派を追放して政権をにぎり，1649年，議会はチャールズ1世を処刑し，共和国(Commonwealth)を宣言した。



革命当時のイギリス

クロムウェルの独裁　クロムウェルらの独立派は，徹底的な民主化や普通選挙制の実施などを要求する，貧しい都市民や農民たちの**水平派**(レヴェラーズ)(Levellers)を弾圧して権力をかため，またアイルランドを征服して，のちのアイルランド問題の端緒をひらいた。(→p. 231)

共和国政府は，1651年**航海条令****（Navigation Act）を発布して，オランダの海上権に打撃を与え，イギリスの貿易圏をひろげて，商工階層と資本主義の成長を促進した。

その後クロムウェルは，**護国卿**（Lord Protector）の位につき（1653)，清教主義に徹した厳格な軍事独裁をおこなった。しかし政局が安定するにともなって，国内には不満が高まり，護国卿政治は彼の死後まもなく廃止され，独裁に対する反動として，1660年の王政復古により，チャールズ1世の子チャールズ2世(Charles II 在位 1660~85)が即位した。

---

* 主として郷紳層を将校，富裕農民を兵士として組織された精鋭な軍隊で，鉄騎隊とよばれた。のちクロムウェルにより拡大され，議会軍の中心勢力となった。

** イギリスの商品を運ぶ船舶を，イギリス船，またはヨーロッパでその商品を生産した国の船だけに限ったものである。その結果，第一次蘭(らん)英戦争（オランダ戦争1652~54）がおこり，その後の第二次(1665~67)，第三次(1672~74)蘭英戦争を経て，イギリスはオランダから海上権を奪った。

4.　イギリス憲政の発達

王政復古と議会　チャールズ2世は革命で土地を得た者の所有権や信仰の自由を認めて即位したが，やがて専制政治を再開し，旧教の復活を企てた。議会は再び国王と対立し，専制に対抗して，**審査律** (Test Act, 1673) と **人身保護律** (Habeas Corpus Act, 1679) を可決した。前者は公職につく資格を国教徒に限定して，旧教を復活しようとした国王の意図をはばみ，後者は国王による勝手な逮捕や裁判を禁じて，人権を保護したものである。

王には子がなく弟ジェームズが後継者とされたが，彼は旧教徒であったので，議会では王位継承について議論が分かれた。しかし結局ジェームズ排斥案は上院で否決され，彼は **ジェームズ2世** (James II, 在位 1685～88) として即位した。

政党の始まり　ジェームズの王位排斥案をめぐり，議会内に政党の先駆が生まれた。王位継承を認める一派はトーリー党 (Tories) といわれて，国教会の聖職者や地方の地主を含み，ジェームズを排斥する一派はホイッグ党 (Whigs) といわれ，都市の商人や非国教徒が多かった。この二政党は，保守・進歩の二派として対立した。

名誉革命　ジェームズ2世も，旧教主義をかざし，専制政治を強行した。そこでトーリー・ホイッグ両党は手をにぎって，1688年ジェームズ2世を廃し，王の長女で新教徒のメアリーと，その夫でオランダ総督のオレンジ公ウィリアムをイギリス王位に迎え，無血革命をなしとげた。これが **名誉革命** (Glorious Revolution) である。

名誉革命　議会代表からイギリス王としての王冠を受けるウィリアムとメアリー。



その翌年ウィリアムはメアリーとともに即位して**ウィリアム3世**（William III 在位 1689~1702）となり，その際議会が提出した権利の宣言を承認し，これを**権利の章典**（Bill of Rights）として公布した。権利の章典によって，議会は立法権を確立したほか，国家財政への発言権を強めた。こうしてステュアート王朝時代の国王と議会の対立抗争は，ついに議会側の勝利に終わり，国家の主権は実質的に議会に属することになり，**議会政治**が確立された。

大ブリテン連合王国　ウィリアム3世を継いだ**アン女王**（Anne 在位 1702~14）の時代に，スコットランドはイギリスと合併して**大ブリテン連合王国**（United Kingdom of Great Britain）が成立した。(1707)

責任内閣制

アン女王には後継者がなかったので，1714年議会はジェームズ1世の曽孫（そう）で新教徒であるドイツのハノーヴァー公を，**ジョージ1世**（George I 在位 1714~27）として国王に迎えた（ハノーヴァー王朝）。新王が英語を解さなかった事情もあって，議会の主体性はますます強められ，「王は君臨すれども統治せず」の状態となり，議会が下院の多数党から大臣を選んで内閣を組織し，国政を担当するようになった。こうして**責任内閣制**（議院内閣制・政党内閣制）の端がひらかれ，また二大政党が交互に政権につく習慣が生まれた。最初に責任内閣を組織したのはホィッグ党の**ウォルポール**（Walpole 1676~1745）である。

5.　アメリカの独立

北米植民地の開拓

イギリスは，17世紀初めから本格的に新大陸の植民を開始した。ステュアート王朝の国王は専制主義と国教主義を励行して非国教徒を激しく弾圧したので，1620年あくまで信仰を守りぬこうとした清教徒の一団[*]は，**メイフラワー号**でアメリカ東岸に渡り，プリマス植民地をひらいた。これより信仰の自由を求めて植民する

---

* 彼らはピルグリム-ファーザーズ（Pilgrim Fathers，巡礼始祖）といわれる。

非国教徒がふえ，ニューイングランド植民地が成立した。

一方経済的利益を求めた民間人は，国王の特許を得て，多数の植民会社を設け，植民地経営を進めた。バージニア以南の地方は，多くこの方法でひらかれた。



北アメリカ植民地

植民地の経済的発展　植民地は，それぞれ独立心と進取の気風に富んだ植民者によって経済的繁栄をきたし，北部では海運・造船・漁業，中部では麻・製鉄，南部ではタバコ・藍(あい)などの生産がさかんであった。

13の植民地と自治　こうして18世紀前半には，北アメリカの東岸に，すでにイギリス領の13の植民地が成立していた。

英本国は重商主義政策をとり，アメリカ植民地を本国商品の販売市場および原料供給地として，植民地の商工業を抑圧する態度を示したが，実際にはあまり強い統制を加えなかった。多くの植民地には国王任命の総督がおかれたが，内政にはほとんど干渉せず，植民地の人々はいずれも植民地自身の議会をもち，政治的に大きな自治を享受していた。

植民地の不満　七年戦争の結果，1763年のパリ条約により，アメリカ大陸からフランス勢力が追われ，イギリスの覇(は)権が確立すると，植民地と本国との間には大きな対立が生ずるにいたった。それまで別々に発達してきた各州は，戦争協力を通じて統一の機運を高めた。またほとんど独力で，フランス軍を破ったことも各州の自覚を高め，自治独立の精神をいっそう強めた。それに，背後のフランス勢力の脅威が消えたことも本国への依存を弱めた。ところが戦争により財政困難となったイギリス本国政府は，ジョージ3世(George III 在位 1760～1820)の指導の下に，植民地の自治に干渉を加え，植民地に課税し，財源とする政策を強行した。



印紙条令反対運動　印紙条令に対し，植民地では反対のデモや暴動がおこって，ついに本国も翌年これを撤廃せざるをえなくなった。

そして，1765年**印紙条令**を発布したが，植民地人は，イギリス臣民としての権利にもとづき，本国議会に彼らの代表を送っていない以上課税はありえない(「代表なければ課税なし」)と主張して，抵抗した。本国政府も翌年印紙条令を撤廃したが，1773年東インド会社の茶の無税販売を認めた茶条令が出るに及んで，植民地人の不満は爆発し，急進分子によるボストン港の茶船襲撃事件(ボストン茶会事件（ティーパーティー）)がおこった。

独立戦争

イギリス本国でも，一部には植民地人の自由の要求に同情的なものがあったが，政府は植民地人に強圧的な態度で臨んだから，彼らは翌年フィラデルフィアに大陸会議をひらいて団結した。1775年にいたってついに武力衝突がおこり，独立戦争(1775～83)が始まった*。植民地側ではワシントン(George Washington 1732～99)を総司令官に任命し，1776年7月4日，有名な**独立宣言書**を発表して，植民地のやむなき抵抗の理由を公表した。植民地側は苦戦をつづけたが，大陸会議を代表したフランクリン(Franklin 1706～90)の努力でフランスと同盟し，つづいてスペインとも結び，またイギリスの覇権に反感をもつヨーロッパ諸国が**武装中立同盟****を結んだことにも力を得て，ついにヨークタウンをおとしいれ，大勢を決した。こうして1783年英米間にパリ条約が結ばれ，イギリスはアメリカの独立を承認し，ミシシッピ川以東の地を与えた。

---

* 翌年トマス＝ペインは「常識」というパンフレットを著わし，植民地の独立と共和国の樹立を唱えて，大きな影響を与えた。

** ロシアのエカテリナ2世の提唱により，1780年に結ばれ，中立国船舶は自由に商業を営む権利があると宣言し，イギリスの海上封鎖に対し，この原則を武力で守ろうとした。

独立宣言　トマス＝ジェファソン（Tomas Jefferson, 1743～1826）らによって起草された独立宣言書には，ロックの政治思想がとり入れられた。その初めには，万人は平等につくられ，生命・自由・幸福の追求などの権利を与えられており，これらの権利を確保するために政府が組織される，という趣旨が述べられている。

合衆国独立の意義　アメリカ合衆国の独立は，ヨーロッパ諸国の援助に負うところが大きかったとはいえ，その根底には植民地自体の経済力と，豊かな人口があった。また独立宣言に力強く表わされた，自由・平等と人民主権の大原則は，当時なお専制政治の重圧に苦しんでいた，ヨーロッパ諸国の人々に，大きな自覚と希望を与えた。

独立達成後の合衆国には，各州間の利害の対立が現われたが，1787年**合衆国憲法**が制定され，調整がおこなわれた。この憲法は世界最初の民主的な成文憲法で，各州に広い自治権を与えている点に特色をもった。また三権分立が明確に規定され，州を代表する上院と人民を代表する下院が議会を構成して立法府となり，行政権は大統領に統轄され，司法権は最高裁判所が独立的に行使するとされた。初代大統領には建国の父ワシントン（在職 1789～97）が選ばれ，新たに建設された首都に，その名がつけられた。

第2節　フランス革命とナポレオン

1.　フランス革命の勃（ぼっ）発

革命を準備したもの　フランス革命前の絶対主義社会は，旧制度（アンシャン－レジーム）(ancien régime) とよばれる。国民は第一身分（聖職者）・第二身分（貴族）・第三身分（一般の市民・農民）の三身分に分けられ，このうち，第一・第二身分のさらに一部を占める少教の高位聖職者・高級貴族*は特

＊　この中には旧来の大貴族（武官貴族）のほかに，新たに国王から貴族の称号をうけた上層市民（法官貴族）も存在した（→p. 144）。

特権階層を形づくった。彼らは高級官職を独占し，あるいは農民に対し領主権*を行使して，絶対王権の下に国民の大部分を支配していた。**



三身分　第一身分と第二身分の特権層に搾取されてあえぐ第三身分を表わした当時の版画。

これに対して，第三身分の一部をなす有産市民（ブルジョアジー）は，富農や第一・第二身分の一部とともに，**中産層**を形づくった。彼らは特権階層とも結びつきながら成長し，地主・商人・金融業者としてしだいに富と実力をたくわえ，さらに18世紀の北フランスには，マニュファクチュア経営や資本主義的な農業経営を営む者も現われた。これらの中産層は国政への参加を望んで，しだいに鋭く絶対王政と対立し始めた。

特権階層と中産層に対し，国民の大部分を占めたのは農民大衆や都市の民衆など，第三身分の大多数をなす**貧民層**であった。彼らは国王への租税を負担するほかに，領主・地主・富農・有産市民からさまざまの形で苦しめられていた。

1788年の不作によって麦の価格が騰貴し，国民の生活が苦しくなると，翌年春農民たちは各地で反乱や暴動をおこし，小麦の買い占め商人や領主，徴税人，富農などを攻撃した。多くの都市でも，これに応じて市民が都市貴族を追放し，市政の改革をおこなった。このような農民・市民による大規模な騒乱は，社会的に上昇しつつあった中産層にその政治目的を実現させる恰好（かっこう）の機会を与えることになり，王権に対する貴族の反

* 年貢徴収権や裁判権などで，このような領主権は，ピューリタン革命前のイギリスではすでに消滅していた。

** 第一・第二身分には，貧乏な下位聖職者や没落した旧貴族も多数含まれており，身分の相違と，現実に支配する者とされる者の区別とは，必ずしも一致しなかった。



バスティーユ襲撃
襲撃する民衆を表わしたパリの共和国広場の円柱の浮き彫り。

抗をきっかけに，革命はついに勃発した。

貴族の反抗

ルイ14世の晩年いらい，政府の財政はしだいに窮迫してきたが，**ルイ16世**(Louis XVI 在位 1774~92)の治世にいたって，アメリカ独立戦争の援助費などにより，いっそう悪化した。このため，重農主義経済学者テュルゴーや，銀行家ネッケル(Necker 1732~1804)らが登用されて，財政改革をおこなおうとしたが，不成功に終わった。そこで免税の特権をもつ貴族に課税しようとすると，貴族は公然と国王に反抗し，175年ぶりに**三部会**の召集を要求した。その結果1789年5月，三身分の議員が，ヴェルサイユ王宮に召集された。

国民議会の成立と革命の勃発

しかし三部会では，議決方法について，聖職者・貴族と第三身分とが対立した。そこで第三身分は自ら**国民議会**を名のり，王宮内の球戯場に集まって，憲法が制定されるまでは解散しないことを誓った(球戯場の誓い)。聖職者の大部分がこれに合流したため，国王もやむなくこれを認め，国民議会は憲法制定国民議会と名のり，憲法の制定にとりかかった。

一方，不安な空気のみなぎっていたパリでは，7月14日民衆が暴動をおこし，専制政治の象徴として久しく政治犯の収容所になっていたバスティーユ(Bastille)**牢獄**(ろうごく)を破壊し，これが革命の直接の発端となった。パリ市民は自治組織をしいて自衛軍を設け，地方都市もこれにならうものが多かった。それとともに農民の反乱はいっそう本格的となり，領主の屋敷や役人・富農を襲って，封建的諸負担の廃止を要求した。

国民議会の主導勢力であった貴族たちは，農村や都市の反乱をおさえ

るために，8月4日貴族・聖職者の封建的特権を廃棄することを宣言した[*]。ついで8月26日**人権宣言**を決定し，自由・平等の原理や主権在民，法の前の平等，言論・思想の自由，私有財産権の不可侵が，はっきりとうたわれた。

2.　革命の展開

中産層の登場　国王は新しい事態を認識せず，人権宣言を承認しないばかりか，武力をもって議会をおさえようとした。パリの民衆は再び立って，10月，婦人を先頭に王をヴェルサイユからパリに移し，8月の諸決定を王に認めさせた。1791年6月，ルイ16世は王妃(ひ)マリー=アントアネット[**]に動かされて国外に逃亡をはかり，国境近くのヴァレンヌで捕えられてパリに連れもどされた。この事件は国民の間にますます王に対する不信の念を増大させた。

これにより革命の主導権は，これまでのミラボー（Mirabeau 1749～91）やラファイエット（La Fayette 1757～1834）のような立憲君主主義の立場に立つ貴族・上層市民から，しだいに，中産層へと進むにいたった。彼らは，中産層の理念を直接的に求める穏和なジロンド派(Girondins)と，目的達成のために貧しい農民大衆や都市下層民と結んで王政廃止・共和政の実現を唱えた，マラー（Marat 1743～93）・ダントン（Danton 1759～94）・ロベスピエール（Robespierre 1758～94）の3人に指導される急進的なジャコバン派[***](Jacobins)とに分かれた。

外国の干渉　1791年9月，国民議会は憲法を発布して解散し，同年10月には新憲法にもとづく**立法議会**が開催され，ジロンド派がその中心勢力となった。このころ外国の君主は革命が自国に及ぶことを恐れ始め，ことにオーストリアは，プロシアとともに革命の弾圧を

---

* これにより農民は，領主の政治的な支配権(裁判権)からは無償で完全に解放されたが，年貢支払い義務からの解放は有償で，多額の支払いが必要とされた。

** オーストリアのマリア=テレジアの娘で，当時のドイツ皇帝レオポルト二世の妹。

*** 穏和派も急進派も最初はともにジャコバン派に含まれたが，見解の対立から穏和派が一派をつくり，のちにジロンド派とよばれるようになった。

口実に，フランスを侵そうとはかった。しかしフランス人の愛国心はかえって高まり，ジロンド派の政府は1792年春**宣戦を布告**し，ここにヨーロッパは戦乱に突入した*。

戦いは，初めはフランス側に不利であった。国内の経済情勢は混乱を深め，また王党派も策動をつづけて，フランスは危機におちいった。そのためジロンド派に代わって，ジャコバン派がしだいに優勢となり，1792年８月10日，民衆は立って王を襲った。議会は王権の停止を宣言し，さらに９月，立法議会は解散して**国民公会**が成立した。公会はまもなく王政を廃止し(第一共和政)，翌年１月ルイ16世を処刑した。

この間，革命軍は攻勢に転じ，ベルギー・オランダを占領した。このことは国王の処刑とともに大いに列国を刺激し，多年フランスと対抗してきたイギリスは，首相ピット(William Pitt, the Younger, 1759～1806)の指導のもとに，オーストリア・プロシア・オランダその他の諸国と，**第１回対仏大同盟**を結成した(1793)。

ジャコバン派の独裁

これにより，1793年春からフランスは再び対外的に危機におちいった。このため国民公会は，防衛と治安の維持，国内体制の強化を目的として，革命裁判所・公安委員会を設けたが，同年６月ジャコバン派はジロンド派を国民公会から追放し，**ジャコバン憲法**（93年憲法）を制定して普通選挙制を定めた**。さらに，外国の干渉から革命を守るために，農民大衆の支持を得る必要から，封建的特権を無償で完全に廃棄し，亡命者や教会の土地財産を没収して分割売却し，自作農の創設をはかった。またメートル法や革命暦***を実施した。

同年秋に戦局はいよいよ悪化し，マラーの暗殺や各地の内乱とともに共和国は危機に直面した。これを打開するため，ロベスピエールを中心

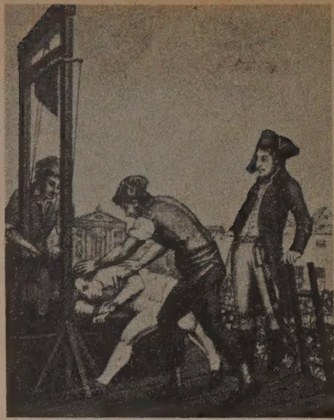
---

* このときマルセイユからパリに進軍した義勇軍が歌った歌が，のちにフランス国歌となった「ラ－マルセイエーズ」である。

** ただし同憲法の施行は平和到来まで延期され，結局実施されなかった。

*** 1793年から1805年まで用いられ，年初の５日間を革命祭日，１か月を30日とし，10日目ごとに休日をおき，各月は雪月(ニヴォーズ)，熱月(テルミドール)などとよばれた。

とする公安委員会は，**恐怖政治**とよばれる独裁手段で政権を維持し，**徴兵制度**をしき，革命裁判所によって，前王妃をはじめ多数の政敵を断頭台(ギロチン)に送り，反対の声をおさえた。



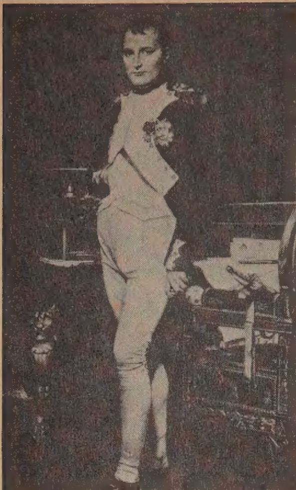
ロベスピエールの処刑　テルミドール９日の事件で失脚し，ギロチンにかけられるロベスピエール。

革命の終末　しかしながらジャコバン派が政権をにぎると，やがて中産層と貧しい一般民衆との提携は破れ，互いに自らの利益を求めて対立するにいたり，指導者の間にも分裂が生まれた。ロベスピエールは，内部の反対派を粛清してかえってジャコバン派の勢力を弱め，他方，農民の中には，土地を取得して保守化し，もはや革命の続行を望まぬものが多くなり，革命の原動力は急速に失われた。1794年春から戦局が好転し，危機を脱すると，７月，ロベスピエールは穏和共和派の反革命により失脚し，処刑された。これを「テルミドール(熱月)９日」の事件という。こうして恐怖政治は１年余りで終わり，革命の勢いは下火となった。

国民公会では，再び有産市民を主体とする穏和な共和派が指導権をとりもどした。1795年，国民公会は，財産額による制限選挙を定めた新憲法を作って解散し，新たに，５人の総裁と二院制の立法府よりなる**総裁政府**が成立して，フランス革命は事実上終わりを告げた。しかし，革命で土地を取得できなかった貧農を中心に，私的土地所有権を否定するバブーフ(Babeuf 1760〜97)らの民衆独裁の企ても生まれ，混乱はなおつづいた。

革命の意義　フランス革命は，飢えと戦争の危機のうちに押し進められ，結局は中産層の勝利に終わった。そしてこの革命において高くかかげられた**自由，平等**の市民社会の理念は，全ヨーロッパにひろく深い影響を与えることとなった。しかし，フランスでは社会の近代化と中産層の成長が，イギリスに比べて未成熟であったため，革命は激しい形をとり，また農民大衆にも

革命の成果を分け与えざるをえなかった。その結果，小土地所有の自作農が多数生み出され，フランス農業の資本主義化がおくれる一因となった。



ナポレオン(ダヴィッド筆)

3.　ナポレオン

ナポレオンの登場　混乱を収拾できない総裁政府に対し，国民はしだいに不信を強め，混乱をしずめて秩序を回復することのできる強い権力を期待するようになった。このような情勢の中から登場してきたのが**ナポレオン**(Napoléon Bonaparte 1769～1821)で，彼は，革命戦争末期から頭角(とうかく)を現わし，1796年イタリア遠征軍司令官となってオーストリア軍を破り，ついで，1798年イギリスとインドとの連絡路を断つためにエジプトに遠征した。翌年イギリス・ロシア・オーストリアなどの第2回対仏大同盟軍はフランス国境に迫ったが，総裁政府はなすすべを知らず，国民の信頼は政府を離れた。この形勢をみたナポレオンは，ひそかにエジプトから帰り，11月9日(革命暦のブリュメール〔霧月〕18日)，クーデタによって政府を倒し，執政政府(統領政府)を樹立し，自ら第一執政となって政権をにぎった。

終身執政　ナポレオンは，1800年イタリアに攻め入ってオーストリア軍を破り，1802年にはイギリスと**アミアンの和約***を結んだ。そして，同年彼は終身執政に就任したが，同時に内政の整備にも努力をはらった。産業を保護・奨励し，**フランス銀行**を設立して財政の安定をはかり，革命中に離反した教皇と宗教協約によって和解するなど，次々に秩序と国力の回復・増大に努めたが，中でも**ナポレオン法典****(1804)は，

---

* この和約で双方とも占領地を返還し，これにより第2回対仏大同盟は崩壊した。

** ナポレオン法典は個人の権利(特に所有権)の尊重，法の前の万人の平等を基本理念とする民法典で，啓蒙思想やフランス革命の精神を具体化したものであり，19世紀に多くの国の民法典の模範となった。



ナポレオン時代のヨーロッパ

大きな意義をもった。

ナポレオン政権の性格　ナポレオン政権は，革命後の社会の安定を武力によって実現しようとしたものであり，いわばフランス革命の収拾者であった。当時，中産層はまだ独力で政権をにぎるにいたらず，土地を得た農民は革命の成果を失うことを恐れた。彼の政権はこうした事情に立脚していた。

第一帝政　1804年ナポレオンは国民の支持によって皇帝の位につき，**ナポレオン1世**(Napoléon I 在位 1804～14, 1815)となった。フランスにはじめて出現したこの帝政は**第一帝政**とよばれる。

皇帝ナポレオンを待っていたものは，またも外征であった。1805年ピットは第3回対仏大同盟を結んでフランスに対抗し，同年ネルソンは**トラファルガル海戦**でナポレオンのイギリス侵入の意図をくじいた。しかし大陸では，ナポレオンはアウステルリッツの戦い*にオーストリア・ロシア連合軍を破り，翌年には西南ドイツの諸国を合わせて**ライン同盟**を結

* 三国の皇帝が自ら軍を率いて戦ったので三帝会戦ともよばれる。

成させ，自らその保護者となって，神聖ローマ帝国を解体させた。さらにプロシアとロシアの連合軍を破って1807年**ティルジットの和約**を結び，ポーランドにワルシャワ大公国を建てた。その間，兄弟や一族をオランダ王・ナポリ王・スペイン王などに任じ，オーストリア皇女を妃(きさき)に迎えた。ここにナポレオンの帝国は最盛期を迎え，彼に従わない国は，ヨーロッパのおもな国ではイギリス・ロシア・トルコのみとなった。

ナポレオンへの反抗　頑(がん)強に抵抗をつづけるイギリスに対し，報復としてナポレオンは，1806年ベルリンで**大陸封鎖令**を発した。これはイギリスの商品を大陸からしめだし，フランスの産業を保護するために，大陸諸国とイギリスとの貿易を禁止したものであった。しかし，イギリスとの貿易にたよっていた諸国は，これによって，かえって苦しみ，ナポレオンへの反感を生んだ。そのうえ，彼の遠征は，征服した各地方で，前近代的な体制の打破をうながし，フランス革命の理念をひろめたが，その結果は，民族意識の成長を促進し，ナポレオンからの解放運動を生みだしていった。

プロシアの改革　中でもプロシアでは，シュタイン(Stein 1757～1831)・ハルデンベルク(Hardenberg 1750～1822)らが国政を改革し，不徹底ながら農奴の解放，兵制や教育制度の刷新を実行して，近代化を進めた。また哲学者フィヒテ(Fichte 1762～1814)の「ドイツ国民に告ぐ」の連続講演や**ベルリン大学**の創設など，精神面での国家意識の高揚もおこなわれた。

第一帝政の崩壊　反ナポレオンの動きは，1808年まずスペインに火の手を上げた。フランス軍がこれを鎮圧できないでいた1812年，大陸封鎖令によって穀物市場を失い反抗するにいたったロシアに対し，ナポレオンは遠征の軍をおこした。遠征軍はモスクワまでたどりついたが，寒気とロシア軍の抵抗により，退却するほかなく，その退路をロシア軍に襲撃されて，みじめな姿で母国に逃げ帰った。

ナポレオンの**ロシア遠征失敗**に勇気づけられた諸国は，翌13年第4回対仏大同盟を結成して，**解放戦争**に立ちあがった。そして**ライプチヒの**

戦い（諸国民の戦い）にナポレオンを破ったのち，翌年フランスに侵入して，パリをおとしいれた。ナポレオンもここにいたってついに帝位を辞し，エルバ島に流された。



モスクワ炎上　この大火のため，フランス軍は退却のほかなく，これがナポレオン失脚のきっかけになった。

その後，フランスでは，ルイ18世（Louis XVIII，在位1814～15，1815～24）が帰国して王位につき，列国代表は**ウィーン会議**（→p. 217）をひらいたが，利害が一致せず，会議ははかどらなかった。この情勢をみたナポレオンは，1815年エルバ島を脱出して帰国し，再び帝位にのぼった。諸国はただちに第5回対仏大同盟を結成して対策を講じ，イギリスのウェリントン（Wellington，1769～1852）は**ワーテルローの戦い**にナポレオン軍を打ち破った。ここに百日天下は終わり，ナポレナンは再び退位して，南大西洋の孤島セントヘレナに流され，彼の時代は最終的に終わりを告げた。

第3節　産　業　革　命

1.　産業革命の原因

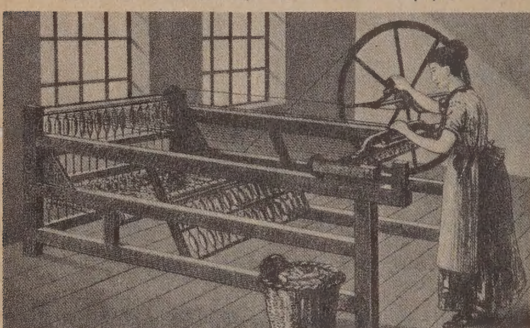
資本の蓄積　イギリスは16世紀なかばから17世紀後半にかけて，毛織物を中心とする工業生産をいっそう発展させ，18世紀には植民地戦争に勝利をおさめて世界の海上権をにぎり，多くの植民地を手に入れた。その結果，原料の供給や製品の販売市場獲得において有利となり，他国をひきはなして商工業が進展し，豊かな資本が蓄積された。またイギリスには，石炭や鉄などの天然資源が豊かに埋蔵されていた。このような事情を背景に，農業・工業に大きな変革がおこることとなった。

農業革命　18世紀にはいり，工業の発達，人口の増加などによって穀物への需要が高まると，農業における生産性の向上，農業経営の改良が要求された。そこで営利主義的な大地主は，**第2次囲い込み運動**（エンクロージュア）をおこない，中小地主や農民の土地・共有地を合わせて耕地を集中し，これを借りた大借地農は，非能率的な三圃（ぼ）制に代えて，全耕地を休ませることなく使用する新しい輪作方法を始めた*。この囲い込みにより土地を追われた農民も多く，ヨーマンが没落するとともに，中には農業労働者となって農業資本家のもとで働くものも現われ，農業における資本主義が確立した。また一方では，職を求めて都市に流れこむ者も少なくなく，その一部は産業革命のための労働力として吸収されていった。

2. 機械と動力

機械の発明　従来イギリスの最も重要な産業は，毛織物工業であったが，18世紀にはいり，木綿（もめん）への需要が高まり，インド産綿布の輸入がふえると，イギリス国内にも**木綿工業**がさかんになり，需要の増大につれて生産の増大が要求されるようになった。

1733年ケイ（John Kay 1704～64）が飛び梭（ひ）を発明して織布能率を増大させ，紡糸の生産がまに合わなくなった。そこで1760年代にハーグリーヴズ（Hargreaves 1745～78）のジェニー紡績機（多軸紡績機）とアークライト（Arkwright 1732～92）の水力紡績機，少しおくれてクロンプトン（Crompton 1753～1827）のミュール紡績機が発明され，紡糸の生産も急増した。そのため逆に織布が追いつけなくなり，この部門においても力


ジェニー紡績機

* 小麦・かぶ・大麦・クローバを順次くり返して植えつけるもの。この輪作法のほか，たねまき器その他の技術的改良もおこなわれた。

ートライト(Cartwright, 1743～1823)の力織機が発明された。これらはやがて，動力に蒸気を用いるようになり，木綿工業の生産は飛躍的に高まった。

蒸気・鉄・石炭 発明された機械は，はじめはおもに水力を動力としたから，設置は河川の流域に限られていた。ところが，1765年ワット(James Watt, 1736～1819)が，炭坑の排水用にしか使われていなかったニューコメン(Newcomen, 1663～1729)の**蒸気機関**を改良し，紡績機その他の機械にも利用できるものにした。そして蒸気力はやがて多くの工業や交通機関に利用され，産業・交通の原動力となった。

銑鉄産出量(単位万トン)		綿製品輸出額(単位万ポンド)	
1720年	約2.0	1720年	1.6
1750	2.6	1740	1.4
1770	3.2	1750	2.0
1788	6.8	1760	16.7
1796	12.5	1780	30.6
1806	25.0	1790	145.6
1820	36.8	1800	585.1
1830	67.7	1810	1,910.9
1840	139.6	1820	2,253.2
1850	224.9	1840	2,470.0
1860	382.7	1860	5,200.0

イギリスの産業の発達

鉄工業も，18世紀なかばごろから石炭を燃料とする製錬法*が一般に知られるようになったことなどにより，生産が増加した。鉄工業は，やがてすべての工業の基幹となったから，その増大・発達は大きな意義をもった。鉄工業の燃料としてにわかに需要のふえた石炭も，安全燈や通風設備の改善とあいまって，産出額が増大し，毛織物工業においても，機械による生産がおこなわれるようになった。こうした生産技術の大変革は，その他の諸工業部門にも及び，やがて機械で機械をつくるような重工業もおこり，全生産部門にわたって革命的な変化が進んだ。

交通機関の発達 工業の発展は，原料や製品を輸送する交通機関の改善をうながした。初めは道路の改修や運河の開掘がおこなわれたが，やがて蒸気が動力として利用されるようになった。19世紀初め，アメリカ人フルトン(Fulton, 1765～1815)は，蒸気船をハドソン川に走らせて，はじめて蒸気船が経済的に有望であることを実証し，1814年にはスティーヴンソン(Stephenson, 1781～1848)がすぐれた性能をもつ蒸気機関車**を

* これまでの製鉄用の燃料はおもに木炭であった。

** 鉄道は最初イギリスにおいて，1825年にストックトンとダーリントン間に，つづいて1830年にリヴァプールとマンチェスター間に敷設された。



紡績工場　機械はベルトで運転され，生産能率は急増した。214ページの図と比べても，能率化のほどが察せられるであろう。

つくった。これらはその後ますます改良され，鉄道はイギリスはじめ全世界に普及し，汽船は大洋を航行して，地球上の距離をちぢめるとともに，産業の発達を大いに助けた。

3.　産業革命の結果と影響

イギリスの繁栄　工場は，人口が多く労働力が豊かで，動力や燃料・原料を手に入れやすい都市に建てられ，工業や交通の発達とともに，そのような都市はさらに多くの人々をひきつけた。しかも当時は，衛生観念や医学知識の進歩もあって，人口は急激にふえつつあった。その結果 **マンチェスター**・**バーミンガム**などの工業都市や **リヴァプール** などの商業都市はいっそう発展し，都市と農村の人口の比重はしだいに変わっていった。こうして，生産力を飛躍的に増大させたイギリスは，19世紀にはいると，世界の経済界の中心となり，「**世界の工場**」とよばれるほどの地位を築いて，非常な繁栄を謳(おう)歌した。一方産業革命は，19世紀に他国にも伝わり，フランス・アメリカでは1830年代から始まり，ドイツでも少しおくれて開始された。

資本主義の確立　機械による生産は大規模な工場設備を必要とし，**工場制度** が成立した。工場は製品を安く大量に生産したから，問屋(とんや)制度やマニュファクチュアは太刀(たち)打ちできなくなり*，衰えるほ

* 没落の危機に直面した従来の生産者の中には，機械破壊運動をおこなうものもあった。中でもラッダイト事件(1811～17ごろ)は有名である。

かはなかった。そして，工場の経営者となった**産業資本家**は，これまでのような商業資本家からの支配を脱して，経済界の主導権をにぎるようになり，多くの労働者をやとって大きな利潤を手に入れ，経営を拡大していった。**資本主義**はこれを契機として本格的に成立に向かうこととなり，近代社会が誕生した。

また従来は，社会や国家の先進性や経済力を左右したものは繊維工業であったが，これ以後は鉄と石炭を中心とする重工業になり，経済も社会も新しい段階にはいった。

社会的影響　工場制度の初期には，資本家は利潤をあげるため，労働者にひどい労働条件を強制したり，分業によって熟練労働が不要になった結果，婦女子や児童を使ったりした。しかも低い賃金しか払わなかった。労働者の生活状態はひどく，またその数も増大したので，彼らは待遇改善を求めてしばしば暴動をおこした。それらは官憲の力によって弾圧されたが，労働者はしだいに自覚を強め，行動も組織的になり，**労働運動**に発展していった。また一方では，労働法などの**社会立法**の制定や**社会主義思想**の発生もみられることとなった。

第4節　自由主義の勝利

1.　ウィーン体制とその破綻（たん）

ウィーン会議　1814年から翌年にかけて，トルコを除く全ヨーロッパ諸国の代表はウィーンに国際会議をひらき，フランス革命とナポレオン戦争後のヨーロッパの処置を討議した。この会議には，フランス革命に対する反動から保守的な空気が強く，指導権はオーストリアの宰相メッテルニヒ（Metternich 1773～1859）がにぎり，また敗戦国フランスの代表タレーラン（Talleyrand 1754～1838）は，すべてを革命前の状態に復帰させようとする**正統主義**を主張し，



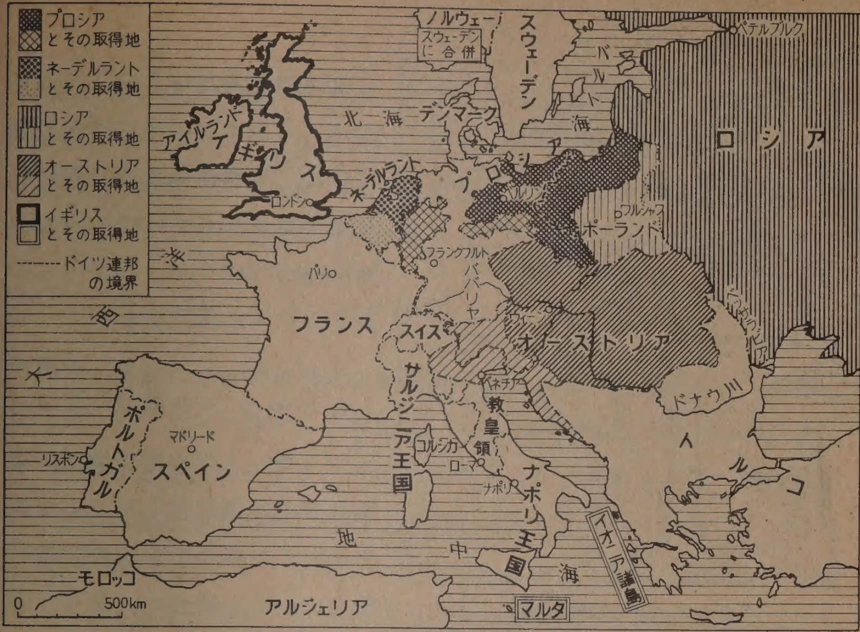
ウィーン会議(イザベー筆)　左から7人目がメッテルニヒ，右端にすわっているふたり目がタレーラン。「会議は踊る，されど会議は進まず」とからかわれた。

結局これがヨーロッパ復興の根本原則とされた。会議は難航の末，1815年ようやく議定書を成立させた。

ウィーン議定書　(1)フランス・スペイン・ナポリの旧ブルボン王家は，ほぼ以前の領土を得て復位する。(2)ロシアは，ワルシャワ大公国の大部分をポーランド立憲王国として支配下におく。プロシアは，東西に領土を拡大する。オランダは，オーストリア領ネーデルラント(のちのベルギー)をあわせてネーデルラント王国と称する。オーストリアは，その代わりにベネチアとロンバルジアを得る。スイスは，数州を加え永世中立国となる。イギリスは，戦時中に占領したマルタ島・セイロン島・ケープ植民地を領有する。(3)神聖ローマ帝国は復活せず，ドイツは，35君主国と4自由市によってドイツ連邦を結成する。

神聖同盟と五国同盟

ウィーン会議ののち，ロシア皇帝アレクサンドル1世(Aleksandr I，在位1801～25)はオーストリアとプロシアを誘って，**神聖同盟**(Holy Alliance)(1815～48)を組織した。これはキリスト教の精神にのっとって，列国の君主が兄弟のように親しみ，国民を家族のようにいつくしんで，平和と友好を維持



ウィーン会議後のヨーロッパ

しようというもので，イギリス・教皇庁・トルコを除くヨーロッパ諸君主が参加した。しかし結局はメッテルニヒらの反動政治に利用された。

神聖同盟が，現実にはあまり活動しなかったのに対し，ウィーン体制の中心機関となったのは，1815年オーストリア・プロシア・ロシア・イギリスの間に結ばれた**四国同盟**で，1818年フランスも参加を許されて**五国同盟**となった。メッテルニヒは，五国同盟を指導し，神聖同盟の名を借りて，保守政策を推進し，各国の自由主義や民族解放の運動を弾圧することに努めた。

自由主義・国民主義運動の弾圧　保守的な**ウィーン体制**に対して，各国の人々は強い不満をいだき，反抗の機運が各地におこった。

中でもドイツにおける学生組合*の運動，イタリアにおける**カルボナリ(Carbonari，炭焼)党**の反乱は，国家統一を求める**国民主義**の要求を含んでおり，のちの統一への動きのさきがけをなした。またスペインには自由

*　ブルシェンシャフトとよばれた。1815年イエナ大学に結成され，各地に波及した。



ラテンアメリカ諸国の独立

主義者の革命がおこり，ロシアではアレクサンドル1世の死を機会に，専制政治と農奴制の廃止をめざすデカブリスト（十二月党）の乱がおこった。しかし，これらも次々に弾圧された。

ラテンアメリカ諸国とギリシアの独立　中南米のスペイン・ポルトガル植民地は，本国政府の圧制に苦しんでいたが，ナポレオン戦争で本国の干渉が薄らいだのを機会に，次々に独立を宣言し，ウィーン会議後約10年の間に，スペイン領のチリ・ペルー・アルゼンチン・メキシコなど10余国，ポルトガル領のブラジルがそれぞれ独立した*。メッテルニヒはこれをおさえようとしたが，外相カニング（Canning 1770～1827）の指導するイギリスは，国内の自由主義の風潮と貿易上の利益から協調せず，アメリカ大統領モンロー（Monroe 在職 1817～25）は，1823年 **モンロー主義**（→p. 226）の教書を発して，ヨーロッパ諸国の干渉に反対し，メッテルニヒの意図をくじいた。

ラテンアメリカにつづいてギリシアでも独立運動が始まった。15世紀いらいバルカン半島を支配したオスマン帝国（トルコ）は，イスラム教の首長を兼ねた皇帝が独裁し，専制的な政治をつづけていたため，領内のヨーロッパ人とキリスト教徒は，圧制からの解放と民族の団結を求めるにいたった。中でも商業方面に活躍したギリシア人はその先頭に立ち，1821年独立戦争をおこした。

メッテルニヒはこれに反対したが，ヨーロッパ諸国民の同情は強く，イギリスの詩人バイロン（→p. 242）をはじめ独立軍を援助する者も多かった。やが

* これらの諸国はラテン系国民を主とし，ラテンアメリカ諸国とよばれる。

て列強も積極的な干渉に出て，バルカンへの進出を企てるロシアと，これを恐れたイギリス・フランスは，利害が異なりながらも共同してトルコを圧迫したので，1829年トルコは屈服してギリシアの独立を認めた。こうしてウィーン体制はつまづきをみせ，五国同盟は事実上分解した。

2. 七月革命と二月革命

七月革命

フランスでは大革命後も商工業者の成長がイギリスに比べて弱く，いぜんとして農業国の性格が強かった。そして，所有する土地の大きさが財産の基準とされ，大地主だけが選挙権をもつ政治体制が生まれた。このため王政復古によりルイ18世ついでシャルル10世（Charles X 在位 1824～30）が位につくと，革命に対する反動がおとずれ，王は言論・出版の自由を束縛し，貴族・聖職者・大地主を保護して，絶対主義の復活をはかった。さらに1830年，商工業者ら中産層を代表する自由主義派が議会の選挙に多数を得ると，王は未召集のままこれを解散し，選挙法を改めて，有権者資格をさらに限定しようとした。そのため同年7月，パリの民衆は再び立って七月革命をおこし，市街戦ののち，シャルルをイギリスに追放し，自由主義者として知られていたオルレアン家のルイ＝フィリップ（Louis Philippe 在位 1830～48）を，「フランス国民の王」として迎えた。


民衆を率いる自由の女神 三色旗を持つ自由の女神に率いられたパリ民衆。七月革命における民衆の戦いを描いたドラクロアの絵。

七月革命の影響

七月革命は諸国に影響を与え，ウィーン体制に動揺がおこった。旧教徒で農業・工業を主としたベルギー人は，新教徒が

多く商業・貿易にたよるオランダの支配を喜ばず，これを機に独立を宣言した。翌年列強は動乱の波及を恐れてこれを認め，のちベルギーは永世中立の地位を得た (1839)。

ウィーン会議以後ロシア皇帝の支配下に自治を許されていたポーランドでは，やがて始まった反動的な政治に抵抗して反乱がおこったが，ロシア軍のために鎮定されて自治権を奪われ，以後その属領となった。イタリアではカルボナリ党が各地で暴動を起こし，西南ドイツにも暴動がおこったが，やはり制圧された。

イギリスの改革　世界にさきがけて新しい産業資本家層が成長し，国の経済力が著しく増大したイギリスでは，反動政治も弱く，自由主義が発達した。

イギリスは1801年アイルランドを併合し，「大ブリテン・アイルランド連合王国」(United Kingdom of Great Britain and Ireland) と称したが，アイルランド人には旧教徒が多く，審査律により公職につくことが許されなかった。しかし自由主義の風潮が進むとともに，審査律は1828年廃止されて非国教徒にも公職が開放され，なお除かれていた旧教徒も翌年の**カトリック教徒解放法**により同権になった。

新しい社会勢力の増大は，政治への参加を求める選挙権拡大の要求を生んだ。当時のイギリスでは，下院議員の選挙資格は大地主に独占され，急速に向上した産業資本家の声が反映されていなかった。また選挙区はテューダー王朝いらいほとんど変わらず，新興の工業都市が議員を送れないのに，人口のごく少ない地域が**腐敗選挙区**として存続していた。このため市民の不満が高まって選挙法の改正が叫ばれ，ホイッグ党内閣が成立すると，1832年**選挙法改正**（第１次）を実現した。これにより腐敗選挙区は廃されて，新興都市が新たに選挙区と認められ，中産層にも選挙権が拡大されて，産業資本家の政治力が伸びることとなった。

穀物法の廃止　産業革命により経済的優位をさらに高めたイギリスでは，

資本家たちは保護貿易よりも自由貿易を有利と考えた。そのため，1813年東インド会社の独占が廃止され，まもなく商業上の機能を失った(→p. 181)。さらにナポレオン戦争終了後，穀物価格を高く維持して地主を擁護するため外国からくる穀物に輸入税をかけていた穀物法は，コブデン(Cobden 1804～65)・ブライト(Bright 1811～89)らの指導による市民層の反対運動によって，1846年に廃止され，1849年航海条令も廃止された。こうして，イギリスは **自由主義経済** を確立し，世界市場の覇(は)権をにぎった。

労働運動と社会主義

資本主義の発達にともない，労動運動や社会主義も発達した。まず，1832年の選挙法改正で利益を得られなかったイギリスの労働者は，普通選挙権を求めて **チャーティスト運動**(Chartist Movement) をおこした。彼らは6か条の「人民憲章」(People's Charter) を掲げて，1837年ごろから議会に請願したり，街頭に示威運動を展開したりした。

労働運動とともに社会主義思想も育った。イギリスの **オーエン**(Owen 1771～1858)は人道主義の立場から労働者の地位の向上をはかり，共産社会の建設を試みたりした。政府も法律で労働者を保護する必要を認め，1833年 **工場法** を制定した。フランスにも **サン＝シモン**(Saint-Simon 1760～1825)や **フーリエ**(Fourier 1772～1837)らが現われ，社会主義思想を説いた。しかし彼らの思想は，まだ現実に対する認識が不十分で理想主義的色彩が強かったため，**空想的社会主義** とよばれる。

19世紀なかばになると，労働運動はますます発達し，それに対応して，労働者階級の解放は，労働者自身により推進されるべきことを説くドイツ人 **マルクス**(Marx 1818～83) およ



チャーティストの請願行進(当時の版画)

びエンゲルス(Engels, 1820〜95)が現われた。彼らは科学的社会主義を唱え，労働者階級の政権獲得をめざす国際社会主義の原理を主張した*。(→p. 239)

二月革命

フランスでも，七月革命後に産業革命がようやく進んだが，工場生産は一般に規模が小さく，工業の発達は必ずしも順調ではなかった。したがって産業資本家は十分な勢力をもつにいたらず，ルイ＝フィリップの**七月王政**のもとで政治的・経済的に勢力を占めていたのは，少数の上層の金融資本家に限られていた。これに対して，新興の中小資本家を代表する自由主義者は参政権を要求し，一方，労働者階級を代表するルイ＝ブラン(Louis Blanc, 1811〜82)らに指導された社会主義者も加わって，しきりに政府を攻撃した。

1848年2月，彼らが選挙法の改正を求めてひらいた集会がパリで禁止されると，市民は武器をもって立ち上がり，政府を倒し，ルイ＝フィリップをイギリスに亡命させた。これが**二月革命**で，その結果，共和政体**が宣言され，普通選挙制がおこなわれることになった。

二月革命と社会主義　二月革命では社会主義者が多く加わったために，その収拾は複雑であった。臨時政府にはルイ＝ブランらの社会主義者が加わり，**国立作業場**の設置など，社会的革新が企てられたが，有産市民である自由主義者は，労働者階級の急進的政策を恐れるようになった。一方多数の小土地所有農民も，私有財産の廃止を主張する社会主義者を恐れて，保守的な態度を示した。その結果4月におこなわれた普通選挙では，農民層を味方にした自由主義者が大勝して政権をにぎり，国立作業場を閉鎖した。労働者はこれに反対し，6月に暴動をおこしたが弾圧された。

ドイツの三月革命

二月革命はドイツに深刻な影響を与え，翌3月各地に革命運動がおこり，ウィーン体制は事実上崩壊した。オーストリアでは，首都ウィーンの革命でメッテルニヒが失脚し，

---

* 彼らの手になる「共産党宣言」は1848年二月革命直前に発表された。
** これを大革命当時の第一共和政に対して第二共和政という。



三月革命　ベルリンにおける市民のバリケードと市街戦の様子。当時の新聞のさし絵。

ボヘミア・ハンガリーに民族独立の運動がおこって，国は分裂するかにみえた。**プロシア**でも首都ベルリンに革命がおこり，国王は憲法制定や議会召集など自由主義的な改革を約した。他のドイツ諸邦でも同様の運動がおこった。また，革命の過程で統一ドイツ国家建設の機運も高まり，**フランクフルト国民議会**が開かれて「ドイツ国民の基本法」を発表するとともに，全ドイツの統一が論議された。その結果，プロシア中心に統一を進めようとする**小ドイツ主義**の主張がオーストリアを中心とする**大ドイツ主義**をおさえて，1849年プロシア王をドイツ国民の皇帝に推すことがきまった。しかし，成長がおくれて力の弱い自由主義的な有産市民は，労働者階級の急進的行動を恐れ，**地主貴族**(ユンカー)を中心とする保守勢力との妥協によって収拾をはかろうとしたから，革命はいずれも挫(ざ)折して，保守勢力が復し，統一問題も王に拒絶され，不成功に終わった。

その他の民族運動　二月革命の影響は他の諸国にも及んだ。北イタリアではサルジニア王を先頭にイタリア統一運動がおこり，マッツィーニ(Mazzini, 1805～72)は**青年イタリア党**を率いてローマ共和国を建設したが，サルジニア軍はオーストリア軍に弾圧され，ローマ共和国はフランスの干渉によって崩壊した。オーストリア領内のハンガリーには独立政権が生まれ，ポーランドには反乱がみられたが，いずれも成功しなかった。またこの年イギリスのチャーティストはロンドンで大示威運動をおこそうとしたが弾圧され，以後衰えた。これらの運動はすべて成功をみなかったが，ウィーン体制の崩壊により，こののち，運動の成功は時間の問題となるにいたった。

フランス第二帝政　フランスでは，第二共和政においても王朝的勢力・自由主義勢力・社会主義勢力など社会各層が互いに対立

し，政情はなお不安であった。このため国民の多くは，強力な指導者の出現を待望した。この状態を利用して政権をにぎったのは，ナポレオン1世の甥(おい) ルイ＝ナポレオン(Louis Napoléon 1808～73) であった。彼は第二共和政憲法にもとづく大統領選挙において，圧倒的な支持を得て当選した。ついで1851年12月，クーデタを決行して，反対派を議会より追い，翌年には国民投票によって皇帝に就任し，ナポレオン3世(在位 1852～70) と称して**第二帝政**を開始した。

彼はカトリック教会を保護して保守的な農民の支持を得たが，さらに全国民の人気を得るために外交上の成功をおさめようとして，多くの戦争をおこなった。しかし，それは必ずしも成功せず，**クリミア戦争**(→p. 237)(1853～56)では，トルコを援助して勝利を得，イタリア統一戦争(→p. 232)(1859～61)に際しては，サルジニアを助けて領土をひろめ，インドシナをも侵略したが(→p. 188)，アメリカの南北戦争を機に強行した**メキシコ出兵**(1861～67)では，アメリカの抗議と原住民の反抗をうけて兵をひきあげざるをえなかった。この間，国内でも彼の政治に対する不満が高まり，とくに社会主義勢力が増大して，情勢はたびたび不安となった。

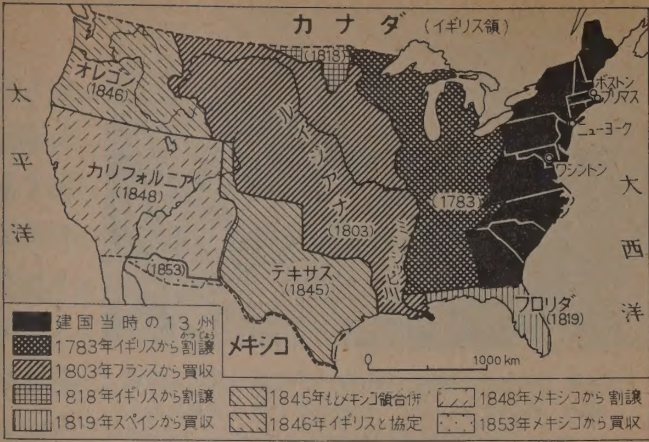
3. アメリカ合衆国の発展

合衆国の自立

アメリカはフランス革命とナポレオン戦争に中立を保って中継貿易で利を占めたが，イギリスがナポレオンの大陸封鎖に対抗して海上封鎖を実施したことから，**米英戦争**(1812～14)がおこり，これはアメリカの経済的自立をうながすもととなった。またラテンアメリカ諸国の独立に際して，第5代大統領モンローは，1823年「合衆国はヨーロッパの問題に干渉しない代わり，ヨーロッパ諸国は，新大陸の問題に干渉すべきでない」とする**モンロー主義**(Monroe Doctrine)を宣言し，これはその後長くアメリカ外交の基調となった。

一方，その領土も，1803年第3代大統領ジェファソン(在職1801～09)の時代にナポレオン1世からルイジアナ地方を買いとっていらい，しだいに拡張され，

1819年にはスペインからフロリダ半島を買収した。1845年もとメキシコ領のテキサスを併合し，翌年にはイギリス領カナダと争ってオレゴン地方を入手するとともに，カリフォルニア獲得を企ててアメリカ－メキシコ戦争を起こし，48年目的を達した。* こうして19世紀中ごろまでにアメリカの領土は太平洋岸にまで達した。



アメリカ合衆国の発展

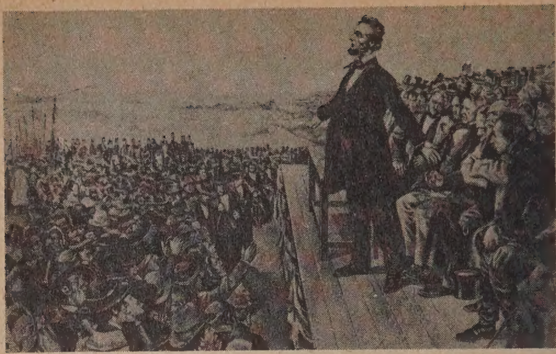
フロンティア運動　領土が西にひろがるにつれて，東部の生活困窮者や新たな移住者は，未開の辺境（フロンティア）を開拓して西部に移動していった。その結果，1880年代末にはフロンティアは一応なくなった。

南北戦争

西部出身のジャクソン（Jackson 在職 1829～37）大統領の時代には民主主義が発展し，今日の民主党(Democrats)と共和党(Republicans)の前身も成立したが，両党の成立は南北の対立をも表面化させた。民主党の力の強かった南部諸州は，一般に綿花・タバコの農業地帯で，農業経営者(地主)は自由貿易を主張し，各州の自立を唱える州権主義者が多かった。これに対し北部諸州は


黒人奴隷の競売　19世紀なかばすぎのバージニアにおける競売の模様を描いた当時の絵。

* 同年カリフォルニアで金鉱が発見され，「ゴールド－ラッシュ」がおこった。



ゲチスバーグの演説　1863年，南北戦争最大の激戦地で，同年末リンカーンは戦死者を弔う式典に臨み，「人民の，人民による，人民のための政治」の演説をおこなった。

商工業地帯として発展し，保護関税・中央集権を主張する者が多く，共和党の地盤となった。このような南北の不一致は，**黒人奴隷問題**を一つのきっかけとしてさらに深まった。

南部諸州では，黒人奴隷を使った大農場経営（プランテーション制度）をおこなっていたが，自由労働者を基礎とする北部諸州では，人道の名においてこれに反対する声が強く*，南部と北部の対立はしだいに激しくなった。

1860年共和党のリンカーン（Lincoln，在職 1861～65）が大統領に当選すると，翌年ついに南部は合衆国から分離し，ジェファソン＝デーヴィス（1808～89）を立ててアメリカ連邦を結成した。リンカーンは，あくまでも分離をくいとめようと決意し，ここに同年**南北戦争**が始まった。北軍ははじめ形勢不利であったが，1863年のゲチスバーグの戦いより優勢に転じ，総司令官にグラントを迎えて南軍を圧迫し，1865年連邦の首都リッチモンドをくだしたので，ついに南部は屈した。その間，リンカーンは1862年，５年間定住・開墾する者には一定の土地を無償で与えるという**自作農創設法**（ホームステッド法）を定め，翌年には国民の支持を得るために**奴隷解放宣言**を発した。

産業の発達

南北戦争の結果，南部のプランテーション制度は没落し，大地主に代わって中小農民の勢力が伸張した。黒人は解放されて農業労働者や小作人となったが，社会的・経済的地位はいぜん改善されず，黒人問題はこののちも大きな問題として残った。

西部では自作農創設法が施行されて農業がさかんになり，戦後急速に

---

* ストウ夫人は「アンクル-トムズ-ケビン」を書いて黒人奴隷の虐待を世に訴えた。

開発が進んで，それに必要な大陸横断鉄道も1869年に完成した。やがてフロンティアが消滅すると，土地の利用がていねいになり，農業の機械化や天然資源の調査・開発に努力がはらわれた。

北部の工業は，高率の関税などによる国家の保護をうけて著しく発達し，機械を用いる工場生産が普及したが，西部の開発と農業の発達は，そのような工業の発展をさらに促進し，アメリカの生産力はめざましい進歩をとげた。海外に商品と資本の輸出地を求める必要も強まり，1867年にはロシアからアラスカを買収して北方に領土をひろげた。

工業の発展にともなって労働運動も盛んになり，各種の労働組合組織が生まれたが，1886年にいたり，熟練工を中心とする**アメリカ労働総同盟(AFL)***が結成された。これは全国のおもな労働組合を結びつけたものであるが，その方針は比較的穏健であった。

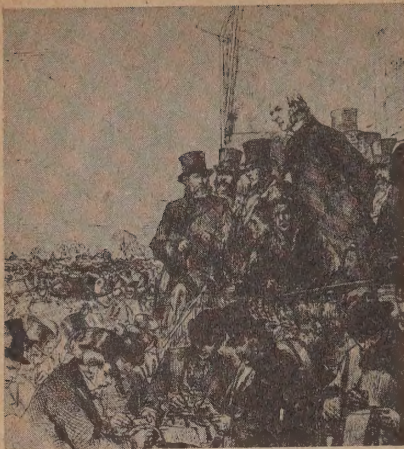
4.　イギリスの繁栄

ヴィクトリア時代　イギリス資本主義の発展は，19世紀後半に絶頂に達した。ヴィクトリア女王(Victoria 在位 1837～1901)治世のこの全盛期には，経済的繁栄と産業資本家層の成長により，政治面でもそれに対応するかずかずの発展がみられた。

第1次選挙法改正(→p. 222)のころ，トーリー党は**保守党**(Conservatives)，ホイッグ党は**自由党**(Liberals)とよばれるようになり，この二政党は交代で内閣を組織した。とくにヴィクトリア時代の後半には，保守党のディズレーリ(Disraeli 1804～81)と自由党のグラッドストーン(Gladstone 1809～98)がこもごも政局を指導して，二大政党対立時代を現出し，議会政治はさらに発展した。

選挙権拡大の要求はその後さらに高まって，1867年第2次選挙法改正として実現し，都市労働者の多くが選挙権を得た。チャーティスト運動の経験に学んだ労働運動は，組織的な労働組合運動に発達し，1871年労

* American Federation of Labor の略。



グラッドストーン　1874年の総選挙に際し，ロンドン郊外で選挙演説をおこなうグラッドストーン。当時の新聞のさし絵。

働組合法が制定されて合法的地位を得た。また1870年普通教育法がしかれ，国家の費用による義務教育がおこなわれるようになった。さらに1884年にはグラッドストーン内閣が第3次選挙法改正をおこない，農村労働者も選挙権を得て，普通選挙に近づいた。このようにして労働者の政治的地位も向上し，20世紀初頭には**労働党**（Labour Party）が結成された。

植民政策

自由貿易主義をとってきたイギリスも，1870年代ごろから，植民政策の転換を迫られた。ドイツ・アメリカなどの後進国が，保護貿易主義をとって産業を発達させ，イギリスに迫ったためである。優越的地位を脅かされるにいたったイギリス産業資本は，企業の独占と植民地の獲得・確保をはかって，これに対抗しようとした。

こうして，いわゆる帝国主義(→p. 250)時代にはいると，保守党のディズレーリ内閣は，エジプトに進出し(→p. 252)，インド帝国(→p. 181)の成立を宣言するなど，強硬な対外政策をとり始めた。しかし一方では，産業資本の発達にともなって，後進地域は原料の供給地，製品の市場として経済的に確保できるだけでよいとの主張も唱えられた。そこで，自治を認めることによって植民地を王冠（クラウン）を中心とする大英帝国につなぎとめる自治領の政策がとられることになり*，1867年のカナダをはじめとして，オーストラリア(1901)や，ニュージーランド(1907)，南アフリカ連邦(→p. 254)(1910)が自治領となった。1887年には，ジョゼフ＝チェンバレン（Joseph Chamberlain 1836～1914）の提唱で植民地会議がひらかれ，以後たびたび会合して帝国の結合をはかり，1907年帝国会議と改称した。

＊　ただし，これは白人系の植民地に対してだけであった。

アイルランド問題　この間にあって，民族と宗教を異にし，土地のほとんどをイギリスの不在地主ににぎられていたアイルランド人は，自治を求めて，しばしば英本国に反抗した。* グラッドストーンは数次にわたる改革で，耕地・小作料などにかなりの譲歩を示したが，政治的自治の問題は，自治法案が2回とも不成立に終わり(1886・1893)，ついに解決されなかった。(→p.285)

第5節　ナショナリズムの発展

1.　イタリアの統一

統一運動の進展　工業生産の展開が西ヨーロッパ諸国よりずっと遅れていたイタリアでは，近代にはいっても **小国分立状態** がつづいた。ナポレオン軍の侵入により一時高まった統一の機運も，ウィーン会議以後は再び旧状にもどり，教皇領やサルジニア・ナポリの両王国などが復活した。またオーストリアはロンバルジア・ベネチアを領有して北イタリアを圧した。そのため，イタリアの国民主義運動は，まずオーストリア勢力の打破を目標とした。

はじめこの運動は，明確な組織と統一を欠いていたが，七月革命ののち，カルボナリ党にかわって マッツィーニ の青年イタリア党が活発に運動を開始した。(→p. 225) ついでサルジニア国王 ヴィットリオ＝エマヌエレ2世 (Vittorio Emanuele II　在位 1849～61 イタリア王1861～78) は，父王が二月革命の時発布した憲法を守り，カヴール (Cavour　1810～61) を首相に登用して統一の達成にのりだした。

イタリア王国の成立　カヴールは，オーストリアを破って統一を実現するには強国の援助が必要と考え，まず1855年クリミア戦争に英・仏を助けて出兵し，とくにフランスの同情を得ることに努めた。

---

* アイルランド人はケルト系で旧教徒が多かった。これに対し，17世紀いらい北部のアルスター地方には新教徒のイギリス人地主が集団的に居住していた。



イタリアの統一

そしてナポレオン3世の武力援助の約束をとりつけたうえで，1859年**イタリア統一戦争**をおこした。戦いはサルジニア側に有利であったが，ナポレオン3世は，サルジニアの強大化を恐れて態度を変え，単独でオーストリアと和したため，サルジニアはロンバルジアをあわせるにとどまった。しかし，中部イタリア諸国はサルジニアとの合同を望んだので，カヴールはサボイ・ニースの地をナポレオン3世に与えて中部諸国の合併を承認させた。さらにガリバルディ(Garibaldi 1807～82)は義勇軍を組織し，シチリア・ナポリを攻めとってサルジニア王に献じた。かくて1861年サルジニア王は，オーストリア領ベネチアと教皇領の一部を除く全半島を統一して，**イタリア王国**をたてた。

その後1866年普墺(おう)戦争(→p. 233)が始まると，イタリアはプロシアを助けてベネチアをあわせ，1870年には普仏戦争(→p. 234)に乗じて教皇領を併合し，ローマを首都と定めて，ここに統一はほぼ完成した。

残された問題　しかし，領土を失ったローマ教皇は「バチカンの囚人」と称してイタリア政府と対立した。またイタリアはオーストリア領のトリエステ地方などを「**未回収のイタリア**」とよんで，その併合要求をつづけた。(→p. 290, 291)

2.　ドイツの統一と発展

統一機運の進展　神聖ローマ帝国の名ばかりの支配のもとで，分裂に悩んできたドイツにも，19世紀になると，統一の機運がめばえてきた。ウィーン会議により生まれた**ドイツ連邦**は，35君主国と4自由市の集合体にすぎず，また連邦内の諸邦が設置した関税は，自由な経済活動をさまたげ，産業の発達を遅らせる原因となっていた。

しかし隣接する幾つかの統一国家に対抗して，しだいに経済的統一の機運が高まり，1834年プロシアの指導下に，オーストリアを除く18領邦の間でドイツ関税同盟が組織された。つづいて鉄道の敷設も進み，産業革命が発展したが，工業のさかんな西ドイツのライン地方を獲得したプロシアは，しだいにオーストリアを圧していった。1848年の三月革命時の統一運動は失敗に終わったが，(→p. 225)プロシア中心の傾向はさらに強まった。



ドイツの統一

1862年プロシア王ヴィルヘルム1世(Wilhelm I 在位1861～88 皇帝1871～88)は，地主貴族(ユンカー)出身のビスマルク(Bismarck 1815～98)を宰相に任じた。ビスマルクはドイツ統一を「鉄と血」による武力で実現しようとし，議会の反対をおしきって軍備を拡張した。たまたまシュレスウィヒ・ホルシュタイン両州の帰属をめぐる争いから，まずオーストリアと同盟してデンマークを破り，ついで1866年オーストリアとの間に**普墺戦争**をおこし，7週間で勝利を得た。その結果プロシアは，ドイツ連邦を解散させ，新たに北ドイツ連邦を組織してその盟主となり，オーストリアをドイツ問題からしめだし，この基礎の上に統一を実現することとなった。

普仏戦争と統一の達成

ルール地方やザール地方など鉄鉱や石炭に富む地方をもつプロシアに対し，工業原料も工業生産も少なかったフランスは大きな脅威を感じた。その上，ナポレオン3世は国内においても，あいつぐ威信の失墜に悩んだ。そこで内外の危機をきりぬけるため，1870年スペイン王位継承問題をめぐってプロシアに宣戦した（普

仏戦争)。ビスマルクはただちに応戦してフランス軍を破り，セダンでナポレオン3世を降伏させたのち，パリに向かい，1871年1月ヴェルサイユ宮殿で，南ドイツ諸国をも加えた**ドイツ帝国**の成立を宣言した。ヴィルヘルム1世が皇帝に推され，ビスマルクは新帝国の宰相となった。

帝国のしくみ　ドイツ帝国の組織は，北ドイツ連邦の制度をもとにした連邦制で，連邦各邦がそれぞれの政府と議会をもった上に，プロシア王が皇帝を兼ねて君臨した。立法府は各邦を代表する連邦参議院と，男子の普通選挙による帝国議会との二院制をとったが，宰相は皇帝にだけ責任を負うもので，外見上の立憲主義にすぎず，プロシアの軍国主義の性格も温存された。

ドイツ帝国の発展　戦勝の結果，フランスの工業生産の中心地であったアルザス・ロレーヌ二州を奪ったドイツは，急速に工業を発展させた。1870年代以後，ヨーロッパ各国の資本主義は，自由競争から独占へと発展したが，ドイツは後進国であったため，保護関税や資本の集中・独占によって重工業を中心とする**国家的産業の育成**に力を注ぎ，その生産力は1890年代には，イギリスと肩を並べるほどになった。

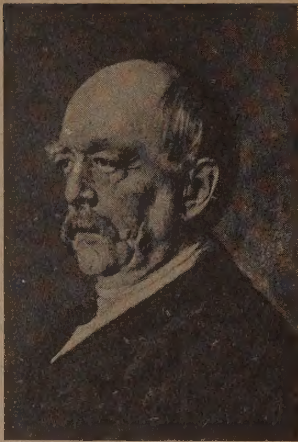
民主主義の弱体　各国の経済力が高まって国家間の競争や対立が激化し，また社会主義や労働運動が強まると，これらに対抗するため資本家は国家の権力や軍事力に依存するようになり，このため自由主義や民主主義も十分に伸張しえなくなったが，この傾向はドイツのような従来の後進国で著しかった。

ビスマルクの内政　ビスマルクは，国内政策で，カトリック教会と社会主義勢力の二つの問題に当面した。

旧教徒の勢力が強い南西ドイツは，新教国プロシアによる統一を喜ばず，中央党を組織して政府に反対した。ビスマルクは1871年**文化闘争**をおこし，教会や宗教学校に対する監督をきびしくしたが，旧教徒は教皇の支援を得て団結し，屈しなかった。この間社会主義勢力が増大したので，これと対抗する必要から，ビスマルクはついに教会と妥協した。

ドイツの社会主義運動はラッサール（Lassalle 1825～64）・マルクスらの指導によって始ま

り，1875年には社会主義労働者党が結成され，選挙ごとに代議士の数を増して政府を攻撃した。ビスマルクは1878年**社会主義者取締法**を成立させて弾圧をはかったが，その勢力は増大をつづけ，1890年**社会民主党**と改称した。彼は社会主義運動に対抗するため，労働者の福利をはかり，養老保険・疾病保険など各種の**社会政策**を実施したが，これは各国の模範とされるようになった。


ビスマルク

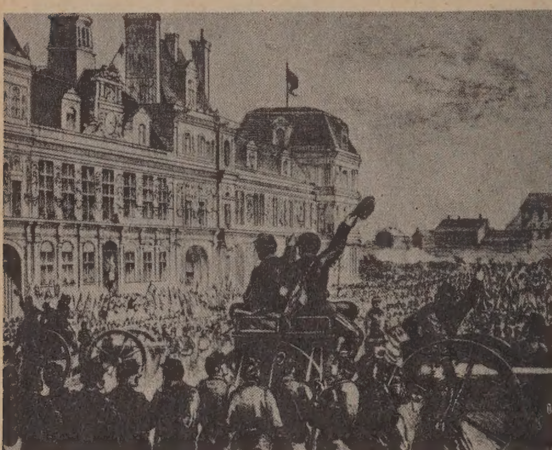
ビスマルク時代 ビスマルクの外交政策は，宿敵フランスを孤立させてドイツへの復讐(しゅう)を断念させることを目的とし，そのために，平和協調外交と**同盟政策**を推し進めた。彼はまずオーストリア・ロシアと三帝協約(1873)を結んだが，露土戦争の収拾をめぐってイギリス・オーストリアとロシアが対立すると，1878年彼はベルリン会議を開いて，ロシアの意図をおさえた。(→p. 238)その結果，三帝協約が崩壊すると，翌年**独墺同盟**を結んでオーストリアとの政治的・経済的な結束を強める一方，中央アジアにおける英露の対立を利用してロシアを誘い，1881年三帝協約を復活させた。またその翌年には，チュニジアをフランスに占領されて，これと対立するにいたったイタリアをひきいれて，オーストリアとともに**三国同盟**を結成した。しかし，その後もロシアとオーストリアはバルカン問題をめぐってしだいに離反し，三帝協約が再び消滅すると，ビスマルクは，露仏の接近を防ぐため，1887年ロシアと再保障条約を結んだ。このように，1890年ビスマルクが引退するまで，ヨーロッパの平和は彼を中心に保たれ，**ビスマルク時代**とよばれた。(→p.262図)

オーストリア-ハンガリー帝国 オーストリアは，普墺戦争後の1867年，ハンガリーに自治を与えて，オーストリア-ハンガリー帝国と称した。しかしその後もチェコ人などの民族運動にいぜんとしてなやまされた。

3.　フランス第三共和政

パリ－コミューン　1870年ナポレオン3世がプロシア軍に降伏すると，パリでは暴動がおこって帝政を廃し，国民防衛政府が組織された。プロシア軍は翌年1月パリにはいったが，ビスマルクは急進的なこの政府を相手にせず，議会の選挙を要求し，穏和共和主義者 ティエール（Thiers 1797～1877）を長官とする臨時政府と講和条約を結んだ。パリの民衆はこれを不満とし，自治政府（コミューン）をたてて抵抗した。これは最初の社会主義政権であったが，臨時政府はドイツ軍の支持を得て，2か月ののち反乱を鎮定した。

第三共和政の成立　コミューンの乱後も，王党派と共和派の争いがつづいたが，共和派はしだいに勢いを伸ばし，1875年共和国憲法ができた。三権分立を基礎とするこの憲法により，フランス **第三共和政** はようやく確立した。産業も進み，敗戦と賠償金支払いの痛手もとりもどし，1880年代には海外進出に努めるようになった。



パリ－コミューンの結成式（当時の版画）

国力の回復とともに，再び軍部・右翼の反動的傾向も生まれ，19世紀末ブーランジェ事件*・ドレーフュス事件**などがおこり，

* 前陸相ブーランジェを中心に対独復讐戦と強力政治の樹立を求めた運動で，王党派に支持されたが，結局失敗し，ブーランジェは亡命した(1888～89)。

** ユダヤ人の参謀将校ドレーフュスがドイツ－スパイの嫌（けん）疑をうけ投獄された事件。民主共和派と軍部保守派との激しい政争がひきおこされ，文豪ゾラはきびしく保守勢力に抗議した。結局ドレーフュスは釈放され，軍部の信用は失われた(1894～99)。

その後も左右両派の政争がつづいて，共和政の運営は不安定であった。この間，社会主義運動もさかんになり，議会主義を否定して労働組合の直接行動による革命を主張する急進的なサンディカリズムが強くなった。

フランスの資本主義　原料の産出が少なかったフランスでは，工業資本主義の展開が不十分で，農業の資本主義化も進まず，保守的な小土地所有農民がなお社会の多数を占めた。このためフランスの資本主義は，英・米・独などのように大工業ではなく，金融と海外投資を中心として発達した。国内には資本家と労働者の対立にもとづく大政党が生まれず，利害をともにする人々のまとまりは小さく数多く出現し，小党分立の傾向が著しかった。

4.　ロシア帝国と南下政策

自由主義運動とクリミア戦争　ロシアは，西欧諸国に比べて経済・社会の発達が著しく遅れ，皇帝の専制政治（ツァーリズム）のもとに，国民の大部分を占める農民は農奴の地位にとどめられ，近代的工業は未発達であった。19世紀にはいると，近代化をめざす自由主義的思想や解放を求める民族主義がおこったが，ニコライ1世（Nikolai I，在位 1825〜55）はそれらをきびしく弾圧し，(→p. 220, 222)専制政治を強化した。

その間ロシアは，バルカン・近東方面に積極的な進出をこころみ，ギリシア独立戦争への介入にひきつづいて，エジプト問題でオスマン帝国(トルコ)援助を口実に南進をはかったが，イギリスの外交によりはばまれた(→p. 183)。ついで，1853年，パレスチナの聖地管理権とトルコ領内のキリスト教徒保護を要求してトルコと開戦したが，イギリス・フランスは翌年トルコを助けてロシアに宣戦した（クリミア戦争）。クリミア半島を主戦場とするこの戦争で*，ロシア軍は装備・戦略などのあらゆる点で英仏軍に劣り，56年あえなく敗退して目的を果たせなかった。

---

* この時，イギリスのナイティンゲールは傷病兵の看護に活躍し，のちの赤十字運動に影響を与えた 。



アレクサンドル２世

農奴解放と革命運動　クリミア戦争の敗北で後進性が痛感されると，社会改革を求める声はにわかに強くなった。そこでアレクサンドル２世（Aleksandr II　在位 1855～81）は，社会の近代化を進め，資本主義を発展させて国力を強めようとの意図から，1861年**農奴解放令**を発した。これにより農民にはじめて人格的自由と土地所有が認められたが，解放は農民に不利な条件でなされ，ここにひらかれた資本主義化への道は，かなり不完全なものであった。

解放後もなお不満な農民たちは各所に一揆（き）をおこし，またインテリゲンツィア（知識層）や学生の間から社会改革をめざすいろいろな運動もおこった。学生を中心とするナロードニキ（人民主義者）は「ヴ－ナロード（人民の中へ）」を標語に，農民の啓蒙（もう）にあたり，他方，無政府主義者バクーニン（Bakunin　1814～76）らの影響をうけた虚無主義者（ニヒリスト）は，暗殺手段に訴えて，一挙に社会の転覆をはかろうとし，1881年にはアレクサンドル２世も虚無主義者に暗殺された。その後ロシアの専制政治は強化されたが，これはかえって国民に革命思想をひろめることとなり，労働者の間にはマルクス主義が普及し始めた。

露土戦争とベルリン会議　19世紀後半に，オスマン帝国からの分離独立を求めるバルカンのスラブ諸民族の運動（汎スラブ主義）が高まると，ロシアはこの情勢を利用して，またしても南下をくわだてた。そして，これら諸民族の運動に対してトルコがきびしい弾圧を加えると，1877年ロシアはキリスト教徒保護を口実に**露土戦争**をおこした。翌年トルコは敗れ，サン－ステファノ条約によって，セルビア・モンテネグロ・ルーマニアの独立とブルガリアの領土拡張を認めた。

ところが，ロシアのバルカン進出を恐れたイギリス・オーストリアは，この条約に強い不満を示し，国際関係が緊張した。これを見たビスマル

クは「誠実な仲介人」と称して調停に乗りだし，1878年**ベルリン会議**をひらいた。その結果，サン－ステファノ条約は破棄され，新たに**ベルリン条約**(→p.184)が結ばれた。これにより，イギリスがキプロス島領有を認められ，オーストリアがトルコの名目的主権下にボスニア・ヘルツェゴヴィナの統治権を与えられたのに対し，ブルガリアは領土を縮小されたうえ，半独立国として，ひきつづきトルコの支配下に置かれ，ロシアの意図はまたも挫折した。

5.　国際的諸運動の発達

労働運動の国際化　ヨーロッパ諸国の資本主義的発展にともなう国際対立の激化は，一方では国際協調の動きを高め，対立が複雑で激しくなるにつれて，ますます国際的な親善が求められた。

最も国際的傾向をもったのは，社会主義の運動であった。1863年のポーランドの反乱援助を機に，翌64年英・仏その他の労働運動の指導者は，ロンドンで**国際労働者協会***(**第一インターナショナル**)を結成した。マルクスがその指導にあたったが，マルクス派・プルードン派・バクーニン派などの内部対立や各国政府の弾圧のため，1876年に解散した。しかし帝国主義(→p. 250)の新たな情勢に応じ，労働運動の国際的協力の必要はいよいよ痛感された。そこで1889年，パリで**第二インターナショナル**が結成され，ドイツ社会民主党を中心とする各国社会主義政党の連合体として，戦争反対と労働者保護を主張し，世界に大きな影響を与えたが，1914年第一次世界大戦の勃(ぼっ)発によって解体した。

国際協調の進展　交通・通信機関が，19世紀になって飛躍的に進歩したことは，世界を一体とする国際運動の発達をうながし，万国電信連合(1865)・万国郵便連合(1874)も結成された。また，イタリア統一戦争中の惨状を目撃したスイス人デュナン(Dunant, 1828～1910)の提唱により，

---

* International Working Men's Association

1864年ジュネーブに**国際赤十字社**が設立された。古代ギリシアに源を発する**国際オリンピック競技会**は，1896年アテネで復活され，以後4年ごとに回を重ねて，スポーツによる国際親善を実現した。

第6節　近代市民社会の文化

1.　自然科学の発達

物理・化学

「理性の世紀」であった18世紀を経て，19世紀にはいると，自然科学は著しい発達をみせ，「科学の世紀」となった。産業革命の進行は技術と科学の発達をうながした。近代は，産業が科学や技術の発達ときわめて密接な関係をもつにいたった時代である。

世紀半ば，ドイツのマイアー（Mayer 1814～78）・ヘルムホルツ（Helmholtz 1821～94）らが発見したエネルギー不滅の法則は，熱エネルギーの工業技術への利用をもたらし，その影響は大きかった。さらにイギリスのファラアー（Faraday 1791～1867）は電気理論を研究し，電気の時代としての20世紀を導くこととなった。ラヴォアジエにはじまる近代(→p. 157)化学の発達もめざましく，ロシアのメンデレエフ（Mendeleev 1834～1907）は元素の周期律を発見した。

キュリー夫妻

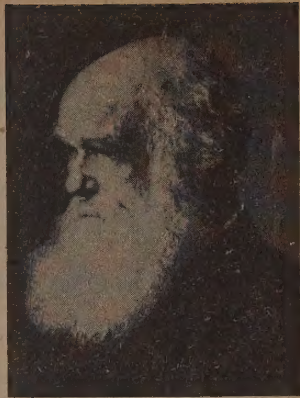


19世紀末にはドイツ人レントゲン（Röntgen 1845～1923）のエックス放射線の発見，フランスのキュリー夫妻（Curie 夫1859～1906 妻1867～1934）によるラジウム発見などがあり，物質の本体を探る原子物理学が今世紀にはいって大発展を示す基礎が築かれた。

生物学・医学

生物進化の思想は18世紀末より科学的に進められたが，イギリスのダーウィン（Darwin 1809～82）は，1859年「種（しゅ）の起源」を発表し，適者生存と自然淘汰（とうた）の理論をもっ

て進化論を完成し，自然を固定的なものとする神学的な世界像を打破して，思想界にも大きな影響を与えた。また，オーストリアのメンデル(Mendel 1822〜84)は遺伝の法則を発見した。生物学の発展は，近代医学の建設に寄与し，微生物の研究を通じて，フランスのパストゥール(Pasteur 1822〜95)は伝染病の原因が細菌の作用であることを発見した。さらにドイツのコッホ(Koch 1843〜1910)を経て細菌学は一段と進み，臨床医学もこれにともなって発達した。



ダーウィン

数学・天文学・地質学その他の分野でも発達は著しかった。数学は他の学問への従属的地位を脱して，純粋数学として発達するとともに，科学の基礎学問として，その発展は科学や技術の進歩を大きく促進した。

自然科学の応用

自然科学の発達は，その応用面でさらにめざましく，人類の日常生活は面目を一新した。交通・通信機関では，19世紀初めに蒸気機関車・汽船が実用化されたが，19世紀後半から20世紀にかけて，アメリカ大陸横断鉄道・シベリア鉄道が敷設され，スエズ・パナマ両運河がひらかれるなど，地表上の隔たりを縮小した。また電気エネルギーの利用が急速に進み，アメリカのモールス(Morse 1791〜1872)（モース）が電信機を発明した(1837)のち，19世紀後半には，アメリカ人ベル(Bell 1847〜1922)が電話機を，

電話の発明　1876年２月フィラデルフィアで，ベルが初めて電話を公開したときの様子。当時の版画。



イタリア人マルコーニ(Marconi 1874~1937)が無線電信を，アメリカ人エディソン(Edison 1847~1931)が電燈・映画・蓄音機を発明した。また石油の利用による内燃機関の発達は，自動車，ついでライト兄弟(Wright 兄 1867~1912 弟 1871~1948)らのくふうによる飛行機を出現させ，新しい交通革命をもたらすもととなった。

このような交通・通信機関の発達と科学の進歩は，遅れた地域の探検や開発を可能にした。イギリスのリヴィングストン(Livingston 1813~73)，アメリカのスタンレー(Stanley 1841~1904)によるアフリカ探検をはじめ，アジア・中南米の奥地の探検・開発も進められ，20世紀にはいるとアメリカ人ピアリー(Peary 1856~1920)が北極を，ノルウェー人アムンゼン(Amundsen 1872~1928)が南極を，それぞれ探検した。*

2.　文芸思潮の変遷

ロマン主義文学

18世紀末から19世紀初めにかけて，**ロマン主義文学**が生まれた。**ロマン主義**は，理知的な冷静さよりも感情や想像を重んじ，中世の伝統を尊んだ。それは，ウィーン体制の暗い現実を逃避して，孤独感と非現実の世界に遊んだものであると同時に，啓蒙思想の理性偏重に対する自覚的な個性の反逆でもあった。

フランスではルソーの影響のもとにロマン主義が栄え，スタール夫人(Staël 1766~1817)が基礎づけ，シャトーブリアン(Chateaubriand 1768~1848)や「レ－ミゼラブル」の著者ユゴー(Hugo 1802~85)に代表されたのち，現実主義への橋渡しともいうべきバルザック(Balzac 1799~1850)が多くの傑作を残した。ドイツでは18世紀末にゲーテ・シラーが疾風怒濤(シュトルム－ウント－ドラング)運動により先駆的動きを示したのち，** ノヴァーリス(Novalis 1772~1801)・シュレーゲル兄弟(Schlegel 兄1767~1845 弟1772~1829)・ハイネ(Heine 1797~1856)らが出たが，空想的な性格や中世へのあこがれは，この国で最も強かった。イギリスにはワーズワース(Wordsworth 1770~1850)・バイロン(Byron 1788~1824)・スコット(W.Scott 1771~1832)らが出た。プーシュキン(Pushkin 1799~1837)は

*　1911年イギリスの F.スコットはアムンゼンと南極探検を争い，約1か月遅れて翌1912年初め到達したのち，凍死した。

**　この時期のゲーテの代表作には「若きヴェルテルの悩み」，シラーの代表作には「群盗」があげられるが，両人とも，のちにはロマン主義の風潮から離れ，ゲーテは大作「ファウスト」を著わし，シラーは「ヴィルヘルム＝テル」などを書いた。

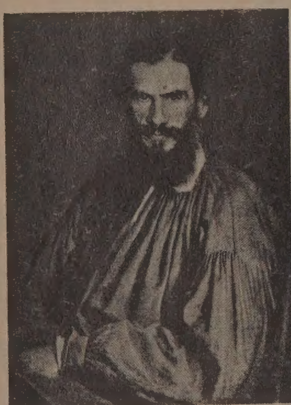
ロシア最大の国民詩人で，この国の写実主義の基礎をもつくった。

アメリカの文学　アメリカでも19世紀になって文学活動が盛んになり，理性より直観を重んじた詩人エマーソン（Emerson 1803～82），清教徒として良心の問題を追求した小説家ホーソン（Hawthorne 1804～64），民主主義と自然を賛美した詩人ホイットマン（Whitman 1819～92）らが出た。

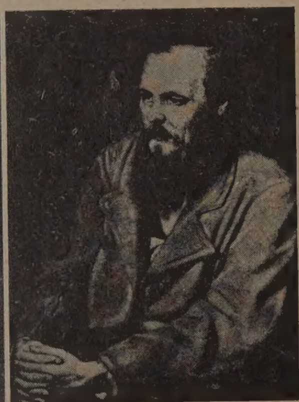
現実主義の傾向　自然科学の隆盛と資本主義の成熟にともなって，ロマン主義の空想的な風潮はしだいに否定され，文芸の上でも，題材を日常の社会や生活に求める写実的な傾向が強くなった。バルザック・スタンダール（Stendhal 1783～1842）を経てフランスに現われたフロベール（Flaubert 1821～80）は，現実主義の確立者とされ，つづいて出たゾラ（Zola 1840～1902）・モーパッサン（Maupassant 1850～93）らは，それをさらに強めた自然主義の代表的作家である。ここには空想や中世に遊ぶのではなく，社会の発展にともなって現われたさまざまの問題を，科学的な正確さで鋭くとらえ，客観的に描き出そうとする傾向がある。またイギリスのディケンズ（Dickens 1812～70）は写実的な作風をうたわれ，ドイツのハウプトマン（Hauptmann 1862～1946）は自然主義的の劇作家として名高い。

このような風潮は，社会の発展の遅れたロシアや北ヨーロッパでは，社会的性格の強い作品を生んだ。ゴーゴリ（Gogol 1809～52）・トゥルゲーネフ（Turgenev 1818～83）についでロシアに現われたトルストイ（Tolstoi 1828～1910）は，人道主義の立場から「戦争と平和」などを書き，ドストエフスキー（Dostoevskii 1821～81）は「罪と罰」などの諸作に人間の苦悩と本性を掘り下げた。「人形の家」を書いたノルウェーのイプセン（Ibsen 1828～1906），スウェーデンのストリンドベリ（Strindberg 1849～1912）は社会劇によつて女性解放問題などを投げかけた。

トルストイ



ドストエフスキー



世紀末文学　19世紀末の帝国主義時代になると，国際関係や社会の不安・動揺を反映して，文学においても，フランスを中心に，懐疑的・退廃的な傾向が強まった。ボードレール Baudelaire 1821～67 やヴェルレーヌ Verlaine 1844～96 は伝統や形式を捨てて，象徴主義の詩を書き，イギリスのワイルド Wilde 1856～1900 は芸術至上の耽美(たんび)主義を唱えた。

美　術　美術ではフランスの中心的地位が確立したが，ロマン主義から写実主義（現実主義）への流れは絵画にもみられた。一般に，主義と主義との対立の中に文芸が発展していったことは，19世紀の新たな様相であり，それは文化の近代化を示すものであった。

ドラクロア Delacroix 1798～1863 は，アングル Ingres 1780～1867 らの新古典主義絵画に反抗して，色彩と激動によってロマン主義絵画を完成させたが，ミレー Millet 1814～75 を経て，クールベ Courbet 1819～77 にいたると，ロマン主義への反逆として，日常の平凡な生活が題材とされた。このような写実主義は，一面では科学における客観的観察の態度と通ずるものであったが，その観察の精神は，やがて色彩における発見をもたらすにいたり，ここにマネ Manet 1832～83 に始まり，モネ Monet 1840～1926・ルノアール Renoir 1841～1919 らに代表される印象主義（印象派）がおこった。

一方，ドガ Degas 1834～1917 は社会の裏面に観察の目を向け，ゴッホ Gogh 1853～90 は強烈な表現に，ゴーガン Gauguin 1848～1903 は深い精神性に，独自の画法を示し，セザンヌ Cézanne 1839～1906 にいたって19世紀絵画の終幕と現代絵画の出発がもたらされた。彫刻には近代の第一人者ロダン Rodin 1840～1917 が出た。

糸杉　ゴッホ筆



音　楽　音楽はドイツが中心でハイドン Haydn 1732～1809・モーツァルト Mozart 1756～91 のあとをうけて，ベートーヴェン Beethoven 1770～1827 が古典音楽を完成した。ついでシューベルト Schubert 1797～1828・シューマン Schumann 1810～56，ポーランド人ショパン Chopin 1810～49 ら，ロマン主義音楽の天才が数多く現われ，ワグナー Wagner 1813～83 は北欧神話による壮大な楽劇を大成した。その間ロシアでは

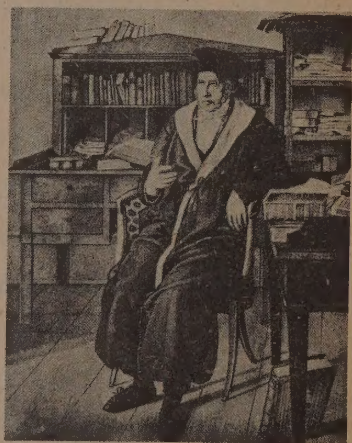
民族的伝統にもとづく国民音楽の動きが活発で，チャイコフスキー（Chaikovskii，1840〜93）はロマン主義音楽に民族的色彩を加えた。19世紀末には，不安な世紀末の人間精神を反映して，フランスのドビュッシー（Debussy，1862〜1918）らを中心とする印象主義音楽が現われ，旋律より響きの効果を重視し，現代音楽につながって複雑な展開を示した。

3.　文化・社会科学の発達

近代哲学の確立　18世紀末から19世紀前半にかけて，現実面では遅れた社会体制に苦しみながら，精神面での優越を力にして国の再興をはかろうとしたドイツで，すぐれた思想家があいつぎ，観念論哲学の黄金時代を生んで，ヨーロッパの思想界を指導した。

カント（Kant，1724〜1804）は啓蒙思想の理性万能的な考えに対し，理性の認識能力への批判をおこない，「純粋理性批判」などで批判哲学を樹立し，近代哲学を大成した。彼の哲学は，フィヒテの理想主義にうけつがれ，その主観的な傾向はシェリング（Schelling，1775〜1854）の神秘主義をも生んだが，ヘーゲル（Hegel，1770〜1831）に及んで，世界史は絶対的理念すなわち精神の弁証法的発展であると説かれ，その哲学は著しく動的なものとなった。またショーペンハウアー（Schopenhauer，1788〜1860）の厭（えん）世的思想は，ロマン主義的思潮の一表現といえる。

ヘーゲル



ヘーゲルの死後彼の学派は分裂したが，その一つにフォイエルバッハ（Feuerbach，1804〜72）に発してマルクスにうけつがれた**唯物論**の世界観がある。これは観念論哲学への批判であるとともに，現実主義の風潮ともつながっていた。このころフランスに現われたのが実証主義の哲学で，コント（Comte，1798〜1857）は社会にも科学同様の法則性を求め，社会学の基礎を築いた。イギリスにおける経験主義の傾向は，ベンタム（Bentham，1748〜1832）・ミル（Mill，1806〜73）らによって功利主義思想を生み出し，ま



ラ　ン　ケ

たスペンサー(Spencer 1820～1903)は進化論にもとづいて社会進化の思想をつくりあげた。しかしこのような傾向に反対する声もあり，デンマークのキェルケゴール(Kierkegaard 1813～55)は実存主義的な思考に傾き，またドイツ人ニーチェ(Nietzsche 1844～1900)の超人の思想は，資本主義のいきづまりを感じ始めるとともに神を失った世紀末の反映でもあった。

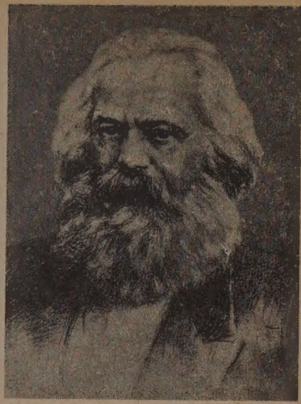
19世紀末から20世紀にかけて，新カント派の哲学がおこり，理想主義の傾向が唯物論的思想に対立したのは，新しい時代の方向を探ろうとする思想界の苦しみの表われであった。ドイツのディルタイ(Dilthey 1833～1911)やフランスのベルグソン(Bergson 1859～1941)は「生の哲学」を唱えたが，一方アメリカではプラグマティズム（実用主義）が発達した。

近代歴史学の成立　19世紀のロマン主義や中世へのあこがれや国民主義の傾向は，また歴史学の発展とも結びついた。ドイツはその中心で，ランケ(Ranke 1795～1886)は，きびしい史料批判と実証を重んずる多くの労作を書き，近代史学を確立した。つづいてドイツにドロイゼン(Droysen 1808～84)・トライチュケ(Treitschke 1834～96)らが出たほか，フランスにはギゾー(Guizot 1787～1874)，イギリスにはマコーリー(Macaulay 1800～59)らが現われた。やがて実証的研究は深められて，文化史の主張がおこなわれるとともに，20世紀にはいるとマルクスの流れをくむ唯物史観も影響力をもち始めた。また法学においても，法の歴史性や民族的特殊性を重視するドイツのザヴィニー(Savigny 1779～1861)らの歴史法学がおこった。

政治・経済学説　自然科学の発達は，政治学・経済学などの社会科学にも大きな影響をもたらし，それぞれの部門において研究が深められ，自然科学にならった研究体制が確立された。

イギリスでは，ベンタムが功利主義にもとづいて，「最大多数の最大幸福」を目標とする民主政治を主張した。スミスの経済学説は，その後マルサス(Malthus 1766～1834)やリカード(Ricardo 1772～1823)の諸研究によって補われ，古典学派として完成され

た。しかし社会主義の影響は，やがてミルに現われて，分配法則の改革や婦人解放の必要が説かれた。一方，国民主義の立場からする歴史学派経済学説も生まれ，ドイツのリスト(List 1789〜1846)は，後進国の立場から，経済的に遅れた祖国に保護関税政策をしき国内市場の育成に努めるよう説いた。



マルクス

社会主義思想　空想的社会主義(→p. 223)ののち，社会条件の成熟・深刻化に応じて社会主義思想を理論的に大成したのは**マルクス**である。彼は「共産党宣言」などにおいて，人間本来の歴史を，支配階級と被支配階級の階級闘争の歴史であったとする**唯物史観**を展開し，また「資本論」などでスミスいらいのイギリス経済学説を研究して剰余価値説を唱え，資本主義社会は資本家による労働者の剰余価値の搾(さく)取を本質としていると説いた。このような主張は，ただちに社会主義運動の実践に結びついた。

その他の社会主義理論　社会主義の理論はきわめて多様であり，空想的社会主義，国家権力を絶対的に否定する無政府主義，キリストの隣人愛を基調とするキリスト教社会主義なども生まれている。またラッサールは，階級闘争を否定し，国家権力による社会改革を説く国家社会主義の立場をとって，労働者の国際的団結を説くマルクスに対立した。

課　題

1. イギリスとフランスの市民革命の違いを考えてみよう。そして，市民層の発展の度合いと市民革命のあり方の関係を調べてみよう。

2. ナポレオンの帝政は，自由・平等・友愛の理念をかかげたフランス革命とどのようなかかわりをもつだろうか。第一帝政の意義を念頭におきつつ考えてみよう。

3. 産業革命はなぜイギリスに最初におこったのであろうか。中世いらいのイギリスの経済・社会の発展をふり返りつつ考えてみよう。

4. 19世紀なかばごろは，二月革命を初めとして多くの事件や事態が生まれ，ヨーロッパの歴史上重要な時期であったといえる。19世紀前半と後半の動きを念頭に置きつつ，この時期の意義を考えてみよう。

5. 19世紀のアメリカ合衆国の発達はめざましいものがあったが，その理由はどういうところにあったか。

6. 中世いらい19世紀前半までのドイツは，むしろ後進的な国であったが，19世紀後半から工業生産でもイギリスやアメリカと肩を並べ，外交政策でも諸国を主導するまでに発展した。その理由を考えてみよう。

7. ロマン主義の風潮はどのようにしておこってきたのであろうか。その成立の事情と，ロマン主義のもった諸性格とを，当時の政治・社会・経済などと関連づけながら考えてみよう。また，ドイツに最も典型的なロマン主義の特徴が現われたのはなぜであろうか。



サラエボの惨劇
捕えられたフェルディナント夫妻の暗殺者

第７章　帝国主義と世界大戦

19世紀の欧米では自由主義と国民主義の運動が盛んであったが，実際に政治に参加できたのは，財産と教養とをもつ少数の人びとに限られていた。19世紀末になると，工業技術の発達は驚異的となって，独占資本が生まれ，またそれと並行して，これまで政治から遠ざけられていた一般大衆が，物質文明全般の向上をバックとして，大きな発言権をもつようになった。こうして，帝国主義的な対外発展と国内の社会問題の解決とが，先進諸国の二大問題となってきた。

他方，アジア・アフリカ諸地域には，遅れた政治・社会体制が残っていたが，列強の植民地支配に対しては根強い民族的抵抗をおこなった。しかしこの動きも，また資本主義諸国の労働者の運動も，国家主義・排外主義の強大な潮流や世界戦争を阻止するほどの力をもってはいなかった。

第一次世界大戦は，以上のような深刻な矛盾をかかえながら戦われたが，これは史上はじめての総力戦であり，全世界に大きな影響を与えた。ロシアには共産政権が成立して，社会主義社会の建設がはじまり，後進地域では民族運動が一せいに発展して，列強の植民地支配をゆり動かした。西ヨーロッパでは欧州統合の運動がすすみ，アメリカ合衆国は指導的強国としての地位を確立した。こうして国際協調と民主主義の精神が築かれたが，他方では独裁政治と侵略主義も，後進諸国や日独伊などで発展して，やがて，国際対立が激化して第二次世界大戦を迎えるにいたった。

第1節　アジア・アフリカの分割と国際関係の変動

1.　帝国主義の開始

独占資本の形成

19世紀末期における西洋列強の資本主義の発展は，自然科学や産業技術の進歩とも関連して，まことにめざましいものがあり，産業の重心は軽工業から重工業に移った。とくにこれまで資本主義の発達が遅れていたドイツでは，電気・化学工業が急速におこり，国家の積極的な援助も加わって工業生産が進み，先進国イギリスを脅かすようになった。この産業の発展は，大銀行の援助にたよるところが多く，**金融資本**が生産を掌握するという状態が生まれた。

ドイツやアメリカ合衆国など後進資本主義国では，企業経営の面においてもカルテル（企業連合），トラスト（企業合同）などにより，大企業の**独占・集中**が進んだ。また，国家の政策も資本家の利益を主にしておこなわれるようになり，保護関税政策を実施して各種工業の発展をはかる一方，新しい資本の投下地を求めてさかんに**海外発展**をめざした。

イギリスは生産や貿易のあらゆる分野において世界の第一位を占めていたが，独占資本の形成には立ちおくれていた。そして，ドイツなど後進資本主義諸国のめざましい発展は，イギリスの国際的地位をもゆるがし始めた。そこで，70年代後半のディズレーリ内閣いらい，積極的な外交政策をとって「大英帝国」の植民地支配の強化・拡大に努め，海外各地に進出し始めた他の列強と鋭く対立するようになった。こうして19世紀末期の国際関係はにわかに緊張するにいたった。

国際対立の激化

国際緊張の焦点となったのは，ドイツ皇帝**ヴィルヘルム2世**（Wilhelm，在位1888～1918）の世界政策であった。

1890年ビスマルクを引退させた皇帝は，国内の産業資本家の強い要望

もあって，積極的な外交政策に転じ，ビスマルク時代の親露政策とフランス孤立政策を放棄し，海外各地への進出をめざした。このためトルコに接近し，ベルリン・ビザンティウム・バグダードを結ぶ鉄道を敷設しようとする**3B政策**の計画も生まれた。また，1890年再保障条約の更新を拒否し，そのためロシアは翌年**露仏同盟**を結び，フランス資本を導入して重工業を中心とする資本主義を急速に発展させた。一方フランスの金融資本家はこのような資本輸出によって普仏戦争でうけた痛手を回復し，欧州制覇をめざしてドイツと鋭く対抗し始めた。



老練な水先案内（ビスマルク）を解雇したウィルヘルム2世

イギリスは，アフリカやアジアにおいてフランス・ロシアの進出に対抗していたが，今やドイツの発展にも強い警戒心を抱いた。こうして1890年代の国際外交は，露仏同盟・**三国同盟**(→p. 235)および**「光栄ある孤立」**の外交政策をとるイギリスの3者が互いに対峙し，植民地の確保と分割をめざす抗争が激しさを加えた。以上のような経済上・政治上の新しい状況を**帝国主義時代**とよんでいる。

帝国主義　帝国主義(Imperialism)とは，産業革命の結果，資本主義が国家を単位として高度に発展し，このために国家間の経済上・政治上の対立が，世界的な規模で激化した状態をさすことばである。その結果，対外的には領土拡張・植民地獲得競争，低賃金と安価な原料とによって高い利潤をあげることのできる後進地域ないし植民地への投資（資本輸出）がおこなわれ，対内的には，大資本による企業の集中・独占の進行，銀行（金融）資本による企業支配などの特徴が現われ，これらの特徴をもつ帝国主義列強は，世界の再分割をめざして激しく対立することになった。また，資本主義の発展は労働者階級の勢力を増大させ，彼らは，政治的・経済的要求をかかげて政府や資本家

に迫り，各国の支配階級に大きな脅威をあたえた。一方，列強は独立と解放を求める民族の抵抗をきびしく抑圧することなしには植民地を保つことができなくなった。こうして列強の帝国主義的な発展は，これらの運動をあるいは圧迫し，あるいは利用したが，いずれにしても武力を背景としており，支配階級には内外ともに軍事力の強化が必要とされた。

2. アフリカ分割

イギリスのエジプト支配

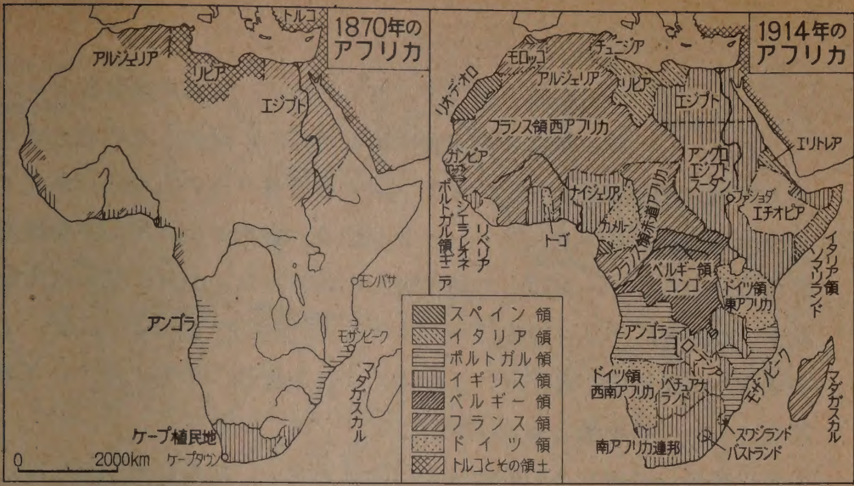
これまで暗黒大陸とよばれてきたアフリカは19世紀なかばのリヴィングストン(Livingstone 1813～73)やスタンレー(Stanley 1841～1904)の探検もあって，(→p.242)にわかにヨーロッパ諸列強の関心をひいた。アフリカの中でもエジプトは，すでに19世紀初めからフランスと接近しつつ近代化に着手し，スエズ運河 もフランス人レセップス(de Lesseps 1805～94)によって1869年完成した。まもなくエジプト政府は財政が窮迫し，スエズ運河会社の持株を売却しようとした。イギリス首相ディズレーリは，フランスの機先を制して，これを買収し(1875)，さらにフランスとともにエジプトの財政管理権をもつにいたった。エジプト人はこのような内政干渉に反感をもち，アラビ=パシャ(Arabi Pasha 1839～1911)は，反乱をおこした(1881～82)。イギリスは単独でこれを鎮圧し，以後エジプトを保護下におくとともに，さらに南の東スーダンに進出しようとした。スーダンの住民はこれに抵抗し，一時イギリスの進出ははばまれた。

ディズレーリのスエズ運河株買収への風刺



アフリカ分割の本格化

その後，アフリカの分割は着々と進められた。ベルギー国王はスタンレーの探



アフリカの植民地

検を助けてコンゴ盆地を獲得し*，ドイツは東アフリカ・カメルーン・トーゴおよび西南アフリカの一部を獲得した。イタリアもエリトレア・ソマリランドを併合し，さらにエチオピアを征服しようとしたが，大敗を喫した (1896)。イタリアはのちトリポリを要求してトルコと戦い，リビアを得た (1912，伊土戦争により)。(→p. 263)

早くも 1830 年アルジェリアを征服し，ついでチュニジアを占領した (1881) フランスや，スーダンで進出をはばまれたイギリスは，このような情勢に直面してアフリカの分割をいっそう強力に進めることになった。

フランスがサハラ砂漠(ばく)から赤道アフリカを収めて，紅海の南端に達する横断計画を進めたのに対し，イギリスはアフリカを縦断してケープタウンとカイロを結び，インドのカルカッタにつなぐアフリカ・アジアの支配（3 C政策）をめざし，90年代後半に再び南下政策を始めた。

ファショダ事件　両国の横断・縦断両政策は東スーダンにおいて衝突し，1898年ファショダ事件をおこした。両国の外交関係は一時緊張したが，結局フランスが譲歩して東スーダン地方をイギリスの支配下におくことを認めて事件は解決した。

* 「コンゴ自由国」は1908年ベルギー領コンゴとして政府の直轄支配に移された。

ブーア戦争

3C政策をめざすイギリスのケープ植民地首相セシル＝ローズ(Cecil Rhodes 1853～1902)は帝国主義政策を熱狂的に進め，その北方にローデシアなど領土を拡大した。オランダ人の子孫ブーア人(Boer)がたてたオレンジ自由国とトランスバール共和国は，金やダイヤモンドを豊富に産出したから，ローズはこの地の併合をねらった。かれの試みは失敗したが，1899年イギリス政府はブーア戦争(南阿(あ)戦争)をおこし，ブーア人の頑(がん)強な抵抗に苦しんだが，3年後にこれを併合，のちに南アフリカ連邦をつくって自治領とした(1910)。

この結果，イギリスの縦断政策はほぼ完成し，20世紀の初めには，アフリカ大陸において独立を保つのは，エチオピアとリベリア*の2国のみとなり，他は全くヨーロッパ列強によって分割されてしまった。

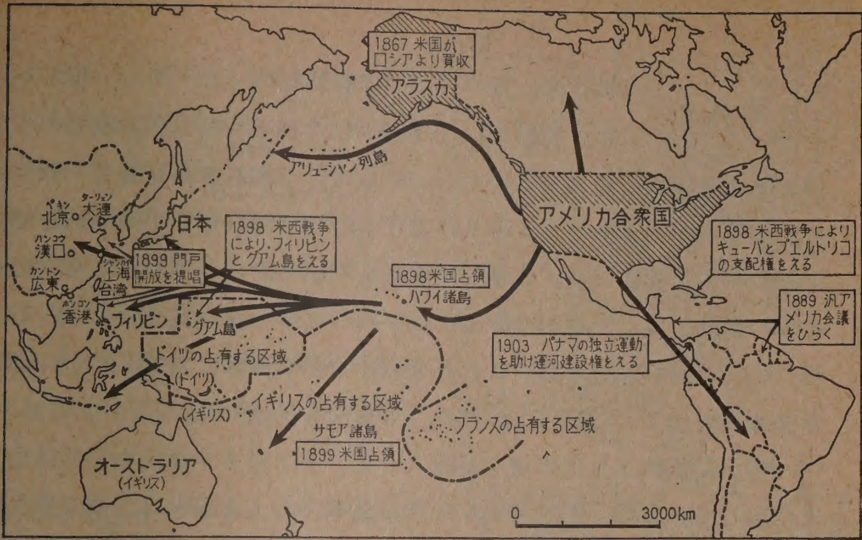
3. 太平洋・アジアの分割

列強の太平洋進出

太平洋の島々のうち，フィリピンやインドネシアの諸島は16～17世紀いらいそれぞれスペイン・オランダの植民地となっていた。オーストラリアは18世紀後半クック(Cook 1728～79)の探検によってイギリス領となり，はじめの間は流刑地とされていたが，まもなく牧羊業が発展し，19世紀中ごろ，金鉱が発見されてから急速に発展した。イギリスはさらに70年代から南太平洋諸島の獲得に努め，ドイツ・フランスもこれにつづいた。この結果，19世紀末にはニューギニアをはじめ大部分の島々がヨーロッパ列強に分割されるにいたった。そしてイギリスは，1901年オーストラリア連邦をつくって，これを自治領とし，ついでニュージーランドも自治領となった(1907)。

---

* リベリアは，1822年アメリカ合衆国が国内の解放奴隷をこの地に移して建設し，1847年より独立共和国となったものである。



太平洋分割とアメリカの進出

アメリカの進出　南北戦争後大いに産業を発展させ，80年代に早くも独占資本が生まれたアメリカは，まずカリブ海・ラテンアメリカへの進出を企て，1889年汎(はん)アメリカ会議をひらいて，この地域に大きな勢力をもつイギリス資本を排除しようと努めた。

共和党のマッキンレー(Mckinley 在職1897～1901)・セオドア＝ルーズヴェルト(Theodore Roosevelt 在職1901～1909)両大統領のもとで，アメリカの外交政策はきわめて積極的となった。(→p.283) 1898年，スペインからの独立をめざしたキューバの反乱を助けて**米西戦争**をおこし，フィリピンではアギナルド(Aguinaldo 1869～1964)の率いる独立運動を利用して，スペインを破った。また戦争中ハワイを併合し，キューバを保護国として，内政干渉権と軍事基地を得た。戦後はフィリピン・グアム島を領有し，太平洋に勢力圏をひろげた。完全独立を要求するフィリピン人はゲリラ戦をもってこれに抵抗し，1902年までアメリカを悩ました。

ここにおいてアメリカは，太平洋と大西洋を結びつける必要を感じ，1903年コロンビアからパナマを独立させ，パナマと交渉して運河地帯の永久使用権を得た。困難な工事の末，1914年パナマ運河が開通して，アメリカの極東進出は著しく有利となった。

日清戦争

19世紀末，東アジアでは朝鮮をめぐって新しい情勢が生じた。朝鮮では，1870年代の初め大院君(1820〜1898)が政権をにぎり，排外的な鎖国政策をとっていたが，日本は，**江華島事件**(→p.191)を機会に開国させ，つづいてアメリカ・イギリスなども，ほぼ同様の不平等条約を結んだ。こののち朝鮮では，日本に反感をもち清にたよろうとする事大党と，日本の援助をうけて政治の改革をはかろうとする独立党とが対立し，相ついで政変がおこった。これらをめぐり日清両国は対立したが，1885年**天津条約**によって両国は朝鮮からの撤兵を約束した。

一方，開国により外国商品が流入して，手工業者や農民の生活は急速に悪化していった。それとともに悪政改革・外人排撃を叫ぶ東学党という民間信仰の教団の勢力が朝鮮南部にひろがり，1894年に反乱をおこした。政府は清に援軍を依頼し，日本も出兵してこの乱は鎮まった*。この後，日清両国は朝鮮の内政改革をめぐって意見が合わず，同年7月，**日清戦争**がおこった。清軍を破った日本は，1895年**下関条約**を結び，朝鮮を清朝の勢力から切り離し，遼東半島・台湾を獲得し，さらに多額の償金を得た。

中国の分割

清朝が日本に敗れると，ロシアはフランス・ドイツを誘い，遼東半島の返還を日本に迫った。日本はこの**三国干渉**をはねのける余力がなく，遼東半島を放棄した。しかし，この干渉を機会に三国は中国の利権獲得にのりだし，翌年ロシアは**東清鉄道敷設権**を得た。1898年ドイツが宣教師殺害事件を理由に**膠州湾**を租借すると，ロシアも旅順・大連を含む遼東半島南部を租借した。ついでイギリスは九龍半島と威海衛を租借し，フランスも**広州湾**を租借した。この4国はさらに中国内に勢力範囲を設け，鉄道敷設権や鉱山採掘権をも獲得した。また日本は，台湾の対岸にある福建省の不割譲を清朝に約束させた。

---

* 1875(明治8)年日本海軍が江華島に接近して朝鮮側から砲撃され，武力衝突がおこった。翌年，日鮮修好条規が結ばれ朝鮮は開国したが，これは不平等条約であった。

そのころ，太平洋に進出し，中国市場への関心を深めつつあったアメリカは，1899年，国務長官ジョン＝ヘイ(John Hay 1838～1905)が，中国の領土保全・門戸開放・機会均等を求める「**門戸開放宣言**」を列強に通告して，中国分割に加わるにいたった。19世紀末の中国は，列強の侵略によって半植民地の状態におちいったのである。



中国分割

戊戌(ぼじゅつ)の変法と義和団事件　これら一連の列強の侵略によって，洋務運動の無力さが暴露された。国内には**孫文**(1866～1925)の「**興中会**」その他の各種秘密結社が生まれ，清朝打倒と漢民族の主権回復をめざす革命運動がはじまった。このような情勢の中で，若い光緒帝(こうしょてい)(徳宗)(在位1874～1908)は1898年，**変法自強説**を説き立憲君主制をめざす**康有為**(こうゆうい)(1858～1927)らを登用し，日本の明治維新にならった政治改革に着手した。しかし，保守派官僚は，養母西太后を動かして3か月後改革派を一挙に逮捕し，処刑した(**戊戌の政変***)。

そのころ，華北の民衆の間に，白蓮教の流れをくむ民間信仰の団体であった義和団の勢いがひろまり，1899年末，山東地方で反乱をおこした。彼らは「扶清滅洋(ふしんめつよう)」を唱え，教会堂・鉄道などを破壊し，北京にはいりドイツ公使殺害事件などをおこした。清朝はこの動きを利用して列強に宣戦したので，日・露・英・米・仏・独・伊・墺(おう)の八か国は連合軍を組織して，北京を攻撃し，占領した(北清事変)。清朝は屈服し，1901年**北京議定書**が調印された。その結果，清朝は，関税・塩税収入を担保として多額の賠償金を課せられ，列強の北京駐兵権を認めた。

* 1898年の干支(えと)は戊戌に当たる。なお1911年は辛亥(しんがい)である(→p. 260)。



義和団鎮圧に参加した各国兵士　左より英・米・露・印・独・仏・墺・伊・日

4.　日露戦争とその影響

日露戦争

義和団事件後も，ロシアは満州から撤兵せず，朝鮮をう
かがい，朝鮮から満州への発展を望む日本との対立が
けわしくなった。

19世紀末いらい激しくなったロシアのアジア進出を恐れたイギリスは，それまでの孤立政策をすてて1902年**日英同盟**を締結した。門戸開放の立場にたつアメリカも，満州の独占的支配をめざすロシアに不満をもち，日本に好意を示した。こうしてイギリス・アメリカの支持を得た日本は1904年ロシアと開戦し**日露戦争**がおこった。仏・独はロシアを支持したが，戦況は陸海とも日本軍に有利に展開した。ロシアの国内では1905年革命がおこり，戦争継続に大きな支障となったが，日本にとっても，戦争をつづけることは軍事・財政の両面で困難となった。そこでアメリカ大統領セオドア=ルーズヴェルトの斡旋(あっせん)に応じて，両国はポーツマス会議をひらき，1905年9月講和条

ポーツマス会議　小村寿太郎(右)・ウィッテ(左)・ルーズヴェルト(中央)。



約を結んだ。この結果，日本は朝鮮での優越権をえ，また南樺太(からふと)および関東州租借地，長春以南の鉄道などをロシアより譲りうけた。

1907年，日露両国は，さらに満州・蒙(もう)古における勢力範囲を協定し，日本はまた，1910年に朝鮮（韓(かん)*）を併合するにいたった。朝鮮各地にはげしい民族抵抗がおこったが，総督府はきびしくこれを弾圧した。

ロシアの革命運動

ロシアは農奴解放後しだいに資本主義が発達し，これにともなって労働運動も急速に活発になり，マルクス主義も輸入されて1898年には**ロシア社会民主労働党**が生まれた。1903年同党はレーニン(Lenin 1870〜1924)の率いるボルシェビキ (Bolsheviki) とメンシェビキ (Mensheviki) とに分裂した**。また，ナロードニキの流れをくむ**社会革命党**も結成された (1901)。

日露戦争中の1905年１月，ペテルブルクの労働者が生活の窮乏と国会開設を皇帝に訴えようとして請願したが，軍隊の攻撃をうけて多数の死傷者を出した (**血の日曜日事件**)。これをきっかけとして全国的に革命の波が大きく盛りあがった。労働者は各地でストライキをおこない，ソビエト(協議会)を結成した。農村では一揆(き)が激発し，軍隊の動揺もひろがった。ニコライ２世(Nikolai II 在位1894〜1917)は日本と講和を結び，10 月には勅令を出して国会の開設など改革を約束した。ポーツマス会議の全権ウィッテ(Witte 1849〜1915)が首相となり，1906年国会がひらかれた。つぎの首相ストルイピン(Stolypin 1862〜1911)は革命運動をきびしく圧迫し，専制政治の再建に努めた。

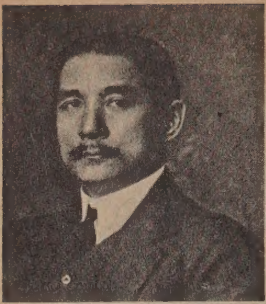
辛亥(しんがい)革命

日本の勝利とロシア革命は，アジア諸民族に強い刺激を与え，各地で民族運動が高まった。中国では孫文が清朝打倒をめざす諸団体を統一して，東京で**中国革命同盟会**を組織し (1905)，民族の独立・民権の伸長・民生の安定を目標とする**三民主義**をかかげた。

---

* 朝鮮は1897年より国号を「韓」と改めた。

** プロレタリアートに革命の指導権を認め，農民の役割をも重視するボルシェビキは，自由主義的産業資本家層との協力を主張するメンシェビキより勢力は小さかった。



孫　文



袁世凱

北清事変の結果，保守的な清朝政府も立憲制の必要を感じ，科挙制を廃止し，1908年憲法大綱を発布して9年後の国会開設を約束した。ところが，幼い宣統帝(在位1908～1912)をいただいた満州人貴族の内閣は，1911年にいたって英・仏・独・米の**四国借款団**から借りた資金によって民有の幹線鉄道を国有化しようとした。これに対して，まず四川(しせん)省で激しい反対運動がおこり，一部は暴動にまで発展した。さらに10月10日，武昌(ぶしょう)に駐在していた軍隊内部に反乱がおこると，革命の波は次々とひろまり，年内には南方13省が清朝からの分離を宣言した。これが**辛亥革命**である。

革命派は翌12年1月，南京で**中華民国**を設立し，孫文が臨時大総統に推された。清朝は，華北の大軍閥**袁世凱**(えんせいがい)(1859～1916)を起用して，革命鎮圧に向かわせようとした。しかし袁は，足並みのそろわない南方革命派と交渉を進め，大総統就任の確約を得て，1912年2月，宣統帝を退位させた。ここに2000年にわたる皇帝政治は終わりを告げたが，もともと革命の主張に理解のない袁世凱は，反対者を次々と弾圧して独裁化を進め，革命派は，これに対して第二革命(1913)，第三革命(1915)*(→p. 278)をくり返した。辛亥革命は満州人の支配を倒す民族革命としては成功したが，帝国主義列強を背景とする軍閥勢力を倒すことには失敗した。

インドの民族運動　インドでは，1885年インド人の反英運動を緩和させる目的で，イギリスが**国民会議**を結成させた。しかし初期の協調的な性格は20世紀にはいってから影をひそめ，日露戦争における日本の勝利は，ティラク(Tilak 1856～1920)を指導者とする運動を戦闘的にした。そこで，イギリスはイスラム教徒とヒンドゥー教徒との対立を利用して，1905年イ

---

* 第二革命は袁の革命派弾圧に対し，第三革命は袁の帝政復活に対しておこされた。

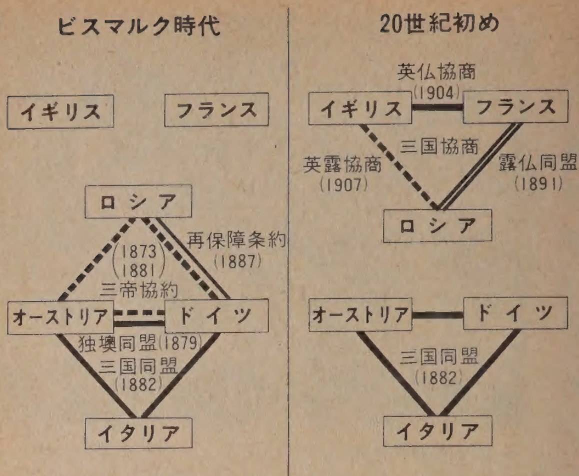
スラム教徒の多いベンガル地方に対してベンガル分割令を発布した。これに反対した国民会議派は，翌年カルカッタに大会をひらき，英貨排斥・自治（スワラジ）獲得・国産（スワデシ）愛用・民族教育の４つの綱領をきめ，独立獲得の戦いを国民の中へひろげた。一方，イスラム教徒は，この年，全インド－イスラム連盟(ムスリム連盟)をつくって行動を異にすることとなった。


自治連盟の代表団　1918年８月，自治実現のためイギリスを訪れる一行。前列中央がティラク。

アジア諸国の動き　日露戦争後は，他のアジア諸国においても民族運動が活発になった。ビルマ・ベトナムにも政治団体が生まれ，オランダ領東インドにはイスラム連盟が生まれて勢力をひろげた。ペルシアでは，1905年末から革命運動がひろがり，カジャール朝もやむなく立憲政治を認めたが，ロシアとイギリスの武力干渉が加わって改革は失敗した。トルコ（オスマン帝国）でも青年トルコ党を中心に立憲運動がさかんとなり，1908年革命がおこって立憲政治が樹立された。しかし，古い社会制度は改革されず，外交的には，なおドイツに接近する政策をとり，帝国内の諸民族を圧迫した。

5.　国際関係の緊張

三国協商の成立　ヨーロッパでは，ロシアが極東の問題に忙殺されている間に，ドイツの世界政策が著しく強化された。1900年には，イギリス海軍に対抗できる大艦隊の建設を決定し，バルカン・近東方面にも積極的に進出していた。一方，イギリスは，日英同盟につづいて，1904年**英仏協商**を結び，エジプト・モロッコにおけるそれぞれの優越権を確認しあって提携をかため，ドイツに備えた。



同盟関係の変化

モロッコは，19世紀いらい，列強の進出の目標とされてきたが，1905年3月，ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世は突如モロッコを訪れ，領土保全と機会均等を宣言して勢力伸張の野心を示した（**第一次モロッコ事件**）。列国は翌年のアルジェシラス会議において，フランスを支持し，ドイツの進出をおさえたが，1911年ドイツは再び軍艦を派遣して第二次モロッコ事件をおこし，不成功に終わったものの，国際緊張はますます高まった。

この間，日露戦争でロシアが敗れ，極東の不安が薄らぐと，イギリスは，1907年**英露協商**を結び，互いにペルシア・アフガニスタンの勢力圏を確認しあった。こうして英・仏・露の間に結ばれた**三国協商**は，独・墺・伊の三国同盟を包囲する形となった。しかもイタリアは「未回収のイタリア」(→p. 232)をめぐってオーストリアと対立し，オーストリアも国内に多くの異民族をかかえて内政は不安定であったから，ドイツはきわめて不利な立場に立った。

バルカンの危機

ロシアは，日露戦争に敗れて極東への野心がくじかれると，またバルカンへの進出を企て，ブルガリア・セルビアを援助し，**汎スラブ主義**を展開した。一方，オーストリア・ドイツもバルカンを勢力下におこうとする**汎ゲルマン主義**を推し進めたから，この地域には，にわかに険悪な情勢が生まれてきた。1908年トルコに**青年トルコ党の革命**がおこると，この機会にブルガリアは完全独立を宣言し，オーストリアはドイツの支持を得て，セルビア人らが住むボスニ*

＊　ベルリン会議により，トルコの宗主権のもとでオーストリアの統治地となっていた。

ア・ヘルツェゴビナ2州を併合して，大セルビアの実現をめざすセルビアを憤激させた。ついで，1911年イタリアがトルコと開戦し勝利すると(伊土戦争)(→p. 253)，翌年セルビア・モンテネグロ・ブルガリア・ギリシアのバルカン4国はロシアの支持の下にバルカン同盟を結び，トルコ領の分割をねらって第一次バルカン戦争をおこした。トルコは敗れてコンスタンティノープルの周辺を除くヨーロッパ領の大部分を失ったが，その分割をめぐってブルガリアと他の3国は対立し，1913年第二次バルカン戦争がおこった。ブルガリアは敗れてバルカン諸国から離れ，トルコにつづいてドイツ側に接近した。

セルビアはロシアの援助を頼んで激しい敵意をオーストリアに向け，ドイツ側も強硬政策をすてなかったから，戦争の危機が増大した。

反戦平和の動き　ヨーロッパにひろがる戦争の不安に対しては，平和への努力もおこなわれ，1899年・1907年の2回にわたり，**ハーグ万国平和会議**がひらかれたが，真剣な軍備縮小と戦争防止対策は考えられなかった。また，**第二インターナショナル**の各国社会主義政党は，しばしば国際大会をひらいて反戦決議をおこなったが，植民地・民族問題で意見の対立があり，強力な反戦活動をおこなえないまま，大戦の勃発をむかえて第二インターは解体した。

第2節　第一次世界大戦とロシア革命

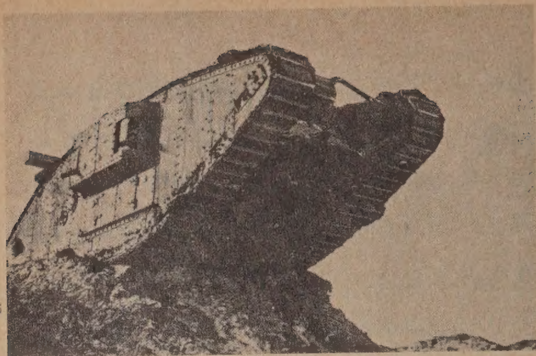
1.　世界大戦の勃発と展開

サラエボ事件　1914年6月28日オーストリア皇太子フランツ=フェルディナント夫妻がボスニアの州都サラエボで，セルビアの一青年に暗殺されると，多年わだかまっていた同盟・協商両陣営の対立は一時に爆発した。

オーストリアは，ドイツの支援を頼みとして1か月後にセルビアに宣戦し，ロシア・フランスがセルビア側に，ドイツがオーストリア側に立

ち，イギリスは，ドイツがベルギーの中立を犯したのを口実にドイツに宣戦した。

日本の参戦　日本は，日英同盟を理由に協商側にたって参戦し，ドイツの根拠地である青島(膠州湾)や，南洋諸島を占領したから，戦争は世界的に拡大した。



タンクの出現　タンクは1916年９月のソンムの戦いで初めて出現した。第一次大戦には，このほか，飛行機や毒ガスなど新しい兵器がぞくぞくと登場した。

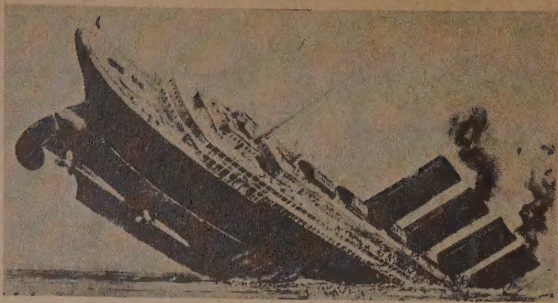
戦争の長期化　多年戦争に備えていたドイツは，フランスを北部から急襲してパリに迫ったが，**マルヌの会戦**で反撃され，以後西部戦線は膠着状態となった。東部戦線では，侵入したロシア軍をタンネンベルクの戦いで撃破し，翌年ポーランドを占領したが，ロシア軍に決定的な打撃は与えられなかった。

1914年にトルコ，翌年にはブルガリアが同盟側についたが，イタリア

第一次世界大戦戦局図



は，アドリア海対岸その他の領土をうける約束で1915年協商側にたって参戦し，翌年ルーマニアもこれにならった。こうして協商側を中心とする連合国は，広大な戦線を維持して同盟国を包囲したが，戦争は長期化の様相を示していった。



ルシタニア号の撃沈　1915年5月このイギリス船がドイツ潜水艦に撃沈され，アメリカ人船客百名以上が死亡した。この事件はアメリカの対独感情を決定的に悪化させ，参戦をうながす一因となった。

ドイツは，一挙に戦局を打開しようとして，1916年初め ベルダン要塞(ようさい)を攻撃したが失敗に終わった。同年連合国軍もソンムで大攻勢にでたが，勝敗は決せず，西部戦線は一進一退の塹壕(ざんごう)戦をくり返した。

その間，連合国側は，トルコやドイツの領土を互いに分割する秘密条約を結んで結束をかためようとし，イギリスはインド・エジプト・アラビア人の戦争協力を得るためいろいろの約束を与えた(→p. 276)。また，戦争が長びくにつれて各国ともしだいに物資が不足し，国民の疲労がめだってきた。ことに海軍力の劣勢のため，連合国側の海上封鎖をうけて物資の欠乏したドイツ人は，厳格な統制経済によって急場をしのいだが，やがて平和を求める声が強くなり，労働者のストライキも激しくなってきた。

戦局の転換

海上では，ドイツが潜水艦によって連合国の通商補給路を攻撃していたが，1917年2月から中立国船舶をも攻撃する**無制限潜水艦作戦**を始めた。これは，従来中立を保って，連合国に多量の物資を供給し，巨利をおさめていたアメリカの世論を刺激し，参戦を望む声が強くなった。そこで大統領ウィルソン(Woodrow Wilson，在職1913～21)（民主党）は，4月ドイツに宣戦を布告し，多数の軍隊と軍需物資を送って連合国側の戦力を強化した。これと前後して，アジアやラテンアメリカ諸国の多くもドイツに宣戦して連合国側に加わった。

アメリカ参戦直前の3月に，ロシアでは革命がおこった。(→p. 268)この結果成立した臨時政府は，戦争を継続したが，国内には戦争に反対する機運がひろがった。やがて11月には再び革命がおこり，新たに成立したソビエト政府は，ただちに戦争中止の方針をとり，翌18年3月ドイツと単独講和（ブレスト－リトフスク条約）を結んだ。(→p. 270)こうしてアメリカの参戦とロシアの離脱により戦局は新しい情勢を迎えた。

2. ヴェルサイユ条約の成立

大戦の終結　ロシアが戦線から脱落したのち，ドイツは西部戦線に兵力を集中して総攻撃をおこなったが成功しなかった。ロシア革命の影響をうけて，ドイツ国内には講和と民主化を要求する声が高まった。1918年秋同盟国は次々に降服し，ドイツでは11月初めキール軍港の水兵が平和と民主的改革を求めて暴動をおこすと，これが全国的な革命に発展した（**ドイツ革命**）。皇帝ヴィルヘルム2世は退位し，社会民主党のエーベルト(Ebert, 1871～1925)らを中心とする共和政府が成立して，11月11日連合国と休戦条約を結び，ここに大戦は終結した。

大戦の性格　第一次世界大戦は，その規模・性格において従来の戦争とは全く異なった。兵力，戦費は厖(ぼう)大な数字にのぼり，航空機・潜水艦・毒ガス・タンクなど，新兵器の使用による戦争の苛(か)烈さや，犠牲の増大は，人々の予想をはるかにこえた。また切符制度の実施や原料の集中的管理など国内に一種の計画経済が実施され，国民すべてが戦争経済に参加させられて，戦争はまさに**総力戦**の性格をおびた。これは各国とも深刻な問題となったが，オーストリアやロシアなど資本主義体制の脆(ぜい)弱な国家では，とくに混乱が著しかった。

ヴェルサイユ条約　これよりさき，1918年1月，ソビエト政府による休戦のよびかけや平和を求める各国民の世論に対してウィルソンは，秘密外交の廃止，**民族自決**，軍備の制限，国際協調などを中心とした**14か条の原則**を発表した。1919年1月パリで開かれた講和会議

では，これが講和の原則と考えられていた。しかし，この原則は，イギリス・フランスなど戦勝国の利害によってくずされ，6月28日パリ郊外のヴェルサイユ宮殿で調印された条約は，ドイツに対する報復を主とした非常にきびしいものとなった。

条約によってドイツは全植民地を失い，アルザス・ロレーヌや西プロシア地帯（ポーランド回廊）などを割譲し，軍備は大幅に制限され，ラインラントの武装は禁じられたうえ，まもなく巨大な賠償金も決定された。またこの条約で**国際連盟**の設立をきめ，世界平和の維持に加盟国が協力することが約束された。オーストリア・ブルガリア・トルコに対する条約も調印され，オーストリアと旧ロシア帝国の領内には，民族自決の原則にしたがって，ハンガリー・チェコスロバキア・ユーゴスラビア・ポーランド・エストニア・ラトビア・リトアニア・フィンランドが独立した。* オスマン帝国の領域は小アジアのおよそ半分となり，シリアはフランスの，イラク・パレスチナはイギリスの委任統治の下におかれることになった。日本も南洋諸島の委任統治権を得た。



第一次世界大戦によるヨーロッパの変化

* これによりオーストリアは1867年いらいの二重帝国体制（→p. 235）を解消するとともに共和政となり，ハプスブルク家の支配は終わった。またセルビアは南スラブ族を合わせて大セルビアを実現し，セルブ-クロアート-スロベーヌ王国を建設し，1929年にはユーゴスラビア王国と改称した。



ロシア革命の指導者　中央がレーニン，その手前がスターリン。

3.　ロシア革命

三月革命

ロシアの専制政治は，大戦が長期化するにつれてその欠陥を暴露した。

工業・農業の生産力は激減し，食糧や生活必需品の極端な不足から国民生活がはなはだしく窮乏してくると，工場ではストライキが頻(ひん)発した。人馬の徴発によって農民の不満も増大し，兵士の士気も衰えて，前線ではしばしばドイツ軍に敗れた。宮廷を中心とする支配層は，この情勢を恐れて戦争をやめようとする動きをおこし，軍部や工業資本家と対立して，政府内部にも分裂をきたした。

1917年3月8日，首都ペトログラード*におこった大ストライキには，鎮圧に向かった軍隊も合流して，政府はたちまち倒れ，労働者・兵士の間には，ソビエトが組織され，革命の指導機関となった。革命はモスクワをはじめ各地に波及し，前線にいた皇帝は退位し，ロマノフ王朝はここに滅んだ。**

十一月革命

立憲民主党など自由主義者たちによる臨時政府には，社会革命党のケレンスキー（Kerensky，1881～1970）らも加わり，普通選挙による議会の召集を定めたが，なお戦争を継続した。一方全国各地のソビエトでは，社会革命党やメンシェビキの勢力が優勢であった。これに対し4月に亡命地のスイスから帰国したレーニンは，臨時政府の打倒とソビエト

---

* 大戦中ドイツ風のよび名ペテルブルクが改称された。レーニンの死後は，さらにレニングラードと改められた。

** この三月革命はロシア暦では2月に当たるので二月革命ともよばれ，のちの十一月革命も十月革命とよばれることがある。

政権の樹立という革命方針を明らかにし，ボルシェビキを指導して「平和とパンと土地」を要求する運動を強力に進めた。臨時政府にはまもなくメンシェビキも加わり，7月からケレンスキーが首相となってボルシェビキを弾圧した。しかし，まもなくペトログラード近郊におこった反動的将校の反乱の鎮圧に，ボルシェビキは大いに活躍したから，彼らに対する民衆の支持が全国的に増大した。

ボルシェビキは武装蜂起に成功して，政府を倒し，ついでひらかれた全ロシア－ソビエト大会は，11月7日，ソビエト政府*の設立を決定し，土地私有制を廃止する「土地に関する布告」，**無併合・無賠償**の即時講和を全交戦国に訴える「平和に関する布告」を発表した。

ソビエト政権の成立

革命は成功したが，情勢はボルシェビキにとって有利ではなかった。ソビエト政権に対する軍隊の反革命が始まり，官吏や労働者の一部はストライキをおこした。しかし，モスクワをはじめ各地のソビエトが次々に反革命派を破って権力を確保し，政府も，重要産業・銀行等の国有化，地主の大土地所有の廃止，民族自決の宣言，旧政府による外債の破棄などの政策に着手した。

一方，臨時政府が約束していた憲法制定議会の選挙の結果は社会革命党が第一党となり，ボルシェビキは第二党にとどまった。議会は翌18年1月ひらかれたが，社会革命党をはじめ反ボルシェビキ派は，政府が提案する革命政策を認めようとしなかった。そこでレーニンらは，武力で議会を解散し，ボルシェビキの一党政治を樹立しやがて自派を共産党と改称した。

ロシア革命が成功し，ソビエト政府が即時講和を訴え，皇帝の政府が結んだ秘密条約を暴露したことは，世界各国の政府と，一般国民に深刻な影響を与えた。しかし連合国はソビエトの平和提議に応じようとしな

* 正式には「人民委員会議」（議長レーニン，外務人民委員トロツキー，民族人民委員スターリンその他）という。ほかにソビエト大会の権限を代行する常設の国家最高権力機関として全ロシア中央執行委員会が設けられた。



十一月革命　1917年11月のモスクワでの蜂起。

かったので，ソビエト政府は，トロツキー(Trotsky 1879〜1940)を代表としてドイツとの単独講和の交渉を進め，3月きわめて不利な条件でブレスト－リトブスク条約を結んだ*。

アジア諸国への影響　ソビエト政府は，帝政時代にアジア諸国から獲得した利権の廃棄を宣言した。この宣言は完全な形では実行されなかったが，民族自決の宣言とともに，アジア諸民族に新しい希望を与え，彼らの民族運動を前進させることになった。

ソ連邦の結成　ソビエト政権の前途はなお多難であった。ドイツと講和したのちも，反対派が各地に反革命の政権を立てたほか英・米・仏などは軍隊を送って反革命政権を助け，日本もシベリアに出兵するなど**対ソ干渉戦争と内乱**がつづいた**。

ソビエト政府は，これらの反対勢力を赤衛軍と全ロシア非常委員会(チェカ)の力によって鎮圧し，工業の国営，農民からの強制的な穀物徴発など，**戦時共産主義**とよばれる経済政策をとって，きびしい独裁政治をおこなった。しかし，外国の干渉は国民の愛国心を高め，戦時共産主義は兵士と労働者に必要な物資を供給したから，3年後には内乱をしずめ，干渉軍を撤退させることに成功した。

これと同時に，旧ロシア帝国のウクライナ・白ロシア・コーカサスなどにもソビエトが組織され，これら諸民族のソビエト共和国は，1922年末，あい集まって「**ソビエト社会主義共和国連邦**」(ソ連)を結成した。少し

---

*　この条約でソビエトは，ポーランド・フィンランド・バルト海沿岸，ウクライナ・ベッサラビアを失ったが，条約はドイツの敗北によって廃棄された。

**　日本は1918年，ロシアの捕虜となったチェコ兵の救援を理由にシベリアに出兵し，1920年列国の撤兵後も占領をつづけて非難をうけ，1922年撤兵した。

遅れて中央アジアの諸民族共和国もこれに加わった。

第3節　ヴェルサイユ体制と国際関係の変動

1.　国際協調主義の展開

国際連盟の成立　第一次世界大戦後新しく生まれた国際秩序は，ヴェルサイユ体制とよばれる。ここでは国際協調と民族自決が強くうたわれ，この理想を実現し，世界の平和を保障する機構として，大戦中のアメリカ大統領ウィルソンの提唱にもとづいて，**国際連盟**(League of Nations) が生まれた。

連盟は本部をスイスのジュネーブにおき，総会・理事会*および連盟事務局があり，ほかに国際労働機構 (ILO) や国際司法裁判所（在ハーグ）があった。連盟の規約を無視して戦争をおこす国々には，経済制裁などを加えることも定められた。

連盟の設立を最も強く希望したアメリカは，孤立主義を主張する共和党の反対で参加せず，ドイツやソ連もはじめは参加できなかったので，組織として不十分ではあったが，このような史上最初の国際組織が成立したことは一つの進歩であった。

ヴェルサイユ体制　ヴェルサイユ体制は大戦後の国際的勢力関係に相応した新しい国際体制ではあったが，ドイツをはじめオーストリア・トルコなど，敗戦国の立場を極端に無視したこと，アジアその他の植民地民族の希望を考慮していないこと，社会主義のソ連と鋭く対立していたことなどに大きな問題をはらんでいた。また戦勝国でもイタリアなどは大きな不満をいだいた。そして激しい情勢の変化によって，10年あまりでこの体制は崩壊した。

---

* 国際連盟は総会中心主義で，すべての加盟国がそれぞれ代表権をもった。連盟の行政機関としては理事会がおかれ，日・英・仏・伊は常任理事国として重んじられた。

民族主義の実現

大戦によって崩壊したドイツ・オーストリア・トルコ・ロシアの旧帝国からは，長い間独立を求めていた幾多の**新しい民族国家**が生まれた。(→p. 276, 287)

しかし，これら新興の民族諸国家は，旧領土の回復を求める敗戦国への自衛上，英・仏の支持によって，しばしば民族自決の原則をはるかにこえる広大な領地を与えられた。したがって領内に少数民族の問題がおこり，また国内封建勢力の清算も不十分であったので，のちに台頭した全体主義国家に侵略の口実を与えることとなった。

一方，民族自決の原則は，**アジア・アフリカの民族運動**にも大きな刺激を与え，植民地民族の独立・自治の要求が急速に高まった。しかし，これらの独立運動には列強が強く反対し，容易に実現をみなかった。

賠償問題

連合国は戦争中，アメリカから莫大な援助をうけ戦争に勝ったので，戦後には，約100億ドルにのぼる対米戦債が残った。その支払いをするためにもドイツから賠償金をとることが必要となり，総額1320億金マルクにのぼる過大な賠償をおしつけた。

しかしドイツには負担能力がなく，支払いはとどこおりがちであったから，フランス・ベルギーは1923年1月，ドイツの重工業中心地**ルール地方を占領**して支払いを強要した。これに対してドイツ人は「消極的抵抗」を決行したので，ドイツの(→p. 292)経済は混乱し，ヨーロッパの経済界にも深刻な影響を与えるにいたった。その結果1924年，アメリカのドーズを長とする委員会により新しい賠償支払い方法（ドーズ案）が決定された。これによって，ドイツの毎年の支払額は軽減され，そ

ドイツのインフレ紙幣　ルール占領を機にドイツはかつてないインフレとなった。写真は本来1千マルクの紙幣に10億マルクの印をおして通用させたもの。なお，292ページの統計参照。



のうえアメリカなどから多大のクレジットが与えられたから，ドイツは回復に向かい，ヨーロッパ経済界も復興することとなった。ドイツの賠償支払いがおこなわれている間は，戦勝国の対米戦債の返還も順調に進んだ。

軍備縮小と平和協調の機運　戦争に疲れた各国の人民は軍備の拡張を好まず，またアメリカ合衆国は日本の中国・太平洋方面への進出を警戒したので，1921年大統領ハーディング(Harding 在職1921～23)が提唱してワシントンに軍縮会議をひらいた。

このワシントン会議では，太平洋上の防衛設備の制限を定めた**四か国条約**が結ばれて日英同盟は廃棄され，米・英5，日3，仏・伊1.78の比率を定めた主力艦・航空母艦協定が成立し，中国の主権尊重を約した**九か国条約**が結ばれた。会議の結果，アメリカの海上勢力が確立し，戦争中に進出した日本の勢力は後退した。

ヨーロッパにおける平和の機運も，1925年の**ロカルノ(Locarno)条約**と，1928年の**不戦条約**によっていっそう高められた。

ロカルノ条約*の結果，ドイツは翌年国際連盟に加入し，独・仏の関係も著しく緩和された。アメリカの国務長官ケロッグ(Kellogg 1856～1937)・フランス外相ブリアン(Briand 1862～1932)の主唱で結ばれた不戦条約は，国家の政策としての戦争をすてること，国家間の争いはすべて平和的に解決することを定めたもので，多くの国国が参加した。つづいて1930年には**ロンドン海軍条約**が結ばれて，米・英・日3国の間で補助艦の制限を実現し，10：10：7の比率が定められた。このように戦後のおもな条約は，アメリカを中心として結ばれている。

ソ連の外交　大戦後数年間のソ連は，内乱と資本主義諸国の干渉戦争に苦しめられたが(→p. 270)，反面，1919年モスクワに第三インタ

* この条約はスイスのロカルノでドイツと英・仏・伊・ベルギー・ポーランド・チェコの間に結ばれた。ここでドイツは割譲した西部国境地域の奪回を公式には断念し，ラインラントの非武装地帯を確認し，かつ相互に紛争を平和的に解決することを約して，西欧の集団安全保障体制をつくりだした。

ーナショナル(コミンテルン*)を結成し，各国の共産主義者とその党を指導して革命をおこさせることを外交方針とした。

また，ヴェルサイユ体制下で孤立を余儀なくさせられたソ連は，ヴェルサイユ条約の重圧に悩むドイツとの提携を企て，1922年**ラッパロ条約**を結んで相互の賠償放棄や経済援助を約束した。しかし，1923年を境に各国の革命運動は衰え，ソ連も当時は**新経済政策**(→p. 288)によって経済復興をはかっていたから，各国との協調外交に努めるようになった。資本主義諸国もロシア市場への進出を望み，1924年イギリス労働党内閣がソ連を承認し，イタリア・フランスなどもこれにならった。翌年日本も承認したが，アメリカは1933年まで承認しなかった。

2. 国際協調主義の破綻

世界経済恐慌

戦争によって低下したヨーロッパの生産力は，アメリカの援助を得てしだいに回復して，1925年には戦前の水準に達した。さらに各国とも産業の合理化を進めたから生産力は一層伸び，1929年の前半までは一般に好景気がつづいた。

しかし生産力の増加は，やがて諸国民の購買力をはるかに追い越すにいたった。しかも一方では，後進国の工業の発達，植民地の民族資本の台頭，ソ連経済の向上などが著しかったから，市場はせまくなった。このような情勢を背景に，1929年アメリカに恐慌が勃発した。(→p. 282)

統制経済と国際対立の激化

恐慌は1932年に頂点に達し，かつてない激しさで資本主義世界にひろがり，革命運動が各国におこった。各国は社会政策費の削減，公共投資と軍事

	米	英	独	仏	全資本主義国
1929年	182	104	108	144	150
1932年	81	70	51	92	84

工業生産指数（1913＝100）

* 共産主義インターナショナル（Communist International）の略。なおこの直後に第二インターナショナルも復活し，コミンテルンと対立することになった。

産業の拡張，自由経済にかわる**統制経済**と**経済的自給自足**(アウタルキー)**政策**などで恐慌をきりぬけようとした。

また保護関税主義をとり，関係の深い国々と経済ブロックをつくって，他の国々をしめ出した。このため，自給力に乏しいドイツ・イタリア・日本などの経済は脅かされ，それとともに国際対立が激しくなった。

また政治上でも，これらの3国をはじめ，民主主義の伝統の弱い国々では，国内政治の危機を独裁政治によって克服しようとする傾向が生まれた。こうした独裁主義の国家が対外強硬政策をとると，国際対立はいっそう険悪となり，ついに第二次世界大戦勃発となるのである。

第4節　アジア・アフリカの民族運動

1.　イスラム諸国の動向

トルコの近代化

第一次大戦で敗れたトルコは，きびしい**セーブル条約**をおしつけられた。これは，国土を分割し，列強の治外法権を認め，トルコの関税自主権を極端に制限した不平等条約であったから，トルコ人の不満は大きかった。これに奮起した**ムスタファ＝ケマル**(Mustafa Kemal, 1881~1938)は，新たに国民党(のちの人民共和党)を結成し，アンカラに新政府を樹立した。そしてイギリスの支持を得たギリシア軍の侵入を撃退し，1923年連合国と**ローザンヌ条約**を結んで，セーブル条約を有利に改めさせた。また，彼は1922年11月スルタンを廃して共和制をしき（オスマン帝国の滅亡)，1923年その初代大統領*に選ばれた。

翌年憲法が制定されて近代的な立憲国家の形が整い，ケマルの指導により，社会の近代的改革が進められた。宗教と政治の分離や，トルコ語のローマ字化，婦人の解放などがおこなわれ，国力もしだいに回復した。

＊ 彼はのちに議会からアタチュルク(Atatürk)「父なるトルコ人」の称号を贈られた。



ムスタファ＝ケマル

エジプトの独立　エジプトは大戦中にトルコの宗主権から離れ，イギリスの保護国となったが，まもなく独立運動がおこり，大戦後はワフド党*が生まれ，民衆の暴動をともなう激しい反英運動に発展した。その結果，1922年イギリスは保護国の地位を廃し，エジプト王国の成立を認めたが，スエズ運河の支配を確保するために，スエズ・スーダン**などに軍隊を駐屯(とん)させ，治外法権も残した。このためエジプト人は完全独立を叫んで反抗をつづけ，1936年のイギリス・エジプト条約で，完全主権を認めさせた。しかしスエズ運河地帯の駐兵権は存続したため，民族運動はこののちもつづけられた。

西アジアの民族運動　大戦中から西アジアの各地で民族運動が激しくなり，戦後，サウジアラビア・イラク・アフガニスタンなどの諸国が独立した。

大戦中イギリスは，アラビア人に対して，トルコから独立させ，王国をつくらせるという約束で協力を求め，ヒジャーズ地方には反トルコの独立運動がおこった。戦後彼らの希望は実現されず，アラビアの分裂状態が続いたが，イブン＝サウード(Ibn Saud 1880ころ～1953)がアラビア半島の大半を制し，1932年サウジアラビア王国と改称した。石油の開発とともにこの国にアメリカ資本が進出した。

イギリスは，アラビア人に王国建設を約束する一方，ユダヤ系財閥の支持を得るために，1917年バルフォア宣言を発して，ユダヤ人にもパレスチナの自治国家建設を約束した。そこで戦後イギリスの委任統治領と

---

* ワフドとは「代表」の意味で，パリ講和会議に代表を送ろうとする運動の中からワフド党が生まれた。

** スーダンは，ファショダ事件後，イギリス・エジプトの共同統治の下にイギリスの支配がつづけられてきた。

なったこの地方に多数のユダヤ人が移住して，イスラム教徒のアラブ原住民との間に土地と職業をめぐる争いをひきおこした。

イラクは，イギリスの委任統治領となったが，1921年イギリスの指導下に**イラク王国**が建設され，1932年形式上の独立国となった。ペルシアもイギリスの影響下にあったが，レザ＝ハーン（Risa Khan 1877～1944）はクーデタにより政権をとり，1925年王位について中央集権化と外国勢力の排除に努め，1935年には国号をイランと改めた（パフレビー朝）。アフガニスタンも抵抗の末，1919年第3次アフガン戦争の結果独立をかちとり，王国となった。

シリアとレバノンは，大戦後フランスの委任統治領となり，民族運動がおこったが，独立の達成は第二次世界大戦にもちこされた。

2. インド・東南アジアの独立運動

不服従運動

第一次大戦がおこると，イギリスはインドの協力を要求し，食糧・軍需物資・兵士の提供などを義務づけるとともに，戦後に自治を許すことを約束し，1919年には統治法を改めて部分的に自治を認めた*。しかし，同年に**ローラット法**を公布して，言論・出版を弾圧し，反英運動をきびしくとりしまったから，インド人のはげしい怒りが燃えあがった。1920年**国民会議派**の指導者となったガンディー（Mahatma Gandhi 1869～1948）は非暴力・不服従の闘争を国民に訴え，納税を拒否し，公職を辞退し，英国商品を排斥する運動を展開した。



ガンディー

---

* インド人を官吏・将校に採用し，インド議会および地方議会の設立を許したが，総督の独裁権が強く，選挙権も国民のわずか2％に限られた。

インド連邦の成立　民族運動はこののちますます発展し，20年代の後半からはより急進的なネール(Jawaharlar Nehru 1889～1964)が国民会議派の指導権をにぎり，1929年の大会で，完全独立(プールナスワラジ)を決議するにいたった。

イギリスは指導者を投獄し，また，1930年より3回の**英印円卓会議**をロンドンにひらいたが成果があがらず，反英運動がいっそう激化したので，譲歩して1935年**改正インド統治法**を発布し，自治州と藩王国によるインド連邦の成立を認めた。またビルマはインドから分離された。しかしインド人の権利はなお不十分であり，会議派やムスリム連盟を中心とする独立運動がつづけられた。

東南アジアの民族運動　フランスの植民地インドシナも，ベトナムを中心として民族運動がさかんになった。ホー＝チ＝ミン(Ho Chi Minh 1890～1969)の活躍もこのころから始まった。インドネシアでも，スカルノ(Soekarno 1901～1970)のインドネシア国民党が独立運動の中心となって，オランダからの完全独立をめざす戦いをつづけた。

朝鮮・外蒙古　日本は朝鮮総督に武官をあて，自治をほとんど認めなかった。朝鮮人は「民族自決」を原則とするヴェルサイユ講和条約に大きな期待をかけたが，すべての希望が無視されたので，ついに反日感情が高まり1919年の万歳事件(3・1事件)となった。

1912年，ロシアの助力で中国からなかば独立した外蒙古は，ロシア革命の後，ソ連の援助で，1924年7月，蒙古人民共和国をたてた。

3.　中国革命運動の進展

文学革命　第一次大戦を利用して中国への進出をはかった日本は，1915年，袁世凱政府に対して，満州の利権の確保や，山東省の旧ドイツ権益の継承などを含む**21か条要求**を提示し，中国市場を日本の手に独占しようとした。袁は結局これをほとんどうけ入れたが，そのころから，自ら帝位につく運動を進めた。これに対して，国内では第三革命がおこり，列強も袁を支持しなかったので，帝制復活運動は失

敗し，やがて袁は病死した。その後も軍閥争覇の形勢がつづいたが，他方，孫文は広東に軍政府を組織した(1917)。



魯　迅

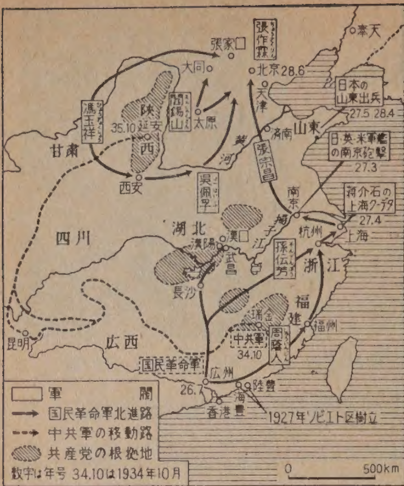
このような情勢下で，一部の知識人は，中国の文化・思想の徹底的な革新の必要を感じ，北京大学の陳独秀(1879〜1942)・胡適(1891〜1962)らが先頭に立って，雑誌「新青年」(1915年創刊)を中心に，運動を展開した。この運動は**文学革命**とよばれ，彼らは専制政治の思想的根拠とされる儒教を激しく攻撃し，民主主義と科学こそが新しい中国の精神とならねばならないと主張した。古い文語体をやめて口語体(**白話**)を用いる運動もおこった。魯迅(1881〜1936)の「阿Q正伝」が，このような背景のもとに生まれたが，そこには，辛亥革命後も旧態依然たる中国の現実に対する絶望と憤りがこめられていた。

五・四運動　中国民衆の反帝国主義・反軍閥の機運は，1919年5月4日に始まる**五・四運動**へと発展した。パリ講和会議には中国も代表を送り，21か条要求の廃棄を主張したが，これが会議に反映されないのに憤激した北京の大学生は，ヴェルサイユ条約反対と21か条要求撤廃を叫んでデモをおこし，一部は親日派大臣邸を襲った。この運動は全国的にひろがり，労働者のストライキ，商店の休業，日本商品の排斥運動へと発展した。政府もこれに動かされ，ヴェルサイユ条約の調印拒否を声明し，親日派大臣をやめさせた*。

第一次国・共合作と分裂　学生・知識人・労働者・一般市民の参加した五・四運動による民族主義的機運のたかまりの中で，広東によった孫文は中国国民党を再組織し(1919)，革命運動を従来よりも広い基礎の上に展開しようとした。一方，ロシア革命の成功は中国にも強い刺激を与

---

* パリ講和会議で承認された日本の対華要求も，ワシントン会議の結果，(→p. 273)否認され，日本は山東省の権益を中国に返し，イギリスも威海衛を返した。



北伐と大西遷

え，1921年上海に陳独秀を委員長とする **中国共産党** が結成された。新しい革命の道を求めていた孫文は，中共との提携を進め，1924年，両党は合作（合同）して，**「連ソ・容共・工農扶助」** の三大政策のもとに中国革命を推進することとなった（**第一次国・共合作**）。

五・三〇事件　孫文が，病死した1925年，上海で日本人経営の紡績工場のストライキに端を発し，５月30日のイギリス警官隊の発砲により拡大された激しい労働運動がおこり，民族運動を高めた。

国民政府の樹立　1926年，孫文のあとをついだ蔣介石（しょうかいせき，1887～）は，国民革命軍を組織して，北方軍閥の打倒にのりだした（**北伐**）。革命軍は一年以内に武漢・南京・上海を占領したが，この間に国民党内の左右の対立が深まり，民族資本家も共産党勢力の進出に不安を感じだしていた。浙江（せっこう）財閥*や英・米などとの結びつきを強めた蔣介石は，27年４月上海でクーデタをおこない，中国共産党と国民党左派によってつくられていた武漢政府とは別に，右派によって南京に **国民政府** を樹立した。蔣はさらに華北へ北伐の軍を進め**，28年６月北京を占領し，国民党による全国統一がほぼ成功した。

国・共の内戦と満州事変　武漢政府の国民党左派と共産党は，しばらく提携していたが，土地改革をめぐる対立から分裂し（1927年８月），国民党は共産党を追放して国民政府に合流した。これ以後，非合法活動

* アヘン戦争後，中国の資本は上海に集中したが，その銀行資本家には，浙江・江蘇両省出身者が多く，浙江財閥とよばれた。

** その間北方軍閥張作霖を援助していた日本は，蔣の北進をおさえるために，２回にわたって山東に出兵した。

にはいった共産党は，農村の土地革命によってソビエト根拠地をひろげて行く方針をとり，31年江西省瑞金(ずいきん)を中心に，中華ソビエト共和国臨時政府を樹立した。しかし蔣介石の討伐はきびしく，ついに中共は34年から9,000キロの「大西遷」(長征)をおこない，1年後に陝西(せんせい)省延安(えんあん)に根拠地を移動した。

この間に日本軍部は，張作霖(ちょうさくりん)(1875〜1928)を爆死させ(1928)，さらに，大陸に対する武力侵出を企てた。1931年9月，関東軍は奉天郊外の柳条溝(りゅうじょうこう)で鉄道爆破事件をおこし，これをきっかけに全満州を占領した(**満州事変**)。翌年には清朝の廃帝溥儀(ふぎ)(1906〜67)を執政(1934，皇帝)とする満州国をつくり，熱河(ねっか)も占領した。国際連盟は満州事変を侵略行為と判断し，満州国の不承認を決議したが，日本はこれを不服として1933年3月連盟を脱退し，さらに内モンゴリアから華北にかけて勢力をひろげようとした。

抗日統一戦線　大西遷の途中，毛沢東(1893〜)が指導権を確立した中共は，35年内戦停止と抗日統一戦線結成を国民政府によびかけた(**八・一宣言**)(→p. 289)。蔣介石はこれを無視して，中共討伐作戦を続行したが麾下の張学良らが，36年末西安(シーアン)におもむいた蔣介石を監禁し，内戦停止を強く訴えたため(**西安事件**)，やむなく要求をいれて国・共間の交渉が始められた。その結果，翌年7月に日華事変が始まると，**第二次国・共合作**が正式に成立した。

第5節　欧米諸国の政治情勢

1.　アメリカ合衆国

永久の繁栄　第一次大戦中，連合国に戦費・物資を援助して，戦前の債務国から債権国に変わったアメリカの経済的繁栄は著しく，イギリスに代わって世界の商業・金融市場における指導的地位を確立した。生産力は世界第一位を誇り，独占資本はいっそう強力となっ

た[*]。この大資本家層を背景とした共和党は，ハーディング・クーリッジ（Coolidge 在職1923～29），フーヴァー（Hoover 在職1929～33）の各大統領のもとで1920年代の政権を独占し，大資本の利益を優先する政策を進めた。1919年に婦人参政権が通過した以外は，革新的な政策はおこなわれず保守主義がひろまった。

世界恐慌の勃発

こうして，「永久の繁栄」をうたわれていたアメリカ経済も，その裏では農産物の過剰や不健全な投機熱が進んでいた。その結果，1929年10月ニューヨークの株式取引所におこった恐慌によって，かつてない不況にみまわれるにいたった。(→p. 274)

アメリカは恐慌に対処して，ドイツ・オーストリアに投下していた資本をひきあげたため，両国の経済は破綻に瀕した。(→p. 293)そこでフーヴァーは，1931年ドイツの賠償支払いや戦債支払いを１年間停止する「フーヴァー＝モラトリアム」の宣言をおこなった。その間，国内の景気回復に努めたが効果なく，生産量や貿易額は激減し１千万人を越える失業者が町にあふれ，国民の不満は高まった。1932年秋の選挙には進歩的政策をかかげるフランクリン＝ルーズヴェルト（Franklin Roosevelt 在職1933～45）が圧倒的に勝利し，政権は民主党に移った。

ニューディール政策

翌年大統領に就任したルーズヴェルトは，恐慌をきりぬけるため，積極的に国内産業の改革・統制をおこなった。この政策は**ニューディール**(New Deal) とよばれ，その中心は**農業調整法と全国産業復興法**であった。

農業調整法 (Agricultural Adjustment Act 略称 AAA) は，過剰生産を防止するため，政府が作付けを制限し，農産物価格をひき上げて農民の購買力を高めようとしたものである。全国産業復興法(National Industrial Recovery Act 略称 NIRA) は，各産業部門ごとに，生産の制限や最低販売価額・最高労働時間・最低賃金などに関する規約を作らせ，公正な競争がおこなわれるように図ったものである。

---

* アメリカでは，早くも1890年に独占をおさえる反トラスト法が成立したが，実効は少なく，その後もセオドア＝ルーズヴェルトやウィルソンが独占の制圧につとめたが，不成功に終わった。

この両法は違憲の判決をうけたが，労働者の団結権・団体交渉権は1935年**ワグナー法**で保障された。そのほか，テネシー渓谷開発公社(TVA)*を設立して総合開発事業をおこしたり，失業者の救済や社会保障の実施に努力した。これとともに労働運動も活発になり，1935年アメリカ労働総同盟(AFL)とは別に急進的な産業別組織会議(CIO)が結成された。**

ニューディールの効果は，1937年の景気回復に示されたが，同年のうちに再び停滞し始め，失業者の増加，労働運動の激化など深刻な危機が生まれた。しかし，ルーズヴェルトは国民の強い支持をうけ，また，国際的な危機のためもあって，大統領に４選された。

ラテンアメリカ

独立後のラテンアメリカ諸国では軍人や貴族の力が強く，政情はきわめて不安定であった。経済も，スペイン植民地時代の重商主義政策の弊害をうけて，大土地所有がなおおこなわれており，民族産業の成長は著しく遅れ，外国資本が優勢であった。

中米諸小国では早くからアメリカの勢力が強かったが，南米ではイギリスが赤道以南に絶大な経済地盤をもっていた。これに対し，アメリカは，19世紀末から南米への進出を試み，元来はラテンアメリカ諸国の連合を主張する運動であった汎アメリカ主義を，合衆国中心の運動に変え，1889年いらい数年おきに**汎アメリカ会議**を開いた。

20世紀にはいると，アメリカは中南米諸国に対する，武力を用いた内政干渉と，ドル外交といわれる露骨な経済支配をおし進めた。そして，大戦中からは積極的に南米に進出し，油田・銅山・港湾・鉄道・銀行を支配して経済の実権をにぎった。

善隣外交

このような傾向に対し，ウィルソン大統領の時代から外交方針を改めようとする努力があったが，ルーズヴェル

---

* Tennessee Valley Authority の略

** Congress of Industrial Organizations の略。AFL は American Federation of Labor の略。1937年秋に AFL は360万人，CIO は370万人の組合員をもっていた。この両組合は1955年12月合同した。

トはそれを継承・発展させ，**善隣外交**とよばれる協調的な外交を進めた。そして，互恵的な関税ひき下げをおこない，キューバの独立を認め，ハイチ・パナマなどの駐兵権を放棄した。その結果，中南米諸国はアメリカに接近し，経済的にもいっそう強くアメリカ資本に従属することとなった。

他方で彼はフィリピンの独立についても，1934年に10年後の独立を約束した。中国に対するアメリカの投資活動はますますさかんで，1931年いらいの日本の満州侵略に対しては，イギリスとともに反対し，また1933年にソ連を承認して国交を回復し，通商の利を得るとともに，日・独の進出に対抗しようとした。

2. イギリス

労働党の進出　イギリスでは，大戦中に挙国一致の**ロイド＝ジョージ**（Lloyd George 1863～1945）内閣が生まれ，大戦を戦いぬくために国民の支持を求めた。1918年に**第4次選挙法改正**をおこない，成年男子の普通選挙権と30歳以上の女子への参政権を認めたのもこのような事情からであった*。

大戦後のイギリスは，多額の債務と戦争被害のために財政は苦しく，貿易も不振で経済界は不況におちいった。そのため，勤労各層の生活は苦しく，**労働党**の支持者が著しく増加した。労働党は1923年の選挙で保守党についで第2党となり，翌年，自由党の協力を得てマクドナルド（MacDonald 1866～1937）は**第1次労働党内閣**を組織し，社会



1928年の婦人の新モード　イギリスのアスコット競馬場のファッションは流行の最先端を示していた。

*　1928年，第5次選挙法改正により，選挙権は女性も男性と同等になった。

政策をある程度実施した。ソ連の承認もこの内閣によっておこなわれたが，１年足らずで保守党のボールドウィン（Baldwin 1867～1947）内閣に代わった。

イギリス連邦の成立　大英帝国内の自治領植民地は，戦争中は軍隊を送って連合国側を助け，講和会議にもそれぞれ代表を送り，国際連盟にも，本国とは別に加入した。そして1923年の帝国会議(→p. 230)では，自治領の外交上の自主権が認められて，帝国内の全領土は**イギリス連邦**(British Commonwealth of Nations)と称することになった。

さらに1926年の会議では，各自治領が王冠に対する共通の忠誠を誓うことによって結ばれながらも，本国と各自治領とは平等の地位に立ち，内治・外交とも，なんら本国に従属しないことが決定された。これは，1931年**ウェストミンスター憲章**によって法制化され，カナダ・オーストラリア・ニュージーランド・南アフリカ連邦・アイルランド自由国・ニューファンドランドが本国と対等の独立国家となった。

エール共和国　1914年第３次アイルランド自治法案が可決されたが，第１次大戦勃発のため実施を延期された。大戦中，シンフェイン党を中心とする独立派は激しい反英闘争をおこない，1922年イギリスも**アイルランド自由国**（北アイルランドを除く）の成立を認めた。しかしなお自治領であったため，デ＝ヴァレラのシンフェイン党は，完全独立を叫んで運動を続け，1937年には**エール(Eire)共和国**として連邦から分離することを決定し，のちイギリスもこれを承認した。

恐慌とブロック経済　1929年第１党となった労働党は第２次マクドナルド内閣を成立させたが，世界恐慌にまき込まれて不景気が深刻となり，政府は失業保険費を大幅に削減しようとした。労働党はこれに反対したため，マクドナルドは改めて保守・自由両党の支持を得て挙国一致内閣をつくり，金本位制の停止，ポンド貨のきり下げ，国費の節約等を断行した。また1932年カナダのオタワにイギリス連邦経済会議**(オタワ会議)**をひらき，連邦内への外国商品の進出を阻止する排他的な**ブロック経済**をつくりあげた。さらに各種の経済統制をおこない，機械

設備を更新し，産業を振興したが，やがてドイツに対抗するために軍備拡張に努めるようになった。この間保守党内閣が成立し(1935)，1937年からはネヴィル=チェンバレン(Neville Chamberlain 1869~1940)が内閣を組織した。

3. フ ラ ン ス

戦後の政局

国土が戦場と化したフランスは，講和会議においてドイツへの報復主義を唱えた。アルザス・ロレーヌの工業地帯は回復したが，革命後のソビエト政府に帝政時代の外債を破棄されたうえ，英・米に対する戦債も多額にのぼったから，経済は苦しかった。1923年の**ルール占領**も，ドイツの抵抗にあって成果がなく，24年いらいのエリオ(Herriot 1872~1957)の左派連合内閣時代も財政危機がつづいたが，26年からはポアンカレ(Poincaré 1860~1934)の挙国一致内閣が成立して，ようやく経済は安定した。外交では，外相ブリアンがドイツとの協調をはかり，東欧諸国とも緊密に提携してさかんに投資をおこなったから，フランスの国力はしだいに回復した。

人民戦線の結成

しかし，世界恐慌の影響は，この国にも及び，ドイツにナチス政権が成立したことにも刺激され，右翼勢力が急速に増大し，独裁政治を樹立しようとする動きも生まれた。

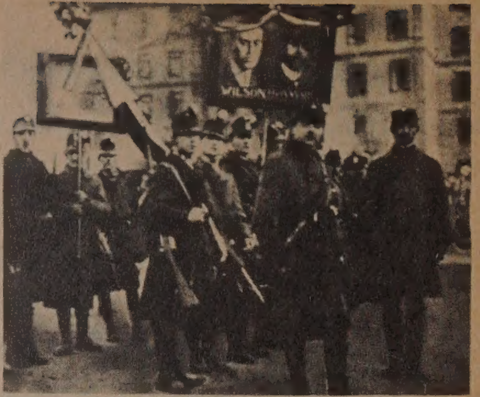
人民戦線　レオン=ブルムの肖像をかかげてバスティーユ広場を行進する人民戦線派の人々。



これに対抗して急進社会党・社会党・共産党が結束し，労働組合や知識人も参加して1935年**人民戦線**(People's Front)をつくった。そして翌年の総選挙で大勝利を得，レオン=ブルム(Léon Blum 1872~1950)を首相とする人民戦線内閣が成立した。この内閣は右翼団体の解散や労働条件の改善などをおこなったが，資本家はこれに不満

で協力せず，1938年には事実上崩壊するにいたった。

4. 東欧・北欧の諸国



独立を祝うチェコスロバキアの義勇軍

東欧諸国 ソ連と西欧との間にはさまって，大戦後新たに建設された東欧諸国は，経済発展も遅れ，資源もかたよっていて，自主的な成長は困難であった。しかもソ連に隣接していたから，各国の支配者層は革命を恐れ，西欧の強国に援助を求めた。これらの事情から東欧諸国では，農地改革や，政治上の改革も不徹底に終わった。そのうえ，国内に多数の**少数民族**をかかえて，民族問題にもなやまされた。

ポーランドでは，地主勢力がなお優勢で，20年代後半にはクーデタにより軍事独裁政権がうちたてられた。ハンガリーは戦後共産主義者の革命により，ハンガリー－ソビエト共和国となったが数か月で倒れ，以後独裁政治がつづいた。チェコスロバキアはマサリク(Másaryk, 1850~1937)やベネシュ(Benes, 1884~1948)らの指導が効をあげ，国内の民主化は徹底した。産業はフランス資本の援助をうけて繊維・軍需工業などがめざましく発達し，その生産力は東欧第一であった。ルーマニアやユーゴスラビアなどでは土地改革がかなり進められたが，政情は安定せず，ここにもフランス資本の進出がめだった。

北欧諸国 デンマーク・スウェーデンおよび1905年スウェーデンから独立したノルウェーの北欧3王国は，いずれも領土拡張を断念して，平和の維持に努めた。3王国とも言語風習が似ており，**民主主義が徹底**して，議会政治が発達した。温和な社会主義政党が強くて，ながく政権をにぎり，社会政策はよくおこなわれた。ロシアから独立したフィンランドは，ソ連とドイツの圧迫をしばしばうけたが，左右両翼

を弾圧しつつ，民主的制度を維持しようと努力した。

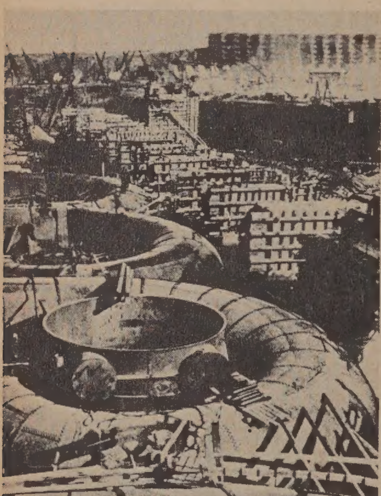
オランダとベルギー　オランダは第一次大戦中に中立を保ち，社会政策もよく実施されたが，その植民地には米・英・日の勢力がしだいにくいこんできた。1919年には23歳以上の男女に選挙権を与えた。ベルギーも19世紀いらい民主化が進んだがゲルマン系のフラマン人とラテン系のワロン人の対立がつづいた。

5.　ソビエト連邦

新経済政策

革命後の内乱と干渉戦争を克服したソ連は，戦時共産主義を改めて，1921年3月からレーニンの指導で**新経済政策**（ネップ）を開始した。これは，銀行・大工業・交通・貿易など重要部門は国有とし，小商業や小工場は個人経営を認めて資本主義をある程度復活し，農民に対しても一定の租税を納めたあとは穀物の自由販売を許したものである。この結果生産力は急速に回復し，1927年にはほぼ戦前の生産水準に達した。1924年レーニンが死んだ後は，一国社会主義の建設が不可能でないことを主張する**スターリン**が，世界革命を重視するトロツキー派に対する圧迫を強化した。スターリンの勢力は党内に増大し，1927年以後トロツキー派を除名，あるいは追放した。ソ連政府は1928年から，重工業の発達と農業の社会主義化をめざす**第1次五か年計画**の実施に移った。鉄道・発電所・工場を建設し，農業では集団農場（コルホーズ）・国営農場（ソフホーズ）を組織した。その反面軽工業には力が注がれず，国民の消費生活はかなり犠牲にされた。

五か年計画　ドニエープル水力発電所の巨大なタービンをすえつけているところ。



第1次五か年計画は世界恐慌の影響をうけることなく進捗し，1933年からは第2次五か年計画にはいった。ここでは重工業ばかりでなく軽工業の発展にも努力し，国民生活もしだいに向上して，社会主義経済は軌道にのり始めた。

社会主義体制の確立　トロツキーの追放後も党内の抗争はつづいた。スターリンは，これらの反対派に対して1934年以後**粛清**を大々的におこない，党・政府から赤軍にいたるまで多数の幹部を処刑して*，その地位を不動のものとした。1936年12月には**スターリン憲法**により，男女18歳以上の普通選挙制を実施した**。しかしきびしい独裁政治は，一方では多くの弊害を生んだ。

五か年計画を進めるためには，自国の安全をはかる必要があったので，外交政策は積極的に各国と協調する方針をとった。1934年には**国際連盟に加入**し，翌年のコミンテルン大会で決定された人民戦線戦術を外交政策にもいかそうとした。このような情勢の中で1938年から第3次五か年計画を始め，ウラル・シベリアの大規模な工業建設と軍需工業の発展を企てたが，計画の中途で**独ソ戦争**が勃発した。(→p. 298)

6. イタリア

ファシスト政権の樹立　イタリアは社会の発達が遅れ，経済力も弱かったから，戦後の不景気で失業者は増大し，労働運動が激化して，社会混乱がたかまった。また，講和会議でも南チロール・トリエステなどを回復しただけで，ダルマチア地方は得られなかったから，国民はヴェルサイユ体制にきわめて不満であった。

国民生活の窮乏から社会党が勢力を伸ばし，1920年秋には北イタリア

---

* 1956年の第20回党大会いらいスターリンの粛清の誤りが批判されるようになった。

** 地域別秘密選挙で代表者を選ぶことになり，農村と都市の代表者の数の差別もなくなった。少数民族に対しても従来以上に大きな権利が与えられ，民族の平等がはかられた。しかし，候補者推薦制と共産党の一党独裁制は変わらなかった。



ムッソリーニ　ローマ進軍のあと，イタリア王のもとにおもむくファシスト幹部たち。中央黒服がムッソリーニ。

で労働者が工場管理をおこなうにいたり，一時は社会主義革命が成るかにみえた。農民も土地占拠などの過激な手段をとった。この社会革命を恐れた資本家・地主・軍人は，ムッソリーニ(Mussolini 1883～1945)が1919年3月結成した戦闘者ファッショ*という右翼団体に近づいた。彼らの支持を得たファッショ団は，1921年**国家ファシスト党**と改称し，暴力をふるって社会主義運動を弾圧するとともに，翌1922年10月武装行動をおこし，**ローマ進軍**をおこなって政府を倒した。つづいて新選挙法**をつくり，1924年の総選挙で第1党となった。

ファシスト独裁体制　ムッソリーニはその後も反対派に対する弾圧をつづけ，1926年ファシスト党以外の一切の政党を禁止した。さらに言論・集会・出版を統制し，地方自治制度や議会制度を廃して，**ファシスト大評議会**に全権を与え(1928)，独裁体制を固めた。また，経済の安定をはかるために強力な統制をおこない，国土開発計画により自給自足体制をめざすとともに，一方では，米・英からの外債を得て財政を安定し，工業を発達させた。

外交では強硬な態度をとり，フィウメ市の奪取(1924)，アルバニアの保護国化(1926)を強行し，フランスのバルカン進出に対抗してハンガリーを支援した。ナチス(→p. 292)の進出に対しては，ムッソリーニは最初は警戒的で，英・仏と結んでドイツに対抗しようとしたが，1930年代なかばごろ

---

* Fascio，イタリア語で「結束」の意味。ファシズムはこの結束主義から一般に右翼の全体主義・独裁主義を意味することばとなった。

** 選挙で4分の1以上の票をとった第1党は下院の3分の2の議席を得ることとした。

からしだいに接近するようになっていた。(→p. 296)

ヴァティカン市国　ムッソリーニは，カトリック教徒の支持をうるため，1929年教皇と**ラテラン条約**を結び，教皇を独立の主権者と認めた。これにより，教皇庁はヴァティカン市国を形成することとなり，イタリア王国建設いらいの不和は解消された。(→p. 232)

7. ドイツ

ワイマール共和国の成立　1918年11月の革命でドイツは共和国となった。しかし，スパルタクス団（ドイツ共産党の前身）は，徹底的な社会主義革命を主張して，翌年1月，ベルリンで武力行動にでた。この革命の企ては鎮圧され，指導者の**カール＝リープクネヒト**（Karl Liebknecht 1871～1919）や**ローザ＝ルクセンブルク**（Rosa Luxemburg 1871～1919）は殺された。ついで，ワイマールで憲法制定国民議会がひらかれ，社会民主党・民主党・中央党が多数派となり，同年8月，ドイツ共和国憲法（ワイマール憲法）を制定した。この憲法は，20歳以上の男女の普通選挙権や人民投票の制度を定め，労働者の団結権や経営参加権を認めるなど，当時，世界で最も民主的な憲法といわれた。* 任期7年の大統領には社会民主党の**エーベルト**（Ebert 在職1919～25）が選ばれ，連邦制のいわゆるワイマール共和国が発足した。



ローザ＝ルクセンブルク

戦後の混乱　共和国は，6月ヴェルサイユ条約に調印したが，国民はこれを国家的屈辱として大きな不満をもった。その上，巨額の賠償金は国民生活を悪化させ，社会の混乱が深まった。共和国に不満な左右の勢力は，このような社会の

---

* ただ，第48条で大統領の非常大権が規定され，基本的人権の一時停止が認められていた。共和国末期には，これが濫用され，独裁政治をまねいた。(→p. 293)

年	月	
1914.	7.	4.2
1919.	7.	14.0
1920.	7.	39.5
1921.	7.	76.7
1922.	1.	191.8
	7.	493.2
1923.	1.	17,972.0
	7.	353,412.0
	8.	4,620,455.0
	9.	98,860,000.0
	10.	25,260,208,000.0
	11.	4,200,000,000,000.0

対ドル換算率（月額平均単位マルク）1921年5月に賠償案の承認を要求したロンドン通牒(ちょう)が発せられ，いらい，加速度的にマルク崩壊が始まった。

混乱を背景に，しばしば反政府運動をおこない，暗殺が横行した。

1923年1月，ルール地方(→p. 272)が占領されると，政府は「消極的抵抗」の方針をとり，この地方の生産活動をとめた。このため生産は激減したが，政府は資本家への補償と労働者の生活保障のため多額の不換紙幣を濫発したから，紙幣価値が暴落して未曽有(みぞう)のインフレーションとなり，国民生活は破綻に瀕し，反政府運動が激化した。そこでドイツ人民党のシュトレーゼマン（Stresemann 1878～1929）は，8月，挙国一致内閣をつくって，抵抗をやめ，左右の攻撃をおさえるとともに，新マルク紙幣（レンテンマルク*）へのきりかえによってようやくインフレーションをおさめた。

ドイツの復興　翌1924年のドーズ案により，ドイツに米・英の外資がはいるようになって経済復興の道がひらけた(→p. 273)。この結果，国内では生産が急増するとともに，独占資本も復活し，保守的な風潮がひろがった。それは，1925年エーベルトの死後，保守的な帝政派や軍部の中心人物ヒンデンブルク（Hindenburg 1847～1934）が大統領に選ばれたことにも現われた。

シュトレーゼマンは，その後外相として協調外交政策をとり，ソ連との親善を維持しつつ西欧への接近を深めた。1925年ロカルノ会議に参加し，翌年国際連盟に加入を許されるなどドイツの国際的地位も向上した。

ナチス　国民社会主義ドイツ労働者党（俗称ナチス Nazis）は，1919年南ドイツのミュンヘンで結成され，まもなくヒトラー（Adolf Hitler 1889～1945）が党首となり，1923年秋ミュンヘン一揆をおこしたが失敗した。しかし，突撃隊(SA)などの大衆団体を組織し，巧妙な宣伝活動をおこないつつ，強大なドイツ国家の建設，独裁政権の樹立，

---

* 従来の1兆マルクを保障準備をもつレンテンマルクの1マルクにきりかえた。

ユダヤ人排斥などを叫び，一方では大資本経営の利益の分配や社会政策の大拡張など社会主義的な要求を唱えたので，党勢はしだいに伸びた。



ヒトラーとヒンデンブルク
1933年国会招集のとき。

ナチスの台頭 ドーズ案による賠償金支払いは1930年のヤング案によって総額358億マルク余に軽減されたが*，アメリカにおこった恐慌はたちまちドイツに影響を及ぼした。(→p. 282)経済は混乱し，失業者は激増し，国民生活は窮乏して，左右からの政府攻撃が激しくなった。しかも保守派を中心とする不安定な政府は強力な政策をとることができず，ヒンデンブルク大統領の非常大権がしばしば行使され，議会政治は事実上否定されるにいたった。

このような情勢の中で，国民はナチスの主張に強くひきつけられるようになり，ナチスは，中産階級や農民の支持を集め，青年や婦人層を組織してめざましく発展した。また，共産党など革命勢力の増大を恐れる保守帝政派や資本家・軍部・官僚の間にも，支持者が多くなった。その結果ヒトラーは，1932年の大統領選挙でヒンデンブルクに600万票の差で迫り，その後2回の総選挙では，ともにナチスが第1党となった。

共和国崩壊と第三帝国 危機が深まるにつれて，共産党の勢力も増大したが，ナチスへの支援も強まり，ヒンデンブルクは，1933年1月，ヒトラーに組閣を命じた。議会に過半数を占めないナチスは，ただちに総選挙をおこない，その直前におこった国会放火事件を利用して共産党に大弾圧を加えてこれを禁止した。こうして3月召集された国会で，ナチス政府に独裁権を与える**授権法**が制定され，ナチスの独裁政治(第三帝国)がはじまった。

---

* 賠償金は，その後，世界恐慌によるドイツの経済的困難にともない，1932年のローザンヌ会議で30億マルクに軽減され，戦勝国のアメリカへの戦債支払いも実際上解消された。ヒトラーは政権をとるや賠償支払いをやめた。

まずヒトラーは，労働組合・社会民主党を禁止し，他の諸政党を解散させ，一党独裁を完成した。また中央集権を強化し，国家行政機関とナチス党組織を結びつけ，大規模な土木工事をおこなって失業者を吸収するとともに，軍需工業をおこして自給自足的な戦時体制の確立を急ぎ，**四か年計画** とよばれる厳重な統制経済政策を実施した。労働者と企業家は強制的に官製の組織（ドイツ労働戦線）に加入させられ，青少年による勤労奉仕も大規模におこなわれ，また軍備が著しく強化された。

ヒトラーは，1934年にヒンデンブルクが死去すると大統領も兼ね，総統（フューラー）と称した。反ナチス分子に対しては国家秘密警察（ゲシュタポ）がきびしい弾圧を加え，ドイツ民族の優秀性を強調してユダヤ人への迫害を合法化した。アインシュタインらすぐれた学者は国外に亡命し，学問・言論・出版の自由は奪われ，焚書もおこなわれて，ドイツ文化は衰退し，民主主義は否定された。さらにヒトラーは，戦勝国家の現状維持政策に反対し，ゲルマン民族による欧州制覇のための侵略政策をとり始めたのである。

第6節　第二次世界大戦

1.　国際危機の展開

独・伊（い）のヴェルサイユ体制打破　1933年以後のヨーロッパの形勢は，列強がドイツとソ連の国力の発展をどううけとめるかを中心として展開した。イギリスはドイツの要求を認めつつソ連と対立する方針をとり，フランスはドイツとソ連の間にあって動揺をつづけた。

ドイツは国際連盟で軍備平等権を主張したが，それが否認されると，1933年**国際連盟を脱退**し，1935年には再軍備を宣言した。フランスはソ連と**仏ソ相互援助条約**を結んでこれに対抗したが，イギリスは**英独海軍協定**を結んでドイツの海軍拡張を認めた。翌36年ドイツはロカルノ条約を

破棄し，軍隊をラインラント非武装地帯に進駐させた。イギリスはこれも承認した。

ドイツに対するイギリスの態度が寛大であったのに対して，フランスはドイツの強大化を恐れてイタリアに近づき，その行動に寛大であったために，1935年イタリアのエチオピア侵略は，有利に進められた。国際連盟は，イタリアを侵略国とみなして経済制裁をおこなったが，直接イタリアに打撃を与える手段はとらなかったので，翌年イタリアはエチオピアを併合し，イギリス・フランスもこれを承認した。連盟の威信は地におち，イタリアは1937年，日本・ドイツにつづいて連盟を脱退した。



ドイツの拡大

スペイン内乱と枢軸の形成 一方では，民主主義を守ろうとする努力が，このころから非常に強くなり，人民戦線結成の動きがおこった。そして1931年に共和国となったスペインでも，左右の勢力が激しく争っていたが，1936年に，フランスと同じく人民戦線内閣が成立した。しかし，右翼はこれに反対し，フランコ(Franco, 1892～)将軍を中心にモロッコで反乱をおこした。この内乱は本土にひろがり，ドイツ・イタリアの武力援助を得てしだいに優勢となった。各国の自由主義者・社会主義者の中には政府軍に加わ

スペイン内乱　首都マドリードとトレドの間の道路上に土嚢(どのう)を築き，フランコ軍に抗戦する政府軍兵士。



って戦ったものもあるが，フランス・イギリスは不干渉の態度をとって動かず，3年にわたる内乱ののち，フランコがスペイン全土を制圧した。

スペイン内乱を通じて，ドイツとイタリアは親密となり，1936年10月，ベルリン－ローマ枢軸が成立した。* ついで，日独防共協定が結ばれ，翌37年にはイタリアも参加し，**三国防共協定**が成立した。こうして全体主義3国は「枢軸」を完成し，侵略外交をとることとなった。

日華事変

1937年7月北京郊外の蘆溝橋（ろこうきょう）において日華両国軍が衝突し，日華事変が始まった。日本政府は戦争の不拡大方針を唱えたが，軍部は戦線を中国全土にひろげた。これに対して中国は，**抗日民族統一戦線**を結成して，抗戦をつづけた。(→p. 281)

日本は南京・武漢・広東など重要都市を占領したが，国民政府は首都を重慶に移して長期戦の態勢をとり，中国共産党も支配地域（解放区）を増大させながら遊撃隊を展開した。戦局がいきづまった日本は，重慶から脱出した汪兆銘（おうちょうめい）(1883～1944)をたてて，南京に国民政府を組織させたが (1940)，米・英・ソの蔣政権援助はつづき，事変解決の見通しは立たなかった。

2.　第二次世界大戦の勃発

ドイツの東欧侵略

1938年3月，ドイツは強迫を加えて**オーストリアを併合**した。つづいてドイツ人の住む**チェコスロバキア**領内のズデーテン地方の併合をはかり，チェコ政府に拒否された。しかし，対独宥和（ゆうわ）政策をとるイギリス首相チェンバレンは，チェコスロバキアを無視し，9月末にヒトラーおよびフランス・イタリアの首相とミュンヘン**会議**をひらき，ドイツの要求を入れて平和を維持する策をとった。

ところが，39年3月になると，ヒトラーはチェコを強迫してその独立を奪い，チェコ地方をドイツの保護領とし，スロバキアを保護国とした。

---

*　ムッソリーニははじめはヒトラーを警戒しており，1934年ヒトラーがオーストリア併合を企てた時には，国境に兵力を集結して併合を断念させた。

つづいてポーランドにダンチヒ（いまのグダニスク）とポーランド回廊を要求した。ここにいたってイギリスも，ポーランドへの援助を約束し，ソ連とも提携する態度を示した。しかしソ連は，英・仏の宥和政策がなおすてられていないと判断し，かつ，できればドイツの鋒先（ほこ）を西方に向けさせようとしてドイツに接近した。一方，東欧への進出をめざすヒトラーは，まず，フランスと戦って西方の脅威を除くためソ連と一時的に結ぶ必要を認め，39年8月，独ソ不可侵条約を締結して世界を驚かせた。



ミュンヘン会談　向かって左よりチェンバレン・ダラディエ(仏首相)・ヒトラー・ムッソリーニ。

大戦の勃発

この条約によって，戦争体制をととのえたヒトラーは，9月1日突然ポーランドに進撃した。イギリス・フランスはポーランドを助けてドイツに宣戦し，**第二次世界大戦**が始まった。ドイツ軍は一挙にポーランドを圧倒したが，ソ連もこの機をとらえてポーランドに進駐し，ドイツと国土を分割した。ソ連はさらにエストニア・ラトビア・リトアニアのバルト3国を保護国とし，国境修正と領土交換に応じなかったフィンランドと戦って，翌40年要求を通した*。またルーマニアからはベッサラビア地方を獲得した。

枢軸軍の優勢

西部戦線では，ドイツは1940年春デンマーク・ノルウェーを占領し，ついでベルギー・オランダの中立を侵した。イギリス・フランス軍はダンケルクに包囲され，かろうじて脱出した。その結果6月フランスではペタン（Petan 1856～1951）元帥が内閣をつくり，ドイツに降伏してビシーに政府を移した。国土の北半はドイツ軍に占領された。これに対し，ド＝ゴール（De Gaulle 1890～1970）将軍はロンドンに新政府をつくって抗戦（レジス

* このため1939年ソ連は国際連盟から除外された。



タンス）をよびかけ，占領地域でも地下運動がつづけられた。イギリスでもチャーチル（Churchill, 1874～1965）が首相となって，ドイツ空軍の猛烈な空襲にたえて制空権を守りぬき，大西洋の制海権も保ったから，ドイツ軍は英本土に上陸できず，戦争は長期戦化し，バルカンへも戦線がひろがった。イタリアはドイツ側にたって参戦し，北アフリカでも両国は連合してエジプト国境に迫った。

独ソ開戦　ドイツのバルカン制圧は，この地方との貿易関係を深めていたソ連とドイツとを対立させた。そこでソ連は，日ソ中立条約を結んでまず極東の不安を除き，同時にドイツとの関係も改善をはかろうとした。一方，ヒトラーは東ヨーロッパを占領して，ここにゲルマン民族の大帝国を建設することを，かねてからナチス運動の大目的としていたので，1941年6月22日，突然大軍をもってソ連に攻撃

を加え，ここに**独ソ戦争**が勃発した。ソ連軍は不意をつかれて大敗したが，その後よく戦ってモスクワ・レニングラードを守りとおし，産業施設を計画的に東方に移転させて抗戦の体制をかためた。イギリスはソ連と軍事協定を結び，アメリカは大量の物資をソ連に供給した*。



三国同盟の成立　独・伊大使と松岡外相（中央）。

1941年8月，ルーズヴェルトとチャーチルは大西洋上の軍艦で会談し，**大西洋憲章**＊＊を発表してナチス打倒と戦後世界の再建方針を定めた。こうしてイギリス・アメリカ・ソ連の3国の結束がととのった。

ナチスの占領地支配　ナチスは占領地の物資をきびしく徴発し，青年男女を強制労働に従事させ，専制政治をしいて多数のスラブ人をその居住地から追放し，かつユダヤ人400万人以上を虐殺した。このような統治に対しては，フランス・ユーゴ・ソ連をはじめとして，各地で大規模な抵抗運動がおこった。

3.　戦局の転換と連合国の勝利

太平洋戦争　ヨーロッパにおいてオランダ・フランスが敗れたのに乗じて，日本は石油その他の軍需資源の豊富な南方地域を獲得しようとした。そこで「大東亜共栄圏」の建設を唱え，1940年9月，日・独・伊**三国軍事同盟**を結び，仏領インドシナの北部を占領した。また一方，ソ連とも1941年4月，**日ソ中立条約**を結んで北方での軍事的負担を軽くした。ついで7月，日本軍が南部仏印進駐をおこなうと，アメ

(→p. 298)

＊　アメリカはイギリスに対してもフランス降伏後支持を積極化したが，1941年3月武器貸与法を制定してこれをいっそう強化していた。

＊＊　これは前大戦におけるウイルソンの14か条原則に相応するもので，領土の不拡大，政体選択の自由，戦後における恒久的安全保障制度の確立など8項目からなる。

リカの対日態度は硬化し，日米間の外交交渉も，全くいきづまった。そこで東条内閣は，極秘のうちに行動を進め，1941年12月8日未明，ハワイの**真珠湾を攻撃**し，米・英に宣戦した。ここに太平洋戦争が始まり，ドイツ・イタリアもアメリカに宣戦したので，第二次大戦は全世界に拡大した。

大戦の経過　太平洋戦争の初期においては，日本軍はフィリピン・マライ・ジャワ・ビルマ・西南太平洋諸島を占領した。占領地域には日本に協力する政権が生まれ，軍政がしかれたが，日本軍の統治は原住民の利益を無視することが多く，各地で抵抗がおこり始めた。この間，アメリカの軍需生産力は飛躍的に増大し，42年6月のミッドウェー海戦，ついでガダルカナル島攻防戦を境にアメリカ軍の大反攻がはじまった。

ヨーロッパでも，1942年後半の北アフリカ戦線と，ソ連軍のスターリングラード（現在のボルゴグラード）包囲戦を機に，形勢が逆転した。北アフリカ戦線では，同年11月アメリカ軍が上陸し，イギリス軍と協力して，翌年夏にはシチリア島に進攻した。動揺したイタリアではムッソリーニが解任され*，9月降伏した。スターリングラードでは，激しい市街戦の後，43年初めドイツ軍はソ連軍に降伏した。

連合国の勝利　ルーズヴェルトとチャーチルは，43年1月カサブランカ会談をおこなって枢軸国に対する無条件降伏の要求を決定した。同年11月にはルーズヴェルト・チャーチル・蔣介石がカイロ会談をひらいて，日本に関する処置方針を決定した。同月テヘラン会談では，ルーズヴェルト・チャーチル・スターリンはドイツを無条件降伏させるべき作戦を決定した。

1944年にはいると連合国軍の反撃はますます激しくなり，太平洋では米軍によってマーシャル群島・サイパン島・レイテ島が次々と奪われた。

---

* 彼は幽閉されたのち，いったんドイツ軍によって救出されたが，1945年4月，北イタリアで民衆ゲリラに捕えられ，殺された。

一方この年6月アイゼンハワー（Eisenhower 1890～1969）の率いる米・英軍がフランスのノルマンジーに上陸して，第2戦線を形成し，8月パリを奪回し，ド＝ゴールは臨時政府をつくった。


テヘラン会談　前列左からスターリン，ルーズヴェルト，チャーチル。

45年2月，米・英・ソの首脳は**ヤルタ会談**をひらき，ドイツ処理の大綱を決め，ソ連の対日参戦とその旧領土回復を定めた。3月連合国軍はライン川を越えたが，ソ連もバルカンを占領し，さらにベルリンをも占領した。ヒトラーは自殺し，5月7日ドイツは無条件降伏をした。

日本は制海権も制空権も奪われ，全国各地の空襲のため産業は破壊された。6月沖縄が占領された後，8月6日朝，広島に史上最初の**原子爆弾**が落とされ，9日長崎にも投下された。8日ソ連はヤルタ協定にもとづき，日ソ中立条約を破棄して，日本に宣戦した。日本は1945（昭和20）年8月14日，**ポツダム宣言***を無条件受諾して降伏した。

国際連合の成立　大西洋憲章について1943年10月，米・英・ソ・中華民国は「四か国宣言」をモスクワで発表し，平和機構の検討を開始した。1945年4月から各国代表が**サンフランシスコ会議**をひらいて国際連合憲章を採択し，10月正式に**国際連合**（United Nations Organization）が連合国51か国をもって成立した。

かつての国際連盟が侵略戦争を阻止できなかった先例にかんがみ，国

---

* 1945年7月，ルーズヴェルトの死去（4月）で大統領になったトルーマン・チャーチル(のちアトリー)・スターリンによってポツダム会談がおこなわれ，ドイツ処理の問題が決定された。この会談では7月26日，米・英は中国の同意を得て，日本に無条件降伏を要求する共同宣言（ポツダム宣言）を発表した。ソ連は，日本に宣戦した8月8日にこれに参加した。

際連合は，**安全保障理事会**に総会にまさる権限を与え，必要な際には武力制裁もできるようにした。また，米・英・ソ・仏・中華民国の5国は安全保障理事会の常任理事国となり，その決議には拒否権を行使できることとした。国連にはこのほかに経済社会理事会があり，そのもとにユネスコ(UNESCO)*，国際労働機構(ILO)**などの機関がおかれた。そして3年後の1948年12月，国連は**世界人権宣言**を可決した。

課　題

1. 帝国主義時代に，ヨーロッパ諸国の中でも，積極的に海外侵略をおこなった国と，あまり侵略をおこなわなかった国があるが，その差はどういう事情にもとづくかを考えてみよう。
2. ビスマルクが引退してから第一次世界大戦に至るまでのヨーロッパの国際関係の変化をたどり，この大戦の性格を考えてみよう。
3. ロシア革命がピューリタン革命やフランス革命と異なる点はどういうところかを調べてみよう。
4. 第一次世界大戦と第二次世界大戦にはどんな相違と似た点があるかを考えてみよう。
5. 世界恐慌に対するおもな国々の対策を調べ，この恐慌が諸国ならびに世界の動きに与えた影響を調べてみよう。
6. ファシズムがおこった国とおこらなかった国を比較し，ファシズムの本質を考えてみよう。

---

* 国連教育科学文化機構 United Nations Educational Scientific and Cultural Organization の略。

** International Labor Organization の略。国際連盟時代の機構を継承したもの。



ゲルニカ
（ピカソ筆）

第8章　現代の世界

第二次世界大戦後は，国際平和を守ろうとする機運が，かつてないほどに高まり，国際連盟の欠陥を反省して結成された国際連合が，活発な活動をした。アジア・アフリカの民族運動もますます盛んになり，多くの独立国が誕生して，純粋な形による列強の植民地支配はほぼなくなった。

しかし，ソ連を中心とする共産主義諸国家群の勢力が増大し，さらにアジア，やがてはアメリカ地域にも中国をはじめとする共産国家が生まれるに及んで，共産圏と資本主義圏の対立が深刻になって，「冷たい戦争」とよばれる国際的緊張がひろがった。しかし両陣営の間に一種の力の均衡状態が生まれ，またどちらの側も世界戦争を欲しなかったので，1950年代のなかばいらい，平和の気運が一般民衆の間でも，政府当局者の間でも強くなった。この気運が強まるにつれて，両陣営内部の各種の軍事同盟の意義はうすらぎ，両陣営内にそれぞれの矛盾や対立が現われ，国際的中立をめざす諸国の発言力も強まった。1960年代の後期いらい両陣営の間の融和が欧州では進んでいるが，アジアではその気運はまだ進んでいない。一方自然科学，とくに航空機の進歩は地球の文字通りの一体化を実現したが，科学技術の進歩は，他面では人類破滅の危険をも生みだし，工業の発展は公害の著しい増大をもたらしている。ここに現代文明の深刻な問題があるといえよう。

第1節　冷戦の激化と緩和

冷たい戦争の開始　第二次大戦後の世界では，莫大な犠牲者をだした戦争の惨禍を深く反省し，戦争の根絶と恒久的平和の実現を願う動きが高まった。国際連合の設立は，その現われであった。ニュルンベルクと東京では，1945年および1946年から国際軍事裁判がひらかれ，戦争の責任や残虐行為が追求された。

ところが，大戦中協調してきた，アメリカを中心とした西欧側とソ連との間には，戦後世界の再建をめぐって，早くも対立が生まれた。アメリカは，1947年3月「トルーマン宣言」を発して共産主義の広布を防ぐ立場からギリシア・トルコへの援助を開始し，ついで6月，マーシャル-プラン*(Marshal Plan) を発表した。これに対して共産諸国は，イタリア・フランスの共産党代表をも加えて，9月コミンフォルム(Cominform) の結成をきめ**，各国共産党の情報の交換，活動の活発化をめざした。ユーゴ共産党は独自の社会主義建設を主張してソ連の批判に服さず，翌年除名されたが，ともかく，こうして東西ヨーロッパは，いわゆる「鉄のカーテン***」によってきびしく隔離されることとなった。

1948年2月，チェコスロバキアにクーデタがおこり，共産党が政権をにぎったことに西欧側は驚き，3月にはイギリス・フランスとベネルクス3国（ベルギー・オランダ・ルクセンブルク）の5国は**西欧連合**を結成した。

世界労連の結成と分裂　労働運動の面でも国際協調の機運がおこり，1945年

---

* アメリカ国務長官マーシャルの唱えたもの。ヨーロッパ諸国が一体となって経済復興プランをたて，アメリカはそのプランに対する経済援助をおこなうという主旨。ソ連はこのプランは反共主義をとるものとして攻撃した。

** コミンテルンは1943年5月米・英とソ連との協調の必要上から解散されていた。

*** これは1946年3月，チャーチルがアメリカのフルトンでおこなった演説の中で，「ヨーロッパを横切って〈鉄のカーテン〉がおろされている」と述べたことに由来する。

9月パリに56か国代表が参集し，**世界労連**(WFTU)*が成立した。しかし，米ソの対立が鋭くなるころから，この組織にも分裂が生じ，米・英その他西欧諸国の労働組合は，別に**国際自由労連**(ICFTU)**を結成した。



ベルリン封鎖と大空輪

東・西ドイツの分立　戦後のドイツは，ヤルタ・ポツダム両会談によって，米・英・仏・ソの4国に分割占領され，ソ連占領地区内のベルリンも，特別地域として同じ4国に分割占領された。ところが，ドイツ統一の方法，賠償取り立てなどで意見が分かれ，西欧側は西ドイツ政府の創設を決意し，1948年6月，単独で通貨改革をおこなった。ソ連はこれに反対し，東西ドイツの交通を遮(しゃ)断して**ベルリン封鎖**をおこなう一方，東ドイツでも，通貨改革を実施した。その結果，政局は極度に緊張したが，翌年妥協がなって，ソ連はベルリン封鎖を解除した。しかし，ドイツの東西分裂は決定的となった。

このような急激な国際情勢の緊張を反映して，1949年4月アメリカを中心とする反ソ軍事同盟である**北大西洋条約機構**(NATO)***が発足した。

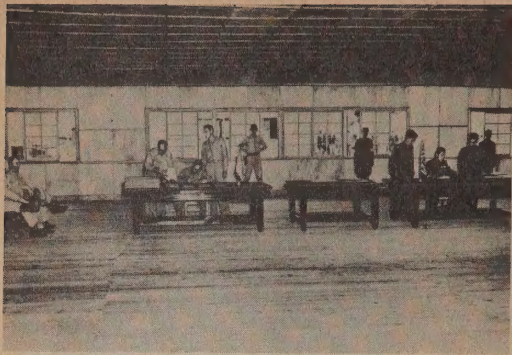
朝鮮戦争　朝鮮は戦争終結とともに日本から独立したが，北緯38度線を境に南北に分けられ，南鮮では**李承晩**(りしょうばん)(1875〜1965)がアメリカ軍政に協力し，北鮮ではソ連の援助をうけつつ，**金日成**(1912〜)が土地改革や重要産業の国有化に着手した。1948年8月，南鮮は李承晩を大統領とする**大韓(かん)民国**をたて，北鮮も金日成を首相とする**朝鮮民主主義人民共和国**をたて

---

* World Federation of Trade Unions の略。

** International Confederation of Free Trade Unions の略。西欧連合5か国のほかイタリア・デンマーク・ノルウェー・ポルトガル・アイスランド・カナダが参加した。

*** North Atlantic Treaty Organization の略。



板門店における休戦会談

た。そのため，朝鮮の統一をめぐる南北の対立はますます激しくなり，1950年6月，38度線を境にして南・北朝鮮はついに大規模な武力衝突をおこした。日本に駐屯するマッカーサー指揮下の米軍が，国連軍の主力として出動し北鮮軍と戦った。はじめ北鮮軍が優勢であったが，やがて国連軍は反撃に転じた。これに対し中華人民共和国(→p. 309)は義勇軍を組織して北鮮軍を援助した。

休戦の成立　マッカーサーは中国領土攻撃と原爆使用を主張したが，世界には平和運動が急速に高まり，翌年4月，マッカーサーは解任され，つづいて休戦会談がひらかれ，53年7月，ようやく休戦が成立した。

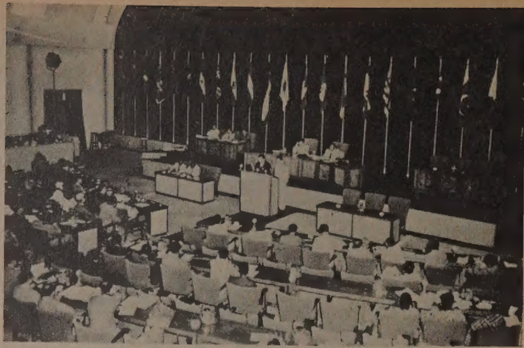
アジア反共体制の成立　この間アメリカは，アジアの緊張激化にそなえて，日本と安全保障条約を結ぶ直前に(→p. 310)，フィリピンと相互援助条約を，オーストラリア・ニュージーランドとは太平洋安全保障条約を結ぶなど，アジアにおける反共体制の強化に努めた。また朝鮮戦争が終わると，ただちに米韓安全保障条約を結び，韓国にも駐留軍がおかれることとなった。

平和協調の機運　アメリカでは，1953年，朝鮮戦争の平和的解決を約束した共和党のアイゼンハワー（在職1953～61）が大統領に就任し，ソ連でも，同年スターリンの死後首相となったマレンコフ（Malenkov 1902～）によって，資本主義国と社会主義国との平和共存が強く唱えられるようになった。このような機運の中で，1954年4月から朝鮮統一とインドシナ休戦の問題でジュネーブ会議*がひらかれ，インドシナの休戦協定が成立した。(→p. 312)

---

* 関係国として中華人民共和国とベトナム民主共和国の代表が招かれた。

また，翌1955年4月，インドネシアのバンドンで史上はじめての**アジア-アフリカ会議**が29か国の代表を集めてひらかれた。この会議は，植民地主義を否定し，平和共存を主張したもので，その意義は大きかった。



バンドン会議　はじめてのアジア・アフリカ人会議といわれたが，1965年にアルジェリア第2回会議が計画され，失敗に終わった。

西欧とソ連

朝鮮戦争の勃発いらい，アメリカを中心とする自由圏諸国は，軍事力の強化にのりだした。NATOは北大西洋軍の創設を決定し，さらに1954年10月，**パリ協定**によって西ドイツの再軍備と北大西洋条約機構への加入が認められ，アジア地域に関しては同年**東南アジア条約機構**（SEATO*）が，翌年バグダード条約機構**が結成された。西欧側のパリ協定に対して，ソ連は1955年5月，東欧諸国と**ワルシャワ条約**を結んで対抗したが，同月，米英仏の3国と協調し，**オーストリア国家条約**に調印して，その永世中立国化を認めた。7月にはジュネーブで**4国首脳会談**が戦後はじめてひらかれ，意見の一致はみなかったが，9月にはソ連は西ドイツと国交回復をおこない，ついで翌年10月，日本とも日ソ共同宣言に調印した。こうして，1950年代の中ごろには，西欧諸国の発言力がしだいに強まり，国際緊張はやや和らいだ。

核兵器の脅威

原子爆弾の恐るべき威力が知られると，その使用について，きびしい反省がおこり，1946年1月ロンドンにおける第1回国際連合総会は，満場一致で原子力委員会の設置を決議し

* South-Eastern Asia Treaty Organization の略。加盟国はアメリカ・イギリス・フランス・オーストラリア・ニュージーランド・タイ・フィリピン・パキスタン。

** 中東条約機構ともいう。加盟国はトルコ・イラク・パキスタン・イラン・イギリス。



核武装に抗議するデモ行進（スイス）

た。しかし，管理機関の設置に関するアメリカ案とソビエト案が鋭く対立して意見の一致をみず，1949年7月には委員会は事実上活動を停止した。ソ連も同年9月には原子爆弾を所有するにいたった。

やがて1952年11月，アメリカは**水素爆弾**の製造に成功し，ソ連も翌年その実験に成功した。遅れてイギリスもこれを所有するにいたり，3国の水爆実験がひきつづいておこなわれ，世界に不安と恐怖がひろがった。米・ソの原水爆競争には，フランス・中共も加わった。1957年ソ連は**大陸間弾道弾**(ICBM)を完成し，アメリカも核武装を積極的に進めだした。いまや戦争は全人類の破滅をもたらすのみであるという不安が，全世界にひろがり，核兵器使用禁止と全面軍縮を願う世論が大きくなった。

第2節　アジア・アフリカの解放と独立

1.　アジア諸国の発展

中華人民共和国の成立　第二次世界大戦後の世界で最もめざましい変化をみせたのは，アジア・アフリカの地域であった。とくに中国は，大戦中に不平等条約を廃棄し(1943)，戦後には満州・台湾を回復して，国連安保理事会の5大国の一つに数えられるようになった。しかし大戦末期から国民政府と中国共産党の武力衝突が表面化し，1947年，国・共は全面的な内戦に突入した。戦況は，はじめ国府側に有利であったが，官僚・資本家の腐敗がひどく，インフレが進行して，国民政府は民



周恩来・毛沢東・林彪(りんぴょう)（左から）

衆の支持を失った。中共はその支配地域（解放区）を中心に，農村の土地改革を進めてきたが，1948年にはいると，反撃に転じ，またたく間に中国本土を支配するにいたった。1949年10月には北京を首都とする**中華人民共和国**が成立し，**毛沢東**が主席となった。ソ連・インド・イギリスはこれを承認した。

一方，蔣介石(しょうかいせき)は台湾に移って**国民政府**を再建した。アメリカは朝鮮戦争勃発ののち，台湾の国民政府を積極的に援助するようになった。

1950年以後，中華人民共和国は，反共諸国との対立激化に応じて，国民の結束に努め，毛沢東の新民主主義路線にそって，共産党の強力な政治指導のもとに地主制度を根絶し，1953年からの第１次五か年計画で，社会主義の建設に本格的にのりだし，翌年新憲法を制定した。1958年からは**人民公社**の組織が進み，これと並行して重工業建設にも力を注いだ。その後，自然災害やソ連からの援助停止などにより，経済建設に各種の障害が生じ，国政の実権は劉少奇(りゅうしょうき)（1898〜）にうつった。一方，このころより，社会主義建設の方向をめぐって，共産党内部に深刻な意見対立が生まれ，他方ではソ連の政策にも強く反対するようになり，中ソの対立は1964年ごろ頂点に達した。一方，同年10月には核実験を成功させ，国際政治に対する発言力を強めた。

戦後の日本

日本は1945年９月降伏調印をおこなったのちは，連合国最高司令部の指令に従い，政治・社会の改革を進め，軍隊の解散・財閥の解体・農地改革などを実施して，民主主義国家の基盤をかためた。1946年11月主権在民と国民の基本的人権を定め，戦争放棄を宣言した**日本国憲法**が制定された。労働運動も活発になり，1947年に

は社会党内閣も生まれたが，米ソの対立が激しくなるころから，アメリカの占領政策が著しく反共的となり，国内の保守勢力も復活してきた。日本の経済は朝鮮戦争の勃発いらい，アメリカの強い援助をうけて生産力が急速に向上し，それとともに防衛力も強化された。

アメリカは日本との講和を急ぎ，1951年9月，**サンフランシスコ会議**をひらいて講和条約に調印し，同時に**日米安全保障条約**を結んで，ひきつづき日本に駐兵することとなった。

インド・パキスタンの独立　インドの独立運動は，第二次世界大戦中もつづけられた。戦後は独立運動がさらに激しく発展し，イギリス労働党内閣の首相アトリー(Attlee 1883～1967)も，インドの完全独立を許す宣言を発表した。ところが，この独立をめぐって国民会議派とムスリム連盟は対立し，武力抗争にまで発展した。結局，インドは二分され，1947年8月，イスラム国家をめざすパキスタンとヒンドゥー教徒の多い**インド連邦**が，それぞれ英連邦内の自治領の資格で独立した。

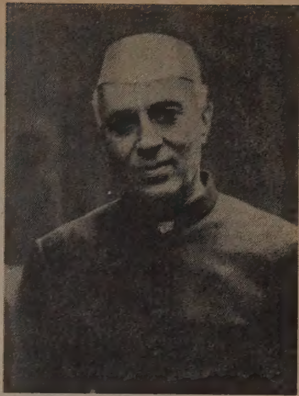
全インドで500をこえる藩王国は，やがて両国のどちらかに吸収された。しかし，カシミール地方の帰属をめぐって，両国の間に対立がおこり，紛争がつづいた*。翌年セイロンも自治領として独立した。

インド連邦では，独立後もヒンドゥー・イスラム両教徒の宗教的対立が，経済・社会問題とからんで深刻となり，両派の和解を訴えていたガンディーは，1948年1月，狂信的なヒンドゥー教徒に暗殺された。このほか大衆の貧困対策や言語の統一問題，カスト制度，旧藩王への年金支給問題など封建的遺制を廃止する問題が残され，豊かな農業地帯を失って食糧不足になやむこととなった。1951年いらい，数次の経済建設五か年計画を進め，農工業生産の増加をはかっている。

---

* カシミール地方は，人口の70％以上がイスラム教徒であるのに，ヒンドゥー教徒の藩王がインド連邦に帰属する協定を結んだことから，両国の間に紛争がおこった。とくに1965年には武力衝突がおこり，国連の調停で停戦したが，問題はなお解決されていない。

1950年1月からインド連邦は共和国となり，**ネール首相**の指導下に，国内経済の発展をはかり，外交上では，東西両陣営のいずれにも属さない中立外交を主張して，世界平和のために積極的な役割を果たした。



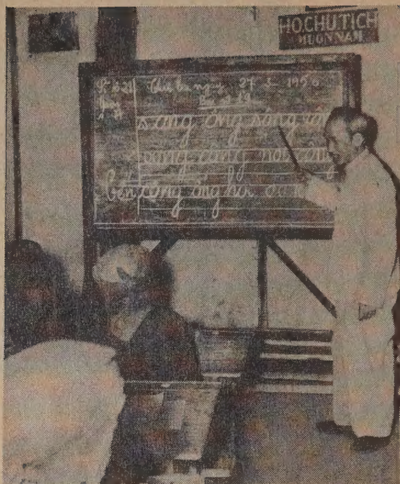
ネール

インドの国際的地位は，このようにして著しく高まった。しかし，相互に親善を深めていた中国とは，1959年いらいチベット問題をめぐって対立し，1962年には，両国国境で武力衝突さえおこった。1964年5月にはネールが死んで，シャストリ（Shastri 1904～66），ついでインディラ＝ガンディー（Indira Gandhi 1917～）があとをついだが，国民会議派の左右両翼への分裂など，国内の難問題は解決されていない。

一方，パキスタンは，国土が東西に分かれ，またほとんど工業をもたない国家となった。国内では地主階級の勢力が強く，東パキスタンでは1971年春自治独立をめざした反乱がおこった。現在も軍部独裁がつづいているが，経済建設も進みつつある。

東南アジア諸国　東南アジアの諸国は，大戦中日本軍が占領して従来の統治機構を破壊した。各地の民族主義者はこの新しい情勢に応じて，日本軍にたいする武装抵抗を開始し，またある場合には，日本の占領支配を独立のために利用した。戦後は，旧植民地支配国に対する抵抗がおこなわれ，旧支配国が戦前の形で統治することはできなくなった。

ビルマ・マレーシア　ビルマは，1937年インドから分離し，ある程度の自治を認められたが，日本軍に占領されると，一面これと協力しつつ，他面抗日運動を展開した。戦後イギリスはビルマ統治を復活したが，自由連盟は完全独立を要求し，1948年1月ビルマ共和国として独立し，英連邦からも離れた。また，マライも，1957年には国防・外交な



民衆に教えるホー＝チ＝ミン

どを除いて自治を許され，英連邦内のマラヤ連邦となり，1963年９月，シンガポール*・北ボルネオなどとともにマレーシアとなった。

インドシナ　インドシナに対するフランスの植民地政策は，フランス本位のもので，住民の生活習慣を全く無視したから，人口の70％を占めるベトナム人の反感は強かった。戦争中，日本の進出とフランスの後退に乗じて民族運動が発展し，共産主義者ホー＝チ＝ミンらは，ベトナム独立同盟（ベトミン）を組織して，日本軍に対する武装抵抗をつづけた。

ベトミンは日本の降伏とともに，**ベトナム民主共和国**を建設し，ホー＝チ＝ミンが大統領となった。フランスはベトナム民主共和国と武力衝突をおこし，バオ＝ダイ（Bao Dai, 1914～）を首班とする**ベトナム国**をつくらせ（1949），翌年からこれをフランス連合**内の独立国として認めた。しかし，この**インドシナ戦争**はベトミン軍の勝利に終わり，1954年ジュネーブで休戦協定が成立し，フランスはインドシナから退いた。いらい北緯17度線を境として，南北ベトナムが分立した。北ベトナムでは社会主義建設が進められ，南ベトナムでは1955年，共和政が宣言された。その後，南ベトナムではアメリカの援助の下に独裁政治がつづき，共産勢力との間に内戦が展開されている。(→p. 324)

* 華僑（かきょう）が人口の大半を占めているために，1965年マレーシアから分離した。
** 第４共和政においてフランス本国と旧植民地をつらねる国家組織をさすことば。第５共和政となり1959年いらいフランス共同体と改称した（→p. 319）。

インドネシア・フィリピン オランダの植民地として長く苦しんできた東インド諸島では，戦争中日本の援助で独立の準備を進めていた。スカルノらは太平洋戦争で日本軍が敗北したのち，インドネシア共和国の独立を宣言した。オランダは武力抑圧を試みたが，アメリカの圧力もあって譲歩し，1949年，独立を認めた。翌年８月インドネシア共和国が成立して，スカルノが大統領に選ばれ，1955年の第１回アジア・アフリカ会議をバンドンに開催するなど，積極的な外交方針をとった。1965年９月，軍部内の反共派が実権をにぎって，容共的なスカルノを失脚させ，スハルト(Suharto 1921〜)将軍が軍部独裁政治を開始して，中国とも断交した。

フィリピンは，1934年の独立法により，10年後の完全独立をアメリカに約束させたが，日本軍の占領のために時期が遅れ，1946年７月正式に共和国として発足した。アメリカは反政府運動の鎮圧を援助し，1947年３月軍事協定を結び，多数の基地を設けた。

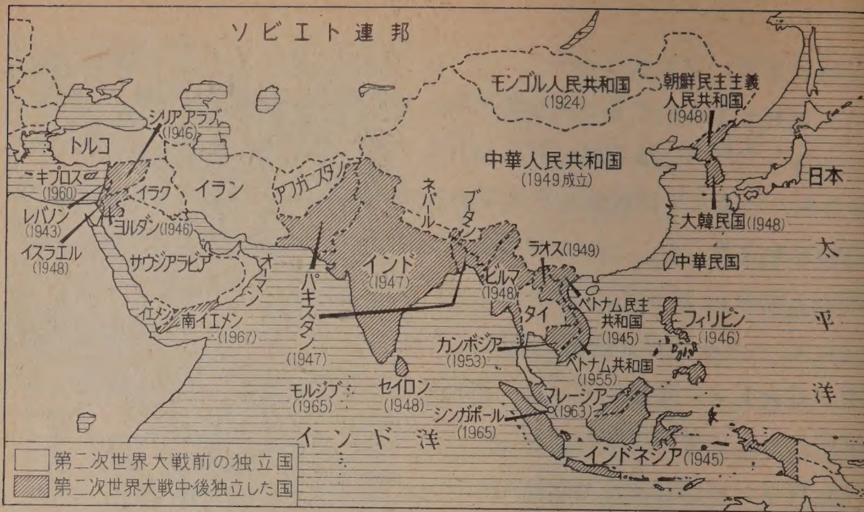
2. アラブ・アフリカの解放

戦後の西アジア 第二次大戦は西アジア諸国の民族運動をますます発展させた。すでに大戦中，シリア・レバノンはフランスの支配から独立した。*

一方，イギリスの委任統治領パレスチナでは，第一次大戦後ユダヤ人の入国者が激増して，原住のアラブ人と衝突をくりかえしていたが，第二次大戦後，国連が分割案を決定した。しかし，アラブ人・ユダヤ人はともにこれを不満とし，1948年武力衝突がおこり，**パレスチナ戦争**が勃発した。同年イギリスは，統治をうちきって撤兵し，ユダヤ人は**イスラエル共和国**を建設した。** イスラエル側の軍事力は優勢で，翌年にはアラブ

* フランスが完全独立を認めたのは1945年12月である。なお，シリアは1946年に正式に独立した。

** これを推進したのは，故国パレスチナにユダヤ人の国家をつくろうとするシオニズム運動で，この運動は19世紀末におこった。



第二次世界大戦後のアジア

諸国が敗北し，イスラエルの領土は拡大した。イスラエルにはひきつづいてユダヤ人が流入して，工業建設や開拓が進んだ。1956年，1967年にも，イスラエルとアラブ諸国との間に**中東戦争**がおこった。イスラエルが戦争中の占領地から撤兵しないために，いまも紛争が続いており，とくに故郷を追われたパレスチナ難民100余万人は，ゲリラ隊を組織して自分らの権利を主張している。

第二次大戦中，連合国の重要な戦略拠点であったイランでは，戦争中に独裁政治が倒されて民主化が始まったが，1951年モサデグ(Mossadegh 1881～1967)が政権をにぎり，石油国有化法をつくってイギリス系石油会社を接収した。しかし結果はイラン経済を必ずしも好転させず，親米派が1953年クーデタをおこして，親西欧的な政策をとるようになった。

トルコは大戦末期に連合国に加わった。戦争終了とともに人民共和党の独裁が廃止され，新たに結成された民主党が急速に勢力を増し，戦後は政権を独占し，親米政策を進め，大衆運動をきびしく圧迫した。

エジプトの発展 エジプトでは，戦後ただちに英軍の完全撤退を要求する民族運動がひろがったが，国王や宮廷派はイギリスに妥協的であった。パレスチナ戦争に敗れてからは，腐敗した上層

階級に対する国民の不満が爆発し，ついに1952年ナセル（Nasser 1918～1970）らを中心とする「自由将校団」は革命をおこして国王を追放した。さらに農地改革をおこなって農村の民主化に努め，翌1953年王政を廃して共和政を樹立した。ナセルはアラブ諸民族の支持を得て，反帝国主義政策をとりつつ，アスワン－ハイダム（1971年完成）を建設するなど国力の伸張に向かった。



アルジェリアの独立　1962年7月，独立をかちとった民衆は，街頭にあふれて喜びを分ちあった。

アラブ諸国の解放運動は，1950年代の中ごろから激しくなった。とくにエジプトの反帝国主義と積極的中立の態度が激しかったので，これに反感をもったアメリカ・イギリスは，1956年エジプトへの経済援助を中止した。ナセルはこれに対してスエズ**運河国有化**を実行した。10月になるとイスラエル軍はエジプト攻撃をおこない，イギリス・フランスもスエズに出兵した。国連総会は，3国の撤兵を決議し，3国は国際的非難に屈して撤兵した。

1958年2月エジプト・シリアは合併して**アラブ連合共和国**を結成し*，5月には，レバノンで親西欧派の政府に対する暴動がおこり，7月イラクは軍部のクーデタによって反西欧的な共和政国家となった。これによってバグダード条約機構は崩壊し，**中央条約機構**に代わった。

北アフリカの民族運動

アフリカ諸地域でも民族運動が急速に高まった。北アフリカではチュニジア・アルジェリア・モロッコの民族独立運動が，1950年代の後半になって激しくなり，1956年にはチュニジア・モロッコが独立した。しかしなおフランス軍は駐屯したから，

＊　その後両国の関係が破れ，1961年にシリアはアラブ連合より分離したが，名称はそのまま残っている。



アフリカの独立

問題の解決は長びいた。アルジェリアの解放運動は激烈であり，民族解放戦線(FLN)は，武力抗争を展開してフランス政府を混乱させた。この結果，第四共和政は倒れて第五共和政が生まれ，(→p. 319)ド＝ゴール大統領は，1962年アルジェリアの独立を許した。いらい農地改革がおこなわれて，アルジェリア人の地位は向上し，現在では中立主義をとるアルジェリア民主人民共和国となっている。

アフリカ諸国の独立　アフリカでは以上のほかに，1956年スーダンが，翌年には黒人のガーナ共和国が独立すると，独立の機運が高まり，1960年にはカメルーンなど17か国が独立し，その後も独立国は増加した。これらの国々は国連加盟を認められたから，国連におけるアジア・アフリカ諸国の数と影響力は著しく増大した。

これらのアフリカ新興国は豊かな資源をもっているが，植民地支配のもとで，政治的・経済的発展が均衡を欠いていたうえ，独立の形式や旧支配国との関係もおのおの異なっている。また国内には部族が割拠し，国境も植民地分割の境界線がそのままうけつがれており，また外国勢力の干渉もつづいて，その前途は容易でない*。しかし，一方ではアフリカ諸民族の間には連帯意識も高まり，1963年にはエチオピアのアジスアベバに独立国首脳が集まり「アフリカ統一憲章」を採択して，アフリカ統一

＊ 1960年6月ベルギーから独立したコンゴにおこった内紛が，ついに国連軍の出兵をまねき，国際問題にまで発展した。

への動きを一歩進めた。この中にあって南アフリカ共和国・ローデシア共和国は極端な人種差別政策（アパルトヘイト）をとり，国内の黒人に対する圧迫を強め，世界の批判をまねいている。

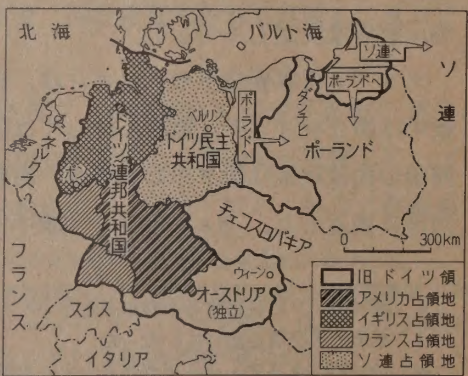
第3節　戦後の各国内政

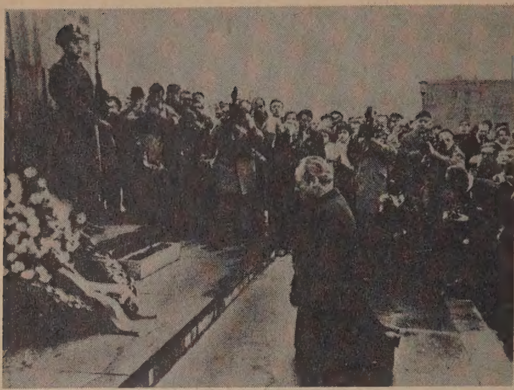
1.　戦後の西欧諸国

東西ドイツの発展　東西ドイツの分立が確定したのち，西ドイツは1949年5月に基本法を制定して，9月**ドイツ連邦共和国**を樹立し，キリスト教民主同盟が第1党となって，アデナウアー（Adenauer 1876～1967）政府が生まれ，ボンを首都とした。これに対して東ドイツでも，10月，**ドイツ民主共和国**が樹立され，社会主義統一党のグローテヴォール（Grotewohl 1894～1964）が首相となって，社会主義建設のための計画経済に着手した。

以後西ドイツはアデナウアー首相のもとに，アメリカの経済援助をうけて生産を復興し，経済は繁栄をつづけ，やがて欧州第一の生産力を誇るほどになった。国民の生活水準と国力の向上もめざましく，欧州経済共同体(EEC)(→p. 326)の中心となり，世界政治のうえでも，再び指導的な地位に立った。1963年秋にアデナウアーが退陣したあと，社会民主党の勢力が増大し，1966年12月にはキリスト教民主同盟と連立内閣をつくり，1969年10月には社会民主党首ブラント（Brandt 1913～）が，自由民主党と連立内閣をつくった。元ナチス系の極右派も活動しているがふるわない。

ドイツ分割





1970年12月 ワルソーゲットーのユダヤ人犠牲者の墓碑にひざまずくブラント首相。

東ドイツでは，戦後ただちに農地改革がおこなわれたが，ソ連の占領下に社会主義統一党の独裁支配がつづき，1953年6月ベルリンに暴動がおこった。その後も独裁政治にたいする人民の不満は解消していないが*，社会主義社会の建設が進められ，国民生活の水準は向上し，いまや共産圏第2位の実力をもつにいたった。

イタリアと南欧　イタリアはハンガリー・ルーマニア・ブルガリア・フィンランドの旧枢軸4国とともに，1947年2月講和条約に調印し，植民地を放棄し，領土の一部をユーゴスラビアなどに譲り，1948年1月からは共和国憲法が施行された。戦争中ファシスト打倒のために協力した共産党・社会党・キリスト教民主党は，キリスト教民主党のもとに連立内閣をつくった。しかし，アメリカの援助をうける同国政府は，まもなく反共政策に転じた。経済はやがて復興し，繁栄期にはいったが，南部の開発問題は残されており，労働運動もさかんなので，政情は安定していない。

フランコ将軍独裁下のスペインは，日独伊防共協定に参加したが，大戦中は中立を守った。戦後しばらくは国際連合から除外されていたが**，同国の独裁政権は改まらないまま，冷戦が進むにつれて，米・英・仏は同国に接近した。ポルトガルも大戦中は中立を宣言したが，戦後はアメ

---

* 西ベルリンに脱出するものが絶えないので，1961年8月に東西ベルリンの境界に壁を築いて交通を断つにいたった。

** 1955年イタリア・ポルトガルとともに加盟が認められた。

リカの援助を得て独裁政治をつづけている。*

フランス　第二次世界大戦中の激しいレジスタンスを経験したフランスでは，戦後共産党の勢力が急速に伸び，ド＝ゴールは，共産党とともに臨時政府を組織した。しかし彼はまもなく引退し，政局は安定しなかった。



ド＝ゴール

政情の不安　1946年10月新憲法を制定して出発した第四共和政の政治は，きわめて不安定であった。とくに植民地の完全な独立を認めなかったために，インドシナ・チュニジア・アルジェリアの反抗と反乱に悩まされた。(→p. 315)

アルジェリア人民のはげしい解放運動によって窮地に立ったフランス軍は，ド＝ゴールの登場を要求して1958年反乱をおこし，彼を政権につけた。ただちに大統領の権限を強めた新憲法がつくられ，9月国民投票によって承認され，**第五共和政**が発足した。ド＝ゴールは初代大統領となり，1962年アルジェリアの独立を許した。(→p. 316)なお海外植民地は広い自主権を得て，本国とともにフランス共同体を構成することとなった。** また，ドイツとともにEECの中心勢力となり，米ソの間に立って，ヨーロッパの自主権を主張し，強大なフランスをめざす外交政策を展開した。しかし，1968年5月，教育制度の実状に不満をもつ学生の反抗によって，内政上の矛盾が爆発し，1969年4月，国民投票に敗れて退陣し，ポンピドー（Pompidou 1911～）が大統領になった。

イギリス　イギリスでは1945年7月の総選挙で，重要産業の国有化と社会保障制度の確立を公約した労働党が圧勝して，**アトリー内閣**が成立した。政府は公約に従い，石炭・ガス・電力・鉄鋼業な

---

* この国でも1932年から1968年までサラザール首相の独裁政治がつづいた。

** この結果，アフリカのフランス植民地のうち，ギニアは即時独立の道を選び，58年10月独立したが，他の植民地（モロッコ・チュニジアを除く）はフランス共同体加入の道を選び，1960年，旧仏領アフリカに14の共和国が成立した。

どの基幹産業を国有化し，「ゆりかごから墓場まで」の大規模な社会保障制度を充実させた。また，政府は生産の増強・輸出の振興に努めると同時に，国民には耐乏生活を求めた。しかし，国際政局が緊張するにつれて軍事費が増加し，労働党内閣への不満が高まった。その結果，1951年には保守党のチャーチル内閣が再び成立するにいたった。

イギリス連邦の組織も変化して，「王冠に対する忠誠」は「自由な連合の象徴」に代わり，インド・パキスタン・セイロン・ガーナなど新しいアジア・アフリカの独立共和国を含むゆるやかな結合となった。しかし，ビルマなどはイギリスから離れ，また積極的な中立を主張する連邦内の民族運動もしだいに激しくなった。

その後 EEC の発展とアメリカの繁栄にはさまれて経済成長が思わしくなく，外交交渉でもスエズ事件(→p. 315)，EEC 加盟交渉など失敗を重ねた。1964年10月の選挙では労働党が勝ってウイルソン(Harold Wilson)内閣が成立した。1967年にはポンド切下げをおこなったが，もはや全世界にわたる勢力範囲を維持するだけの力がなく，1970年6月の総選挙では保守党が勝利してヒース(Heath 1916~)内閣ができ，1971年6月EC加盟がきまった。

アメリカ合衆国

戦後の世界で最強の資本主義国家となったアメリカ合衆国は，工業生産力において戦前の2倍となり，世界の政治・経済・外交において主導権をにぎるにいたった。戦争末期に急死したルーズヴェルトに代わってトルーマン(Truman 在職1945~53)が立ったが，大資本家の政界への発言力が強くなり，ソ連との対立が深まるにつれて，革新政策をつづけることは困難になった。1947年6月には労働者の団体交渉権その他を制限するタフト-ハートレー法が制定された。

また，戦後のヨーロッパの経済復興を援助し共産主義の発展をはばむ目的をもって，反ソ・反共の政策が強化された。ラテンアメリカ諸国とも47年9月リオ条約を結び，共産主義に対する共同防衛が約束され，翌年には，アメリカ州機構の成立をみた。トルーマンは1950年6月対外援

助法を制定して後進国の開発援助をはかったが，これも反共主義に立脚した政策であった。

1952年秋の大統領選挙には，共和党のアイゼンハワーが当選し，1956年には再選された。彼のもとで，国内には反共主義が高まり，外交上では国務長官ダレス(Dulles, 1888～1959)の対ソ強硬政策がとられた。1960年秋の選挙では，民主党のケネディ(John Kennedy, 在職1961～63)が勝利し，彼は黒人の差別待遇改善，平和共存政策への接近などに努めたが，1963年11月暗殺され，副大統領ジョンソン(Johnson, 在職1963～69)があとをついだ。1968年秋の選挙では共和党のニクソン(Nixon, 1913～)が勝ち，1969年いらい政権をにぎっている。



カストロ

中南米　外国資本の勢力が強い中南米諸国では，軍部や左翼勢力によるクーデタや内乱がつづき，政情は安定していない。その中では，メキシコが比較的経済建設が進み，国内の民主化も進んでいる。1959年初めキューバではカストロ(Castro, 1927～)がバティスタ(Batista, 1901～)独裁政権を倒して社会主義政権をたて，農地改革をおこない，外国会社を接収した。カストロは国内改造を進める一方，武装ゲリラ戦術によるラテンアメリカの民族解放闘争の発展をはかっている。1970年チリにも社会党政権が生まれ，外国企業の国有化を進めている。

2.　戦後の東欧諸国

ソ連邦　ソ連は第二次大戦において莫(ばく)大な人的・物的損害をこうむったが，戦争の終結に果たした役割はアメリカと並んで最も大きく，領土を西方に拡大し，国際的地位は著しく向上した。

1946年より第4次五か年計画にはいり，1951年の完成年度には工業

生産高は1940年の173%に達した。つづいて1951年からは第5次五か年計画にはいった。

スターリンは独裁体制をつづけ，アメリカとの協調が困難になった1947年ごろから，東欧や中共との結束をかためつつ，強硬な反米政策を展開した。しかし，1953年3月スターリンが急死したのち，資本主義諸国との平和共存が唱えられるようになった。

1956年2月，ソ連邦共産党第20回大会において，共産党第1書記のフルシチョフ（Khrushchov 1894〜）は，独裁政治の誤りをおかしたとしてスターリンを批判するとともに，ソ連の積極的な平和共存政策と，世界諸地域の社会主義の多様な発展コースを認めた。

フルシチョフはさらに首相となり，地方行政や経済の民主化を進め，アメリカとの協調に努めたが，中国共産党との対立を深め，農業問題でも成績をあげず，1964年10月突然解任され，ブレジネフ（Breznev 1906〜）・コスイギン（Kosygin 1904〜）らが新しい指導者となった。経済の民主化と平和共存の路線は受けついでいるが，中国との対立はさらに激化し，共産主義陣営の思想と政治・経済上の結束をかためるのに苦慮している。内政上では各企業の創意と利潤を認める経済政策がとられており，各地方の開発と国民生活の向上とが進んでいるが，学問・芸術と政治上の自由はきびしく制限されている。

東ヨーロッパ　ポーランド・ルーマニア・ブルガリア・チェコスロバキア・ハンガリー・アルバニアなどは，いずれもソ連軍の援助を背景として，戦後ただちに徹底した農地改革をおこない，大地主制を一掃した。政治組織においても人民民主主義という勤労者独裁制度をたて，共産党ないし同系統の政党が事実上政権を独占している。

これらの国では，農業国から重工業国家への改造，農業の集団化などの社会主義建設が，ソ連の干渉を受けつつ強行された。これに対して，チトー（Tito 1892〜）を指導者とするユーゴスラビア共産主義者同盟は，独自の経済建設をおこなおうとしてソ連と衝突した。そのため経済封鎖・コミンフォ

ルム除名などの圧迫を加えられたから，ユーゴはソ連依存の外交をすてて，積極的中立主義をとり，企業の自治管理を中心とするユーゴ社会主義の建設にのりだした。しかし，他の諸国では，ソ連のスターリン体制のもとに強い統制を受け，表面上は動揺がみられなかった。

しかし，スターリン批判は東欧諸国に大きな衝撃を与えた。1956年６月ポーランドのポズナニ市に暴動がおこり，同国政府・共産党の民族主義的改造がおこなわれ，これに刺激されて10月，ハンガリーのブダペストに暴動がおこり，ソ連軍が出動してハンガリー全土を制圧した。この事件後，ハンガリーには民族主義的なカダル（Kádár, 1912～）政権ができて国内の建設に努めた。こののち東欧の共産圏諸国はソ連を盟主とするコメコン*（経済相互援助会議）体制の中で，相互依存の社会主義経済の建設を進めた。しかし後進国として，政治・社会上のきびしい統制を必要とするアルバニアは，ソ連を批判し，中国に接近した。またルーマニアも，ソ連の大国主義に反発し，自主的な外交・経済政策をとりだした。このような動きの中で，東欧の工業国チェコスロバキアでも，自由競争をとりいれた計画経済と政治活動の自由などの新しい政策が採用され，1968年には自由化が進んだ。ソ連はこの動きが東欧共産圏諸国の足並を乱すものとして，チェコに対して，８月軍事介入をおこない，ソ連型の社会主義を強要した。また個人農業を主体としていたポーランドでは，社会主義経済のゆがみが大きかったが，1970年12月，労働者は物価の値上げに反抗して暴動をおこし，同国首脳部を退陣させて，官僚主義に抵抗した。このように，東欧諸国には，社会主義経済の建設方式をめぐるソ連との対立や，少数民族・領土問題など，根本的にはまだ解決されないし，共産圏諸国の実力が増大するにつれて，ソ連の国際的な指導力は低下しつつある。

---

* Council for Mutual Economic Assistance（俗称 Communist Economy）の略。1949年東ヨーロッパ６か国によって社会主義陣営内の経済協力を目的として設立され，1955年いらい，相互の国際分業を促進している。

第4節　現代世界の動向

軍縮問題

第二次大戦後，国際連合が中心になって軍備縮小の問題に取りくんできたが，核兵器の廃棄が実現するどころか，核兵器保有国が増加した。このような人類の危機を前にして，核戦争防止を望む世界の世論は高まり，ようやく1963年8月には**部分的核実験停止条約**が結ばれた。しかし，それまでの軍縮交渉が主に米・ソ二大国によって進められてきたことに対する反発も強くなり，核兵器保有国となった中華人民共和国やフランスは，この条約に参加しなかった。その後も軍縮交渉は進められたが，核兵器の拡散防止条約をめぐっては，非核保有国側からの不満も生まれている。

アジアの情勢

ベトナムにおいては，南ベトナム解放民族戦線の勢力が強まったが，アメリカは直接に戦闘に参加して，解放戦線を援助している北ベトナムの爆撃を開始した。その後，アメリカの軍事行動が拡大されたが，北ベトナムは中国・ソ連の援助を受け，解放戦線と呼応して強力に反撃し，1969年には南ベトナム臨時革命政府が成立した。**ラオス**においても保守派と共産党の内戦がつづいており，1970年3月には，**カンボジア**にクーデターがおこって親米派が政権をにぎり，内乱が同国内にもひろまった。南ベトナム政府軍はアメリカの支援をうけて，カンボジア，ラオスに出撃した。

中国は，ひきつづいて政治・経済の建設に努め，また，平和共存を主張するソ連との間に激しい論争を展開したが，1966年夏，官僚派に対する攻撃が共産党内部からおこり，**文化大革命**とよばれる全国的抗争に発展した。毛沢東・林彪 1908～ らは劉少奇ら党主流の指導方針を攻撃し，政府や軍部の多数の幹部を失脚させ，1968年にはほぼ大勢を決した。外交上では，しばらく強硬外交政策がとられて，中国に対する各国の関係を悪化させ

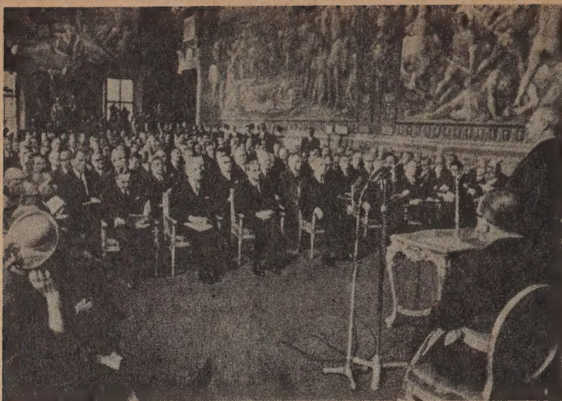
たが，1969年いらい周恩来首相を中心とする柔軟な外交政策が復活し，1971年10月には，多数の国々の支持をえて国際連合に復帰した。朝鮮では，1963年大韓民国の大統領となった朴正熙（ぼくせいき）（1917～）は，反対派を弾圧しつつ，アメリカなどの援助を受けて経済建設を進め，また停滞していた日韓交渉を進めて，1965年6月，東京で日韓条約を調印し，同年末，国交を回復した。しかし，このため北の朝鮮民主主義人民共和国との関係はさらに悪化し，国境地帯における両国の紛争が続発している。



ラオス国境に進撃するアメリカ兵　1971年2月出兵し，1か月あまりで撤退した。

アメリカの苦悩

全世界が大戦の痛手から回復するにつれて，アメリカの覇権は各方面で動揺しはじめ，日本や西欧諸国との間に経済的な競争関係も生まれつつある。アメリカの内部においても社会の矛盾がしだいに深まった。ベトナム・カンボジア・ラオス戦争への介入によって，国防費が増大し，国民生活への影響が深刻になるにともない，国内には反戦・平和運動が急速に広がりだした。それとともに，**黒人問題**も1960年代後半から内政上の最大問題となってきた。1964年公民権法案が成立し，黒人の投票権保護や，公共施設の黒人への開放などが約束されたが，社会生活においてはいぜんとして不平等な扱いを受けている。黒人は，南部はもちろん北・西部においてもしばしば暴動をおこし，穏健派の指導者キング（King）（1929～1968）が暗殺された後は，黒人団体の指導方針もより過激な方向をとってきている。また600万人に近い国内ユダヤ人もシオニズムの立場から内治外交政策に干渉しており，有色人種もまた白人優先主義に反対するなど，アングロ－サクソン民族とプロテスタントを中心とするアメリカ民主主義は大きな試練を受けている。



ＥＥＣ創立10周年記念 1967年，ローマで10周年の記念集会がもたれた。

西ヨーロッパの変化 西ヨーロッパではマーシャル－プランいらい諸国間の経済協力が進み，とくにヨーロッパ石炭鉄鋼共同体の成立いらい，超国家経済組織への歩みが進み，1958年1月には，欧州経済共同体 (EEC)(→p. 317) が発足した。しかし EEC 内部にアメリカの大企業が進出して，各国の小企業を圧迫するという問題もおこった。西ヨーロッパ諸国の実力が急速に向上し，もはや共産圏からの武力攻撃を恐れる必要がなくなったころから，NATO 諸国とコメコン諸国との間に各種の交流が増大しはじめた。**西ドイツ**ではこれまでドイツ民主共和国の否認，オーデル・ナイセ線(Oder-Neiße-Line)不承認という強硬な反共外交政策がとられてきたが，ブラント首相はこれをあらためて，1970年8月ソ連と武力不行使・欧州の現国境承認の条約を，また，12月ポーランドと国交正常化の条約を結び，ドイツ民主共和国とも会談を重ねるなど，東西の和解をめざす外交を展開している。

第5節　20世紀の文化

1.　科学とエネルギー

自然科学の発達 20世紀にはいってからも自然科学の発達はまことにめざましいものがあり，特に実際面への応用が著しく進み，人類は種々様々な形で科学の恩恵を受け，日常生活を豊かなものにした。

その傾向は20世紀後半になっていっそう顕著になり，**航空機の発達**は，第二次大戦後にはついに音速を越えるジェット機を生んで世界の距離を著しく縮め，またラジオ・テレビの普及は，マス－コミュニケーションの方法に画期的な即時性を実現して，教養・娯楽のみでなく政治的宣伝などの面にも大きな影響を与えた。しかし，一方において，人間の精神面の進歩は自然科学の発達にともなっていない感があり，科学の発達がめざましいだけに，それが悪用された場合，人類に不幸をもたらす危険性もいっそう強まっている。また，自然科学の進歩と結びついた工業の発展により，自然環境の破壊や地球全体にわたる大気や海水の汚染などが，もはや座視できないほどとなり，全世界的な**公害対策**が必要になってきている。

電気と石油

20世紀は「電気の世紀」ともいわれる。特に20世紀後半のあらゆる面にわたる電気エネルギーの利用は目をみはらせるものがある。第二次大戦中には電波探知機の性能が戦争の勝敗に決定的な影響を与えたが，戦後は，電波によって天体や海底・地殻を探るなど天文学や地球物理学の進歩に大きく貢献した。電子顕微鏡の精密化は物質世界の秘密をつぎつぎにときあかし，特に生物学においては生化学の発展，分子生物学の開拓をうながし，ウィルスや核酸の構造も解明され，1969年には活性アミノ酸の合成に成功した[*]。またトランジスタを始め半導体応用の高度な発達は**電子工学**の発達を促進し，電子計算機（コンピューター）は各種の分野に広く応用されて事務と研究上の能率を飛躍的に高め，サイバネティックス（人工頭脳学）も一段と進んで，オートメーションの時代にはいった。

このような動きに伴なって電力への需要も急速に高まったが，これを供給する発電所は，従来の水力発電所に代わって石油を燃料とする火力発電所の比率が増大しつつある。そして石油は，電力供給の源としてば

---

* 生物学では，このほかに，生命の起源についての探求も盛んである。

かりでなく，第二次大戦後一段と発達・普及した航空機・自動車の燃料やその他のエネルギー源として，飛躍的に需要が増大し，今や完全に石炭にとって代わった。その上さらに，石油を原料とする石油化学は，合成繊維・合成樹脂などの面でも急速に進歩し，日常生活のさまざまの面にまで浸透するとともに，従来の産業構成や工業立地条件をも大きく変えた。20世紀後半の現代は，ある意味では電気と石油の時代ともよべるであろう。

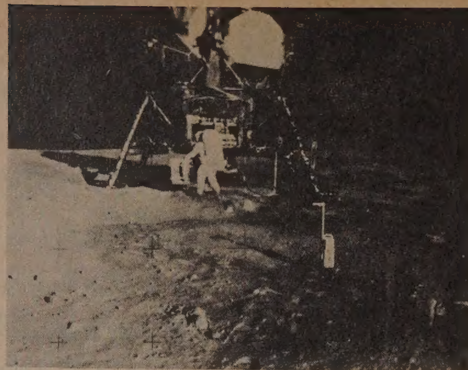
医学・薬学　この方面では特に抗生物質の開発が著しく，1929年イギリスのフレミング(Fleming 1881〜1955)がペニシリンを発見したのにつづいて，1943年アメリカのワックスマン(Waksman 1888〜)がストレプトマイシンをつくり，その後もつぎつぎに研究が進められた。これにより結核などの治療法は画期的に進歩し，人類の平均寿命を延ばしたが，ガンの効果的治療法はなお発見されておらず，これが現在の医学界最大の課題になっている。外科面での進歩もめざましく，1967年いらい心臓移植の試みもおこなわれている。

原子力の解放と利用　第三のエネルギー源として注目されるものに原子力がある。これはアインシュタイン(Einstein 1879〜1955)(ドイツ生まれ)の相対性理論，プランク(Planck 1858〜1947)(ドイツ)・ラザフォード(Rutherford 1871〜1937)(イギリス)・ボーア(Bohr 1885〜1962)(デンマーク)・ハイゼンベルク(Heisenberg 1901〜)(ドイツ)・湯川秀樹(1907〜)らの量子力学・原子物理学によって究明された原子核エネルギーの解放で，最初の実用化は原子爆弾として実現され，1945年8月広島と長崎に投下されて一瞬のうちに数十万の人命を奪った。戦後も，兵器としての利用は拡大される一方で，1958年から米英ソ3国の間で核実験停止会議がつづけられ，1963年には**部分的核実験停止条約**も調印されたが，これを批准しない国も多く，必ずしも実効が大きいとはいえないため，人々の不安はいぜんとして消えていない。

(→p. 308)
(→p. 324)



アインシュタイン



アポロ11号月の表面に着陸（1969年7月21日）

しかし，それと並んで，発電・動力・医療などの面における原子力の平和利用も研究が進められており，1955年の原子力平和利用国際会議につづいて，1957年には国連に**国際原子力機関**が設けられ，平和利用の国際的な協力と管理の体制が一応でき上がった。そして原子力は電気・石油と並ぶエネルギー源として，その将来が期待されている。

宇宙空間への進出

今世紀には，人類の長年の夢であった宇宙への進出も始まった。ソ連は1957年10月史上最初の**人工衛星**打ち上げに成功し，アメリカもこれに続いたが，61年4月ソ連はさらに一歩を進めて人間衛星を打ち上げた。このような段階をへて，1969年7月アメリカのアポロ11号は，ついに月表面に人類を送りこむことに成功した。また，月以外の天体についても，1970年12月ソ連の金星7号が金星に着陸して，温度・気圧などについて報告を送ってきた。

これらは，ロケット工学その他，科学・技術のあらゆる分野での進歩を集約して達成された輝かしい記録であり，1千以上にも達した人工衛星は，通信・気象観測・航海などの実際面においても大きく貢献している。しかし，この場合も，人工衛星が高度に発達すればするほど，将来軍事目的に悪用される危険性もまた大きいことを忘れてはならない。

2. 思想と学問

現代思想

20世紀の思想界は，アメリカのデューイ（Dewey 1859～1952）により大成されたプラグマティズムのような，実用的価値を重んじる現実的な考え方をひろめる一方，二度の世界大戦という悲惨な経験から，現代文明に対する深刻な反省や危機感を生み出した。それは，第一



ケインズ

次大戦後，フランスのヴァレリー（Valéry 1871～1945）らの文明批評などに表われるとともに，人間の認識の限界を説くスイス人バルト（Barth 1886～1968）・ブルンナー（Brunner 1889～）らの**危機神学**や，絶望と不安，虚無と不条理の世界に生きる人間のあり方を，個人性の確保や内面の自由においてとらえようとするドイツの哲学者ハイデッガー（Heidegger 1889～）・ヤスパース（Jaspers 1883～1969）らの**実存主義**の隆盛となって示された。他方では，現代の文明社会の病根を資本主義制度に求め，その打倒と共産主義社会の実現に希望を見いだそうとするコミュニズムもいっそう盛んとなった。

第二次大戦後，こうした思想界の動きはさらに深刻になり，フランスのサルトル（Sartre 1905～）は実存主義を文学にも適用した。しかし，世界平和への脅威や大衆社会状況の進展の中で，物質文明のめまぐるしい発展にもかかわらず，学問・道徳の体系には大きな変化があらわれていないと主張する人々は，従来の革命思想を含めたすべての既成の権威と価値観を否定しようとする運動へと走りつつある。現在の思想界の急務は，こうした混沌とした状況の本質をみつめ，その中から解決への道をさがし出すことにあるといえよう。

人文・社会科学　この分野においては，多少の例外を除いて，学問としての体系化が確立されたのは19世紀のことであるが，この分野の学問は，20世紀にはいると，理論的にも実証的にもますます深められ広められていった。

ドイツのウェーバー（Weber 1864～1920）は，学問の諸分野に新鮮で深く鋭い分析を加えて社会学・歴史学などに大きな影響を与え，オーストリアの精神分析学者フロイト（Freud 1856～1939）は，無意識的な性欲と意識的な自我との葛藤（かっとう）が心理現象のもとであるとして深層心理学をひらき，心理学だけでなく他の学問や芸術にも広く影響を及ぼした。経済学においては，19世紀末からヨーロッパにおこった近代経済学が，消費財に対して消費者の感じる望ましさ（限界

効用）や需要・供給の関係を中心に経済現象を説明したのに対し，イギリスのケインズ(Keynes 1883～1946)は，世界恐慌後の情勢に対応して，政府の力による需要創出の必要を説き，自由放任主義に終止符を打った。また歴史学においても，政治史と精神史の統合を試みたドイツのマイネッケ(Meinecke 1862～1954)，世界各地域の歴史を含む壮大な文明史を構成したイギリスのトインビー(Toynbee 1889～)らが出た。

20世紀後半の現在，学問は一方においてますます細分化され深められて，これまでの定見や定説が再検討をよぎなくされるとともに，他方では，もはや従来の学問体系では間に合わない問題や研究対象も数多く現われ，隣接諸科学との協力や諸分野の総合という傾向が強くなっている。

3. 文学・芸術

20世紀文学

文学や芸術も今世紀の不安や危機感を鋭く反映した。すでに第一次大戦前から，フランスのロマン=ローラン(Romain Rolland 1866～1944)，アンドレ=ジード(André Gide 1869～1951)，ドイツのトマス=マン(Thomas Mann 1875～1955)らは転換期の市民社会と人間像を描いていたが，戦後には，現実を客観的・記録的に描写するレマルク(Remarque 1898～1970)（ドイツ）らの**新即物主義**がおこる一方，19世紀的なリアリズムに対する不信が生まれ，より主観的なリアリズムや機械文明への挑戦を通じて人間存在を探求しようとした。またアメリカではヘミングウェー(Hemingway 1899～1961)が，戦後の失われた世代を描いて名声をえた。

第二次大戦中のフランスではアラゴン(Aragon 1897～)らの**レジスタンス文学**が生まれたが，それをへて，大戦後は，危機感や人間の疎外感がいっそう強まる中で，文学の責任が真剣に問われ，文学と人間のあり方が追求された。フランスにおけるサルトルの実存主義，カミュ(Camus 1913～60)の不条理の文学などはその一例であり，従来の小説形式に対する批判と反逆を宣言するアンチ-ロマン(反小説)派も現われた。演劇においても，ドイツのブレヒト(Brecht 1898～1956)が，これまでの演劇の原則を否定する新しい手法を試みた。



サルトル

このように，現在の文学の世界では，従来の権威や伝統を批判し否定して，新たな可能性を求めつつ混迷を続ける思想状況の中で，人間のあり方を探ろうとするさまざまな試みがあらわれており，これまでほとんど問題にされなかった黒人文学などにも注意が向けられてきている。

社会主義の文学　ソ連では，1930年代に文学や芸術において**社会主義リアリズム**という新しい様式が唱えられた。これは民衆の生活を主題とし，民衆に理解され，民衆を高めることを目標とするもので，文学では，19世紀末から活躍していたゴーリキー（Gorkii, 1868〜1936）を先駆とし，ショーロホフ（Sholokhov, 1905〜）らに代表される。また中国では，老舎（1899〜）が官僚の腐敗や抗日市民の姿を描いた。

芸術の動向　芸術においては，客観描写を基調とするこれまでの絵画への批判・反逆は20世紀初頭からおこり，フランスのマティス（Matisse, 1869〜1954）・ルオー（Rouault, 1871〜1958）は，印象主義の手法をおし進めて濃い原色と大胆な筆法によって強烈な感情と主観の表出を試み，**野獣派**とよばれた。また同じくピカソ（Picasso, 1881〜）・ブラック（Braque, 1882〜1963）らの**立体派**は，セザンヌを継承して対象の解体と幾何学的再構成により新たな絵画の方向を開いた。一方ドイツでは**表現派**がおこって，対象の再現ではなくてその本質を，主観の表現として描き出した。

第一次大戦後になると，立体派のきりひらいた分野がさらに広がりを見せ，物体や自然を線や面に還元する**抽象絵画**，いっさいの伝統や権威を嘲笑（ちょうしょう）し破壊するダダイズムが盛んになり，ダダイズムの発展として，フロイト学説の影響を受けた**超現実主義**（シュール－レアリズム）も生まれた。そして，第二次大戦後は，抽象絵画や超現実主義がいっそう複雑多岐になるとともに，さまざまな素材や音響・光まで採り入れる各種の実験的試みがおこなわれ，前衛芸術はもはや従来の絵画・彫刻という分類

まで不分明にしつつある。

こうした動きは音楽においても同様に認められる。今世紀初頭には，ドビュッシーを継承したラヴェル（Ravel 1875～1937）(フランス) の印象主義音楽が注目されたが，以後の音楽は，それをも含めた従来の伝統への反逆として，さまざまな形で新たな可能性が追求された。そして第二次大戦前までに，ストラヴィンスキー（Stravinskii 1882～1971）(ロシア生まれ) らの新古典主義的音楽，ショスタコーヴィッチ（Shostakovich 1906～）(ソ連) らの民族主義的音楽，シェーンベルク（Schönberg 1874～1951）(オーストリア) に始まる十二音音楽が主な流れとなった。第二次大戦後は十二音音楽が発展させられるとともに，電子音楽・偶然性音楽など，従来の音楽の概念では想像もつかない意欲的な実験が次々と試みられ，また元来黒人の音楽としてアメリカに発達したジャズも大きな影響を及ぼしている。

建　築　建築も，工法や技術の進歩・改善により大いに発達したことはもちろんであるが，最近では，人口の都市集中の激化，工業や交通問題への対策，公害問題の深刻化などをかかえて，個々の建造物だけでなく，周辺の環境をも含めた全体としての都市の計画や改善を考える都市工学が盛んになってきている。

現代文化の課題　現代の文化は，交通・通信機関の飛躍的発達とあいまって，広い国際的交流の中で育っている。それ故，独自の個性を持つ国民的文化のすぐれた伝統をいっそう磨きあげると同時に，豊かな世界性・普遍性を育てることが要求されている。その上で，国際政治の不安や機械文明の疎外感の中に失われつつある人間性を取りもどし，人間の尊厳と自由を確立することが，人類全体にとっての大きな目標であるといえよう。

課 題

1. 第二次大戦後の冷たい戦争の動きと，それが国際政局に及ぼした影響を考えてみよう。
2. 国際連合の成立・機構および今日までの経過について調べ，その果たした役割を，国際連盟の場合と比較しつつ整理してみよう。
3. 第二次大戦後のアジア・アフリカにおける民族独立運動を調べ，新興独立国の中に社会主義的傾向の強い国や独裁的性格の強い国が少なくない理由を考えてみよう。
4. EEC の成立事情とその後の発展を調べ，こうした国際的経済共同体の持つ意義を考えてみよう。
5. 現代の思想や文学・芸術の動向を調べ，自分たちなりに今後の方向づけを考えてみよう。

主 題 学 習

西ヨーロッパ統合の理念と現実

文化統一体としての西ヨーロッパ

こんにち，パリ～ミラノ間，アムステルダム～チューリヒ間など，大都市を起点に発車する21系統の「ヨーロッパ国際特急」(TEE) は，西ヨーロッパのおよそ100都市を結んで縦横に疾駆している。どの系統に乗車してもその日のうちに目的地に到着することができ，乗客は誰しも，西ヨーロッパはひとつということを実感させられる。

アルプス・ライン・ピレネーで囲まれた西ヨーロッパの中心部は，かつて古代にはガリアとよばれた地域で，中世のフランク王国の勢力範囲とも一致していた。封建社会における諸侯の地方的な割拠や，16～17世紀から後における国民国家の形成と相互の抗争にもかかわらず，ローマ文化の遺産とキリスト教会が，ヨーロッパに共通の地盤を与えていた。

啓蒙思想の時代

近代西ヨーロッパにおける統合ないしは平和維持の努力は，このような歴史的前提に立って国民国家間のあつれきをいかに解消するかという観点から，グロティウスによる国際法樹立の試みや，大国間の勢力均衡（バランス-オブ-パワー）による平和維持の主張となってあらわれた。

18世紀は啓蒙思潮の時代であり，そこから祖国愛に代わって世界市民精神を唱えるシラーのような知識人も多くあらわれ，またルソーは，西ヨーロッパの平和維持のために共通の憲法ないしは機関・制度が必要であると考えた。さらにカントの「永久平和論」(1795年) も，さしずめ，西ヨーロッパだけを対象として，国際連盟の結成，最高裁判所による国家間の紛争の解決，世界市民法の制定などを主張している。

19世紀の大経済圏思想

19世紀は民族主義の全盛期であったが，その民族主義を民主主義に結びつけようとしたマッツィーニがヨー

ロッパ各地の青年革命家と結んでつくった「青年ヨーロッパ」運動(1834)などがあらわれ，他方では大経済圏の思想があらわれた。後者はさしづめすぐれた民族による後進民族の支配という思想となり，経済学者リストは，3月革命の前に，ドイツ民族が北海からドナウ盆地，さらにバルカンへと発展する，広大な「中央ヨーロッパ」経済圏の構想をといた。リストの考えは3月革命後，各地方に民族運動が台頭するにつれて消えていったが，19世紀末になると大経済圏の思想は，先進諸国の政策のなかに再び現われた。それは交通機関と通商関係のめざましい発展によって，ヨーロッパ各地の結びつきが強められ，他方では，マジャール，チェコ，ポーランド民族その他による少数民族の自治独立運動がはげしくなったために，領土の直接の併合をさけて，関税同盟の形で広大な経済市場を手に入れようとする大国の政策でもあった。

第一次大戦と国際連盟

しかし，このような大経済圏の主張は，帝国主義的な国際対立の激化を防ぐ力をもたなかったし，社会主義運動を含めたヨーロッパ一体化の運動を促進させることもできなかった。第一次世界大戦の際には，ドイツ側，英仏側ともに国境をこえた戦時協力体制が発達したので，そのことに刺激されて，さまざまな形でのヨーロッパ合衆国案が提出された。国際連盟と国際司法裁判所による永久平和の樹立という理念も，この時期に発展したのである。また民主的な立場のドイツ帝国主義者ナウマン(Friedrich Naumann 1860~1919)は，1915年秋「中央ヨーロッパ」運動を展開し，ロシアとフランスの間に住む諸民族（バルカン地方を含む）がドイツの指導下に連盟をつくり，民主主義と民族の自由にもとづく広大な経済圏を建設することを主張した。

汎ヨーロッパ運動

1922年，日本女性の青山光子を母とするオーストリアの伯爵クーデンホーヴェ=カレルギー(Coundenhove Kalergi 1894~)は，汎ヨーロッパ運動をとなえた。それはソ連を除く全ヨーロッパ大陸諸国とその植民地を一つの関税同盟にまとめ，資源と生産を効果的に組織することによ

って，第一次大戦後の荒廃したヨーロッパの繁栄をとりもどそうとするものであった。彼は，反共主義と植民地領有主義をとっていたが，ドイツ・フランスの和解を全計画の中心におき，義務的仲裁裁判と集団安全保障によって永久平和をかちとろうとした。彼の運動は諸国家と諸国民の幅ひろい支持を得たが，やがて世界経済恐慌の深刻化とナチスの勃興とともに衰退した。ナチスの「ヨーロッパ新秩序」計画は，広域経済圏の必要性に立脚するプランではあったが，ユダヤ人・スラブ諸民族に対する強制労働や追放を特色とする悲惨な計画であった。

欧州共同体の発展　第二次世界大戦後の西ヨーロッパでは，高度産業社会の発達とともに，国家間の経済的な相互依存の関係と組織化が著しく進められ，1952年，西ドイツ・フランス・イタリア・ベネルクスの間に欧州石炭鉄鋼共同体(ECSC)（European Coal and Steel Community）が生まれた。これは石炭と鉄鋼との共同市場をつくり，関税，貿易制限などを撤廃して大量生産と技術革新とを進めようとするもので，広大な共通市場の創設によって，輸送費用の減少，域内貿易の激増，生産の急上昇がもたらされ，1958年1月，ECSCはさらに発展して，すべての経済分野を含む関税同盟としての欧州経済共同体(EEC)（European Economic Community）が誕生した。EECは域内のすべての関税をしだいに低下させて，1968年7月には工業品と農産物の域内関税を原則的に廃止した。いまやEECは単一通貨の創設，統一的な経済・金融政策の確立へと進みつつあり，域内の労働力と資本の移動も自由になった。各国の利害対立はなお残っており，欧州自由貿易連合(EFTA)*諸国の加盟問題もながく難航したが，1971年6月イギリスの加盟がまず決定し，いまやデンマーク・ノルウェー・アイルランド（エール）の加盟が問題となっている。なお，EECはECSCおよび欧州原子力共同体との統合をおこなって1967年いらいEC（欧州共同体）といわれている。

---

* 1959年，イギリス，北ヨーロッパ3国，オーストリア，スイス，ポルトガルで結成。自由貿易の促進をめざすが，共通関税などの共通政策はおこなわない。

年　表

年代	ヨーロッパ	西・南アジア・アフリカ
3000 B.C. 2000	2000　エーゲ文化おこる 2000～　ギリシア人(アイオリス人・イオニア人) の南下始まる	3000ころ　メソポタミアにシュメール人の都市国家興る 2850ころ　エジプト古王国時代始まる 2500ころ～　ウル第一王朝　アッカド王朝(2350～) 2500ころ～　インダス文化おこる 2050ころ　エジプト中王国時代始まる
1000	○　ギリシア人エーゲ海に拡大 1600～1400　クレタ文化黄金期 1550～1200　ミケーネ文化期 東地中海域に民族大移動 1200ころ　ドーリア人の移動	2000～　印欧語族の大移動 アーリア人の西北インド侵入 1700ころ　バビロニアのハンムラビ王 1560～　エジプト新王国盛期(～1200) 1100　アーリヤ人ガンジス川流域移住
800	○　イタリア人の南下 前9～8世紀　ギリシア各地にポリス成立 ○　フェニキア人よりアルファベットを学ぶ ○　このころホメロスの叙事詩成る	1000ころ　ヘブライ人の王国建設 926　イスラエル(～722)　ユダ(～586)に分裂 12～8世紀　フェニキア人，地中海貿易に活躍 ○　アラム人，内陸貿易に活躍
600	753　ローマ市起源（伝説） 750～550ころ　ギリシア人地中海に植民，ポリスの発展（貴族政より民主政へ） 621〔アテネ〕　ドラコンの成文法	670　アッシリアのオリエント統一 630ころ　ゾロアスター教成立 612　アッシリア滅亡　4国対立時代(メディア・新バビロニア・リディア・エジプト)
400	594〔アテネ〕　ソロンの改革 560〔アテネ〕　ペイシストラトスの僭主政 509〔ローマ〕　共和政となる 508〔アテネ〕　クレイステネスの改革 494〔ローマ〕　護民官の設置 492　ペルシア戦争始まる(～449) 490マラトンの戦い　480サラミスの海戦 443〔アテネ〕　ペリクレス時代（～429) 431〔ギリシア〕　ペロポネソス戦争(～404)	586～　バビロン捕囚 525　アケメネス朝ペルシア，オリエントを統一 521　ダリウス1世(～485) 500ころ　ヴェーダ成立(2000～) 492　ペルシア戦争(～449) 466ころ　仏教の祖シャカ生まる（異説多し) 448ころ　ジャイナ教の祖ヴァルダマーナ生まる
200	367〔ローマ〕　リキニウス法 334　アレクサンドロス大王東征(～324) 287〔ローマ〕　ホルテンシウス法 272　ローマ，イタリア半島統一 264　第一ポエニ戦争（～241) 218　第二ポエニ戦争（～201) 200～〔ローマ〕　東地中海に進出	331　アレクサンドリア市建設 330　アケメネス朝ペルシア滅亡 322ころ　マウリヤ朝成立(～185ころ) 301　アレクサンドロス領4王国に分裂 268ころ〔印〕アショーカ王仏教を保護 255ころ　バクトリア王国自立 248ころ　パルチア王国成立
A.D.	149　第三ポエニ戦争（～146) 133　グラックス兄弟の改革(～121) 73　スパルタクスの乱(～71) 60　第1回3頭政治　カエサル，ガリア平定 44　カエサル暗殺さる 43　第2回3頭政治 31　アクティウム海戦 27　アウグストゥス，ローマ帝政開始	146　ポエニ戦争によりカルタゴ滅ぶ 140ころ　大月氏国興る 30　エジプト滅亡　ローマの属領となる 04ころ　イエス＝キリスト生まる

東アジア		
○ 黄河流域に原シナ人の新石器文化 ○ 灰陶文化と彩陶文化の拡大		
○ 黒陶文化の発達 ○ 殷王朝（14～11世紀ころ） ○ 周王朝成立（11世紀ころ）		
○ 周の封建制		
770ころ 周の東遷　春秋時代始まる		
551～479　孔子 403 戦国時代始まる(～221) 戦国の7雄（秦・楚・斉・燕・韓・魏・趙）		
○ 諸子百家の活躍 221 秦の始皇帝，天下を統一 万里の長城修造 209ころ 匈奴冒頓単于(～174) 202 前漢成立(～A.D.8) 高祖(～195)		
141 武帝即位(～87) 139 張騫，西域へ使いす(～126) 136 五経博士をおく　儒教の国教化 129 漢，匈奴を討伐(～119) 108 朝鮮に楽浪など4郡を設置 60 西域都護をおく		

文化

ヨーロッパ

ギリシア文化
〔哲学〕 タレス(6世紀)，ピタゴラス(～497ころ)，デモクリトス（～370ころ)，ソフィスト，ソクラテス(～399)，プラトン（～347)，アリストテレス(～322)
〔文学〕 ホメロス(9世紀)，ヘシオドス(8世紀)，アイスキュロス（～456)，ソフォクレス（～406)，エウリピデス（～406ころ)，アリストファネス(～385ころ)
〔歴史家〕ヘロドトス ツキディデス
〔建築〕 パルテノン神殿

ローマ文化
〔ラテン文学〕 ヴェルギリウス　ホラティウス　〔史学〕タキトゥス「ゲルマニア」カエサル「ガリア戦記」プルタルコス「対比列伝」
〔ローマ法〕 十二表法～市民法～万民法

西・南アジア

オリエント
ヒエログリフと楔形文字の発達　ピラミッドとジッグラトの建造　ハンムラビ法典　アマルナ芸術　ペルセポリス宮殿　フェニキア文字・アラム文字の拡大
ユダヤ教→キリスト教の成立
ヘレニズム文化
アレクサンドリア市の繁栄
エウクレイデス　アルキメデス　エラトステネス
インド
インダス文化(モヘンジョーダロ・ハラッパ)　ヴェーダの成立　バラモン教とカスト制度　ウパニシャド哲学　ジャイナ教　仏教の成立(シャカ)

東アジア

黄河文化
灰陶・彩陶・黒陶文化
殷王朝
甲骨文字　青銅器文化
春秋時代
儒家思想の成立
鉄器の使用と普及
「詩経」「楚辞」
戦国時代
諸子百家の活躍　儒家・道家・法家・墨家・名家・兵家・縦横家
漢代
儒家思想の発展　董仲舒
司馬遷「史記」

年代	ヨーロッパ	西・南アジア:アフリカ
A.D.	○ キリスト教，ローマに伝わる 96 五賢帝時代（～180） ローマ帝国隆盛 113 トラヤヌス帝の東方遠征 領域最大となる ○ ゲルマンのローマ帝国内移住始まる 193 軍人皇帝時代（～284）	30ころ イエス刑死 キリスト教成立 45ころ 中央アジアにクシャン朝成立 ○ ガンダーラ美術盛ん 140ころ カニシカ王 仏典結集 このころ大乗仏教おこり，東方に伝わる
200	284 ディオクレティアヌス帝（～305）一専制君主制 306 コンスタンティヌス帝（～337） 313 ミラノ勅令一キリスト教公認 325 ニケーア公会議 アリウス派を追放 330 コンスタンティノポリスに遷都 375 ゲルマン民族の大移動始まる 395 ローマ帝国，東西に分裂	226 パルチア滅亡 ササン朝ペルシア興る（～642） 320ころ インドにグプタ朝興る（チャンドラグプタ1世） ○ このころペルシア，たびたびローマと戦う 380 チャンドラグプタ2世（～414）グプタ朝最盛期
400	15 西ゴート王国建国（～711） 29 ヴァンダル王国建国（～534） 43 ブルグンド王国建国（～534） 49 アングロサクソン，ブリタニアに侵入 76 西ローマ帝国滅亡 86 フランク王国建国 メロヴィング朝（～751） 93 東ゴート王国建国（～555）	50ころ エフタルの活躍（～6世紀初め） 50ころ フン族（アッティラ）活躍，ローマ帝国をおびやかす
500	27 東ローマ，ユスティニアヌス帝即位（～65） 29 ベネディクト修道院成立 34 ヴァンダル 東ローマに征服さる 55 東ゴート 〃 68 北イタリアにロンバルド王国成立 ○ スラブ族の移動始まる	○ グプタ朝分裂 31 ホスロー1世即位（～579） ササン朝ペルシア全盛 71ころ マホメット生まる（～632）
600	○ アングロサクソン7王国時代始まる 10 東ローマ，テマ制度おこなわる	06 〔印〕 ハルシャ=ヴァルダーナ王（～47） 10ころ メッカでイスラム教成立 22 ヒジュラ（イスラム紀元元年） 51 ササン朝ペルシア滅亡 61 ウマイヤ朝成立（～750）
700	11 イスラム教徒，イベリア半島を征服 26 東ローマ皇帝レオ3世聖像禁止令発布 32 ツール・ポアチエ間の戦い 51 フランク，カロリング朝成立（～987） 00 カール大帝戴冠，西ローマ帝国復興	50 アッバス朝興る（～1258） 51 タラス河畔の戦い 56 後ウマイヤ朝興る（～1031）東西カリフ国分立 86 ハルン=アッラシード（～809）
800		

東　ア　ジ　ア			文　　化
○　このころ，仏教中国に伝わる 08　新の建国（～23） 25　後漢成立（～220）光武帝（～57） 74　班超，西域を討つ　西域諸国漢に服属 166 大秦王安敦の使者洛陽に来る 184 黄巾の乱			**ヨ　ー　ロ　ッ　パ** 1世紀，キリスト教成立し，ローマ帝国に広まる 430　アウグスティヌス死す（354～）「神の国」 529　ユスティニアヌス法典発布
220～265　三国時代 239 邪馬台国の女王卑弥呼，魏に出使 280 西晋の統一 317 東晋興る　五胡十六国時代（～439） ○　朝鮮に高句麗・百済・新羅鼎立す 383 淝水の戦い　中国の南北分立確定化 399 法顕のインド旅行（～414）			**西・南アジア** 2～3世紀〔印〕ガンダーラ美術盛ん 400ころ〔印〕マハーバーラタ・ラーマーヤナ成る 500ころ〔印〕ヒンドゥー教おこる 610ころ イスラム教成立 750ころ ジャワにボロブドゥール着工 751　アラビア人に製紙法伝わる（タラス河畔の戦い） 8世紀よりイスラム文化おこる 890ころ カンボジアにアンコールトム着工
20　東晋倒れ宋建国（～79）（南朝） 39　北魏華北を統一（北朝）南北朝時代（～589） ○　雲崗（460）・龍門（493）の石窟掘り始める ○　〔日〕大和国家の発展 85　北魏，均田制を施行 ○　六朝文化	魏晋南北朝時代		**東　ア　ジ　ア** 82ころ　班固「漢書」 105ころ 蔡倫，製紙法を発明 200　鄭玄死す（127～） 448　寇謙之死す　道教の成立 531　昭明太子死す（501～）「文選」 607ころ 法隆寺建立 640　孔頴達「五経正義」 646　玄奘「大唐西域記」 712　「古事記」成る 720　「日本書紀」成る 759　王維死す（701～） 762　李白死す（701～） 770　杜甫死す（712～） 781　大秦景教流行中国碑建立 846　白居易死す（772～） 920ころ 契丹文字成る
38　〔日〕仏教伝わる（一説 552） 52　突厥帝国成立 62　任那の日本府滅ぶ		飛鳥時代	
89　隋，中国を統一 93　〔日〕聖徳太子の摂政（～622）	89 隋		
18　隋滅び唐朝成立 26　太宗の治世（～49） 29　玄奘のインド旅行（～45） 45　〔日〕大化の改新 71　義浄のインド旅行（～95） 76　新羅，朝鮮半島を統一	18		
10　〔日〕奈良（平城京）に遷都 12　玄宗の治世――開元の治（～56） 13　渤海成立 55　安史の乱（～63） 80　両税法施行 94　〔日〕京都（平安京）に遷都	唐	10 奈良時代	

年代	ヨーロッパ	西・南アジア：アフリカ
800 900	○ このころよりノルマンのフランク領侵入盛ん 43 ベルダン条約 62 ノルマン人ノブゴロド建国 70 メルセン条約 82 ロシアにキエフ公国成立	○ バグダードの繁栄 ○ 南スマトラのシュリーヴィジャヤ王国繁栄（7世紀～）
1000	10 クリュニー修道院成る 62 オットー1世，神聖ローマ帝国（～1806）建設 87 フランスにカペー朝成立(～1328)	09 エジプトにファーティマ朝興る（～1171） 62 アフガニスタンにガズニ朝成立（～1186）
1100	54 東西キリスト教会，全く分離す 66 ノルマン人のイングランド征服 77 カノッサの屈辱 95 教皇ウルバン2世クレルモン公会議召集 96 第1回十字軍おこる	○ チョーラ朝，南インドを統一して強盛 37 セルジュク－トルコ成立 99 パレスチナにエルサレム王国成立（～1187） ○ インドのイスラム化始まる
1200	○ このころより，北イタリアのジェノバ・ベネチア・ピサの諸市，地中海に発展 21 両シチリア王国　建設（～1194） 54 〔英〕 プランタジネット朝始まる（～1399） 98 教皇インノケンティウス3世即位（～1216）	32 西遼（カラキタイ）成立(～1211) 86 ガズニ朝滅びグール朝成立（～1206） 87 サラディン，エルサレム王国を征服。第3回十字軍(89～92)と戦う
1300	04 第4回十字軍，ラテン帝国を建設（～61） 15 〔英〕 マグナ－カルタ発布（ジョン王） 41 ワールシュタットの戦い 56 〔独〕 大空位時代（～73） 65 〔英〕 議会の起源 70 十字軍終わる	06 〔印〕 奴隷王朝成立，デリー諸王朝時代始まる 58 アッバス朝滅亡，イル汗国興る（～1393） 94 ジャワにマジャパヒト王国興る 98 小アジアにオスマン－トルコ建国
1400	02 〔仏〕 フィリップ4世，三部会をひらく 09 教皇のバビロン捕囚（～77） 28 〔仏〕 ヴァロア朝成立～(～1589) 37 英仏百年戦争始まる（～1453） 56 〔独〕 金印勅書発布，皇帝の選挙制度確立 58 〔仏〕 ジャクリーの乱 78 教会の大分裂（～1417） 81 〔英〕 ワット＝タイラーの乱	69 チムール帝国成立 95 チムール，西アジアを統一
1500	14 コンスタンツの公会議（～18） 15 フス処刑 53 百年戦争終わる　東ローマ帝国滅亡 55 〔英〕 ばら戦争（～85） 79 カスティラとアラゴン合同　スペイン王国成立 85 〔英〕 ヘンリー7世　テューダー朝をひらく（～1603） 92 コロンブス，アメリカ発見	02 アンゴラの戦い 05 オスマン－トルコ再興 87～8 ディアス，喜望峰到達 98 ヴァスコ＝ダ＝ガマ，カリカット に到達 00 チムール帝国滅亡

東アジア	中国	日本
○ 中国社会の転換 ○ 節度使の勢力強し ○ ウイグルの勢力衰える 75 黄巣の乱（～84） 94 〔日〕 遣唐使廃止	唐	94 平安時代
07 唐滅亡，五代始まる（～960） 16 契丹(遼)興る 26 渤海滅亡 36 高麗の朝鮮半島統一 60 宋興る（趙匡胤～76）	07 五代十国 60	
04 澶淵の盟 38 西夏建国（～1227） 69 王安石の改革始まる	北宋	
15 金建国（～1234） 25 遼滅亡 27 北宋滅び(靖康の変)，南宋興る 92 〔日〕 鎌倉幕府ひらく(源頼朝)	27 南宋	92 鎌倉時代
06 テムチン，チンギス汗位につく 36 バトゥの東ヨーロッパ遠征（～42） 60 フビライ汗即位（～94） 71 モンゴル，元朝をたてる 74, 81 元の日本遠征 79 南宋滅亡	79/71 元	
34 〔日〕 建武の新政 38 〔日〕 室町幕府成立（～1573） 51 紅巾の乱 68 元滅亡，明の建国 ○ このころ，倭寇，明・高麗を侵す 92 朝鮮に李王朝成立（～1910）	68 明	南北朝 92/38
02 〔明〕 永楽帝即位（～24） 04 日明貿易始まる 05 鄭和の南海遠征（～33） 49 〔明〕 オイラート侵入（土木の変） 67 〔日〕 応仁の乱おこる	明	室町時代

文化

ヨーロッパ

スコラ哲学
　アンセルムス(～1109)　アベラール(～1142)　トマス＝アクイナス(～1274)　ロージャ＝ベーコン(～1294)　ウィリアム＝オヴ＝オッカム(～1349)
中世の文学（11～12世紀）
　ローランの歌(フランス)　ニーベルンゲンの歌(ドイツ)　アーサー王物語(イギリス)
中世の教会建築
　ロマネスク式（10～12世紀）
　ゴシック式（13～15世紀）
ルネサンス
　イタリア
　　ダンテ(～1321)　ペトラルカ（～1374)　ボッカチオ（～1375)　マキァヴェリ(～1527)　レオナルド(～1519)　ラファエロ(～1520)　ミケランジェロ(～1564)
　アルプス以北
　　ロイヒリン(～1522)　エラスムス(～1536)　ラブレー(～1553)　モンテーニュ(～1592)　セルバンテス(～1616)　チョーサー(～1400)　スペンサー(～1599)　シェークスピア(～1616)
　天文学
　　トスカネリ(～1482)　コペルニクス(～1543)　ガリレイ(～1642)

西・南アジア

イスラム文化
　イブン＝スィーナー〔アヴィケンナ〕(～1037)　イブン＝ルシュド〔アヴェロエス〕(～1198)　オマル＝ハイヤーム(～1123)　ラシード＝ウッディーン(～1318)
　イブン＝バトゥータ(～1377)
　イブン＝ハルドゥーン(～1406)
　アルハンブラ宮殿(13～14世紀)
アンコール＝ワット造営(カンボジア，12世紀)

東アジア

1000ころ　羅針盤・火薬・木版印刷術
1084　司馬光「資治通鑑」
1119　女真文字制定
1192　陸九淵死す（1139～）
1200　朱熹死す（1130ころ～）「四書集註」
1281　授時暦公布
1408　「永楽大典」完成
1446　〔朝〕 諺文公布（訓民正音）
1494　羅貫中「三国志演義」

年代	ヨーロッパ・アメリカ	西・南アジア・アフリカ
1500	17 〔独〕 ルター，95条の意見書発表，宗教改革始まる	02 イランにサファヴィー朝興る（～1736）
	19 〔独〕 カール5世即位(～56) マゼランの世界周航(～22)	10 〔ポルトガル〕 ゴアを占領
	21 〔西〕 コルテス，メキシコを征服	17 オスマン-トルコ，エジプトを占領，マムルーク朝滅亡
	32 〔西〕 ピサロ，ペルー征服	
	34 〔英〕 ヘンリー8世首長令発布，英国教会成立 イエズス会創立	20 トルコ，スレイマン1世即位（～66）
	41 カルヴァン，ジュネーブで宗教改革をおこす	26 ムガール帝国成立
	45 トリエント公会議(～63)	
	55 アウグスブルクの宗教和議	56 ムガール，アクバル大帝即位（～1605）
	56 〔西〕 フェリペ2世即位(～98)	
	58 〔英〕 エリザベス1世即位(～1603)	
	62 〔仏〕 ユグノー戦争おこる(～98)	
	68 オランダ独立戦争おこる	
	71 レパント沖の海戦，トルコ敗れる	
	81 オランダ独立宣言	
	88 〔英〕 スペインの無敵艦隊を破る	
	89 〔仏〕 アンリ4世ブルボン朝をひらく(～1830)	
	98 〔仏〕 ナントの勅令	
1600	00 〔英〕 東インド会社設立(～1858)	
	02 〔蘭〕 東インド会社設立(～1795)	19 〔蘭〕 ジャワに総督をおく，バタヴィア市建設
	03 〔英〕 ジェームズ1世即位 ステュアート王朝始まる	○ このころ南洋各地に日本町形成される
	13 〔露〕 ロマノフ王朝始まる(～1917)	
	18 〔独〕 三十年戦争始まる(～48)	32 〔印〕 タージ-マハルを築造（～53）
	20 〔英〕 清教徒，北米移住（メイフラワー号）	34 〔英〕 ベンガルにおける通商権獲得
	28 〔英〕 権利の請願	
	42 〔英〕 清教徒革命おこる	
	43 〔仏〕 ルイ14世即位(～1715)	39 〔英〕 ポルトガル勢力を追い，マドラスを占領
	48 ウェストファリア条約，三十年戦争終わる	
	49 〔英〕 クロムウェル，共和政樹立	41 〔蘭〕 マラッカ占領
	51 〔英〕 航海条令発布	58 〔印〕 アウラングゼーブ帝(～1707)
	52 蘭英戦争（第1次～54，第2次65～67，第3次72～74）	
	60 〔英〕 王政復古，チャールズ2世即位（～85）	
	61 〔仏〕 ルイ14世親政（～1715）	
	67 〔仏〕 ネーデルラント侵略(～68)	
	72 〔仏〕 オランダ侵略（～78）	74 〔仏〕 ポンジシェリー占領
	82 〔露〕 ピョートル1世即位(～1725)	88 〔仏〕 シャンデルナゴル建設
	85 〔仏〕 ナントの勅令廃止	90 〔英〕 カルカッタ市建設
	88 〔英〕 名誉革命 〔仏〕 ファルツ継承戦争（～97）	○ 〔印〕 シク教徒台頭
	89 〔英〕 権利の章典，メアリー2世ウィリアム3世即位	
1700	00 〔露〕 北方戦争おこる（～1721）	

東アジア			文化
17 ポルトガル人，広東に入港 42 タタール強盛（アルタン汗）（～82） 43 〔日〕 ポルトガル人，種子島に来る 49 ザヴィエル来日 57 ポルトガル人，マカオ租借 73 〔日〕 室町幕府滅亡 81 〔明〕 一条鞭法の施行を命ず 82 マテオ=リッチ広東に上陸 90 〔日〕 豊臣秀吉，全国を統一 92 〔日〕 このころ朱印船はじまる 秀吉の朝鮮出兵（文禄の役） 97 秀吉，再び朝鮮出兵（慶長の役）（～98） 00 〔日〕 関ケ原の戦い	68 明	室町時代 73 安土桃山時代	**ヨーロッパ** ルイ14世時代 コルネイユ(～1684) ラシーヌ(～1699) モリエール(～1673) ヴェルサイユ宮殿 イギリス文学・哲学 ミルトン(～1674) バンヤン(～1688) ベーコン(～1626) ホッブズ(～1679) ロック(～1704) ヒューム(～1776) フランス啓蒙思想 モンテスキュー(～1755)，ヴォルテール(～1778)，ルソー(～1778)，ディドロー(～1784) 近代哲学 カント(～1804)，フィヒテ(～1814)，シェリング(～1854)， ベンタム(～1832)，ミル(～1873) 経済学 ケネー(～1774)，スミス(～1790) 産業革命 紡績機(1733 ケイ，1764ころハーグリーヴズ，1768ころアークライト，1779クロンプトン，1787カートライト) 1765 ワットの蒸気機関の改良 1807 フルトンの汽船 1814 スティーヴンソンの蒸気機関車
03 〔日〕 徳川家康，江戸幕府開設（～1867） 09 〔日〕 蘭，平戸に商館設置 16 ヌルハチ，後金を建国 24 〔蘭〕 台湾を占領（～61） 36 後金，国号を清と改める 37 朝鮮，清に服属 41 〔日〕 オランダ人を出島に移す 鎖国体制の完成 44 李自成，北京をおとしいれ，明滅亡 61 〔清〕 聖祖（康熙帝）即位（～1722） 73 〔清〕 三藩の乱（～81） 83 台湾，清領となる 84 〔清〕 海禁を解除―海外貿易を許可 89 〔清〕 ロシアとネルチンスク条約	44/16 清	03 江戸時代	**アジア** このころ 「水滸伝」 1529 王守仁死す（1472～）（陽明学） 16世紀後半「西遊記」 1596 李時珍「本草綱目」 1598 「牡丹亭還魂記」 1601 〔明〕 マテオ=リッチ 北京に天主堂建設 1602 〔明〕 マテオ=リッチ「坤輿万国全図」 1632 〔印〕 タージ-マハル造営(～53) 1633 〔明〕 徐光啓死す(1562～)「農政全書」 1637 〔明〕 宋応星「天工開物」 1641 〔明〕 アダム=シャール「崇禎暦書」 1679 〔清〕 蒲松齢「聊斎志異」 1682 〔清〕 顧炎武死す（1613～）

年代	国際問題	ヨーロッパ・アメリカ
1700	01 スペイン継承戦争（～13） 13 ユトレヒトの和約 21 ニスタット和約 33 ポーランド継承戦争（～35） 40 オーストリア継承戦争（～48）	01 プロシア王国成立 03 〔露〕ペテルブルク市建設 07 〔英〕スコットランド併合 14 〔英〕ジョージ1世即位（～27） ハノーヴァー朝始まる 15 〔英〕ウォルポール責任内閣制度を始める 20 〔伊〕サルジニア王国成立 40 〔普〕フリードリヒ2世即位(～86) 〔墺〕マリア=テレジア即位（～80）
1750	56 七年戦争（～63） 68 ロシア・トルコ戦争（～74） 72 第1次ポーランド分割 75 アメリカ独立戦争（～83） 80 対英海上武装中立同盟 83 パリ条約（米独立） 93 第1回対仏大同盟（～97） 第2次ポーランド分割 95 第3次ポーランド分割 （ポーランド滅亡） 96 ナポレオン戦争（～1815） 99 第2回対仏大同盟	62 〔露〕エカテリナ2世即位（～96） 65 〔英〕印紙条令 ○ このころ英に産業革命始まる 74 〔仏〕ルイ16世即位（～92） 75 アメリカ独立戦争（～83） 76 〔米〕独立宣言 89 〔仏〕フランス革命勃発，人権宣言 〔米〕ワシントン大統領就任 92 〔仏〕国民公会成立　共和政宣言 93 〔仏〕ルイ16世処刑　恐怖政治始まる 94 〔仏〕ロベスピエール処刑 95 総裁政府（～99） 97 カンポ-フォルミオの和約 98 ナポレオン，エジプト遠征(～99) 99 ブリュメール18日のクーデタ　執政政府成立
1800	02 アミアンの和約 05 第3回対仏大同盟 トラファルガル海戦 アウステルリッツの戦い 06 ナポレオン，大陸封鎖令 07 ティルジットの和約 12 ナポレオン，ロシア遠征 米英戦争（～14） 13 ライプチヒの戦い 14 ウィーン会議開催（～15） 15 ウィーン議定書なる 神聖同盟，四国同盟 ワーテルローの戦い 18 五国同盟 ○ 各国に自由・国民主義運動 メッテルニヒの反動政治 21 ギリシア独立戦争（～29） 23 モンロー主義宣言 30 七月革命 31 東方問題始まる（～40） 40 アヘン戦争（～42） 48 二月革命，ウィーン体制の崩壊	01 〔英〕アイルランド併合 〔露〕アレクサンドル1世即位（～25） 04 〔仏〕ナポレオン法典公布　ナポレオン皇帝となる 06 ライン同盟成立，神聖ローマ帝国解体 〔独〕シュタインの改革始まる 10 〔独〕ハルデンベルクの改革 14 ナポレオン退位 ○ このころ中南米諸国盛んに独立 15 ナポレオンの百日天下 ドイツ連邦成立 23 〔米〕モンロー主義宣言 25 〔露〕デカブリストの反乱 30 〔仏〕七月革命 ベルギー独立，翌年承認 ポーランドに独立運動おこる 32 〔英〕第1次選挙法改正 34 〔独〕関税同盟成立 37 〔英〕ヴィクトリア女王即位（～1901） 38 〔英〕チャーティスト運動おこる 46 〔英〕穀物法の廃止 48 〔仏〕二月革命，第二共和政成立 〔独〕三月革命，フランクフルト国民議会
1850		

アジア・アフリカ			文　　化
04 〔清〕典礼問題おこる ○シク教徒，マラータ同盟強盛 13 〔清〕地丁銀制定 22 〔清〕雍正帝の治世（～35） 23 〔清〕キリスト教布教禁止 27 〔清〕ロシアとキャフタ条約 32 〔清〕軍機処をおく 35 〔清〕乾隆帝の治世（～95） 44 インドで英仏植民地戦争始まる	清	江戸時代	**ヨーロッパ** ドイツ古典文学 　ゲーテ（～1832），シラー（～1805） ロマン主義文芸 　ユゴー・ドラクロア・シューマンら 写実主義（現実主義）文芸 　スタンダール（～1842），バルザック（～1850），フロベール（～1880），ディケンズ（～1870），クールベ（～1877） 哲学・思想 　ヘーゲル（～1831），ショーペンハウアー（～1860），フォイエルバッハ（～1872），ベンタム（～1832），ミル（～1873），キェルケゴール（～1855） 空想的社会主義 　サン=シモン（～1825），フーリエ（～1837），オーエン（～1858） 法学・経済学 　ザヴィニー（～1861），マルサス（～1834），リカード（～1823）
57 〔印〕プラッシーの戦い 　〔清〕外国貿易を広東一港に制限 58 〔英〕クライヴ，初代ベンガル知事 60 〔清〕広東の公行成立 69 ビルマ，清の属国となる 70 〔英〕東オーストラリア領有宣言 75 〔印〕マラータ戦争おこる 79 カジャール朝のイラン統一（～1925） 87 〔日〕寛政の改革（～93） 93 〔清〕英使マカートニー，北京に来る 96 〔清〕白蓮教徒の乱（～1804） 　〔英〕セイロン島占領 99 〔蘭〕 東インド会社解散			**アジア** 1709 〔清〕 円明園造営（～59） 1716 〔清〕 康熙字典成る 1719 〔清〕 「皇輿全覧図」 1718～30 オスマン帝国のチューリップ時代 1725 〔清〕 「古今図書集成」 1745ころ ワッハーブ派おこり，アラビア半島で拡大 1749ころ「儒林外史」 1782 〔清〕 「四庫全書」成る（1773～） 1792 〔清〕 「紅楼夢」刊行 1804 〔清〕 銭大昕死す（1728～）
02 阮福映ベトナム統一 阮朝成立 04 〔英〕ムガール帝国を保護下に入れる 05 〔エジプト〕ムハンマド=アリーの改革（～49） 14 〔英〕ケープ植民地領有 15 〔清〕アヘンの輸入を厳禁 19 〔英〕シンガポール領有 24 〔英〕第一次ビルマ戦争（～26，その後2回）マラッカ占領 25 〔日〕異国船打払令 30 〔仏〕アルジェリア占領 33 イギリス東インド会社，特権を失う 　東方問題の激化 40 アヘン戦争（～42） 41 〔日〕天保の改革（～43） 42 南京条約，香港割譲 43 リヴィングストンのアフリカ探検始まる 44 望厦条約，黄埔条約 49 〔英〕パンジャブ併合 50 太平天国の乱（～64）			

年代	国際問題	ヨーロッパ・アメリカ
1850	53 クリミア戦争（～56） 55 トランスヴァール共和国成立 56 アロー号戦争（～60） 64 国際赤十字社創立 第一インターナショナル結成（～76） 66 普墺戦争 69 スエズ運河開通 70 普仏戦争（～71） 73 三帝協約 77 露土戦争（～78） 78 サン-ステファノ条約 ベルリン会議 79 独墺同盟	52 〔仏〕ナポレオン3世即位，第二帝政時代（～70） 59 イタリア統一戦争（～61） 61 〔露〕農奴解放令 イタリア王国成立 〔米〕南北戦争（～65） 62 〔普〕ビスマルク首相就任 63 〔米〕奴隷解放宣言 67 北ドイツ連邦成立 70 〔仏〕ナポレオン3世退位，共和政となる 71 ドイツ帝国成立（ドイツの統一） パリ-コミューンの乱 ビスマルクの文化闘争（～80） 75 〔仏〕第三共和国憲法制定 75～ バルカン諸国の独立運動 78 〔独〕社会主義者取締法（～90）
1880	81 三帝協約復活 82 独墺伊三国同盟 87 独露再保障条約 89 第二インターナショナル結成 91 露仏同盟 94 日清戦争（～95） 98 米西戦争 ファショダ事件 99 〔米〕門戸開放宣言 ハーグ万国平和会議	81 〔露〕アレクサンドル2世暗殺 87 〔英〕自治植民地会議始まる 88 〔仏〕ブーランジェ事件（～89） 〔独〕ヴィルヘルム2世即位 89 〔米〕第1回汎アメリカ会議 90 〔独〕ビスマルク引退 94 〔露〕ニコライ2世即位（～1917） 〔仏〕ドレーフェス事件（～99） 95 〔独〕キール運河開通 97 〔米〕マッキンレー大統領就任 98 米西戦争，米はグァム・フィリピン領有，ハワイ併合 99 〔米〕ヘイ，門戸開放宣言
1900	02 日英同盟 04 日露戦争（05） 英仏協商 05 第一次モロッコ事件 ポーツマス条約（日露戦争終結） 07 ハーグ万国平和会議 英露協商（英仏露三国協商成立）	02 〔露〕シベリア鉄道開通 03 〔独〕トルコとバグダード鉄道条約（3B政策） 05 〔露〕革命おこる（血の日曜日） 06 〔英〕労働党成立 〔露〕国会開設，ストルイピンの改革 08 ブルガリア，トルコより独立 オーストリア，ボスニア・ヘルツェゴビナを併合→汎ゲルマン主義と汎スラブ主義の対立激化 10 ポルトガル革命，共和国成立
1910		

アジア・アフリカ

53 〔日〕ペリー，浦賀に来航
54 オレンジ自由国成立(～1902)
56 アロー号戦争（～60）
57 〔印〕セポイの反乱（～59）
58 〔印〕ムガール帝国滅亡，イギリス，インドを併合
〔清〕ロシアとアイグン条約
〔清〕天津条約
60 北京条約
62 〔仏〕コーチシナ東部を領有
〔清〕洋務運動おこる
63 〔仏〕カンボジアを保護国とする
64 〔清〕太平天国の乱終わる
68 〔日〕明治維新
69 スエズ運河開通
76 日鮮修好（江華島）条約
77 インド帝国成立（女帝ヴィクトリア）

81 〔仏〕チュニジア占領
イリ条約
82 〔英〕エジプト占領
84 清仏戦争（～85）
85 インド国民会議創立
86 〔英〕ビルマを併合
87 仏領インドシナ連邦成立
90 セシル=ローズ，ケープ植民地首相（～96）
94 〔朝鮮〕東学党の乱
〔清〕孫文ら，興中会結成
日清戦争（～95）
98 ファショダ事件
〔清〕独・露・英，港湾を租借
〔清〕戊戌の政変
フィリピン，米領となる
99 ブーア戦争おこる
〔清〕義和団事件おこる(～1901)

02 日英同盟成立
04 日露戦争（～05）
05 第一次モロッコ事件
インドにベンガル分割令発布
中国革命同盟会結成
06 スワラジ・スワデシ運動おこる
全インド回教徒連盟創立
イラン立憲革命（～08）
08 青年トルコ党革命
〔清〕宣統帝即位（～1912）
10 南アフリカ連邦成立
日韓併合

清

江戸時代

68 明治

文化

ヨーロッパ

自然主義文学その他
モーパッサン(～1893)，ゾラ(～1902)，プーシュキン(～1837)，トゥルゲーネフ(～1883)，チェーホフ(～1904)，トルストイ(～1910)
印象主義
マネ(～1883)，モネ(～1926)，セザンヌ(～1906)，ロダン(～1917)，ドビュッシー(～1918)
超人思想
ニーチェ(～1900)
科学的社会主義
マルクス(～1883)，エンゲルス(～1895)
歴史学
ランケ（～1886），トライチュケ(～1896)，モムゼン(～1903)，ギゾー(～1874)
科学その他
1857 醗酵（パストゥール）
1859 進化論の大成(ダーウィン)
1865 メンデルの法則
1869 元素の周期律（メンデレエフ）
1876 電話機（ベル）
1882 結核菌（コッホ）
1895 無線電信(マルコーニ)，X線(レントゲン)
1898 ラジウム（キュリー夫妻）
1900 英人エヴァンズ，クレタ島を発掘
1903 〔米〕 ライト兄弟の飛行機
1905 〔独〕 アインシュタインの特殊相対性理論
1909 〔米〕 ピアリー，北極に到達

アジア・アフリカ

1853 〔印〕 ボンベイを中心にアジア最初の鉄道開通
1855 リヴィングストン，ヴィクトリア瀑布発見
1860 〔清〕 円明園，英仏軍に破壊さる
1871 シュリーマン，トロヤを発掘
1876 カイロでアラビア語最初の日刊紙発行
1891 〔清〕 康有為「大同書」刊行
1892 ジャワで直立猿人の骨発見
1896 アテネで第１回オリンピック開催

年代	国際問題	ヨーロッパ・アメリカ
1910	11 第二次モロッコ事件 伊土戦争（～12） 12 第一次バルカン戦争（～13） 13 第二次バルカン戦争 14 第一次世界大戦勃発（～18） 17 ロシア革命 18 ブレスト-リトフスク条約 19 パリ平和会議開催，ヴェルサイユ条約調印 第三インターナショナル（コミンテルン）結成 20 国際連盟成立	14 サラエボ事件 パナマ運河開通 〔英〕アイルランド自治法成立 16 〔英〕ロイド=ジョージ内閣成立 17 〔露〕三月革命，ロマノフ朝滅亡 アメリカ参戦 〔露〕十一月革命 18 〔英〕第４次選挙法改正 ウィルソン14か条原則提唱 ドイツ革命，ヴィルヘルム２世退位 オーストリア-ハンガリー帝国分裂 ハンガリー共和国宣言 19 〔独〕スパルタクス団の反乱 ワイマール憲法成立 〔伊〕ファシスト党結成
1920	21 ワシントン会議（～22） 四か国条約　九か国条約 22 ラッパロ条約〔独・ソ〕 24 ドーズ案成立 25 ロカルノ条約 27 ジュネーブ海軍軍縮会議 28 パリ不戦条約 29 世界経済恐慌始まる 30 ロンドン海軍軍縮会議	21 〔ソ〕新経済政策採用 22 〔伊〕ファシスト党内閣成立 アイルランド自由国成立 23 〔仏〕ルール占領 〔独〕マルク暴落，シュトレーゼマン内閣成立 24 〔ソ〕レーニン死しスターリン後継 〔英〕マクドナルド労働党内閣成立 26 〔独〕国際連盟加入 28 〔伊〕ファシスト独裁完成 〔ソ〕第１次五か年計画
1930	31 フーヴァー-モラトリアム 満州事変おこる 32 ジュネーブ軍縮会議 35 エチオピア戦争（～36） 36 スペイン内乱（～39） 37 日華事変始まる 日独伊三国防共協定 38 ミュンヘン会談 39 独ソ不可侵条約 第二次世界大戦始まる 40 日独伊三国軍事同盟成立	31 〔英〕マクドナルド挙国一致内閣 32 〔英〕オタワの英連邦経済会議 33 〔独〕ヒトラー首相就任　国際連盟脱退 〔米〕ニューディール政策開始 35 〔独〕ザール問題，再軍備宣言 36 〔西〕スペイン内乱おこる 〔仏〕人民戦線内閣成立 〔ソ〕スターリン憲法成立 37 〔伊〕国際連盟脱退 38 〔独〕オーストリア併合 39 〔独〕ポーランドに進撃（第二次大戦開始） 40 〔仏〕独に降伏，ヴィシー政府成立
1940		

アジア・アフリカ

11 第二次モロッコ事件
伊土戦争（～12）
〔清〕辛亥革命
12 モロッコ，仏の保護領となる
孫文 中華民国を建国 清朝滅亡
臨時大統領袁世凱
14 トルコ，同盟側に参戦

14 〔日〕連合側に参戦
15 〔日〕対華21か条の要求提出
17 バルフォア宣言
〔中〕孫文，広東に軍政府樹立
18 〔日〕シベリア出兵
19 インド統治法・ローラット法発布 ガンディー反英運動始まる
朝鮮の民族運動（万歳事件）
〔中〕五四運動，国民党再組織
20 アンカラにトルコ国民会議

21 中国共産党成立
22 エジプト独立
23 トルコ共和国宣言 ムスタファ=ケマル大統領就任
24 〔中〕第１次国・共合作
25 ペルシア，パフレビー朝成立
〔中〕孫文死す 五・三〇事件
26 〔中〕国民党の北伐（～28）
27 スカルノ，インドネシア国民党結成
〔中〕蔣介石，南京国民政府成立
28 張作霖爆死 蔣介石中国統一
29 〔印〕国民会議派，完全独立を決議
30 英印円卓会議（～32）

31 満州事変おこる
32 サウジアラビア王国成立 イラク王国独立
上海事変おこる 満州国建国
33 〔日〕国際連盟脱退
34 中国共産党大西遷（～35）
35 ペルシア，国号をイランと改む
〔印〕改正インド統治法により連邦となる
エチオピア戦争（～36）
36 〔伊〕エチオピアを併合
〔中〕西安事件（抗日民族統一戦線確定）
37 蘆溝橋事件，日華事変始まる
38 〔中〕国民政府，重慶遷都
39 シャム，国号をタイと改む
40 日本，仏印北部に進駐
〔中〕汪兆銘，南京政府樹立

---

12 中華民国

12 大正

26 昭和

文化

ヨーロッパ

文学
ロマン=ローラン（～1944），ジード（～1951），トマス=マン（～1955）
新即物主義（レマルク）
社会主義リアリズム（ショーロホフ）

芸術
野獣派（マティス・ルオー）
立体派（ピカソ・ブラック）
表現派
抽象絵画
ダダイズム
超現実主義

思想
危機神学（バルト・ブルンナー）
実存哲学（ハイデッガー・ヤスパース）

科学その他
1911 〔ノル〕 アムンゼン，南極に到達
1915 〔独〕 アインシュタインの一般相対性理論
1928 〔英〕 フレミング，ペニシリンを発見
1929 〔英〕 テレビの実験放送開始
1937 〔米〕 ナイロンの発明

アジア・アフリカ

1915 「新青年」発行 文学革命始まる
1917 胡適「文学改良芻義」，陳独秀「文学革命論」
1918 魯迅「狂人日記」
1921 魯迅「阿Q正伝」
周口店で北京人類発掘（～37）
1922 〔印〕 モヘンジョ-ダロの発掘開始
1924 孫文「三民主義」を講演
1928 殷墟の発掘開始
トルコの文字革命
1935 湯川秀樹中間子を予言
1936 魯迅死す（1881～）
1940 毛沢東「新民主主義論」

年代	国際問題	ヨーロッパ・アメリカ
1940	41 独ソ戦開始　大西洋憲章 太平洋戦争始まる（～45） 42 連合国軍反撃に転ず 43 カサブランカ会談　伊降伏　カイロ会談　テヘラン会談 45 ヤルタ会談　独降伏 ポツダム宣言　日本降伏 第二次世界大戦終わる 国際連合成立 46 パリ平和会議 47 マーシャル-プラン発表 コミンフォルム結成（～56） 48 西欧連合成立　ベルリン封鎖 世界人権宣言 49 北大西洋条約機構 50 朝鮮戦争始まる（～53）	43 〔伊〕無条件降伏 44 連合軍，ノルマンジーに上陸 45 〔独〕無条件降伏　ヒトラー死す 〔英〕アトリー労働党内閣成立 46 〔ソ〕第4次五か年計画 〔伊〕共和国発足 〔仏〕第四共和政発足 47 〔米〕トルーマン-ドクトリン発表，タフト-ハートレー法 48 〔米〕アメリカ州機構成立 コミンフォルム，ユーゴを除名 49 〔米〕フェアディール政策 エール共和国　完全独立 ベルリン封鎖解除，ドイツ連邦共和国　ドイツ民主共和国成立
1950	51 シューマン-プラン調印 サンフランシスコ条約成立（対日講和） 52 欧州防衛共同体条約成立 53 朝鮮休戦協定成立 54 ジュネーブ極東平和会議 インドシナ休戦成立 55 中東防衛条約機構，アジア・アフリカ会議，ワルシャワ条約，ジュネーブ4巨頭会談 56 スエズ運河問題国際会議 59 ジュネーブ4国外相会議 60 国連総会，米ソの対立激化	52 〔ソ〕第5次五か年計画 53 〔米〕アイゼンハワー大統領就任 〔ソ〕スターリン死す 55 〔西独〕北大西洋条約に加盟 オーストリア国家条約成立 56 〔ソ〕スターリン批判　ハンガリーに内乱おこる英仏軍，スエズに出動 57 ＥＥＣ〔欧州経済共同体〕条約調印 58 〔仏〕ド=ゴール政権成立 第五共和政憲法成立 59 カストロによるキューバの革命
1960	61 米・キューバ断交 63 部分的核実験停止条約調印 64 〔仏〕中共を承認，国府と国交断絶 65 〔米〕ベトナム戦争で北爆開始 68～ベトナム和平パリ会談 70 西独・ソ連武力不行使条約	61 〔米〕ケネディ就任（～63） 〔ソ〕人間衛星成功 63 〔米〕ジョンソン36代大統領に就任 64 〔米〕公民権法制定 〔ソ〕フルシチョフ失脚，コスイギン首相 67 〔米〕反戦運動・黒人暴動広がる 68 〔チェコ〕自由化運動始まる 69 〔米〕ニクソン大統領就任 70 ポーランドに暴動おこる
1970	71 〔中〕国連に復帰	71 〔英〕ＥＣ加盟きまる

アジア・アフリカ		文化

アジア・アフリカ

41 〔日〕日ソ中立条約　真珠湾攻撃
太平洋戦争始まる
43 レバノン共和国独立
45 アラブ連盟成立
インドネシア独立宣言
原爆投下（日本降伏）
46 ヨルダン王国成立
シリア・アラブ共和国成立
フィリピン共和国独立宣言
インドシナ戦争（～54）
47 インド連邦・パキスタン，英自治領となる
国共の内戦激化
48 ビルマ共和国成立
イスラエル共和国成立
大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国成立
49 インドネシア連邦共和国成立
中華人民共和国成立　毛沢東主席となる
50 インド連邦共和国独立　インドネシア共和国発足
朝鮮戦争おこる（～53）

---

51 太平洋安全保障条約成立
サンフランシスコ対日講和条約
52 エジプトに革命おこる
54 インドシナの休戦成立
東南アジア条約機構成立
周恩来・ネール平和五原則提唱
55 中東条約機構成立
アジア・アフリカ会議
56 スーダン独立，モロッコ・チュニジア独立
スエズ運河国有化宣言
日ソ国交回復　日本国連に加入
57 ガーナ・マラヤ独立
60 アフリカに多数独立国誕生
コンゴの紛争おこる
韓国に暴動，李政権倒れる

---

62 アルジェリア問題解決
63 アフリカ首脳会議統一憲章採択
〔韓〕朴正熙政権（63大統領）
65 ローデシア英連邦離脱，人種差別政策強行
ベトナム戦争激化
66 〔中〕文化大革命進展
67 インドネシア，スカルノ失脚
中東戦争，アラブ連合敗北
〔中〕ソ連と決定的に対立
69 南ベトナム臨時革命政府成立
70 カンボジアにクーデタ
米軍ラオスに侵攻

昭和

49 中華人民共和国

文化

文学
ヨーロッパ
実存主義文学（サルトル）
不条理の文学（カミュ）
アンチ-ロマン
アジア
1941 〔印〕 タゴール死す（1861～）
1945 〔中〕 老舎「四世同堂」
1956 〔中〕 漢字簡素化法
生物学・医学・その他
1943 〔米〕 ストレプトマイシン
1953 ＤＮＡの構造模型
1956 南極観測始まる
1967 〔南ア〕 心臓移植手術
1969 〔米〕 活性アミノ酸の合成
原子力の利用
1945 〔米〕 原子爆弾完成
1949 〔ソ〕 原子爆弾完成
1952 〔米〕 水素爆弾完成
1953 〔ソ〕 水素爆弾完成
1955 〔米〕 原子力潜水艦就航
1957 〔ソ〕 原子力砕氷船就航
1964 〔中〕 核実験成功
1967 〔中〕 水爆実験成功
宇宙への進出
1957 〔ソ〕 人工衛星完成
1958 〔米〕 人工衛星完成
1959 〔ソ〕 宇宙ステーション，月の裏面撮影
1961 〔ソ〕 人間衛星完成
1962 〔米〕 人間衛星完成
1965 〔米〕 火星表面近接撮影に成功
1967 〔ソ〕 金星４号金星に軟着陸
1969 〔米〕 人類はじめて月面に到達

さくいん

（太字は主要な記述箇所）

〔あ〕

〔す〕

人名対照表

略語表 〔英〕英語,〔独〕ドイツ語,〔仏〕フランス語,〔伊〕イタリア語,〔西〕スペイン語,〔露〕ロシア語,〔羅〕ラテン語,〔希〕ギリシア語

〔英〕 **Alexander**（アレクサンダー）
〔露〕 Aleksandr（アレクサンドル）
〔希〕 Aleksandros（アレクサンドロス）
〔英〕 **Bartholomew**（バーソロミュー）
〔仏〕 Barthélemy（バルテルミ）
〔葡〕 Bartolomeu（バルトロメウ）
〔英〕 **Boniface**（ボニフェース）
〔羅〕 Bonifatius（ボニファティウス）
〔英〕 **Caesar**（シーザー）
〔独〕 Kaiser（カイザー）
〔羅〕 Caesar（カエサル）
〔英〕 **Catherine**（カサリン）
〔仏〕 Catherine（カトリーヌ）
〔露〕 Ekaterina（エカテリナ）
〔英〕 **Charles**（チャールズ）
〔独〕 Karl（カルル）
〔仏〕 Charles（シャルル）
〔伊〕 Carlo（カルロ）
〔西〕 Carlos（カルロス）
〔英〕 **Ferdinand**（ファーディナンド）
〔西〕 Fernando（フェルナンド）
〔英〕 **Francis**（フランシス）
〔独〕 Franz（フランツ）
〔仏〕 François（フランソア）
〔伊〕 Francesco（フランチェスコ）
〔英〕 **Frederick, Frederic**（フレデリック）
〔独〕 Friedrich（フリードリヒ）
〔英〕 **Gregory**（グレゴリー）
〔羅〕 Gregorius（グレゴリウス）
〔英〕 **Henry**（ヘンリ）
〔独〕 Heinrich（ハインリヒ）
〔仏〕 Henri（アンリ）
〔伊〕 Enrico（エンリコ）
〔西〕 Henrique（エンリケ）
〔英〕 **Innocent**（イノセント）
〔羅〕 Innocentius（インノケンティウス）
〔英〕 **Joan**（ジョーン）
〔仏〕 Jeanne（ジャンヌ）
〔英〕 **John**（ジョン）
〔仏〕 Jean（ジャン）
〔独〕 Hans（ハンス）
Johann（ヨーハン）
Johannes（ヨハンネス）
〔英〕 **Leo**（リーオ）
〔羅〕 Leo（レオ）
〔希〕 Leon（レオン）
〔英〕 **Louis**（ルーイス）
〔仏〕 Louis（ルイ）
〔英〕 **Peter**（ピーター）
〔仏〕 Pierre（ピエル）
〔伊〕 Pietro（ピエトロ）
〔西〕 Pedro（ペドロ）
〔露〕 Pyotr（ピョートル）
〔羅〕 Petrus（ペトルス）
〔希〕 Petros（ペトロス）
〔英〕 **Philip**（フィリップ）
〔仏〕 Philippe（フィリップ）
〔西〕 Felipe（フェリペ）
〔希〕 Philippos（フィリッポス）
〔英〕 **Theresa**（テリーサ）
〔独〕 Therese（テレーゼ）
Theresia（テレジア）
〔英〕 **William**（ウィリアム）
〔独〕 Wilhelm（ウィルヘルム）
〔仏〕 Guillaume（ギヨーム）

著者	
東海大学教授	吉岡　力
成蹊大学教授	村瀬興雄
東京大学助教授	木村尚三郎
東京外国語大学助教授	松村赳
東京学芸大学助教授	中村義

昭和47年4月10日文部省検定済

世史	409

高等学校 世界史

印刷日	昭和49年1月10日
発行日	昭和49年1月15日
定価	246円
著作者	吉岡　力　ほか4名
著作権所有	学校図書株式会社
発行者	学校図書株式会社 代表者　坂口観蔵
印刷者	静岡県沼津市大塚15 図書印刷株式会社沼津工場 代表者　小林　清
発行所	東京都品川区北品川一丁目1番14号 学校図書株式会社 電話東京(03)472局2811(代表) 振替口座　東京72415



帝国主義時代の世界（1914年）



ロ シ ア
アルハンゲリスク
ペテルブルク
モスクワ
ペルミ
オムスク
1896
トムスク 1898
クラスノヤルスク
1898
イルクーツク
1900
チタ
ネルチンスク
キャフタ
オレンブルグ
アムール(黒竜江)
アイグン
ハバロフスク
1901
ハルビン
1902
ウラジオストク
オホーツク海
カムチャツカ
ベーリング海
アラスカ
1867年ロシアより買収
アリューシャン列島
樺太
1905
千島列島
モンゴル
新疆
イリ
清(1912亡)
中華民国
北京
奉天
旅順
大連
朝鮮 1910
京城
日本
東京
京都
黄河
膠州湾
1898
威海衛
1898
チベット
ラサ
ネパール
蘭州
西安
成都
漢口
揚子江
重慶
長沙
南京
上海
寧波
福州
雲南
広東
マカオ
香港
アモイ
台湾
1895
広州湾
1899
ハノイ
フランス領インドシナ
サイゴン
シャム
バンコク
ビルマ
ラングーン
フィリピン
1898
マニラ
太 平 洋
マリアナ諸島
1899
グアム
1898
カロリン諸島
1899
ウェーク
ビスマーク諸島
1884
ソロモン諸島
1893
ニューギニア
ボルネオ
セレベス
マライ
シンガポール
スマトラ
蘭領東インド
バタビア
ジャワ
チモール
インド
デリー
カラチ
ボンベイ
カルカッタ
マドラス
ポンジシェリー
ゴア
ジウ
マエ
コロンボ
セイロン
ベンガル湾
アラビア海
イ ン ド 洋
アフガニスタン
カブール
ペルシア
テヘラン
コーカンド
カシガル
ホータン
アラル海
ボハラ
メルブ
カスピ海
クリミア
黒 海
コンスタンティノープル
トルコ
キプロス
スエズ運河
カイロ
エジプト
バグダード
アラビア
メッカ
紅海
エリトリア
アデン
ソコトラ
アングロ・エジプト・スーダン
ハルトゥーム
ファショダ
アジスアベバ
エチオピア
ソマリランド
1889
ウガンダ
英領東アフリカ
ベルギー領コンゴ
1885
ドイツ領東アフリカ
1885
ローデシア
ポルトガル領東アフリカ
ベチュアナランド
トランスバール
オレンジ自由国
ケープ植民地
南アフリカ連邦
1910
マダガスカル
1896
セイシェル
モーリシャス
レユニオン
オーストラリア
(1901. 自治領)
シドニー
キャンベラ
タスマニア
ニュージーランド
(1907. 自治領)
ニューカレドニア
1853
イギリスとその植民地
フランス 〃
ドイツ 〃
イタリア 〃
スペイン 〃
ポルトガル 〃
オランダとその植民地
ベルギー 〃
日 本 〃
アメリカ 〃
ロシア 〃
おもな鉄道
H2A
和田

世史 409
定価 246 円